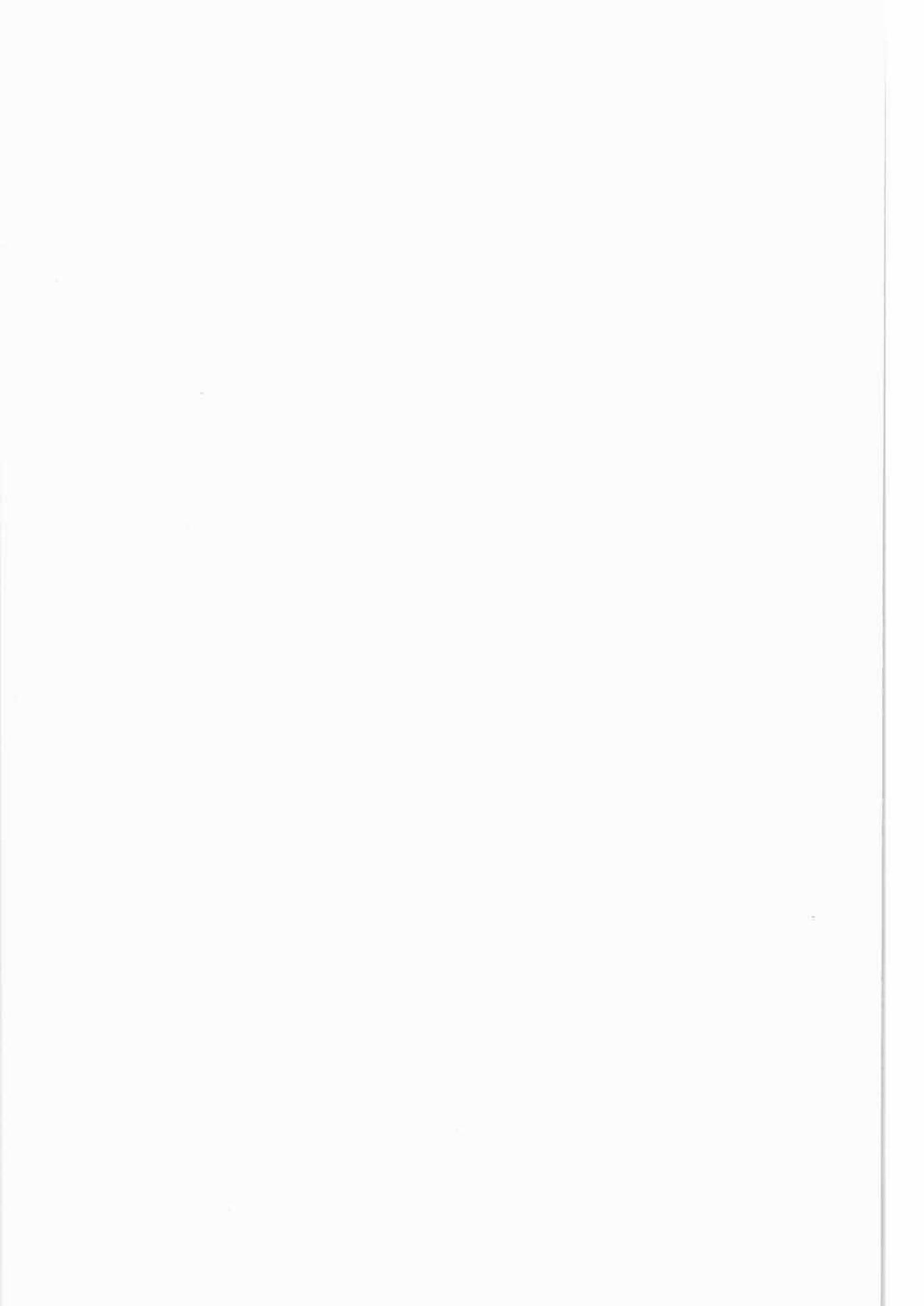


京都府遺跡調査概報

第31冊

1. 桑飼上遺跡
2. 近畿自動車道舞鶴線関係遺跡
 - (1) 小貝遺跡
 - (2) 小西町田遺跡
 - (3) 三宅遺跡
 - (4) 三宅4号墳
 - (5) 福垣北古墳群
 - (6) 福垣城館跡
 - (7) 平山城館跡
 - (8) 私市円山経塚
 - (9) カジャ谷古墓
3. 国道9号バイパス関係遺跡
 - 千代川遺跡

1988



序

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターは、昭和56年4月に設立され、本年3月をもって7年を満了することができました。この間、公共事業に伴う遺跡の調査・研究、文化財保護の普及・啓発などの諸事業を鋭意推進してまいりました。これら諸事業の結果・報告として、『京都府遺跡調査報告書』を始めとする各種の印刷物を公刊し、利用に供してきたところであります。

本概報は、当調査研究センターが刊行する上記の印刷物の一部で、主に丹波・丹後地方に所在する各種の遺跡の調査成果を収めたものであります。本書が、それぞれに取り扱った地域の歴史を解明する上での一助となるとともに、ひいては京都府の地域文化の発展にいささかでも寄与できることを願ってやみません。

最後になりましたが、本書を刊行するにあたり、発掘調査を委託された建設省近畿地方建設局、日本道路公団大阪建設局ならびに調査に直接参加協力頂いた多くの方がたに対し、深く感謝申し上げますとともに、今後とも当調査研究センターの事業に対し御理解・御協力を賜りますようお願い申し上げます。

昭和63年12月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター
理事長 福山敏男

凡 例

1. 本冊に収めた概要は、下記のとおりである。

1. 桑飼上遺跡 2. 近畿自動車道舞鶴線関係遺跡 3. 国道9号バイパス関係遺跡

2. 各遺跡の所在地、調査期間、経費負担者及び概要の執筆者は下表のとおりである。

遺 跡 名	所 在 地	調 査 期 間	経 費 負 担 者	執 筆 者
1. 桑飼上遺跡	舞鶴市桑飼上	昭62. 7. 6 昭63. 2. 10	建設省近畿地方建設局	肥後 弘幸 細川 康晴
2. 近畿自動車道舞鶴線関係遺跡				
(1)小貝遺跡	綾部市私市町・小貝町	昭62. 9. 1 昭63. 2. 16	日本道路公団大阪建設局	黒坪 一樹
(2)小西町田遺跡	綾部市小西町	昭62. 5. 8 昭63. 1. 13		三好 博喜
(3)三宅遺跡	綾部市豊里町三宅	昭62. 5. 8 昭63. 3. 11		竹原 一彦
(4)三宅4号墳	綾部市豊里町三宅	昭62. 5. 8 昭63. 3. 11		竹原 一彦
(5)福垣北古墳群	綾部市豊里町福垣	昭62. 11. 5 昭63. 3. 8		石井 清司
(6)福垣城館跡	綾部市豊里町福垣	昭62. 11. 24 昭63. 2. 25		黒坪 一樹
(7)平山城館跡	綾部市七百石町	昭62. 4. 20 昭62. 8. 26		鍋田 勇
(8)私市円山経塚	綾部市私市町	昭62. 11. 9 昭63. 3. 11		鍋田 勇
(9)カジャ谷古墓	綾部市七百石町	昭62. 1. 29 昭62. 2. 14		細川 康晴
3. 国道9号バイパス関係遺跡			建設省近畿地方建設局	
千代川遺跡	亀岡市千代川町	昭62. 4. 19 昭63. 2. 21		鵜島 三壽

3. 本冊の編集には、調査第1課資料係が当たった。

目 次

1. 桑飼上遺跡昭和62年度発掘調査概要	1
2. 近畿自動車道舞鶴線関係遺跡昭和62年度発掘調査概要	21
(1) 小貝遺跡	27
(2) 小西町田遺跡	35
(3) 三宅遺跡	45
(4) 三宅4号墳	56
(5) 福垣北古墳群	59
(6) 福垣城館跡	71
(7) 平山城館跡	76
(8) 私市円山経塚	86
(9) カジヤ谷古墓	93
3. 昭和62年度国道9号バイパス関係遺跡発掘調査概要	99

挿 図 目 次

桑飼上遺跡

第 1 図	遺跡所在地	1
第 2 図	桑飼上遺跡の位置と周辺の遺跡	2
第 3 図	桑飼上遺跡第 1 次調査トレンチ配置図	4
第 4 図	昭和60・61年度実施確認調査トレンチ出土遺物	6
第 5 図	第 1～9 トレンチ土層断面模式図	8
第 6 図	第 1～5・11・12 トレンチ検出遺構配置図	9
第 7 図	第 6 トレンチ遺構実測図	10
第 8 図	第 7 トレンチ遺構実測図	12
第 9 図	第 8 トレンチ遺構実測図	13
第 10 図	第 9 トレンチ遺構実測図	15
第 11 図	出土遺物実測図	17
第 12 図	周辺地形図	19

近畿自動車道舞鶴線関係遺跡

第 13 図	近畿自動車道舞鶴線関係遺跡位置図(第 8 次区間)	25
--------	---------------------------	----

(1) 小貝遺跡

第 14 図	トレンチ配置図	27
第 15 図	B トレンチ平面図	28
第 16 図	掘立柱建物跡実測図	29
第 17 図	C トレンチ平面図	30
第 18 図	方形周溝墓実測図	31
第 19 図	土器類実測図	32
第 20 図	石器類実測図	32
第 21 図	調査地遠景(私市円山古墳から)	34

(2) 小西町田遺跡

第 22 図	試掘トレンチ配置図	36
第 23 図	東部地区遺構図	36
第 24 図	西部地区遺構図	38

第 25 図	東部地区遺構内出土遺物	40
第 26 図	SK08 出土遺物	41
第 27 図	SD09 出土遺物	42
第 28 図	西部地区出土遺物	43
(3) 三宅遺跡		
第 29 図	調査地位置図	46
第 30 図	第Ⅰ・第Ⅱ・第Ⅲ調査区平面図	47
第 31 図	第Ⅴ調査区SH01平面図	51
第 32 図	出土遺物実測図 1	52
第 33 図	出土遺物実測図 2	53
(4) 三宅 4 号墳		
第 34 図	三宅 4 号墳地形図	57
第 35 図	出土遺物実測図	58
(5) 福垣北古墳群		
第 36 図	福垣北古墳群地形図	60
第 37 図	第 2・3 号墳墳丘図	61
第 38 図	第 2 号墳中心埋葬施設平面図	62
第 39 図	出土遺物—須恵器—	63
第 40 図	周辺第 1 埋葬施設平面図	64
第 41 図	第 4 (第 7) 号墳出土遺物—埴輪—	65
第 42 図	第 5 号墳墳丘図	66
第 43 図	第 5 号墳中心埋葬施設平面図	67
(6) 福垣城館跡		
第 44 図	トレンチ配置図	71
第 45 図	調査地平板測量図	72
第 46 図	出土遺物実測図	74
(7) 平山城館跡		
第 47 図	第 2 郭検出遺構平面図	77
第 48 図	畝状堅堀地形測量図(調査後)	81
第 49 図	出土遺物実測図	83
(8) 私市円山経塚		
第 50 図	経塚の検出状況(第 1 検出面平面図)	87

第 51 図	第 2・3 検出面平面図及び断面図	88
第 52 図	私市円山経塚の構造模式図	89
第 53 図	出土遺物実測図	90
第 54 図	石組平面・断面図	91

(9) カジヤ谷古墓

第 55 図	地形測量図	93
第 56 図	集石遺構測量図	94
第 57 図	遺構配置図	94
第 58 図	遺構実測図	95
第 59 図	出土遺物実測図	96

国道 9 号バイパス関係遺跡

千代川遺跡

第 60 図	調査地位置図	101
第 61 図	自然流路跡(SR16001)土層断面図	102
第 62 図	調査区配置図	103
第 63 図	主要遺構配置図	105
第 64 図	SB15005・15006実測図	107
第 65 図	SE21001実測図	108
第 66 図	SB12001実測図	109
第 67 図	出土遺物実測図(縄文時代)	110
第 68 図	出土遺物実測図(石器)	111
第 69 図	出土遺物実測図(古墳時代前期)	113
第 70 図	出土遺物実測図(木器)	115
第 71 図	出土遺物実測図(奈良～平安時代)	117
第 72 図	出土遺物実測図	118
第 73 図	出土遺物実測図(黒色土器)	118
第 74 図	出土遺物実測図(木簡)	119
第 75 図	木簡	119
第 76 図	出土遺物実測図(鎌倉時代 1)	120
第 77 図	出土遺物実測図(鎌倉時代 2)	121

図 版 目 次

桑飼上遺跡

- 図版第1 (1)第1トレンチ全景(北から)
(2)第2～第4トレンチ調査風景(東から)
- 図版第2 (1)第3トレンチ全景(北から) (2)第4トレンチ全景(北から)
- 図版第3 (1)第4トレンチ管玉原石及び製品出土状況
(2)第5トレンチ土器溜まり(SX501)
- 図版第4 (1)第6トレンチ(南から) (2)第6トレンチSH601(西から)
- 図版第5 (1)第6トレンチSH601(北から) (2)第7トレンチ掘立柱建物跡群
- 図版第6 (1)第8トレンチSH801(南から) (2)第8トレンチSH801(西から)
- 図版第7 (1)第9トレンチSB901・SK902(北から)
(2)第9トレンチSB901・SK902(西から)
- 図版第8 出土遺物

近畿自動車道舞鶴線関係遺跡

(1) 小貝遺跡

- 図版第9 (1)調査前風景(北から) (2)集石土坑・柱穴列検出状況(北から)
- 図版第10 (1)方形周溝墓検出状況(東から) (2)出土遺物

(2) 小西町田遺跡

- 図版第11 (1)調査前遠景(東から) (2)調査地全景(東から)
- 図版第12 調査地全景
- 図版第13 出土遺物(1)
- 図版第14 出土遺物(2)
- 図版第15 出土遺物(3)

(3) 三宅遺跡

- 図版第16 調査地全景
- 図版第17 (1)調査前全景(東から) (2)調査地全景(東から)
- 図版第18 (1)第Ⅴ調査区SH01(西から) (2)第Ⅲ調査区土壇墓
- 図版第19 出土遺物

(4) 三宅4号墳

- 図版第20 (1)調査地全景(東から) (2)墳丘断面(南から)

(5) 福垣北古墳群

- 図版第21 (1)第3号墳中心埋葬施設検出状況(南から)
(2)第2・3号墳完掘状態(東から)
- 図版第22 (1)第2号墳中心埋葬施設鉄器出土状態(南から)
(2)第2号墳中心埋葬施設鉄器出土状態細部(南から)
- 図版第23 (1)第2号墳周辺第1埋葬施設完掘状態(北から)
(2)第2号墳周辺第4埋葬施設完掘状態(南から)
- 図版第24 (1)第2号墳周辺第4埋葬施設遺物出土状態(北から)
(2)第2号墳周辺第4埋葬施設遺物出土状態細部(南から)
- 図版第25 (1)第5号墳中心埋葬施設完掘状態(西から)
(2)第4号墳周溝内遺物出土状態(西から)
- 図版第26 出土遺物(1) 須恵器・埴輪
- 図版第27 出土遺物(2) 鉄器
- 図版第28 (1)第2号墳周辺第4埋葬施設出土玉類
(2)第2号墳周辺第1埋葬施設出土玉類

(6) 福垣城館跡

- 図版第29 (1)調査前風景(東から) (2)横堀検出状況(北東から)
- 図版第30 (1)堀切り断ち割り断面 (2)出土陶磁器類

(7) 平山城館跡

- 図版第31 第2郭全景(空撮)
- 図版第32 (1)調査地全景(南西から) (2)第2郭SB05全景(南から)
- 図版第33 (1)畝状堅堀(調査前, 西から) (2)畝状堅堀(調査後, 西から)

(8) 私市円山経塚

- 図版第34 (1)調査地遠景(南から) (2)経塚の検出状況(第1検出面, 東から)
- 図版第35 (1)経塚の検出状況(第2検出面, 北西から)
(2)経塚の検出状況(第3検出面, 南から)
- 図版第36 (1)銅製経筒 (2)石組検出状況(西から)

(9) カジャ谷古墓

- 図版第37 (1)遺跡全景(南から) (2)遺跡全景(南西から)
- 図版第38 (1)集石遺構断面(北から) (2)土坑(SK01)完掘状況

国道9号バイパス関係遺跡

千代川遺跡

- 図版第39 (1)調査地遠景(北からの空中写真) (2)調査地全景(北の拝田丘陵から)
- 図版第40 (1)掘立柱建物跡(SB12001)検出状況(南西から)
(2)掘立柱建物跡(SB14001)検出状況(南東から)
- 図版第41 (1)掘立柱建物跡(SB15005・15006)検出状況(北から)
(2)掘立柱建物跡(SB15002・15003)検出状況(南西から)
- 図版第42 (1)16トレンチ自然流路跡(SR16001)完掘状況(西から)
(2)17トレンチ全景(北から)
- 図版第43 (1)18トレンチ全景(北から) (2)SD21001完掘状況(東から)
- 図版第44 (1)SE22001遺物出土状況(東から) (2)23トレンチ全景(北から)

付 表 目 次

近畿自動車道舞鶴線関係遺跡

- 付 表 1 近畿自動車道舞鶴線関係遺跡(第8次区間)一覧表……………22
(5) 福垣北古墳群
- 付 表 2 福垣北古墳群検出遺構一覧表……………70

1. 桑飼上遺跡昭和62年度発掘調査概要

(第1次調査・試掘調査)

1. はじめに

桑飼上遺跡は、舞鶴市字桑飼上に所在し、北近畿最大の河川である由良川の河口から約15 km上流の右岸自然堤防上に立地する複合集落遺跡である。建設省近畿地方建設局福知山工事事務所が計画・実施する由良川改修工事に先立ち、同局の依頼を受けて、今年度から(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターが発掘調査を行うことになった。



第1図 遺跡所在地

今年度は、遺跡予想範囲地内の約3分の2地域において試掘調査を行い、遺跡の範囲・性格等を解明し、次年度以降の調査期間・調査方針等を決める資料を得ることを目的とした。

現地調査は、当調査研究センター調査第2課調査第1係長辻本和美・同調査員肥後弘幸・細川康晴が担当した。調査期間は、昭和62年7月6日～昭和63年2月10日である。調査面積は、約2,100㎡である。本概要は、遺物写真の撮影を調査第1課の田中 彰が行い、肥後・細川が執筆した。

なお、調査に際しては、建設省近畿地方建設局福知山工事事務所・同舞鶴出張所・舞鶴市教育委員会社会教育課・同耕地課・同土木課・同市史編纂室・京都府教育委員会・同中丹教育局・舞鶴地方振興局・京都府立丹後郷土資料館および地元の桑飼上地区の方々等の御協力を得た。また、地元をはじめとする有志の方々には、調査補助員・作業員・整理員として調査に参加していただいた^(注1)。加えて、多くの方々から御指導・御助言いただいた^(注2)。記して感謝の意を表する。調査に係る経費は、建設省近畿地方建設局が負担した。

2. 位置と環境

桑飼上遺跡は、舞鶴市字桑飼上に所在し、北近畿最大の河川、由良川の河口から約15



第2図 桑飼上遺跡の位置と周辺の遺跡 (1/50,000)

1. 桑飼上遺跡
2. 地頭遺跡
3. 地頭東遺跡
4. 桑飼下遺跡
5. 岡田由里遺跡
6. 志高遺跡
7. 高津江遺跡
8. 三河宮ノ下遺跡
9. 二箇遺跡
10. 上村1・2号墳
11. 城1・2号墳
12. 山根古墳
13. ニヤ古墳
14. 西飼古墳
15. 別荘古墳
16. 水無月山遺跡
17. 枝宮古墳
18. 薬師古墳
19. 宇谷城跡
20. 地頭城跡
21. 水無月山城跡
22. 荒張城跡
23. 原城跡
24. 大俣城跡

km上流の右岸の自然堤防上に立地する。由良川は、京都府北桑田郡美山町に源を發し、大小100余りの支流を併せて、146kmを流れて日本海若狭湾に注ぐ。その流域面積は、1,880 km²である。由良川は、中流域では綾部・福知山盆地等の小平野を形成するものの、下流域では狭い谷部を縫うように流れて平野を形成しないで若狭湾に注ぐ。また、緩斜面を流れるためその流れは極めて遅く、雨季には多量の雨水が狭い谷に押し寄せ、しばしば洪水をおこす。この洪水のもたらした土砂によって、川の蛇行部には、細長い自然堤防を發達させている。古代から人々はこの自然堤防の上で生活を営んできた。桑飼上遺跡もそのような自然堤防上に立地している。

自然堤防上の集落遺跡は、由良川の蛇行部に数多く点在している。これらの集落遺跡の発見は、昭和30年代の砂利採集作業に伴って川底から多くの遺物が採集されたのが契機であると言って過言でない。周辺の遺跡でこのような経過で知られている遺跡として、地頭遺跡・地頭東遺跡・高津江遺跡等がある。自然堤防上の集落遺跡で調査が行われた例として知られるのは、上流から高河原遺跡^(注3)・桑飼下遺跡^(注4)・志高遺跡^(注5)がある。高河原遺跡は、古墳時代の集落遺跡である。桑飼下遺跡は、縄文時代後期の遺跡として著名で、炉跡48基が検出されている。志高遺跡は自然堤防上の集落遺跡として代表的なもので、遺物包含層が深いところで7mを測り、下層から、縄文時代早期・前期・後期、弥生時代前期・中期・後期、古墳時代前期、飛鳥時代から平安時代初頭、鎌倉時代、江戸時代の遺構面が検出されており、それに伴って数多くの遺構・遺物が出土している。以上のように由良川下流域の古代人の生活基盤は、主に肥沃な後背湿地を抱えた自然堤防上にあったといえる。自然堤防上以外の集落遺跡としては、三河宮の下遺跡・大川遺跡が知られているが、これらの遺跡も由良川の左岸の低地に位置し、地盤の成因は違うものの、自然堤防上の集落遺跡と見掛け上は大差ない。この地域で、集落が由良川から奥まった谷部に広がっていくのは、現状では中世以降と考えられる。集落遺跡に対し、墓域は、自然堤防上以外に丘陵上にも求められ、古墳時代以前のものとしては、水無月山遺跡^(注6)・シゲツ墳墓群^(注7)等が知られている。古墳は、各集落に伴うような形で点在しており、現在舞鶴市教育委員会が行っている分布調査で爆発的に増加する可能性が高い。生産遺跡として志高遺跡対岸に7世紀後半の須恵器窯としてシゲツ窯^(注8)が知られている。

3. 調査に至る経過

桑飼上遺跡の存在が知られるようになったのは、比較的最近のことである。昭和50年発行の『桑飼下遺跡発掘調査報告書』には記載がなく、ようやく昭和58年作成の舞鶴市遺跡分布地図および『志高遺跡—昭和57年度カキ安地区の調査—』に記載が認められる。舞鶴



第3図 桑飼上遺跡第1次調査トレンチ配置図（太枠内は調査対象地）

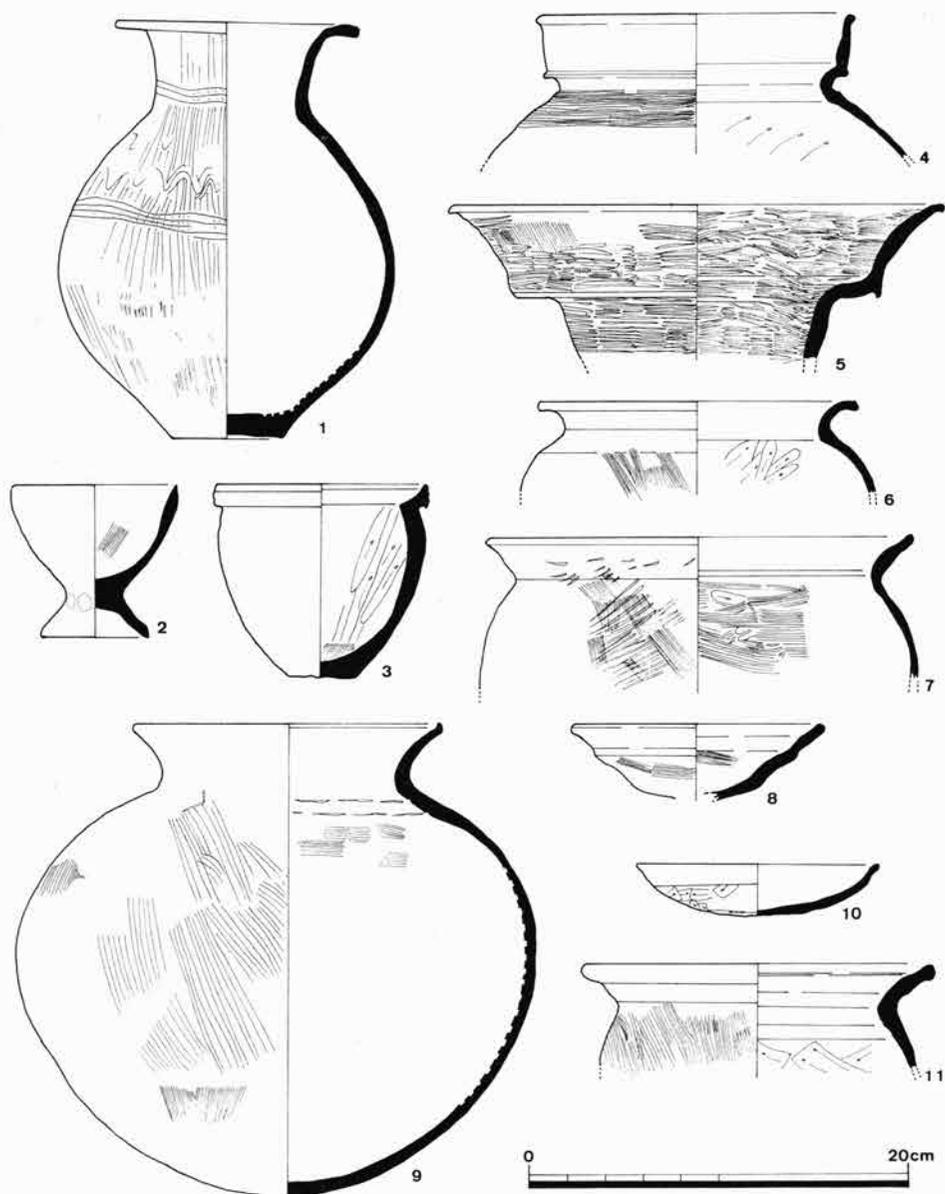
市教育委員会によると、遺跡として確認したのは昭和55年頃のことで、遺物散布地として確認したとのことである。

由良川下流域では、昭和38年度、建設省近畿地方建設局によって由良川の河道拡幅工事(改修工事)が着手された。また、昭和47年には、桑飼下で拡幅工事が行われ、その工事中に桑飼下遺跡が発見された。このため昭和47年度～昭和48年度に桑飼下遺跡の発掘調査が行われた。昭和48年には、大江町高河原において同じく改修工事中に遺跡が発見され、翌昭和49年度に大江町教育委員会によって調査が行われた。昭和55年度には、志高においても改修工事が着手され、工事に先立って、昭和55年度から昭和61年度にかけて7次にわたる発掘調査が行われた。

桑飼上遺跡は、調査着手時に先述のように遺物散布地として知られていたが、遺跡の範囲も不明で、遺構が残っているかどうかもわかっていない状況であった。昭和60年度に建設省から、昭和61年度以降桑飼上遺跡の工事掘削を行いたいと申し入れがあった段階で、建設省近畿地方建設局福知山工事事務所と京都府教育委員会が協議を行い、その結果、まず、由良川改修予定地内での遺跡の有無及び遺跡の広がりを知るために、200mおきにトレンチを設け、重機を用いた確認調査を行うことになった。確認調査は、60年度と61年度の2年度にわたって京都府教育委員会と当調査研究センターが行った。現地調査を担当したのは、昭和60年度が京都府教育委員会技師金村允人・当調査研究センター主任調査員長谷川達・同調査員山下 正・肥後弘幸で、昭和61年度は京都府教育委員会技師金村允人・当調査研究センター主任調査員長谷川達・同調査員肥後弘幸である。調査期間は、①・②・③・④トレンチを昭和61年2月4日から2月18日まで、⑤トレンチを昭和61年6月7日～12日までである。調査の方法は、管理用道路から由良川に直交してのびる幅10mのトレンチを建設省が重機を用いて徐々に掘り下げ、各層ごとに遺構の有無を確認し、併せて断面図を作成した。

①トレンチでは、重機によって階段上に掘り、由良川の水面高まで掘り下げたが、すべて近世以降の砂の堆積土で、極めて新しい瓦や瀬戸物類を採集したにとどまった。

②トレンチは、北側から約3分の2まで由良川による近世の土砂の堆積に覆われていたが、南側で7～8世紀にかけての包含層を確認し、この包含層の上層で浅い溝状遺構を検出した。溝状遺構の中には7～8世紀の遺物に混じって大量の古墳時代前期の遺物が混入していた。溝状遺構から出土した遺物は第4図の4～11である。4～8が古墳時代前期の土器で溝状遺構に流入していた。4・5は、壺形土器でともに二重口縁をもつ。4は口縁部が直立し、5は口縁部が大きく外反する。6・7は、甕形土器で、7の体部にはタタキメが観察できる。8は台付鉢もしくは小型器台の杯部である。10・11は、溝状遺構の年代を決



第4図 昭和60・61年度実施確認調査トレンチ出土遺物

1. 第3トレンチ 2・3. 第4トレンチ 4~8・10・11. 第2トレンチ 9. 第5トレンチ

定する遺物で、杯と甕である。甕は、口縁部内面に強いナデによる段をもち、この地域において7世紀～8世紀中頃にかけて多くみられる。包含層の下には青灰色を呈する粘土層が厚く堆積していた。由良川の水面付近の高さまで掘り下げたが、色調を変化させながらも粘土層が続いていた。

③トレンチは、北側約3分の1が近世以降の土砂の堆積に覆われていたが、中央部分には、黄色粘性砂質土をベース層とした安定した面が存在し、南側約半分は、灰色粘土が厚く堆積していた。粘土は数層に分かれており、上層部分からは、古墳時代から奈良時代にかけての須恵器が出土した。ある層の上面では弥生時代後期の溝状遺構を確認した。さらに下層から弥生時代中期の櫛描文で飾られた壺形土器(1)が完形で出土した。粘土層は奈良時代まで存在した沼による形成と想定した。

④トレンチは、北側約5分の2ほどが近世以降の土砂の堆積に覆われていたが、中央部では弥生時代後期の包含層が存在した。南側には③トレンチで確認した沼地形の続きが確認できた。2・3は、弥生時代後期の包含層から出土した弥生土器である。2は、小型の台付き鉢形土器である。3は、小型の甕形土器で口縁部に擬凹線が見られる。

⑤トレンチでは、上層で古墳時代後期から奈良時代にかけての包含層を、下層で弥生時代後期の包含層を確認した。9の甕形土器は焼土を伴う浅い土坑状の遺構から出土した。完形である。

以上の調査結果から、散布地として知られていた桑飼上遺跡は、弥生時代後期から奈良時代にかけての複合集落遺跡であることが判明した。各時代の遺構・遺物が確認でき、地表下1.5m付近(標高3.5~5.0m)を中心に広範囲にわたって集落遺跡が比較的良好な状態で残されている可能性が高くなった。なお、この確認調査によって予想される遺跡面積は、由良川改修対象地内で約27,000m²(第3図の太枠内)に及ぶ。このため建設省近畿地方建設局福知山工事事務所・京都府教育委員会・当調査研究センターの3者で協議を行い、志高遺跡の現地調査の終わった昭和62年度から約6か年の計画で、現地調査及び整理作業を実行することで合意した。現地調査の方法としては、対象面積が広大であることから、試掘調査を先行させ、その後本調査を実施することとした。

4. 昭和62年度試掘調査概要

(1) 調査の概要

今年度の調査の対象になったのは、遺跡予想地内の下流側3分の2の地区である。調査は、由良川に直交する形で8m×25mもしくは6m×30mのトレンチを50m間隔に1~10トレンチを設定して行った。第2トレンチと第3トレンチの間と第3トレンチと第4トレンチの間には、遺構の広がり、性格を知るために小トレンチ(第11・12トレンチ)を設定した。遺跡地内中央部(第1~5トレンチ)にあたる部分から調査を行った。調査当初、幅8mのトレンチと幅6mのトレンチを交互に配して調査を進めたが、幅6mのトレンチでは、遺構の性格を把握しにくい等の不便をきたしたため、第6トレンチ以降は幅8mのトレンチ

に統一した。

遺構面及び包含層の存在したトレンチは、第1～9トレンチ(第11・12トレンチを含む)である。その土層図を第5図に示した。第1～5トレンチには沼地形が南側に広がる。この沼地形の上には奈良時代以降の包含層が堆積するのみで顕著な遺構は存在しない。第1～9トレンチを通じて北側には弥生時代後期のベース層と考えられる黄褐色粘質土が存在する。このベース層の上には、各トレンチで様相が異なるが、古墳時代前期・古墳時代後期・奈良時代の包含層が1～2層存在し、遺構面を構成するものもある。このベース層の北側は、現由良川により近世から現代にかけて大きく削平を受けている。

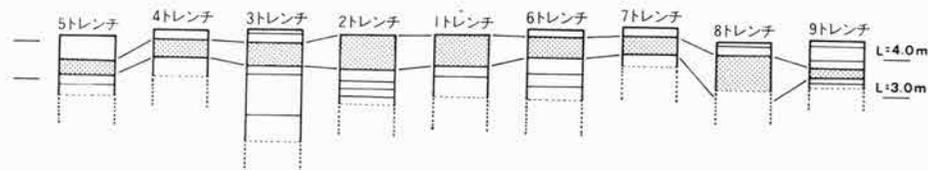
なお、各トレンチの調査にあたっては、第1～5トレンチは標高4.5mまで建設省により表土を搬出していたため主に人力で行ったが、第6～10トレンチに関しては包含層の上面まで重機^(注9)によって掘削した。

(2) 第1トレンチ

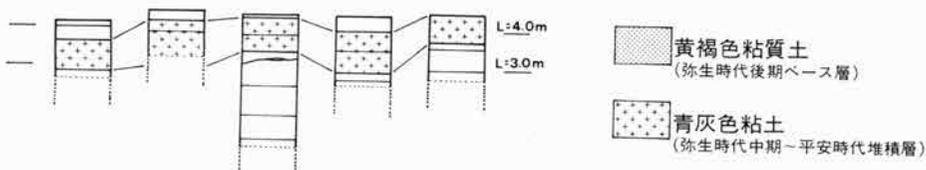
沼地形は、このトレンチ付近が調査地内東端にあたり、沼地形に伴う落ち込みの堆積土も青灰色の粘土から褐色の粘質土と変わっている。この落ち込み内から多くの弥生時代後期の土器が出土した。また、トレンチの中央部付近に存在する黄褐色粘質土の上面で弥生時代後期のピット群を検出した。

(3) 第2トレンチ

トレンチ南側約3分の1は、青灰色粘土の堆積する顕著な沼地形を呈する。青灰色の粘土は大きく2層に分層でき、上層からは古墳時代後期から奈良時代の遺物が、下層からは弥生時代後期から古墳時代前期の遺物が出土している。トレンチの中央部分に残されていた黄褐色粘質土の上面では、遺構は検出できなかった。

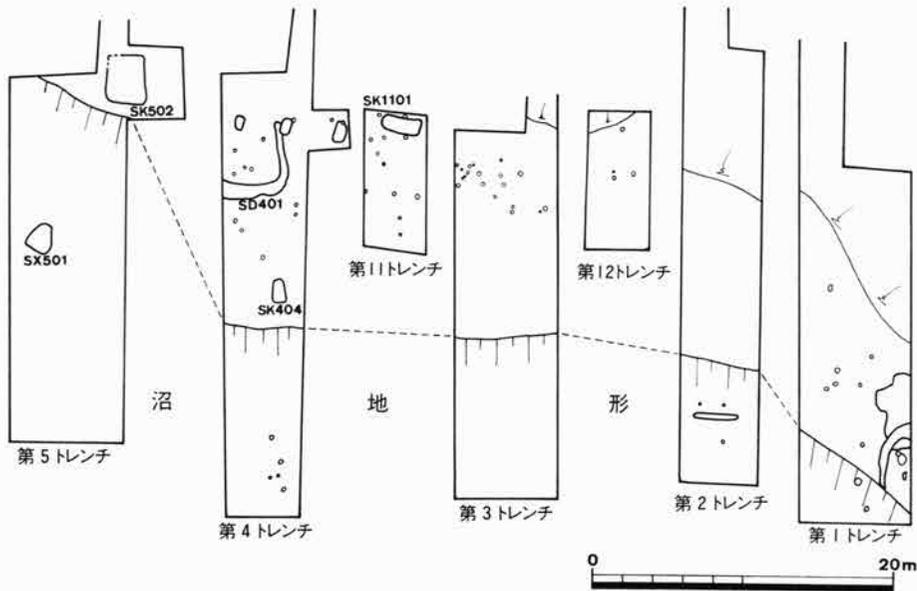


1～9トレンチ遺構現存部(現由良川側)土層断面図



1～5トレンチ沼地形(現水田側)土層断面図

第5図 第1～9トレンチ土層断面模式図



第6図 第1～5・11・12トレンチ検出遺構配置図

(4) 第3トレンチ

トレンチ南側約5分の2は、青灰色粘土の堆積する顕著な沼地形を呈する。青灰色の粘土は大きく2層に分層でき、上層からは古墳時代後期から奈良時代の遺物が、下層からは弥生時代後期から古墳時代前期の遺物が出土している。沼地形の肩部から北側の黄褐色粘質土の上面2か所に焼土があった。黄褐色粘質土を切り込んで弥生時代後期の小ビット群が存在する。

(5) 第4トレンチ

トレンチの約半分近くまで沼地形が広がっている。沼地形に堆積する青灰色粘土は1層で古墳時代後期から奈良時代の遺物を多く含む。この粘土を切り込んで幾つかの小ビットが存在する。トレンチのほぼ中央部の黄褐色粘質土の上面には土器溜まり(SX404)が存在し、弥生時代後期の土器が多数出土した。壺・甕・高杯の口縁端部には、弱い擬凹線文がある。ほぼ完形に復原できる土器が4個体ほど含まれる。ほかに黄褐色粘質土を切り込んで営まれたU字形の溝(SD401)や土坑等がある。溝の周囲で碧玉製の細身の管玉2点と、擦切り技法をとどめる方柱状の管玉未製品(碧玉原石)等が出土している。

(6) 第5トレンチ

沼地形の広がりにはトレンチのほぼ全域に及ぶ。沼地形に堆積する青灰色粘土は、1層で弥生時代後期から古墳時代前期の遺物を含む。この粘土層の上面に接して焼土や土器溜まり(SX501)が検出できた。SX501からは、古墳時代前期の土器が整理箱にして約3箱分出

土した。トレンチの南端で長方形の土坑(SK502)を検出した。土坑は長辺約3.0m・短辺約2.5mを測る。壁はほぼ垂直で床面中央部と考えられるところから土坑の長辺に平行して甍が出土した。また、埋土中からヒスイ製の勾玉(第11図9)が出土した。(肥後弘幸)

(7) 第6トレンチ

トレンチ東半部で、現表土下約1.1m掘り下げたところで旧河道と思われる東へ向けて落ち込む堆積を確認した。出土遺物の整理が現在進行中のため、埋没時期の詳細は不明であるが、堆積土中から、弥生時代後期から古墳時代前期の土器片が多数出土した。

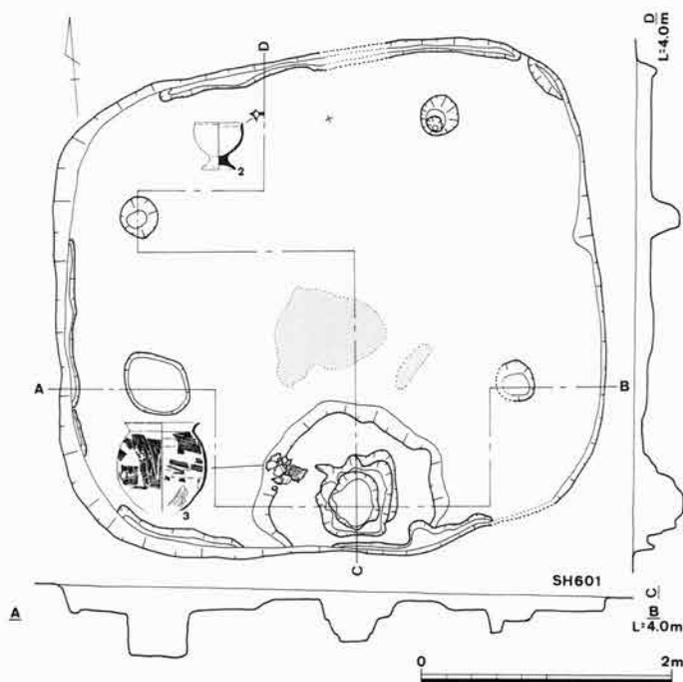
旧河道の西に隣接して、竪穴式住居跡1基を検出した(SH601)。主軸はN2°Wを測り、平面隅丸方形を呈する。一辺南北3.9m・東西4.4mを測り、検出面から床面までの残存高は18cmである。

住居跡床面に伴う施設として、周壁溝・柱穴・土坑がある。

周壁溝は、竪穴壁体に沿って巡るが、完周するものではなく、東辺・北西隅・南西隅部分では確認できなかった。断面V字形を呈し、最大幅24cm、床面からの深さは5cmと浅い。

柱穴は、基本的に四本柱と考えられる。南西のもののみやや大型であり、直径48cm・深さ36cmを測る。他の3基はやや小型で直径32cm・深さ20cmである。

土坑は、竪穴南辺に、舌状に地山を削り残した基台状に穿たれている。二段掘形を有し、



第7図 第6トレンチ遺構実測図

上段直径64cm・深さ15cm・下段直径50cm・深さ16cmを測る。

床面中央部には、炭化層が認められるが、焼土・土坑などは認められない。

遺物出土状況 遺物は、竪穴埋土中、床面直上、柱穴埋土中、土坑埋土中から出土した。

床面直上から出土したものは、住居北辺に近い部分で、高杯1個体(2 完形)が、横転して出土した。一方、土坑基台部分上で、甕1/2個体(3)が出土したが完形ではない。1は、埋土中から出土した。

(8) 第7トレンチ

このトレンチでは、遺構面として上下2面を確認した。

上層では、表土下1.0mの濃茶褐色粘質土上面で、方形柱掘形による掘立柱建物跡群を検出した。トレンチの中では、まだ、正確な建物の規模、内容などについては明らかにし得ない。現状では3棟以上の建物が復原できる可能性がある。

方形柱掘形の埋土は、大半が黄褐色砂質土を呈し、一部、灰色粘砂質土のものがあるが、後者の検出は困難である。柱痕跡は、検出面に差があるが、検出できたものは比較的明瞭な淡青灰色と黄灰色粘質土の混合土により識別できた。

方形掘形の柱間距離の平均は、2.4m前後、掘形規模は、一辺80cm前後を測り、柱痕跡は最大のもので36cmを測る。

以下に、現状で確認できる建物規模について触れる。

SB701 現状で東西1間、南北3間を確認できる。柱掘形はすべて方形で、一辺64～96cmでややばらつきがある。柱間距離は、北東隅の掘形から時計まわりに順に2.42m・2.42m・2.30m・4.5m・2.4m・4.54mである。北西隅の掘形は、重複しているが抜き取り穴は確認できない。建物主軸はN75°Wである。

SB702 東西1間以上・南北3間を確認できる。建物主軸・規模など、前述のSB701に類似する。柱掘形はすべて方形で、一辺66～96mを測る。柱間距離は、北東のものから時計まわりに順に、2.42m・2.44m・2.22m・2.56mである。建物主軸はN75°Wである。

SB703 東西2間分を確認した。柱痕跡が、最大径36cmを測るものがあり、南へのびる建物であると考えた。柱掘形はすべて方形で、一辺60～80cmを測る。

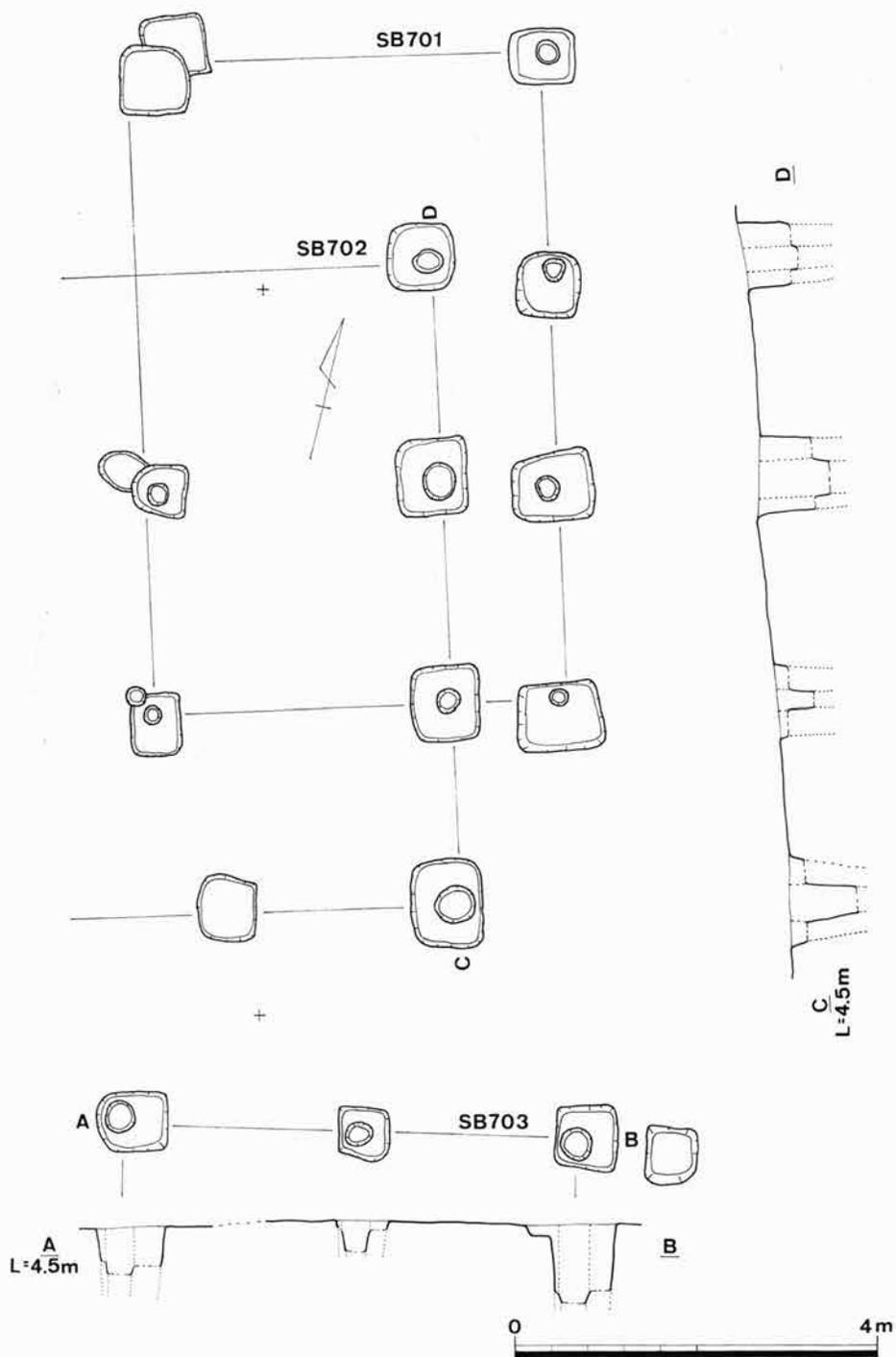
上層の濃茶褐色粘質土自体は、古墳時代前半期に比定できる遺物による包含層を形成しており、層厚は40cmを測る。

下層は、黄褐色粘土面をベースとして、褐色粘土を埋土とする遺構を検出した。

土坑や柱穴などが存在するが、完掘しておらず、詳細は、今後の調査にゆずる。

(9) 第8トレンチ

このトレンチでは、上層遺構面である濃茶褐色粘質土面における遺構が確認されなかつ



第8図 第7トレンチ遺構実測図

たため、表土下1.5mで下層遺構面である黄褐色粘土面でのみ遺構を検出した。

遺構は、トレンチ中央部で、竪穴式住居跡1基を検出した。

遺構検出面は、前述のように、黄褐色粘土面で、遺構埋土は濃茶褐色粘質土である。北辺と東辺は、比較的容易に検出できたものの、南西隅及び南辺の検出は困難を極めた。

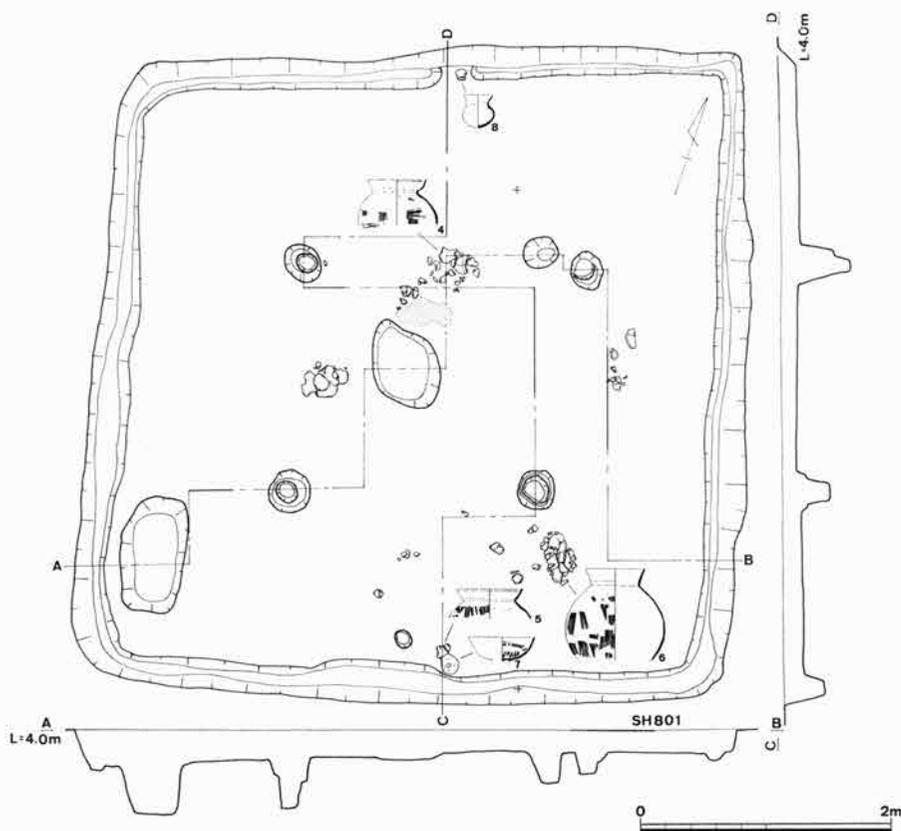
竪穴平面プランは、方形を呈し、南北5.6m・東西5.19m・現存高29cmを測る。主軸はN20°Wである。

主柱穴は、基本的に4本柱である。北東の柱穴のみ隣接して、さらに1基存在し、柱穴の総数は5基である。柱穴の直径は30cm前後、深さ40cm前後である。柱間距離は、北東のものから時計まわりに、1.88m・1.98m・1.81m・1.88mを測る。

竪穴に付属する施設として、ほかに周壁溝、炉跡、土坑がある。

周壁溝は、北辺の一部を除き完周する。幅32cm、検出面から溝底の深さは16cmを測る。

炉跡は、床面中央に浅く掘りくぼめた土坑として存在する。直径約72cm・深さ4cmを測る。土坑底には焼土が堆積し、土坑の北に隣接する部分にも焼土が広がっている。



第9図 第8トレンチ遺構実測図

堅穴南西隅に存在する土坑は、長辺94cm・短辺52cm・深さ40cmを測る隅丸長方形の土坑である。

遺物出土状況 堅穴埋土中からは、若干の土師器片が出土した。堅穴埋土は、基本的に1層のみで分層は不可能であった。

埋土最下層からは土師器片がややまとまった状態で出土した。北辺付近では、周壁溝を掘り残した部分の床面で小型丸底壺(8)の完形品が出土した。中央炉跡のやや北側では、床面にほぼ密着した状態で、甕1個体分(4)が出土した。南東部の柱穴の南でも、3~4cm床面から遊離した状態で甕(6)1個体分が出土した。他の遺物は床面より若干遊離しており、いずれも破片の状態である。ほかに、床面上から管玉1点が出土した。

(10) 第9トレンチ

このトレンチでは表土下1.35mで、上層遺構として掘立柱建物跡(SB901)・方形土坑(SK902)を検出した。上層遺構検出面は、濃茶褐色粘砂質土上面で、第7トレンチ上層遺構面に比べやや砂質が強い。この土層はそれ自体、古墳時代前半期の土器の包含層である。

遺構埋土は、土坑埋土が淡褐色粘砂質土であり、遺構面を形成する土層よりも、若干明るく黄味がかかる色調を示すが、その識別は容易ではない。

これに対して、掘立柱建物跡掘形の埋土は、黄褐色砂質土を呈し、やや識別がしやすい。以下にそれぞれの遺構についてその概略を述べる。

方形土坑SK902 東西3.31m・南北2.86mを測る。四隅が非常にきわだった整然とした長方形をなすのが特徴である。壁の立ち上がりは、ほぼ垂直であり、検出面から土坑底までの深さは33cmを測る。埋土は分層できなかった。土坑主軸はN18°Wである。

土坑に付属する施設として、柱穴、焼土の堆積と半円形状の掘り込みがある。

柱穴は、現在3基を確認した。そのうちの2基は、土坑東辺を切って設けられる。東半部の検出面は、土坑と同一であるが、切り合いは確認できなかった。土坑床面まで掘り下げたところ、ようやく柱穴の西半部の輪郭が確認できたものである。他の1基は、西辺中央に接して存在する。柱穴の直径は30cm前後、床面からの深さ47cmを測る。

焼土の堆積は、床面北西部に認められる。範囲は、東西133cm・南北100cmで、厚さ17cmを測る。焼土の堆積の西側に接して、土坑西辺を半円形状にわずかに掘りくぼめた個所がある。東西42cm・南北36cm・検出面からの深さ4cmを測る。掘りくぼめられた面は、焼土と化している。

遺物出土状況 堆積した焼土の周辺で、ややまとまった状態で遺物が出土した。

焼土北側では、床面から数cm遊離して須恵器杯(14)、焼土上面で土師器甕(13)が出土したが、いずれも破片の状態である。他に土坑埋土中から、須恵器・土師器片が出土した。

以上、方形土坑SK902について、「土坑」として報告してきたが、土坑北西部における焼土の堆積をかまどの破壊されたもの、半円形状の掘り込みを煙道と考えれば、この土坑は竪穴式住居跡の可能性が強い。ただし、現在確認している3基の柱穴のみでは、独立した竪穴式住居跡にはなりにくく、床面の断ち割り調査を待って結論を出したい。

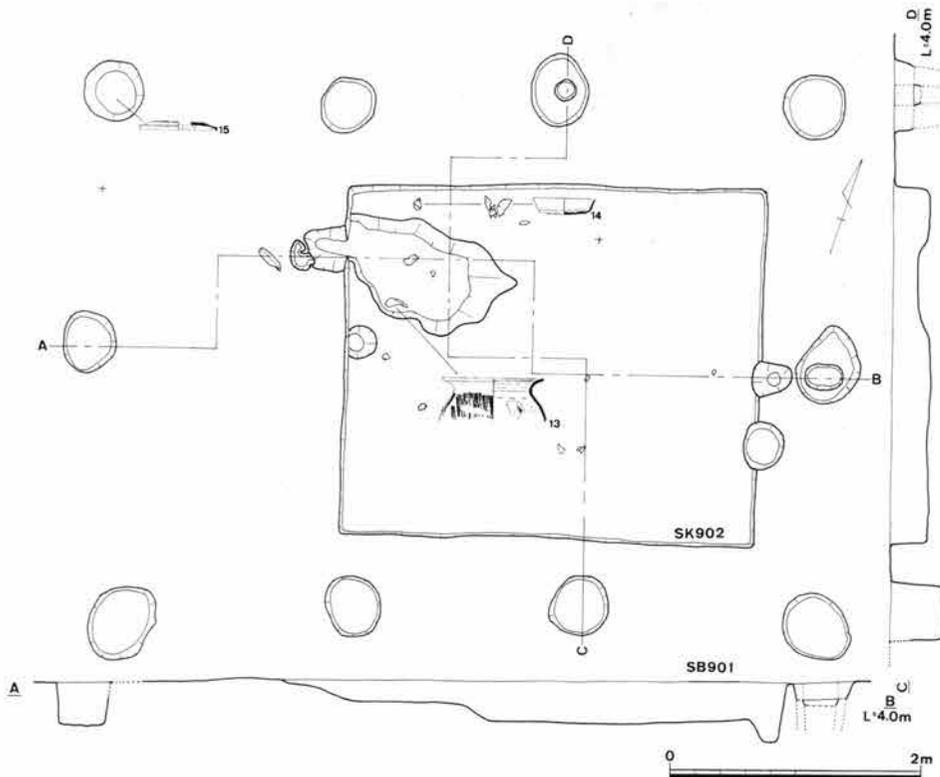
掘立柱建物跡SB901 南北2間・東西3間の掘立柱建物跡である。柱掘形は直径50cm程度の円形を呈し、検出面からの深さは約40cmを測る。柱痕跡を確認したのは、10基の柱穴中、2基にすぎない。確認した柱痕跡は、柱掘形埋土が黄褐色砂質土であるのに対し、やや粘質を呈する淡青灰色と黄灰色の混合土である。柱痕跡の直径は約20cmを測る。

柱間距離は、平均約1.96mである。柱心間距離が確実に押さえられるものは皆無であるが、北東のものから時計まわりに目安を示せば、2.18m・2.06m・1.92m・1.84m・1.84m・2.16m・2.04m・1.87m・1.75m・1.96mである。

遺物出土状況 柱掘形埋土中から須恵器片が出土したものがある(15)。

ここで、方形土坑SK902と掘立柱建物跡SB901の関係について触れる。

SK902とSK901の主軸は、ほぼ一致し、そのずれは、30分前後である。またSK902を前述



第10図 第9トレンチ遺構実測図

の結果から竪穴式住居跡と考えると、SK902は、それ自体単独では建物となりにくいことも前述のとおりである。したがって、互いに切り合い関係を持たないSK902とSB701は相互に関連しあう建築遺構として同時に存在したものと捉えられる可能性もある。しかし、SK902の北西部に堆積する焼土を、かまどの破壊されたものとするならば、煙道部が掘立柱建物跡SB701の西1間分にすっぽり入ってしまい、住居として極めて不都合である。一つの可能性として、竪穴式住居跡から掘立柱建物跡へと拡張して改築したものとも考え得るが、詳細は今後の検討に待ちたい。

(11) 第10トレンチ

このトレンチでは、全面が砂層の堆積に覆われ、遺構面は全く残存しなかった。

5. 出土遺物

現在整理作業中のため遺構出土遺物を中心に、一部標式的なものを抽出して図示した。

1～3は、第6トレンチ竪穴式住居跡SH601出土の土師器である。1は埋土中、2・3は床面に密着して出土した。

1・3は甕である。1は単純な「く」の字形口縁で、3はやや外反する口縁を持つ。口縁部の形状の違いに対応し、器表内外面の調整も異なる。1では体部外面をハケメ、内面をヘラケズリするのに対し、3では、体部下半部をタタキ、上半部にハケメを施す。内面は上半部をハケメ、下半部をヘラケズリする。

2は台付鉢である。口縁端部をややナデた小型の鉢に低い台を貼り付けている。

胎土焼成は、1・2が橙褐色でやや軟質であるのに対し、3は淡褐色でやや硬質である。

4～8は、第8トレンチ竪穴式住居跡SH801出土の土師器である。4～6は甕、7は高杯の杯部、8は小型丸底壺である。

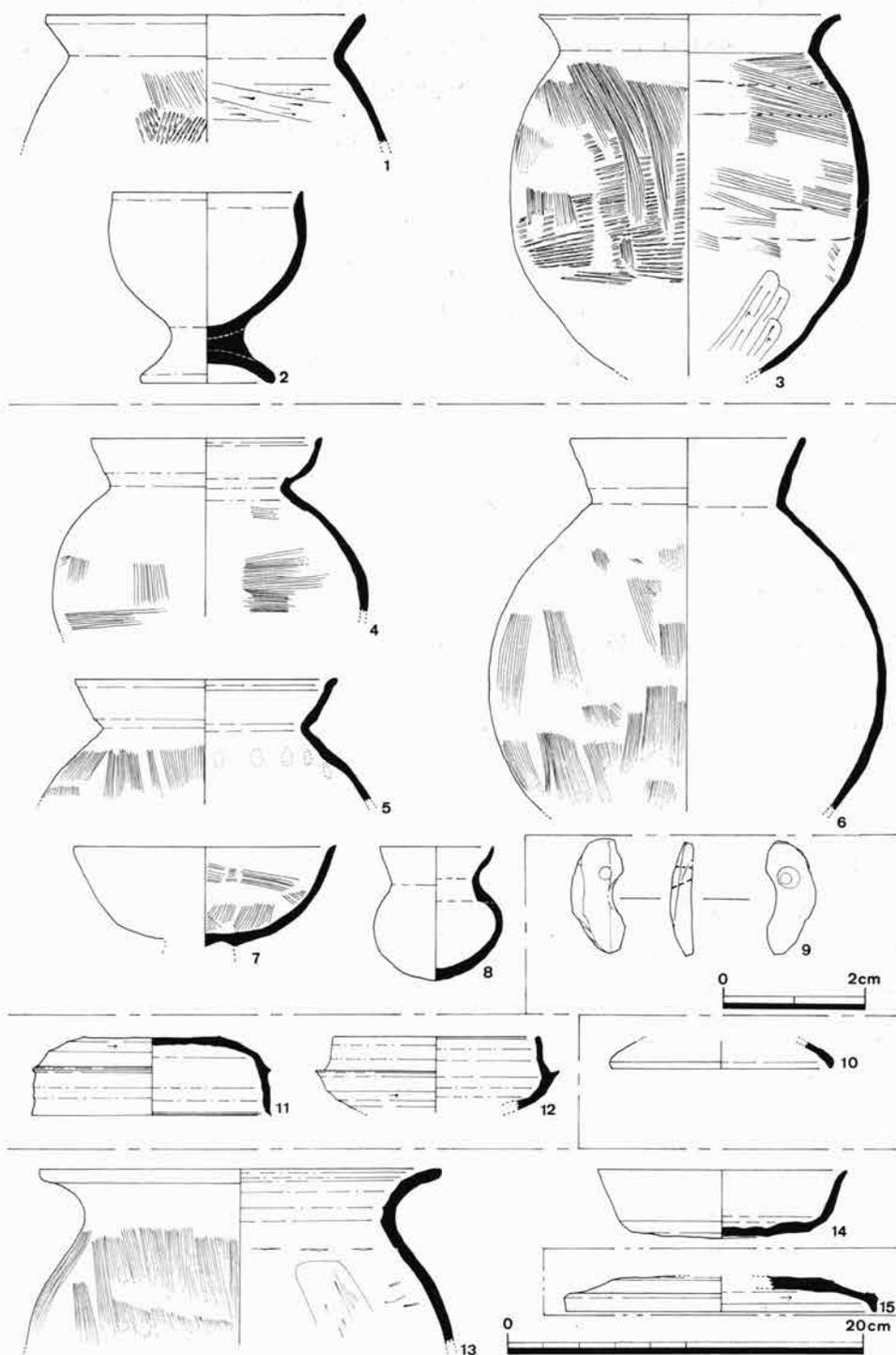
甕は、口縁の形状により2種類ある。すなわち、口縁端部内面が肥厚するいわゆる布留傾向系の甕(4・5)と、口縁部が直線的にのびる甕(6)である。4・5・6は、それぞれやや胎土が異なり、4は褐色、5は明褐色、6は淡褐色の色調を呈する。

7は、口縁部と体部の境界に稜を持たない高杯である。内面はハケメ調整する。

8は、退化した小型丸底壺である。口縁部の外反角度は小さく、口縁径は、体部最大径より小さい。

11・12は、9トレンチ包含層出土遺物である。11・12とも須恵器で、11は蓋、12は杯である。11は口縁部と天井部の境界に突帯を設けて区画し、全体としてややシャープな印象を受ける。口縁端部内面には段を有し、天井部はややていねいに回転ヘラケズリする。

10は、7トレンチ掘立柱建物跡掘形埋土中から出土した。須恵器の蓋であり、笠形にや



第11図 出土遺物実測図

や天井部が高くなり、口縁端部内面にはかえりは認められない。

13・14は、SK928から出土した。13は焼土面上、14は焼土に近い土坑埋土最下層からの出土である。13は、土師器の甕である。口縁内面を数度の横ナデにより、段々状に調整することに最も大きな特徴がある。14は、須恵器杯である。底部に高台がつかないタイプであり、底面は回転ヘラケズリののちナデる。

15は、須恵器の蓋である。SB901柱掘形埋土中から出土した。やや大型の口径に、口縁部と天井部の境界で、端部が明瞭にほぼ直角に下垂して屈曲するのが特徴である。

9は、第5トレンチ土坑SK501の壁面に密着して出土した。硬玉製の勾玉で、片面穿孔である。片面のみが扁平で、全体として、やや不整形である。

6. ま と め

以上、由良川下流域の自然堤防上に立地する遺跡の一つである桑飼上遺跡について、初年度の試掘調査の結果の概要の一部を述べてきた。

今年度は、桑飼上遺跡における初めての発掘調査である。これまで弥生時代中期に比定される遺物が採集され、集落遺跡として注意されてきたが、今後の調査により、典型的な自然堤防上の集落の姿を明らかにできる可能性がある。以下に今年度の調査成果のうち主なものに再び触れ、今後の調査の課題を提示し、まとめに代えたい。

第1～5トレンチでは、トレンチの南半部(現在の管理用道路のある陸地側)で、由良川の旧河道により形成された可能性のある沼状地形(厚い粘土の堆積層)を確認した。粘土層中には、弥生時代中期から奈良時代に比定し得る遺物が包含されている。

一方、現在の由良川に面した側では、度重なる洪水・河川の浸食による、ほとんど遺物を包含しない厚い砂層が堆積している。遺構面は、これらに挟まれたわずかな空間に残存する。土坑、柱穴などを検出したが、これらは概ね、弥生時代後期を中心としている。第1～5トレンチにかけては、当該期の墓域を一定時期形成していた可能性がある。

第6～第9トレンチでは、由良川による陸地の浸食は、トレンチの北半1/2～1/3に及んでいる。しかし、わずかに残存した遺構面では、上層で掘立柱建物跡群、下層で竪穴式住居跡を検出した。

ここで、今後の調査の課題を列挙する。

1. 弥生時代後期段階の墓域の範囲の確認(第1～5トレンチ)
2. 隅丸方形の竪穴式住居跡の时期的問題—住居プランの変遷—(第6トレンチ)
3. 須恵器の導入と土師器との共伴関係(第8・9トレンチ)
4. 竪穴式住居から掘立柱建物への転換期(第9トレンチ)

5. 大型方形柱掘形をもつ掘立柱建物群一範囲・規模・規格性の確認(第7トレンチ)
2については、現状の資料を検討する限り、タタキ成形による甕(3)から古墳時代初頭と捉えておきたい。

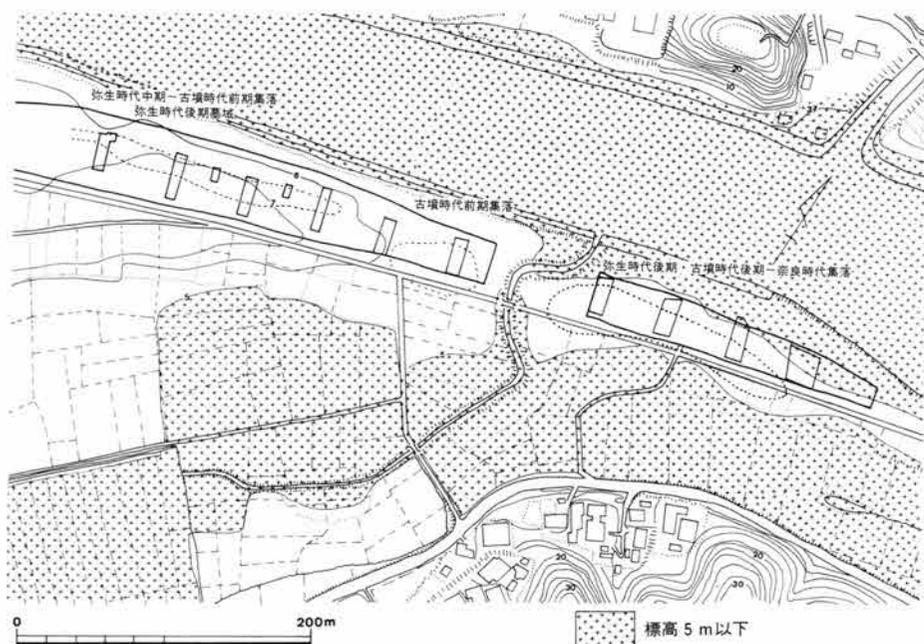
3については、第9トレンチ出土の須恵器蓋は、器形的特徴から、畿内陶邑の編年に対応させれば、TK208型式に併行する段階のものと考えられる。また第8トレンチSH801出土遺物は、退化した布留甕(4)、在地甕(6)、小型丸底壺(8)が共伴することより、布留式併行でも最終的な段階と考えたい。

4については、資料的制約が多いが、SB902出土須恵器を奈良時代でも後半期に比定した場合、SK928出土遺物はこれよりも2～3型式遡るものである。

5については、第7トレンチ掘立柱建物群の存続時期にあたる1点は、柱掘形埋土中より出土した須恵器より、奈良時代の前半期を中心とした時期に求められる。

いずれにしても、現状で知り得た知見は少なく、詳細は、今後の調査の課題としたい。

なお最後に、遺跡周辺の地形図を掲げたが、これによると第1～6トレンチについては、現状の自然堤防の中心から、わずかに北側に寄っている。しかし、第5トレンチの土坑、第6トレンチの竪穴式住居跡などは、むしろ河川に隣接した個所で検出しているため、本来の遺構分布の中心は、むしろ流出していると見るべきかもしれない。



第12図 周辺地形図

一方、第7～9トレンチについては、ほぼ現状の自然堤防の中心を捉えている。今回試掘のトレンチと管理用道路の下に、掘立柱建物を中心とした、奈良時代建物群が埋没している可能性があるので、今後の調査に期待したい。(細川康晴)

注1 調査に参加した方々は以下のとおりである。

池田 力・倉橋谷夫・倉橋三男・小谷弥太郎・嵯峨 勉・佐藤一郎・佐藤健一・佐藤 哲・佐藤正作・佐藤春夫・佐藤治幸・佐藤 勉・佐藤芳夫・新宮又健・高橋松見・橋垣周郎・南谷工・南谷虎夫・山崎源治・吉岡 譲・若狭義明・碓 弥生・井上英子・井上久子・今西アヤノ・今西和子・今西ひさ江・白井あき子・梅原トシ江・瓜生初枝・倉橋ヤエ・河合美智子・河合好乃・河崎和子・新宮久野・新宮ヒサノ・新宮久野・新宮 操・新宮美代子・嵯峨ひさ江・佐藤清栄・佐藤修子・佐藤弘美・佐藤文子・佐藤マサ枝・佐藤正子・佐藤増江・佐藤ミドリ・佐藤ミネ子・佐藤ヤス子・谷口美年子・土井淑子・永野澄慧・永野久枝・牧 鈴子・真下朝野・真下重子・真下志津江・真下チセノ・真下トメ子・真下幸江・水口和子・村上千里・森野石子・荒賀俊貴・荒木尚之・飯田 徹・岩崎浩一・岩永篤彦・岡本英一・岸岡貴英・小橋拓司・高山太郎・中尾重宏・野田敦子・真下定平・真下徳也・山本政敏・島なをみ・中本恵子・西川悦子・山下雅子

注2 御指導・御助言をいただいた方は次のとおりである。

金村允人・佐原 真・杉本嘉美・高橋美久二・堤圭三郎・長谷川達・吉岡博之

注3 中谷雅治ほか『高河原遺跡発掘調査報告書』大江町教育委員会 1975

注4 渡辺 誠ほか『京都府舞鶴市 桑飼下遺跡発掘調査報告書』舞鶴市教育委員会 1972

注5 吉岡博之『志高遺跡一昭和56年度花ノ木・スドロ・藪下地区および久田美地区の調査概要一』(舞鶴市文化財報告 第6集 舞鶴市教育委員会) 1982

吉岡博之ほか『志高遺跡一昭和57年度カキ安地区の調査概要一』(舞鶴市文化財報告 第4集 舞鶴市教育委員会) 1983

吉岡博之『志高遺跡一昭和58年度カキ安・舟戸地区の調査概要一』(舞鶴市文化財報告 第7集 舞鶴市教育委員会) 1984

岩松 保「志高遺跡昭和59年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第17冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1985

肥後弘幸「志高遺跡第7次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第26冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987

注6 増田信武・杉原和雄・釋 龍雄『水無月山遺跡発掘調査報告書』京都府立丹後郷土資料館 1980

注7 肥後弘幸「シゲツ窯跡・シゲツ墳墓群発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第28冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1988

注8 注7に同じ

注9 確認調査の結果に基づいて、遺跡地内でも包含層より上層の無遺物層をほ場整備に必要な分だけ除去した。

注10 田辺昭三『陶邑古窯址群1』平安学園考古学クラブ 1966

2. 近畿自動車道舞鶴線関係遺跡 昭和62年度発掘調査概要

はじめに

近畿自動車道舞鶴線は、兵庫県吉川 J・C～京都府福知山 I・C 間がすでに開通し、福知山～舞鶴間(22.7km)が第8次施工命令区間である。この計画路線上には、福知山市域に6遺跡・綾部市域に15遺跡の計21遺跡の存在が確認されている。福知山～舞鶴間における埋蔵文化財の発掘調査は、日本道路公団大阪建設局の依頼により、昭和62年度から財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターが調査主体として、実施している。

昭和61年度には、綾部市域において平山城館跡(旧名・平山谷城館跡)・平山東城館跡(旧名・中城館跡)・野崎遺跡・カジャ谷古墓の4遺跡を調査している。

今年度は、継続調査の平山城館跡のほか、小貝遺跡・小西町田遺跡・三宅遺跡・三宅4号墳・福垣北古墳群(旧名・以久田野古墳状隆起)・福垣城館跡・私市円山古墳(旧名・円山城館跡)の発掘調査を実施した。各遺跡の発掘調査は、下記の期間で実施した。

- (1) 小貝遺跡 昭和62年9月1日～昭和63年2月16日
- (2) 小西町田遺跡 昭和62年5月8日～昭和63年1月13日
- (3) 三宅遺跡 昭和62年5月8日～昭和63年3月11日(次年度継続)
- (4) 三宅4号墳 昭和63年1月11日～昭和63年3月11日
- (5) 福垣北古墳群 昭和62年11月5日～昭和63年3月8日(次年度継続)
- (6) 福垣城館跡 昭和62年11月24日～昭和63年2月25日
- (7) 平山城館跡 昭和62年4月20日～昭和62年8月26日(前年度継続)
- (8) 私市円山古墳 昭和62年11月9日～昭和63年3月11日(次年度継続)

なお、カジャ谷古墓は昭和61年度に発掘調査を終了しているが、概要報告は今年度分に収録した。(8)については、調査を終了した経塚についてのみ報告する。

現地調査は、調査第2課調査第2係長水谷寿克、同調査員竹原一彦・三好博喜・鍋田勇、調査第3係調査員石井清司・黒坪一樹が担当した。調査に際しては、日本道路公団大阪建設局福知山工事事務所・綾部市教育委員会・綾部市土地開発室・綾部史談会・地元各自治会・京都府教育委員会・京都府中丹教育局・京都府立丹後郷土資料館等の諸機関・諸氏から多大の協力を得た。また、現地の発掘作業については、地元各地区の有志の方々・有志学生諸氏に、酷暑酷暑の季節を通じて、熱心に発掘作業に従事していただいた。末筆なが

付表1 近畿自動車道舞鶴線関係遺跡(第8次区間)一覧表

番号	遺跡名	種別	年代	所在地	備考
1	狐塚古墳	古墳	古墳時代中期	福知山市字石原小字平野	測量調査
2	火柴原古墳	古墳	古墳時代	福知山市字石原	
3	小谷古墳	古墳	古墳時代	福知山市字観音寺	
4	西山館跡	城館跡	鎌倉～室町時代	福知山市字観音寺	
5	興遺跡	集落跡	弥生時代	福知山市字興	
6	観音寺遺跡	集落跡	弥生時代	福知山市字観音寺	磨製石剣出土
7	小貝遺跡	集落跡	縄文～鎌倉時代	綾部市字小貝町	62年度
8	私市円山古墳	古墳 経塚	古墳時代中期 鎌倉時代	綾部市字私市町小字円山	継続
9	馬場池東方遺跡	散布地	不明	綾部市字私市東町	古墓跡?
10	小西町田遺跡	集落跡	弥生～平安時代	綾部市字小西町小字町田	62年度
11	三宅4号墳	古墳	古墳時代後期	綾部市字豊里町小字三宅	62年度
12	三宅遺跡	集落跡	弥生～鎌倉時代	綾部市字豊里町小字三宅	継続
13	福垣城館跡	城館跡	室町時代	綾部市字豊里町小字福垣	62年度
14	福垣北古墳群	古墳	古墳時代中期 ～後期	綾部市字豊里町小字福垣	継続
15	館1号墳	古墳	古墳時代	綾部市字館町小字フロノ谷	
16	赤田城館跡	城館跡	室町時代?	綾部市字位田町小字赤田	
17	カジャ谷古墳	古墓跡	中世?	綾部市字七百石町小字カジャ谷	61年度
18	平山城館跡	城館跡	室町時代	綾部市字七百石町小字平山	61・62年度
19	平山東城館跡	城館跡	室町時代	綾部市字七百石町	61年度
20	奥大石古墳群	古墳	古墳時代	綾部市字七百石町	
21	野崎遺跡	古墳	古墳時代	綾部市字高槻町小字野崎	61年度

ら、ここに厚く感謝し、御礼申し上げます。

(竹原一彦)

位置と環境^(注1)

京都府の北部に位置している綾部市は、丹波高原の東北端にあたり、市域の約8割を山林が占める山間部である。市域の南部を、京都府下最大の河川である由良川が西流し、それに八田川、犀川、相長川等の支流が南流して注いでいる。

綾部市から福知山市にかけての細長い平野は、由良川の中流域にあたり、遺跡の豊富な

地域である。以下、市内の主要な遺跡について(一部、福知山市も含む)、時代を追って概観していく。

旧石器の散布地である石原遺跡、以久田野遺跡などにみられるように、この地には古くから人々の生活が認められる。

縄文時代に入ると遺跡の数は増え、昨年度に調査された野崎遺跡を含み、市内の数か所から、石製品が出土している。

弥生時代の遺跡は、市内のほぼ全域に及んでいる。以下、時期を追って概観すると、前期の遺跡としては、犀川左岸の台地上に位置する館遺跡があるのみである。中期になると、興遺跡・観音寺遺跡、青野遺跡など、遺跡の数も増加する。青野遺跡は、由良川の自然堤防の微高地上に営まれた、市内を代表する弥生中期より古墳時代後期に至る大集落遺跡である。後期になると、中期より続く青野遺跡のほか、古墳時代中期まで及ぶ青野西遺跡、3基の台状墓が検出された宝蔵山遺跡、方形周溝墓と方形台状墓の並存する久田山遺跡などがあげられる。平地における方形周溝墓は、今回調査の三宅遺跡・小貝遺跡で確認され、また、三宅遺跡では、多数の土坑が検出されるなど、これまであまり知られていなかった弥生時代の墓制などを考える上で、貴重な資料を提供した。

この地域の古墳時代は、弥生墳墓の性格を残す成山古墳群の築造で始まる。成山古墳群は、方墳3基より構成され、2号墳からは全国でもわずか6面しか出土していない飛禽文鏡が出土している。小西町田遺跡は、成山古墳群の麓に位置しており、成山古墳群とは、村と墓の関係にあることが窺われる。

5世紀前半には、段築、葺石、埴輪、周濠を兼ね備えた方墳である、菖蒲塚・聖塚古墳(多田古墳群)が築造される。この両古墳は、規模の大きさ、副葬品の豪華さ、外表施設・外周施設の完備という今までにない卓越性をもち、より広い地域の政治的統合と、その首長の出現を窺わせる。しかし、方墳という墳形をとる点が、この地域の特性として注目される。

5世紀後半になると、市内のほぼ全域に、前方後円墳が出現する。年代をおさえられる最古の前方後円墳は、犀川下流域の以久田野古墳群中に存在する沢3号墳である。そのほかにもこの地域には、5世紀中ごろに遡る可能性のある以久田野古墳群殿山1号墳、6世紀前半に位置づけられる同15、16号墳などの前方後円墳が存在する。犀川上流域では、軸山古墳・須波伎東古墳・稲荷山古墳、八田川上流域では茶臼山古墳・上杉1号墳、同下流域では、久田山古墳群、と全域にわたって数多くの前方後円墳が築造されている。

5世紀後半～6世紀における造墓の中心は、群集墳となる。前述の以久田野古墳群・高谷古墳群・三宅古墳群・久田山古墳群等が築造されている。

犀川下流域北東の丘陵上に分布する以久田野古墳群は、前方後円墳5基を含み、総数120基からなる丹波地方最大の群集墳である。これまでは、5世紀の後半に造墓を開始し、6世紀に盛行すると考えられていたが、以久田野古墳群の一支群と考えられる福垣北古墳群の調査により、5世紀の前半～中頃に造墓の始まることが確認された。

高谷古墳群は、犀川の左岸丘陵上に位置し、弥生時代の集落である館遺跡とは小河川をはさんで約150mの位置にある。木棺直葬と横穴式石室、計5基程度からなる小規模群集墳である。5世紀末から築造が始まり、7世紀後半まで存続すると考えられており、出現のはやさと、その存続期間の長さが注目される。

木棺直葬の群集墳である三宅古墳群は、現在は円墳1基が残るのみであるが、今回の調査で、12基から構成されていたことが明らかとなった。1号墳は、荒神塚と呼ばれ、短甲、金銅張りの馬具などの遺物が出土している。副葬品の特異性から盟主墳と考えられている。

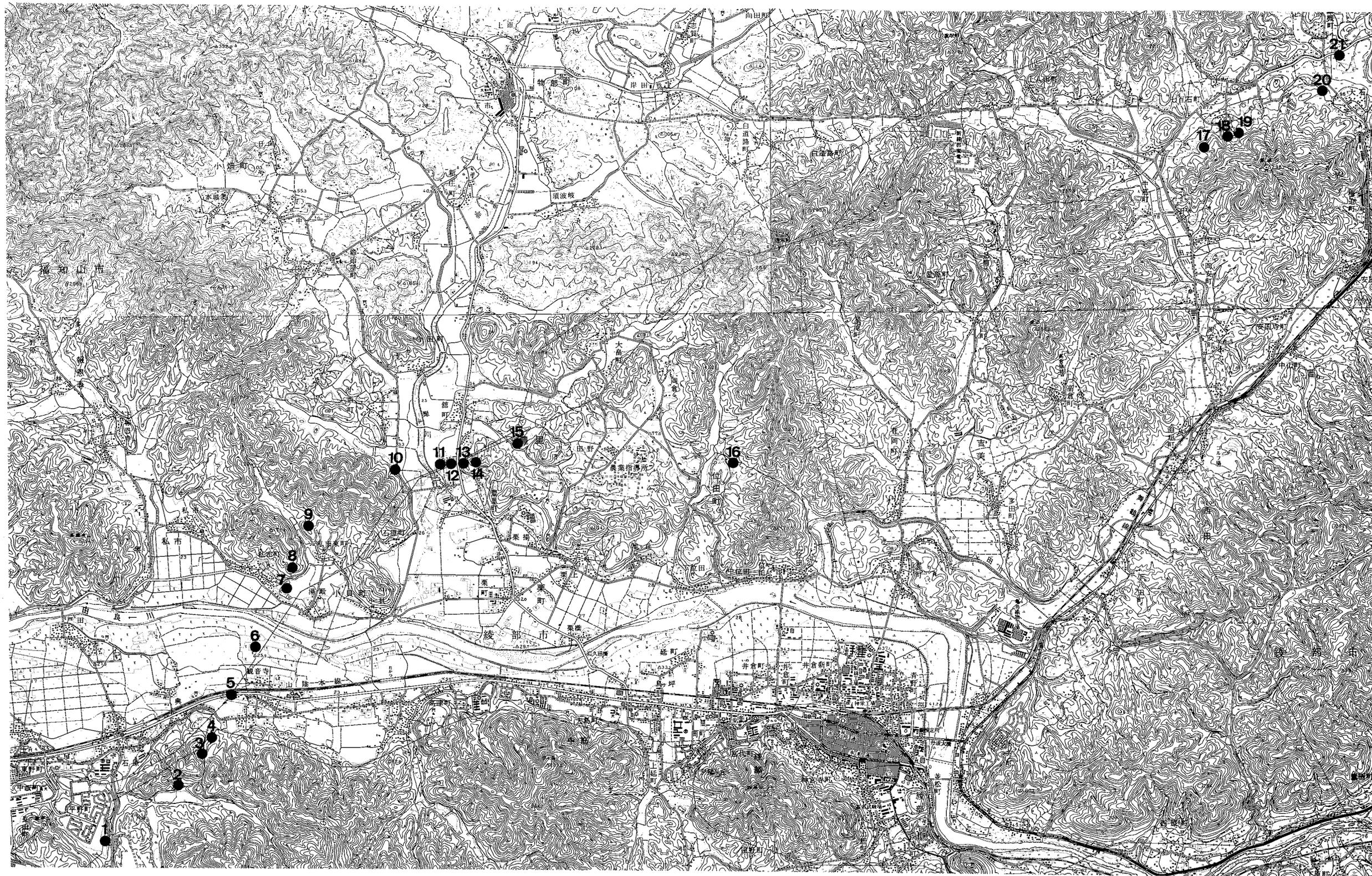
久田山古墳群は、この地域では、以久田野古墳群につぐ規模をもつ群集墳で、前方後円墳2基を含む、総数70基あまりで構成されている。しかし、いずれも未調査のため、詳細については不明なことが多い。

歴史時代についてみると、寺院跡には、白鳳時代に建立された寺院と推定されるものに綾中廃寺がある。綾中廃寺は、文献にはまったく記載されていないが、山田寺式、藤原宮式の軒丸瓦や、風鐸、花崗岩製の礎石列などが確認されている。綾中廃寺北方の青野南遺跡では、規則的に並ぶ掘立柱建物跡が検出された。この遺構については、何鹿郡衙跡の可能性が考えられている。

平安時代では、小西町田遺跡で、官衙的性格を有する遺構・遺物が確認されている。

中世に営まれた経塚は、市内では、藤山経塚・一の宮経塚・私市経塚・篠神社経塚・甲が峯経塚・殿山経塚及び館遺跡の7か所で確認されている。藤山経塚は、綾部市街地を一望することのできる丘陵上に営まれており、銅製経筒・松鶴鏡・刀子・北宋銭等が出土している。

(森 美知子・鍋田 勇)



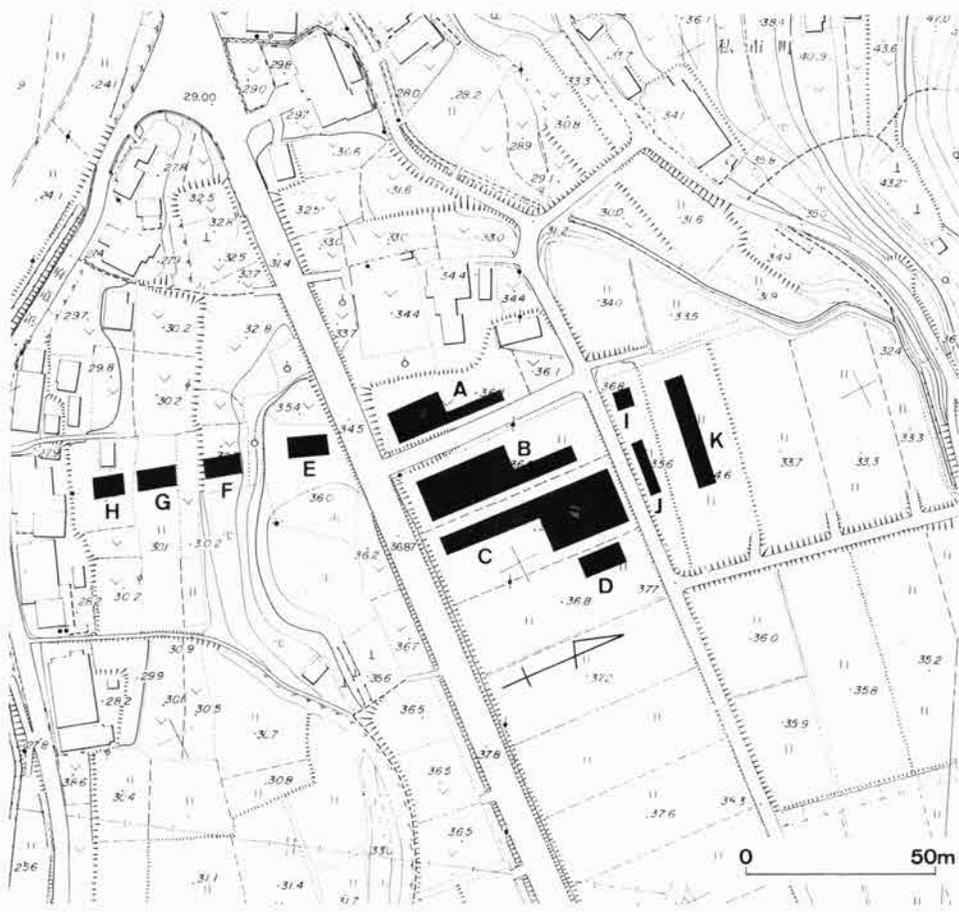
第13図 近畿自動車道舞鶴線関係遺跡位置図(第8次区間)(1/40,000)

(1) 小貝遺跡

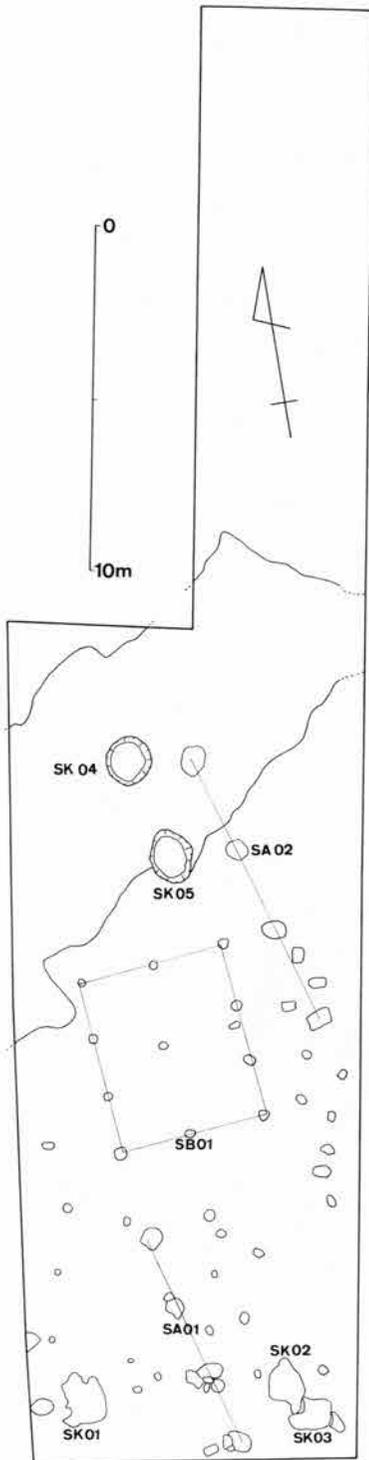
1. はじめに

小貝遺跡は、福知山市に向かって西流する由良川の右岸に広がる集落跡である。今回の調査地周辺は、綾部市のなかでも河岸段丘のよく発達したところの一つである。^(注2) 標高30～37mを測るこの遺跡内からは、縄文時代以来の考古学的資料が過去に発掘・採取されている。舌状にゆるやかに広がるこの段丘上は、大古より人々の生活にとって好環境であったと言えよう。

昭和51年度に綾部市教育委員会が古墳時代の須恵器を採取され、同年の京都府教育委員会による発掘調査でも古墳時代から近代に至る資料が報告されている。^(注3) こうした経緯から、



第14図 トレンチ配置図



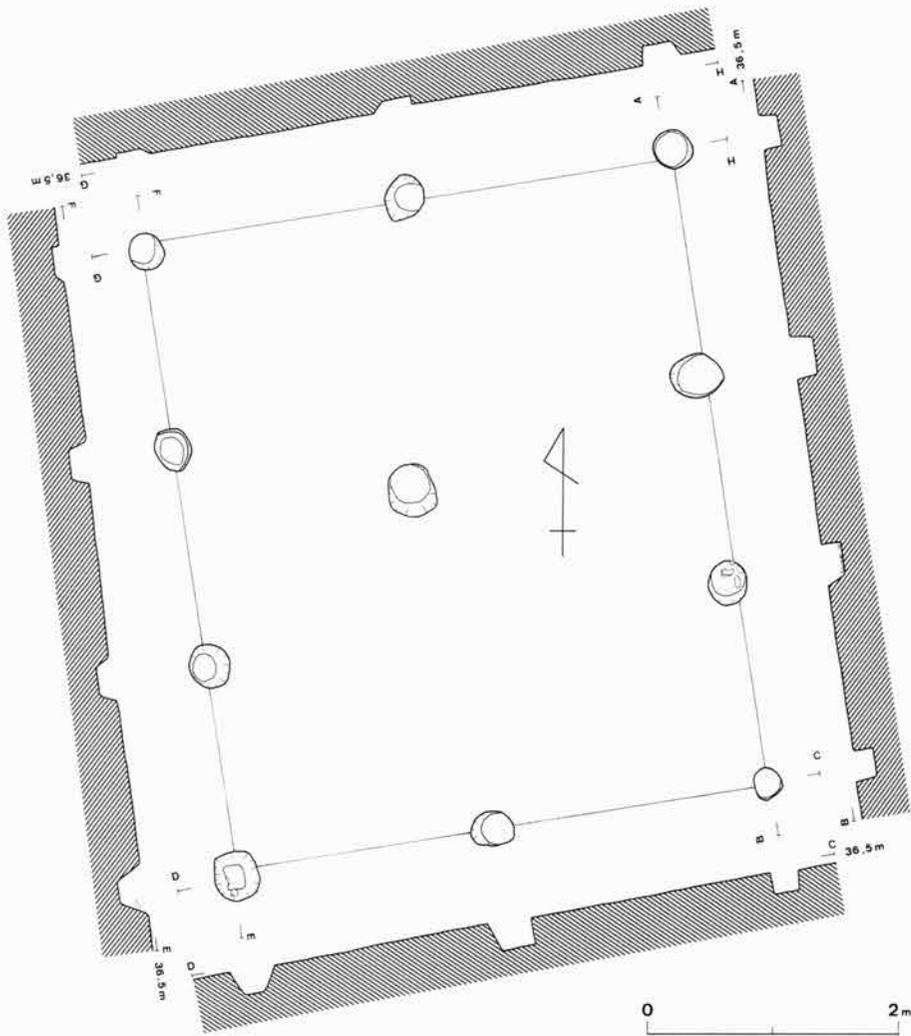
第15図 B トレンチ平面図

確実に遺構・遺物を包蔵する地点と認識されている。しかし、同時に田畑のは場整備を中心とする土地の改変が甚しいところでもある。今回の調査についても、遺構・遺物の良好な状態での検出はあまり期待できないという懸念があった。調査地が、小貝町湯殿から私市町に向かって傾斜していく変換点付近に当たっていることも心配した。しかし、縄文時代晩期から鎌倉時代にかけての資料が検出され、予想を上回る成果を得ることができた。

2. 調査経過

道路建設の予定路線帯内に、A～Kまでの発掘トレンチを設定した(第14図)。E～H及びI～Kトレンチの部分は、A～Dトレンチの面より標高にして1～6m近くも低くなっている。近・現代の田畑利用による掘削で、段差がつけられたものである。したがって、A～Dトレンチ以外のトレンチでは遺構は残存していないものと予想した。予想どおり、E～Kトレンチでは、田畑の耕土・床土直下で暗赤褐色(E～Hトレンチ)及び暗黄褐色(I～Kトレンチ)の粗砂礫層の地山が露出した。遺構は検出し得ず、遺物が耕土・床土中から若干出土したのみである。古墳時代後期の須恵器・土師器や近・現代の陶磁器類などである。

A～Dトレンチからは、多くの遺構・遺物が検出された。A～Dトレンチの基本層序を簡単に記すと、田畑の耕土そして床土がつづき、第3層に暗赤褐色粘土の包含層が南側で部分的に堆積している。第4層は黄褐色粘質土で、この面から遺構が認められた。第4層の厚さは約30cmで、地表から第4層直上(遺構面)までの深さは約50～60cm

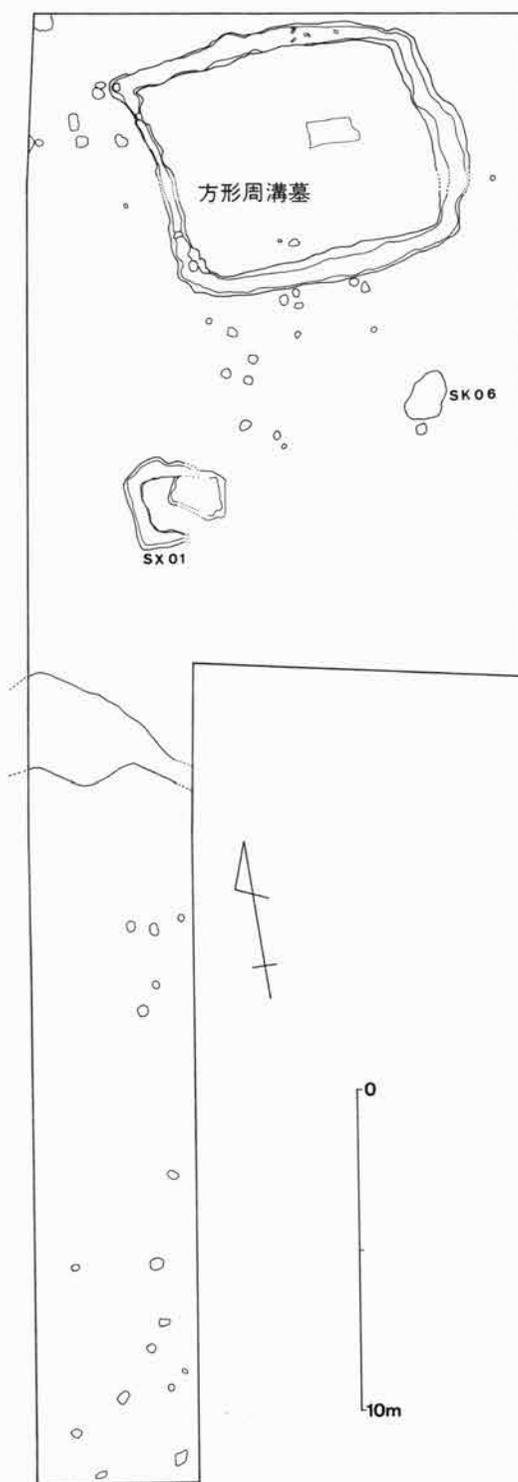


第16図 掘立柱建物跡実測図

を測る。なお、すべてのトレンチの耕土・床土は重機で除去し、A～Cトレンチは、遺構検出区を中心に再び拡張掘削を実施した。

最終的にAトレンチでは多数の柱穴痕(弥生時代～平安時代)を、Bトレンチ(第15図)からは土坑(古墳時代)・掘立柱建物跡1棟(7世紀以前)・集石円形土坑2基(鎌倉時代?)・柵列(鎌倉時代)などを、Cトレンチ(第17図)では方形周溝墓1基(弥生時代中期)・土坑(縄文時代晩期)・柱穴痕(時期不詳)などをそれぞれ検出している。各遺構の写真撮影・実測および周辺の地形測量の後、作業を終了した。

なお、調査地の全景撮影については、航空撮影をとり入れた。



第17図 Cトレンチ平面図

3. 検出遺構

明確な遺構は、A～Cの3トレンチで検出された。Aトレンチから順に主なものについて報告したい。

Aトレンチからの柱穴痕は、ほとんど円形である。直径は大きくても50cmを超えるものはない。残存する深さは、10cm未満のものが多いが、深いものでは30～40cmに達する。埋土は、暗茶褐色粘質土が圧倒的に多い。建物跡や柵列を抽出しようと努めたが、明確に断定し得るものはない。なお、所属時期は、主に弥生時代後期及び平安時代の二時期に比定される。

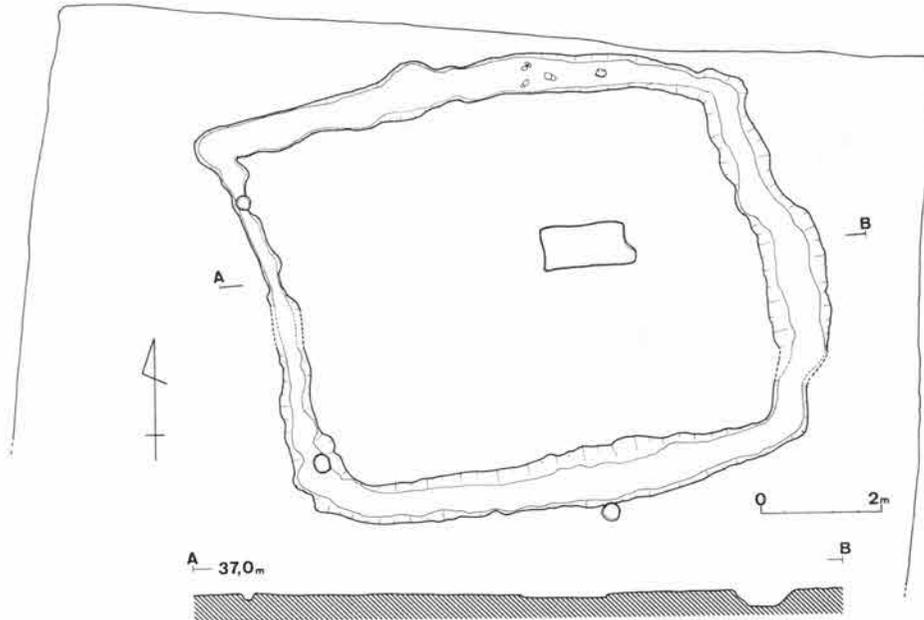
次にBトレンチであるが、まず第16図に示した掘立柱建物跡(SB01)があげられる。直径30～45cmの円形柱穴痕が、東西2間・南北3間の建物を構成する。柱間距離は、東西2.1m・南北1.7～1.8m間隔で一定している。建物の主軸はほぼ真南北に沿っている。柱穴内には暗茶褐色粘土がつまっており、弥生土器や赤く焼き仕上げられた土師器片などが出土した。遺物から見て、時期は8世紀に入ることはない。

2基の集石円形土坑は、トレンチのほぼ中央部で検出(図版第9下)した。2基とも直径1.2～1.4mを測り、深さは約30cmである。2基とも中

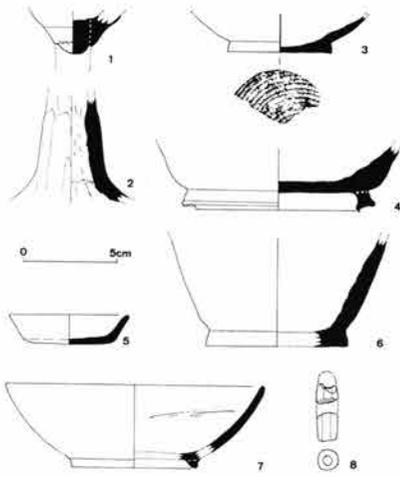
中央に約45cm×30cmの扁平な割石を据え、その周辺にぎっしりと拳大の円礫が詰められている。間隙の埋土は、暗灰色粘質土であった。2基は、中心間距離約3mを隔てている。この東側に並ぶ方形の比較的大きな柱穴列との関係で考え、門柱の前面に設けられた何らかの施設になる可能性もある。瓦器碗細片が柱穴内と1基の集積円形土坑内から出土していることから、鎌倉時代に造られたものと考えられる。

トレンチ南端では2基の土坑(墓?)を検出した。不整形な楕円形を呈し、直径は1.5m×1.1mと1.2m×1mで、深さはともに約20cmを測る。切り合い関係はもたないが、極めて隣接している。暗茶褐色粘質土の埋土を有し、拳大のチャート礫が数点ずつ包含されていた。出土遺物は土師器の甕などが見られた。炭化物・焼土はない。

Cトレンチでは、その北端で弥生時代中期の方形周溝墓を1基検出している(第18図)。全体に厚く削平を受けたようで、残存状態は悪い。規模は、長軸(東西)約9.5m・短軸(南北)約8mを測る。周溝は北・東の辺の残りが比較的良好で、深さ約40~50cm・幅約60~100cmほど残っている。埋土は、暗茶褐色粘土で中からの遺物は僅少であった。北辺中央部底面で比較的まとまって弥生土器の壺(畿内第Ⅳ様式?)が出土した。主体部は、中央から東側に少しずれて確認された。東西方向に沿った長さ1.5m・幅70cm・深さ5cmの大きさである。出土遺物はみられない。全体に著しく削平を受け、本来は盛られていたであろう封土もまったく残存していない。



第18図 方形周溝墓実測図



第19図 土器類実測図

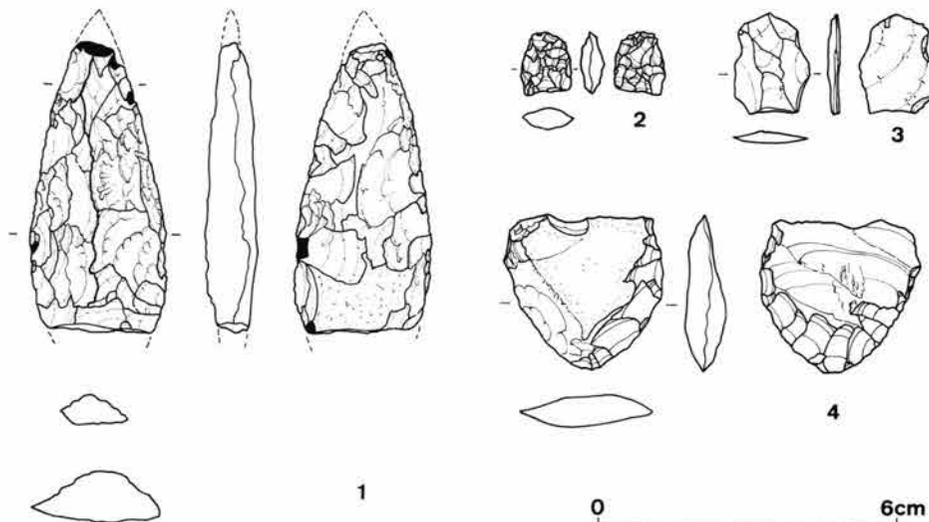
この方形周溝墓の中心から南東約8.5mのところ、楕円形の土坑があった。長軸1.7m・短軸1.1m・深さ15cmの大きさに、紫色を帯びた茶褐色粘土の埋土を有する。埋土の上面で縄文時代晩期の深鉢形土器が出土した。底部を欠損する大きな破片で、土坑底部にはり付くように出土した。

4. 出土遺物

第19・20図の遺物は、第19図3と第20図3を除き、すべて包含層中から出土したものである。

第19図1・2は、別個体であるが高杯の杯部下半と脚柱部である。ともに風化が著しくすすみ、内外面とも調整痕は不明である。ただ脚柱部外面は面取り痕が若干観察される。ともに時期は不明である。

同図3は、須恵器の杯である。底部に糸切り痕をとどめる。底部径は5.4cmを測る。同図4は、須恵器壺である。底部から胴部立ち上がりまでの破片である。しっかりとした高台を貼り付ける。底部径は10.2cmである。胎土・焼成とも極めて良好である。同図5は土師器皿である。口径6.4cmを測る。同図6は、須恵器壺である。底部は糸切り痕をとどめる。直径は7.5cmである。同図7は瓦器碗である。口縁部径13.8cmである。高台の残



第20図 石器類実測図

りは、ほとんど形ばかりとなる。内面のヘラ磨きは、残りが悪く不明瞭である。同図8は、土錘である。赤く焼かれており、胎土は精良である。

所属時期については、3・6が平安時代(9世紀中頃)、4が奈良時代(8世紀中頃)、7が鎌倉時代(13世紀後半)に比定されよう。

図版第10下・左は、Cトレンチの土坑(SK01)から出土した縄文土器である。口縁～胴部にかけて残る深鉢形土器である。滋賀里Ⅳ式(縄文時代晩期)に比定されるもので、削りによる器面調整が観察される。図版第10下・右は、方形周溝墓の周溝内から出土した弥生土器(壺)である。底部のほか、ヘラ描き波状文を施した胴部上半の破片もある。風化およびローリングがすすみ、残りは極めて悪い。畿内第Ⅳ様式に位置付けられよう。

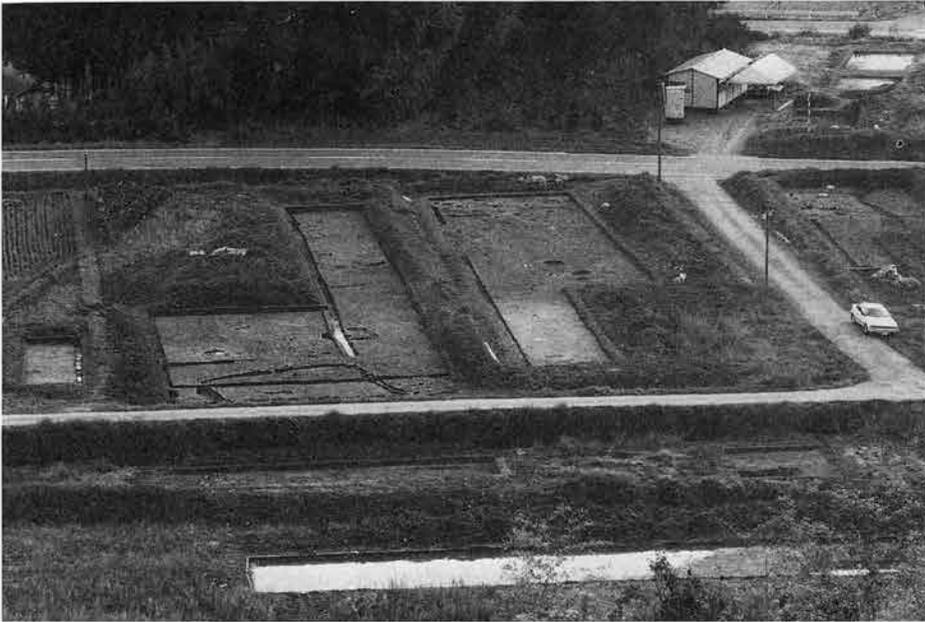
第20図の石器類については、3以外はすべてB・Cトレンチ内の包含層から出土したものである。1は、尖頭器である。先端部と基部を欠損している。残存長5.7cm・幅2.7cm・厚さ1cm・重さ17gを測る。両面加工が入念に施される。石材はサヌカイト製。2は、石鏃未製品である。長さ1.2cm・幅1cm・厚さ4mm・重さ0.5gを測る。表裏面とも細かな調整加工痕が観察される。良質のチャートを石材とする。3は剝片で、Bトレンチの柱穴内から出土している。長軸2cm・短軸1.5cm・厚さ2mm・重さ1.2gで、サヌカイト製である。片面にのみ加工痕をとどめる。4は削器である。長さ3cm・幅3cm・厚さ8mm・重さ7gを測る。赤色チャート製である。尖った下半刃部には細かい調整加工痕を施している。

5. ま と め

今回の調査の結果、主にA・B・Cトレンチから多くの遺構・遺物が検出された。Aトレンチでは弥生時代と平安時代の柱穴痕を、Bトレンチからは土坑(墓?)・集石円形遺構・掘立柱建物跡などを、Cトレンチでは柱穴痕・方形周溝墓などをそれぞれ検出している。

この遺跡が立地するこの台地上は、縄文時代から鎌倉時代にかけて、各時代の人々の極めて身近かな生活領域であった。その利用形態はさまざまで、定住生活を営む集落(弥生・平安時代)として、死者を葬ったりするまつりの場(縄文・弥生・古墳時代)として、あるいは門柱を構えて何らかの領域を画する空間(鎌倉時代)として活用された。由良川の川岸近くの低湿地よりもはるかに、当地は生活施設の立地に適していると考えられる。

また、方形周溝墓の検出は、弥生時代中期の文化交流をめぐって問題を投げかけたと言える。方形周溝墓は、綾部市では久田山古墳群中において見られる。由良川を本流とする文化の交流は、以前からその重要性が指摘されている。加えて小貝遺跡の付近で由良川と合流する犀川も、今回報告の三宅遺跡での弥生時代中期の良好な資料により、舞鶴方面から小貝遺跡を結ぶルートとして、かなり重要な役割を担っていたことがわかる。



第21図 調査地遠景（私市円山古墳から）

最後に、点数的にみればささやかなものであるが、石器類には形態・石材とも多種多様なものがみられる。多くは包含層中のものであることや、時期を決定し得る形態的特徴を示すものがないことは残念であるが、縄文～弥生時代の遺構との関連付けについて、注意を払わなくてはならない。さまざまな問題点を整理していくとともに、当地の遺跡全体の広がりをも、将来も考えていく必要がある。

（黒坪一樹）

(2) 小西町田遺跡

1. 調査経過

小西町田遺跡の発掘調査は、5月8日の測量調査に始まる。調査は、調査対象地が全長約320m・幅約90m・面積約23,400m²という広範囲にわたるため、遺構・遺物の有無を確認することに重点をおき、随所にトレンチを設けることにした。試掘トレンチは、幅4mのものを14か所に設定し、5月13日より重機掘削を行った。試掘調査の掘削面積は、2,000m²に及ぶ。試掘調査の結果、3・4・5のトレンチを中心とする地域と6トレンチ付近とに遺構・遺物の濃密な分布が認められた。このため、前者を西部地区、後者を東部地区として本調査を実施した。

東部地区については、6月8日から重機による拡張を行った。調査面積は1,920m²で、主として弥生時代末期から古墳時代にかけての遺構・遺物を検出した。

西部地区については、9月12日から重機による拡張を行った。調査面積は2,200m²で、主として平安時代の遺構・遺物を検出した。

現地調査は12月でほぼ終了し、12月14日には現地説明会を開催した。すべての作業を終了し、現地を撤収したのは1月13日である。

なお、本調査の地区割りは、国土座標に基づいた10m方眼を用いた。ラインの名称は、 $X = -74.980$ をAラインとして南方向にアルファベットを付し、 $Y = -71.960$ をOラインとして東方向に算用数字を付した。地区名称は、北西側交点を地区名とした。

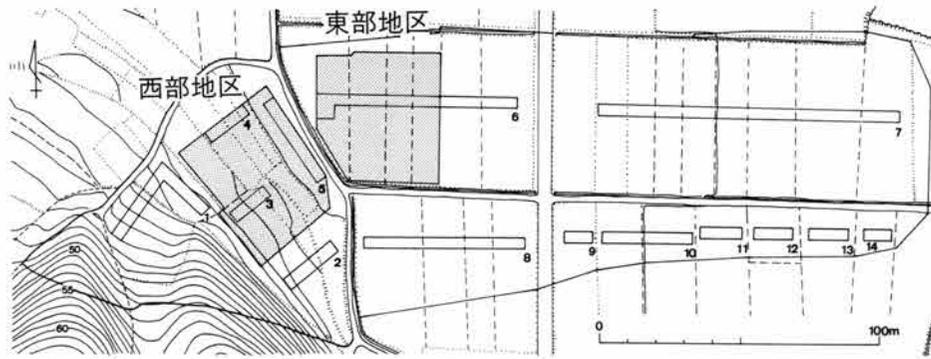
2. 調査概要

(1) 主な検出遺構

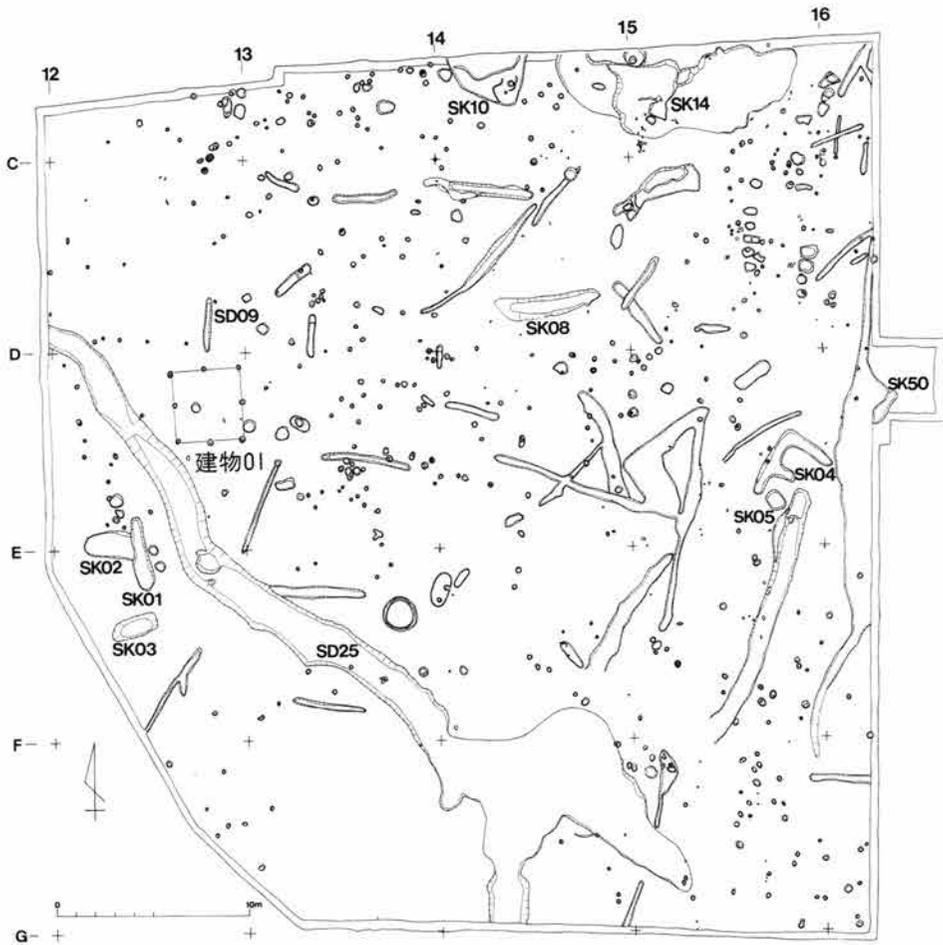
東部地区(第23図) 現地表下約0.4mで遺構面を検出した。基本的な層序は、耕作土・床土と続き、床土を除去した時点で黄褐色粘質土の地山面が現れた。このため遺構面は良好な状態ではなく、永年にわたって削平を受けてきているものと考えられた。実際、数十年以前に人力による耕地整理が行われ、遺物が出土したと聞く。特に南側から東側にかけての地区は、著しい削平により、遺構の状態は明確には把握できていない。

検出した遺構には溝状遺構や土坑・多数の柱穴などがある。溝状遺構や土坑については、不連続なものや不定形なものが多く、削平を受けた結果と考えられよう。総数400を越える柱穴は、掘立柱建物を構成するものと思われるが、明確な建物跡は少ない。

以下では、主な検出遺構の概要について記述していく。



第22図 試掘トレンチ配置図



第23図 東部地区遺構図

溝状遺構 SD25 調査区を西から南へ向けて流れる溝状遺構である。南側については、削平によって不明確となっている。明確な部分での規模は、幅約2m・深さ0.3m前後で、長さ30mにわたって明確に検出した。大まかな埋土は、上層が0.1mから0.3m程度の暗黒褐色粘質土で、下層が0.2mから0.3m前後の砂の堆積がみられた。埋土中には弥生土器や土師器が包含されていた。

溝状遺構SD09 12C地区で検出した。長さ2.9m・幅0.3m・深さ0.2m前後の南北方向の溝状遺構である。暗黒褐色土が埋土となっており、遺構内からは古墳時代初頭の土師器が出土している。

土坑SK01・SK02 12Dおよび12E地区で検出した。切り合い関係にあると考えられるが、暗褐色土が埋土となっており、断面観察では前後関係を識別することはできなかった。土坑SK01は、長さ3.9m・幅0.9m・深さ0.3m程度を測る。土坑SK02は、長さ3m程度・幅1.4m・深さ0.2m前後を測る。いずれも弥生時代後期の土器が出土している。

土坑SK03 12E地区で検出した。長さ2.4m・幅1.1m・深さ0.3m程度を測る楕円形の土坑である。埋土は暗黒褐色土で、弥生時代後期の土器が出土している。

土坑SK04 15D地区で検出した。F字状を呈する不定形な土坑である。あるいは幾つかの遺構が重なり合っていることも考えられる。しかし、埋土が暗黒褐色土のみであったため確認はできていない。幅0.6m・深さ0.2m程度で、縦4m×幅3m程度の広がりをもっている。弥生時代後期の土器が出土している。

土坑SK05 15D地区で検出した。長さ1.1m・幅0.8m程度の隅丸方形を呈した土坑で、深さ約0.2m程度を測る。埋土は暗黒褐色土である。弥生時代後期の土器が出土している。

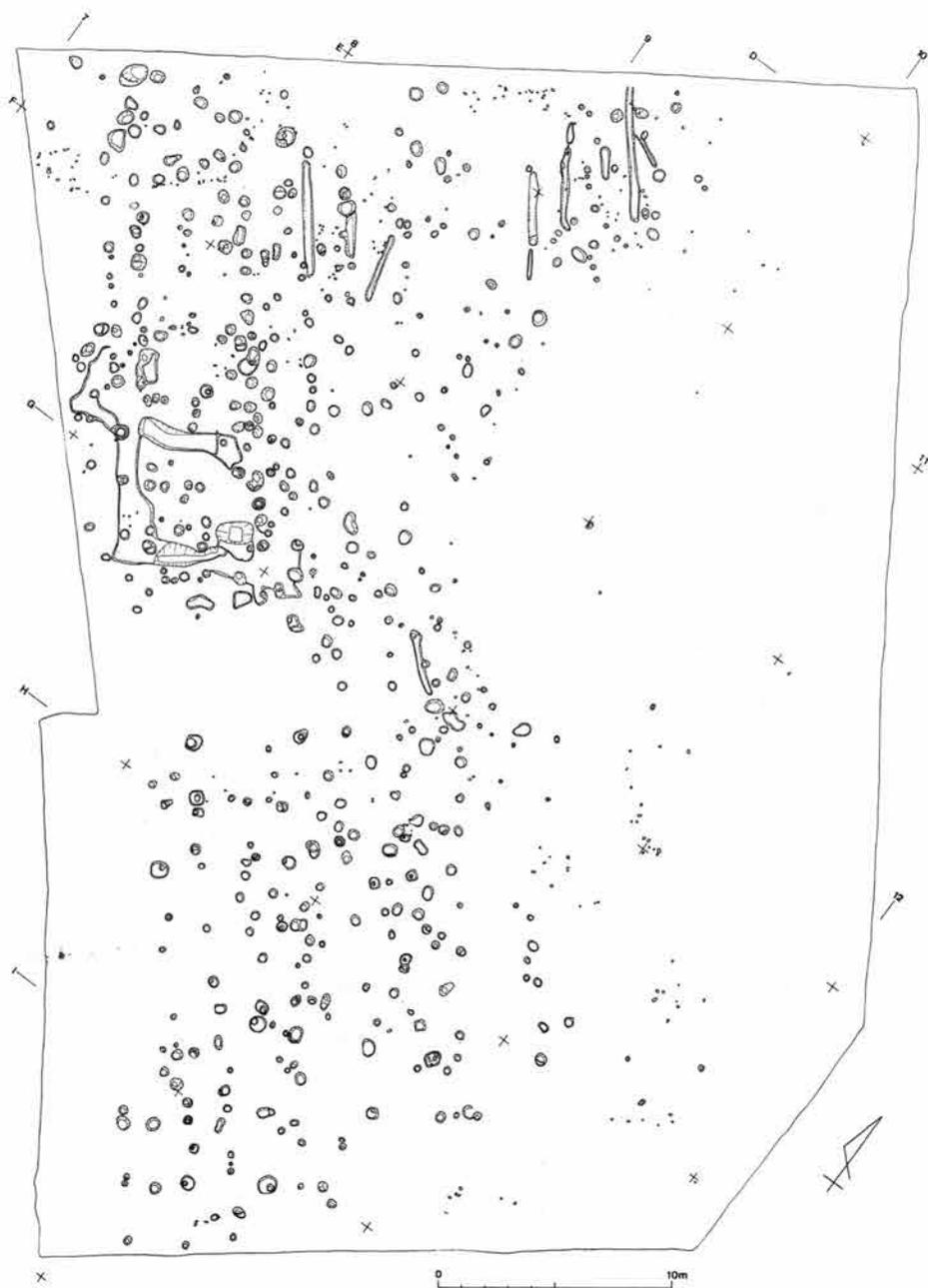
土坑SK08 14C地区で検出した。長さ5.5m・幅1mの不定形な土坑で、深さ0.5m程度を測る。埋土は暗黒褐色土である。多量の弥生時代後期の土器が出土している。器種としては、甕が最も多く、壺や高杯・器台なども出土している。出土状況からして、一括投棄された可能性が高い。

土坑SK10 14B地区で検出した。調査地区外へと遺構が広がっているため、規模は不明である。埋土は2層で、上層は黒褐色土、下層が暗黒褐色土である。弥生時代後期の土器が出土している。

土坑SK50 16D地区で検出した。長さ2.3m・幅0.5mで、深さ0.1m程度を測る楕円形の土坑である。埋土は黒褐色土で、古墳時代初頭の土師器が出土している。

掘立柱建物跡01 12D地区で検出した。2間(1.74m)×2間(1.85m)の規模をもち、主軸線は真北から西へ4°振る。時期は確定できないが、弥生時代末期から古墳時代初頭の建物跡と思われる。

西部地区(第24図) 山裾の緩斜面に位置しているため、高位置にあたる南西側の堆積は0.5m程度であるのに対して、低位置にあたる東側の堆積は、1.8mと土砂の堆積には大きな違いが認められた。東側の堆積層をみると、下層が青灰色粘質土層と砂利層との互層で、



第24図 西部地区遺構図

弥生土器や古墳時代の土師器を多量に包含していた。上層は暗茶褐色土で、調査区のほぼ全面に広がっており、平安時代の須恵器・土師器などを多量に包含していた。堆積層の厚さから考えると、山側から谷側にかけて、かなりの土砂の流出があったように思われる。地山は黄褐色粘質土で、検出遺構には溝状遺構や多数の柱穴がある。柱穴は総数500前後を数え、そのほとんどが平安時代以降の掘立柱建物跡と考えられる。建物跡の復原については、今後さらに検討が必要であるが、15棟程度の復原が可能である。比較的柱穴が密集し、出土遺物も多く、緑釉陶器や墨書土器なども出土した7F・8F・8Gを中心とした地区は、主要な建物が建てられていた地区と考えられる。この地区での建物跡の重複関係から少なくとも4期の建て替えがあったものと推察される。

(2) 主な出土遺物

東部地区出土遺物 遺構出土の遺物については、現在整理中であり、主なものだけを抽出した。

土坑SK01出土遺物(第25図9・10) 蓋である。9は径10.5cm・器高6.1cmを測る。10は径高10.5cm・器高5.0cmを測り、摘み部分には擬凹線が認められる。

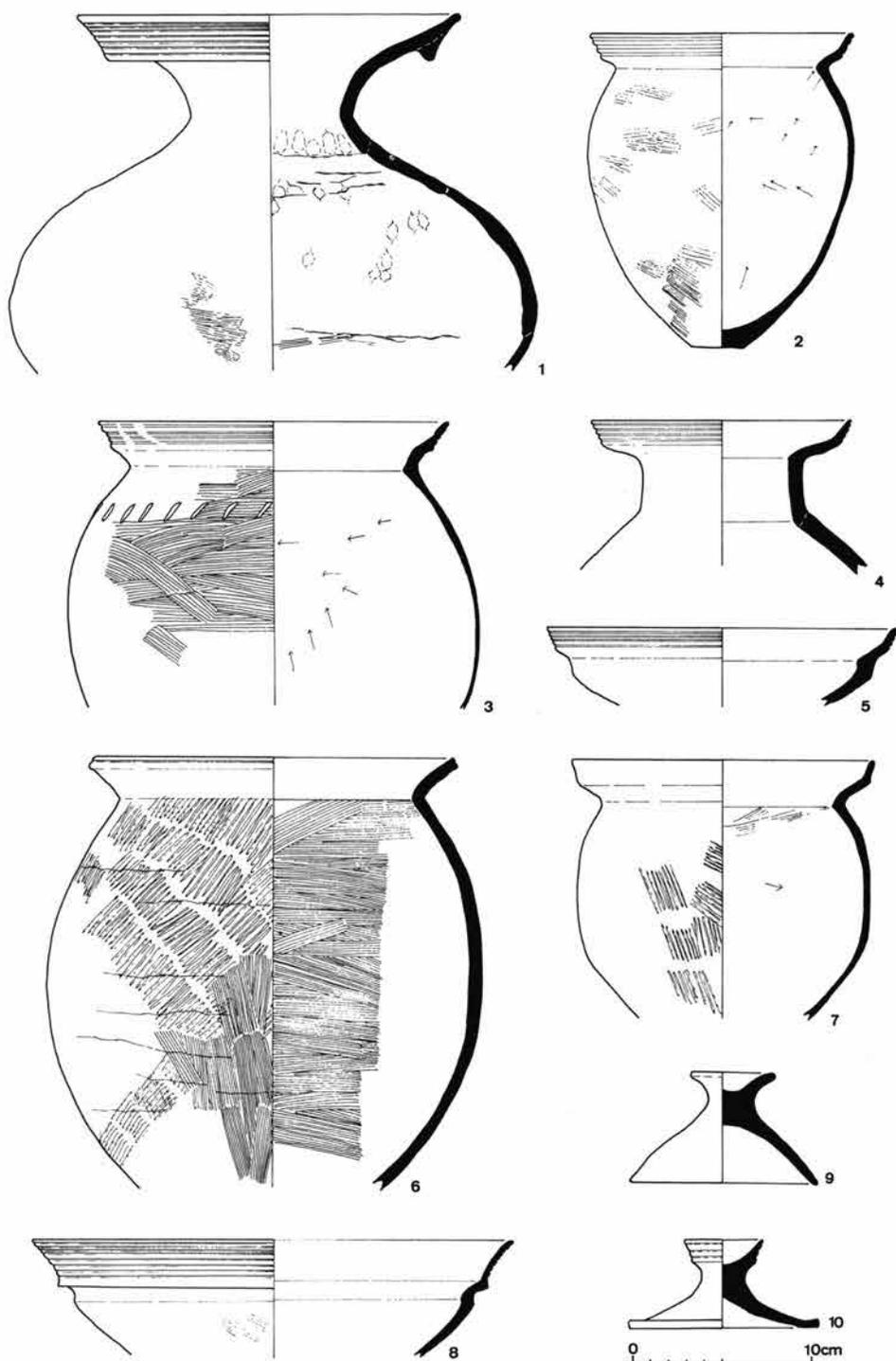
土坑SK02出土遺物(第25図1・2) 1は二重口縁の壺である。口径21.4cm・現存高19.8cmを測る。口縁部外面は粘土を貼付して肥厚させ、擬凹線を施している。2は口径14.7cm・器高17.4cmを測る二重口縁の甕である。調整は、外面がハケメで、内面がヘラケズリ、口縁部には擬凹線が施されている。

土坑SK03出土遺物(第25図3～5) 3は口径19.5cm・現存高15.8cmを測る二重口縁の甕である。調整は、外面がハケメで、内面がヘラケズリ、口縁部には擬凹線が施されている。肩部には刺突文が巡らされている。4は、口縁部に擬凹線を施す二重口縁の壺である。口径14.5cm・現存高8.2cmを測る。5は高杯の杯部と考えられる。口径19.6cm・現存高4.3cmを測り、口縁部には擬凹線が施される。

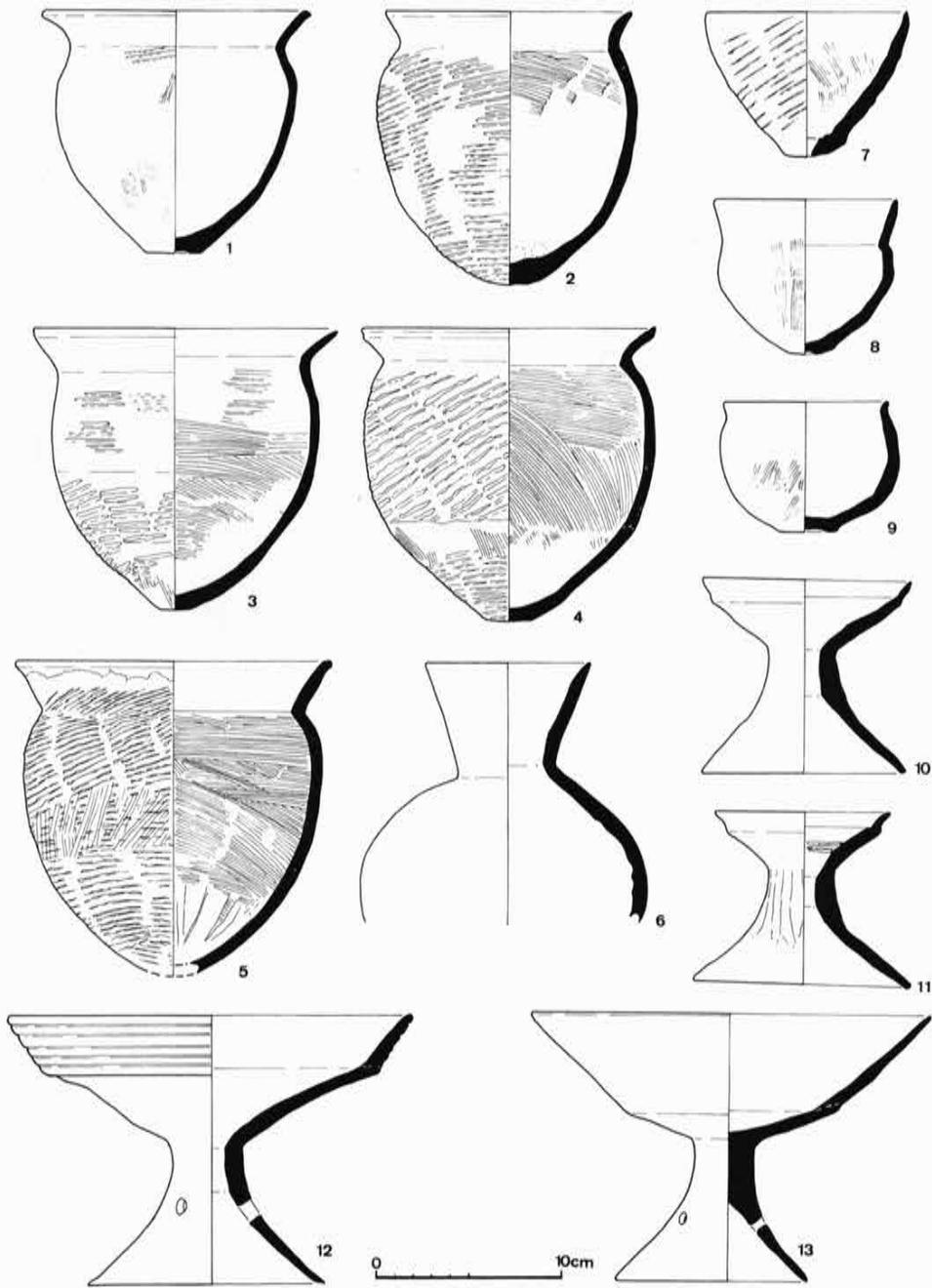
土坑SK04出土遺物(第25図6～8) 6は口径20.5cm・現存高19.0cmを測る甕である。体部外面にはタタキメを残し、下半にはハケメを施している。体部内面はハケメで調整している。7は口径16.9cm・現存高14.3cmを測る二重口縁の甕である。体部外面にタタキメが認められるが、全体の調整は不明である。8は高杯の杯部と考えられる。口径26.8cm・現存高6.7cmを測り、口縁部には擬凹線が施される。外面にはハケメが認められる。

土坑SK08出土遺物(第26図) 多量の土器が投棄されており、総点数は100点前後に上るものと思われる。器種では甕が最も多く、壺や高杯・器台・鉢などもある。

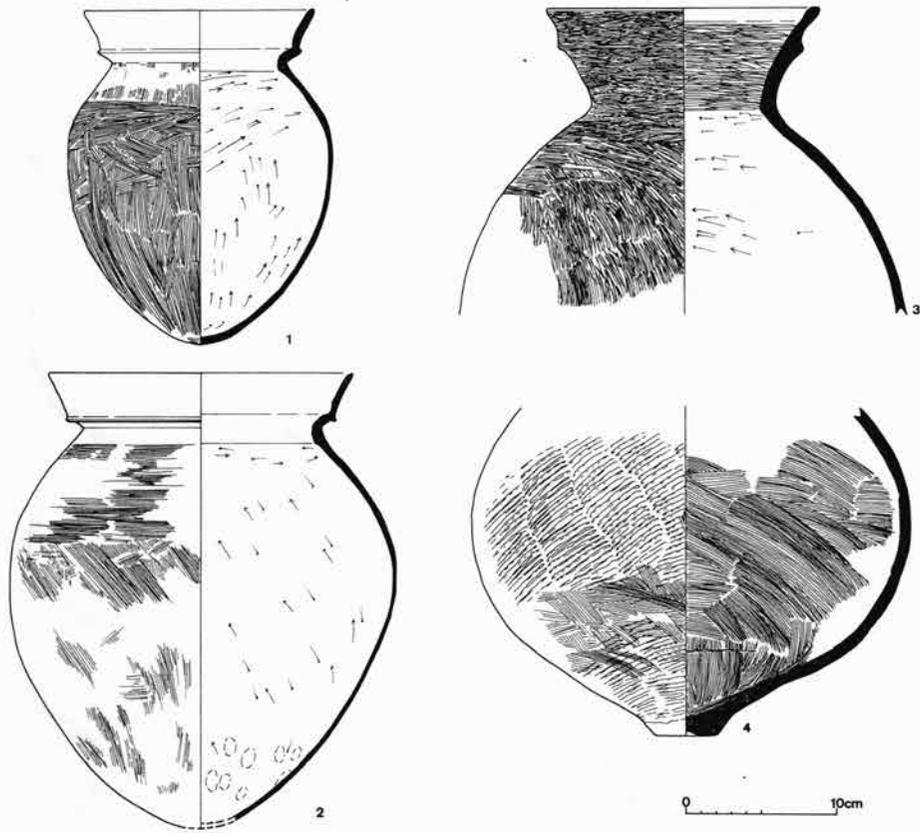
1～5は甕である。いずれも体部外面にタタキメを残す。なかにはハケメを施すものもみられる。内面はいずれもハケメで調整している。1や4が比較的明瞭な底部をもつほか



第25図 東部地区遺構内出土遺物
 1・2; SK02 3~5; SK03 6・8; SK04 9・10; SK01



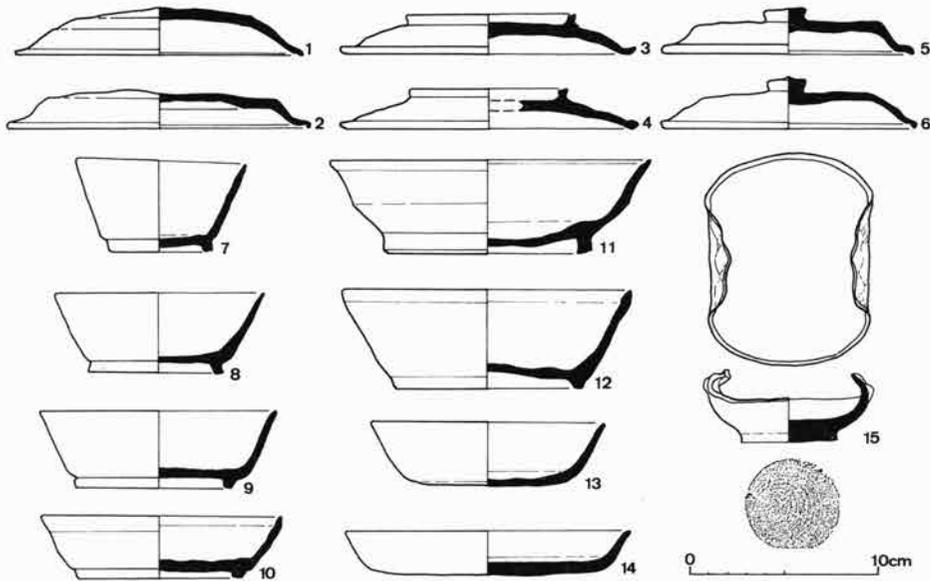
第26図 SK08 出土遺物



第27図 SD09 出土遺物

は、不安定な底部を呈している。1は口径14.6cm・器高12.9cm, 2は口径13.4cm・器高14.6cm, 3は口径16.5cm・器高15.0cm, 4は口径15.9cm・器高15.7cm, 5は口径17.2cm・現存高16.7cmを測る。6は口径8.9cm・現存高14.0cmを測る直口壺である。10は口径11.0cm・器高7.8cmを測る小型の有孔鉢である。外面にはタタキメを残し, 内面はハケメで調整している。8・9は小型の鉢である。8は口径10.0cm・器高8.3cm, 9は口径8.9cm・器高6.9cmを測る。いずれも外面にハケメが認められる。10・11は小型の器台である。10は口径11.3cm・器高10.5cm・裾径11.0cm, 11は口径9.5cm・器高9.3cm・裾径11.8cmを測る。11は, 体部外面にはヘラケズリ, 受け部内面にはヘラミガキが認められる。12は器台である。口径21.9cm・器高14.5cm・裾径12.8cmを測る。受け部外面には擬凹線が施され, 脚部には円形の透かしが3か所に設けられている。13は高杯である。口径21.6cm・器高14.5cm・裾径10.4cmを測る。脚部には円形透かしが3か所に穿たれている。

溝SD09出土遺物(第27図) 1・2は二重口縁の甕である。1は口径15.3cm・器高22.0cm, 2は口径20.2cm・器高29.9cmを測る。いずれも体部外面をハケメで, 内面をヘラケ



第28図 西部地区出土遺物

ズリで調整している。2の体部内面下半には指押さえも認められる。3・4は壺である。3は口径18.1cm・現存高20.1cmを測る二重口縁の壺である。口縁部内外面および体部外面はヘラミガキ、体部内面はヘラケズリによって調整が行われている。4は体部以下の資料である。最大径29.1cm・現存高21.5cmを測る。外面にはタタキメを残し、一部でハケメ調整を施している。内面はハケメによる調整である。

西部地区出土遺物(第28図) 弥生土器・須恵器・土師器が大量に出土している。弥生土器のほとんどは、調査区北東側の谷部から出土している。須恵器・土師器の大半は、柱穴群の周囲ないしは柱穴内から出土しており、これらの柱穴が構成する建物群に伴う遺物と考えられる。

1～6は須恵器の杯蓋である。1・2はつまみをもたない。3・4は環状のつまみをもつものであるが、高台をもつ皿になる可能性もある。5・6は宝珠つまみをもつものである。7～13は須恵器の杯身である。高台をもつもの(7～12)と、もたないもの(13)とがある。11は佐波理碗形のものである。14は須恵器の皿である。

西部地区では須恵器・土師器に混じて緑釉陶器や灰釉陶器・青磁・白磁などの陶磁器類も多数出土した。緑釉陶器は碗や皿の破片がほとんどである。15は完形に近い緑釉陶器の耳皿である。長さ11cm・幅9cm・器高3.8cm・底径5cm程度を測る。折り返し部分には、指押さえで波状のひだをつくっている。糸切りの底部を除いて全面に施釉されている。

特殊な遺物としては、須恵器の硯や墨書土器がある。硯(図版第15-4～7)には円面硯や

風字硯・転用硯が認められる。墨書土器(図版第15-1~3)は、4点を確認している。いずれも須恵器に墨書されたものであるが、文字は判読できていない。

3. 小 結

小西町田遺跡では、東部地区で弥生時代末期から古墳時代初頭を中心とする時期、西部地区で平安時代を中心とする時期という2時期の遺構を検出することができた。

東部地区で注意すべき点は、弥生時代末期における甕の製作技法にある。甕の製作技法をみると、そのほとんどに畿内弥生時代後期を特徴づける「タタキ技法」が用いられている。これまで由良川中流域の綾部・福知山地域で出土した土器にタタキ技法が認められる割合は、非常に希薄であった。丹後山地を挟んで南側に位置する園部町曾我谷遺跡^(注4)では、タタキ技法を用いた土器が大量に出土しており、「タタキ技法」の伝播が丹波山地の南側までは確実に及んでいたことはすでに確認されていた。今回タタキ技法の伝播が丹波山地を越えた小西町田遺跡で認められたことは、この遺跡が少なくとも弥生時代末期には畿内との関係において強い類縁関係にあったといえよう。この地域では現時点でこれほどタタキ技法の認められた遺跡はない。あるいは、小西町田遺跡が畿内勢力の中丹地域進出時におけるひとつの拠点であったとも考えられる。このことはこの遺跡の背後にこの地域最古の古墳群である成山古墳群^(注5)が造営されていることから類推することができよう。小西町田遺跡と成山古墳群とは、おそらく「村と墓」という関係なのであろう。

西部地区で検出した掘立柱建物跡は、出土遺物の年代から9世紀前後を中心とする時期と考えられる。これらの建物跡には度重なる立て替えの形跡が認められ、遺物の時期幅から少なくとも400年程度なんらかの建物が建て続けられていたものと推定される。これらの建物跡の性格の一端を表わすと思われる出土遺物には、多量の須恵器・土師器に混じって出土した緑釉陶器・灰釉陶器・青磁・白磁などの陶磁器や硯・墨書土器などがある。遺物の様相からすれば、官衙的な施設が置かれていた可能性が高い。今後は、周辺遺跡の状況や文献の検討などの作業を通して、これらの建物跡の性格づけを行う必要がある。

今後の整理作業の進展につれて、この地域における弥生時代から古墳時代への転換期のようすや、文献には表だって現われない古代の官衙的施設のようすが明らかになってくるものと思われる。

(三好博喜)

(3) 三宅遺跡

1. 調査経過

三宅遺跡は、以久田野丘陵の西端部を流れる犀川左岸の河岸段丘上(海拔約35m)にあり、古墳時代～奈良時代にかけての集落跡と推定されている。この段丘上には、三宅遺跡の北に館遺跡、南に長砂遺跡の2遺跡(弥生時代)が近接して存在している。三宅遺跡西端部の微高地上には9基前後の円墳からなる三宅古墳群が存在し、対する東部の以久田野丘陵上には多数の古墳群(以久田野古墳群)が築かれている。

調査対象地は三宅遺跡の北部に位置し、近舞線のルートが全長約150m・幅約70mの範囲で段丘部を横断している。段丘西端部の微高地上には茶園が営まれ、三宅4号墳(62年度調査)が存在する。この微高地は東部の水田面に対し、約1mの比高差を測る。

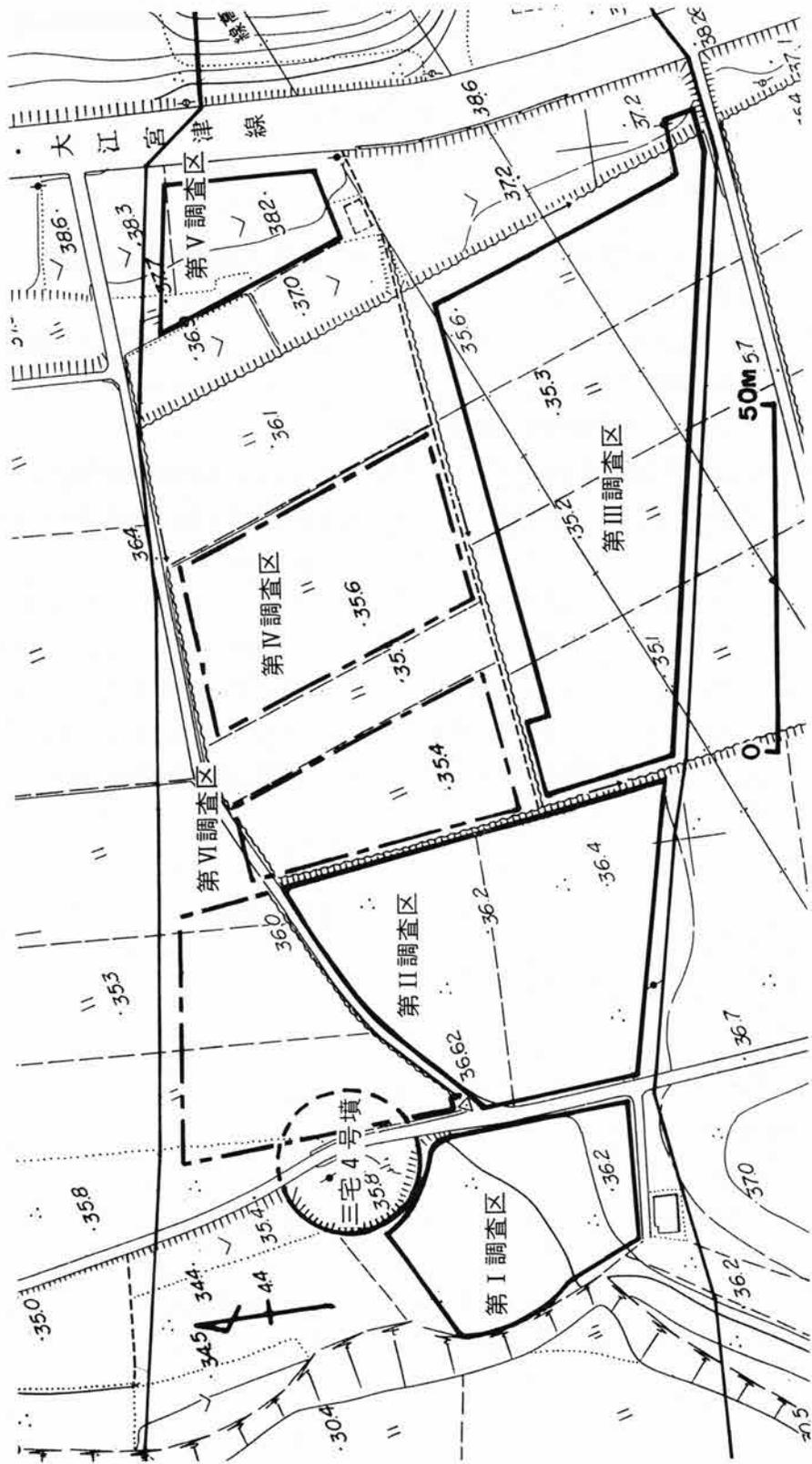
三宅遺跡の発掘調査は、今回の調査が初めてであるところから、遺跡の状況を把握するため、調査対象地内に9か所の試掘トレンチを設定し、調査を開始した。この試掘調査では、段丘西端部から弥生時代中期と古墳時代後期の溝、時期不明の柱穴等を検出した。また、水田部に設けたトレンチでは古墳時代初頭の土坑群、さらに東端部丘陵裾では古墳時代後期の竪穴式住居跡の存在を確認した。この試掘調査の結果、調査対象地全域に数時期にわたる遺構が存在していることが明らかとなった。

試掘調査の成果をもとに、その後の調査は調査対象地全域の面的調査へ切り替えた。今回ここに報告する調査成果は、今年度実施した南部地区(約5,500m²)の成果である。北部地区の調査は翌年度に実施するため、今回報告からは省いた。また、個々の試掘トレンチの調査成果は、各調査区報告と重複するため省略する。

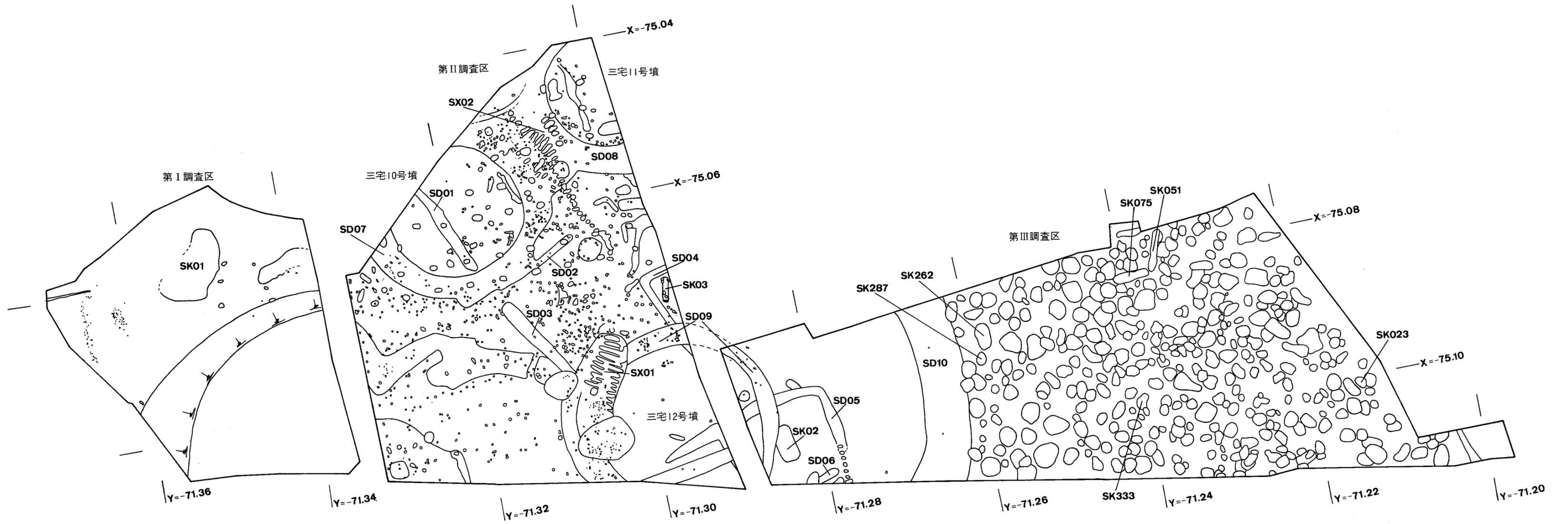
2. 遺構と遺物

(1) 第I調査区

この調査区は段丘西端部に位置し、北端は三宅4号墳に接する。調査区北部は東部と南部に比べ、1段下がったところに平坦地が認められた。調査区東部と南部の斜面部に遺構は存在せず、地山の礫層の確認で終わった。三宅4号墳に接する北部の平坦地では、浅い土坑状の遺構(SK01)が存在し、瓦器・土師器等の中世土器(13世紀代)が出土した。この土坑状遺構は長径約5m・深さ約30cmの不定形を呈している。この調査区においてはその他に遺構の存在は確認できなかった。



第29図 調査地位置図



第30図 第I・第II・第III調査区平面図

(2) 第II調査区

この調査区は西部の微高地部分に設けた調査区である。今年度に調査を実施したのは畑地部分であり、北方水田部は翌年度に調査する予定である。調査地は耕作土直下に黄色粘性土(地山層)が広がり、この地山を切り込む各時期の遺構を多数検出した。検出した遺構のうち代表的なものとして、弥生時代中期の方形周溝墓、古墳時代後期の円墳、鎌倉時代の土坑等が挙げられる。

調査区の北部と東部において、弥生時代中期に属する溝(SD01～04)を検出している。検出した溝には、全長が12m前後の規模で直線的に終わるもの(SD01～03)、直角に折れ曲がるもの(SD04)の2形態が認められる。これらの溝は方形区画を意識して配置されていることから、方形周溝墓に伴う溝と見ることができる。方形周溝墓に伴う埋葬主体部は、第III調査区西部で検出したSK02だけである。方形周溝墓を検出した付近には古墳の周溝が重複して存在したことから、方形周溝墓に関連する遺構の多くは、早い時期に破壊されたものとみられる。方形周溝墓に伴う遺物として、周溝内より畿内第IV様式土器(第32図1～3)の出土をみているが、埋葬主体部SK02から遺物の出土は認められない。第32図(1～3)はSD01より出土したものであり、いずれも底部に焼成後の穿孔が行われている。壺1は、口縁直径15.0cm・器高28.2cmを測る。胴のはった体部と大きく外反する口縁部をもち、幅広い口縁端部と頸部に凹線文を施す。体部外面上半には直線文と波状文を交互に施す。壺2は、口縁直径11.4cm・器高22.6cmを測る。丸みをもった体部に小さく外反する口縁が付く。体部は、内外両面ともハケメ調整を行う。水差し3は、口縁直径8.4cm・残存器高15.4cmを測る。肩部には把手が付く。底部に剝離痕跡が残ることから、もともと脚台が付いていたとみられる。

古墳時代にはいると、この微高地には古墳群が築かれていたことが判明した。弥生時代の方形周溝墓上に古墳が築かれており、墳丘と埋葬主体部はすでに消失していたが、古墳に伴う周溝(SD07～09)を検出した。周溝は2.6～3m幅で円形に巡ることから、新たな3基の円墳(三宅10～12号墳)の存在を今回の調査で確認した。各古墳の直径は三宅10・11号墳がともに約16m、三宅12号墳は20mの規模を測る。墳丘内基底面で弥生時代の方形周溝墓を検出したことから、各古墳の墳丘は盛土で築かれたとみられる。周溝内から出土した須恵器からみて、これらの古墳はほぼ6世紀代に収まると推定する。

また、この周溝内より祭祀に関連する遺物(第33図5～9)が出土している。いずれも手づくねの土製品である。鏡型土製品(5・6)は凸面鏡を模し、背面中央に鈕座を持つ。直径は、5が6.8cm、6が6.0cmを測る。7・8はそれぞれ船形・人形を模したと考えられる。9は直径2.8cmの円柱形を呈し、中心部に穴が通る。

三宅12号墳の北側周溝外で検出したSK03は、古墳時代の埋葬主体部と考えられる。全長2.7m・幅0.8mの規模を持ち、内部から須恵器(第33図1～4)・土師器(高杯)が出土した。出土した須恵器の年代観から見て、7世紀前半代に位置すると考えられる。

埴(1)は、口縁直径5.2cm・器高6.6cmを測る。胴の張った体部に小さな直口が付く。体部外面にヘラ記号を有する。高杯(2)は、口縁直径11.4cm・器高7.0cmを測る。口縁端部は外方へ小さくつまみ出す。短い脚部は大きく外反し、小円形のスカシが2か所に存在する。甕(3)は口縁直径10.2cm・体部直径7.5cm・器高11.7cmを測る。小さな体部に大きく外反する口縁部が付く。口縁上部は、いったんアクセントをもってさらに開く。体部中央に円形の注ぎ口を開ける。杯(4)は、直径7.8cm・器高3.6cmを測る。平底の器形に直立する体部を持ち、口縁端は尖りぎみに終わる。体部外面やや下方に1条の沈線を施す。

古墳時代以降の遺構として、鎌倉時代に属する畝状遺構(SX01・02)を検出している。この畝状遺構は、いずれも古墳の周溝部内に存在している。この遺構は、古墳の周溝に対して直交方向に畝状の遺構が連続して存在する。畝に対する谷部は溝を切った状態で、畝と溝はそれぞれ約40cmの幅で3.5～4m程度の長さを持つ。この畝状遺構がどのような性格をもった遺構であるか、現段階では不明である。

その他の遺構として、溝・土坑・柱穴・井戸等を検出したが、多くの遺構は近世以降もしくは時期不明の遺構であった。

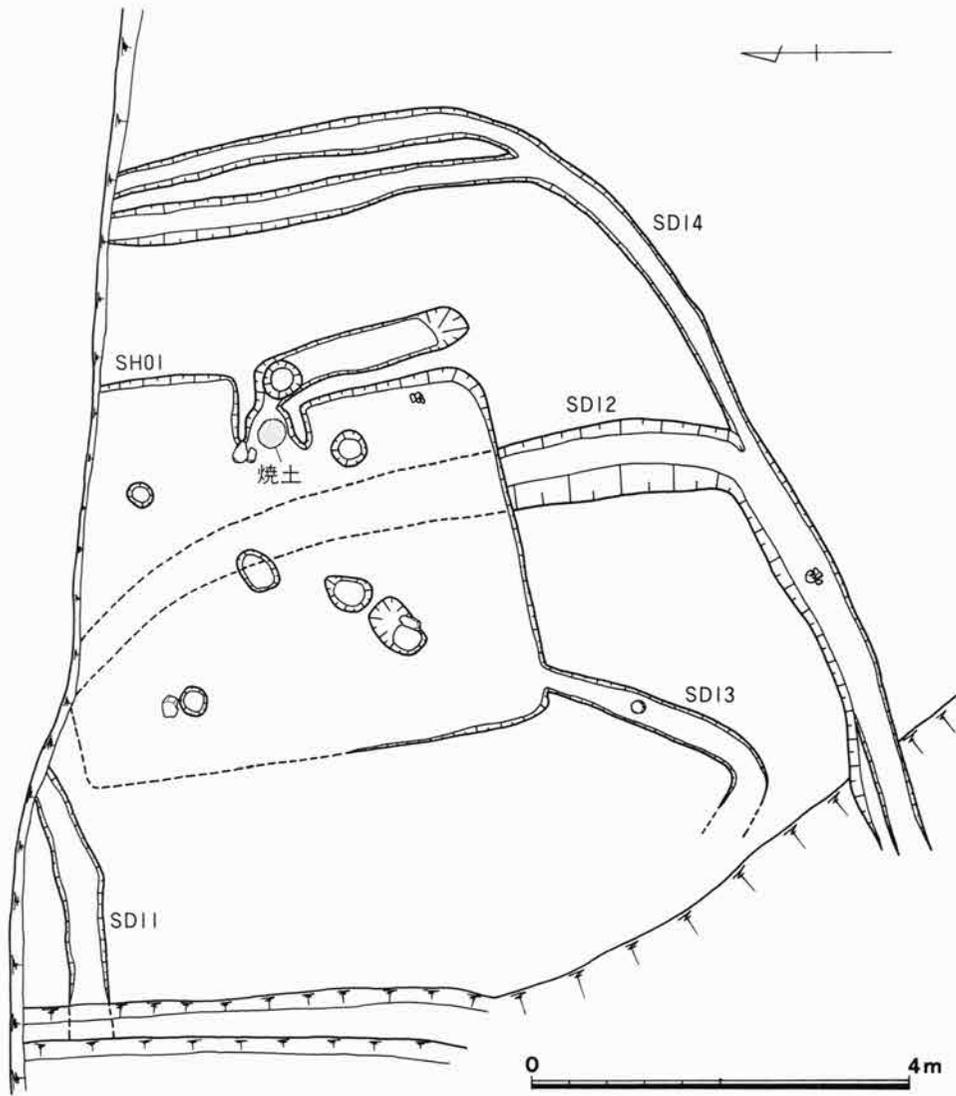
(3) 第III調査区

この調査区は、第II調査区東側の水田部に設けた調査区である。この調査区では、西端部で弥生時代の方形周溝墓、溝を隔てた調査地中央以東から336基の土坑を検出した。

調査区の地山面は、西部の微高地から東方へ下がる傾斜を持ち、地山の土質は底位になるほど砂質から粘土へと移行してくる。微高地東端部に存在する方形周溝墓は、幅約1.2mの浅い溝(SD05・06)を方形に巡らせ、周溝により画された墓域は、一辺約5～5.5mの規模を測る。周溝墓の中央部には全長4.4m・幅2.6m・深さ約20cmの埋葬主体部(SK02)1基が存在する。周溝は全周を巡らせず、東南隅に陸橋部を残している。この方形周溝墓の軸線は、北から西へ約10°振っている。出土遺物としては、周溝内より少量の土器の破片(畿内第IV様式)が見られたが、埋葬主体部からの出土は認められなかった。

方形周溝墓の東約11mの地点には、幅約6mの浅い溝状遺構(SD10)が南北に走り、この間に顕著な遺構は存在しない。SD10以東は、西側とは対照的に多数の土坑が存在している。検出した土坑は、この調査区だけで336基にのぼった。

土坑の平面プランは、円形・楕円形・方形を呈し、小さいもので0.6m、最大のもので3.4mの規模を測る。土坑の深さも40～90cmとまちまちであり、土坑底の形状も不整形な

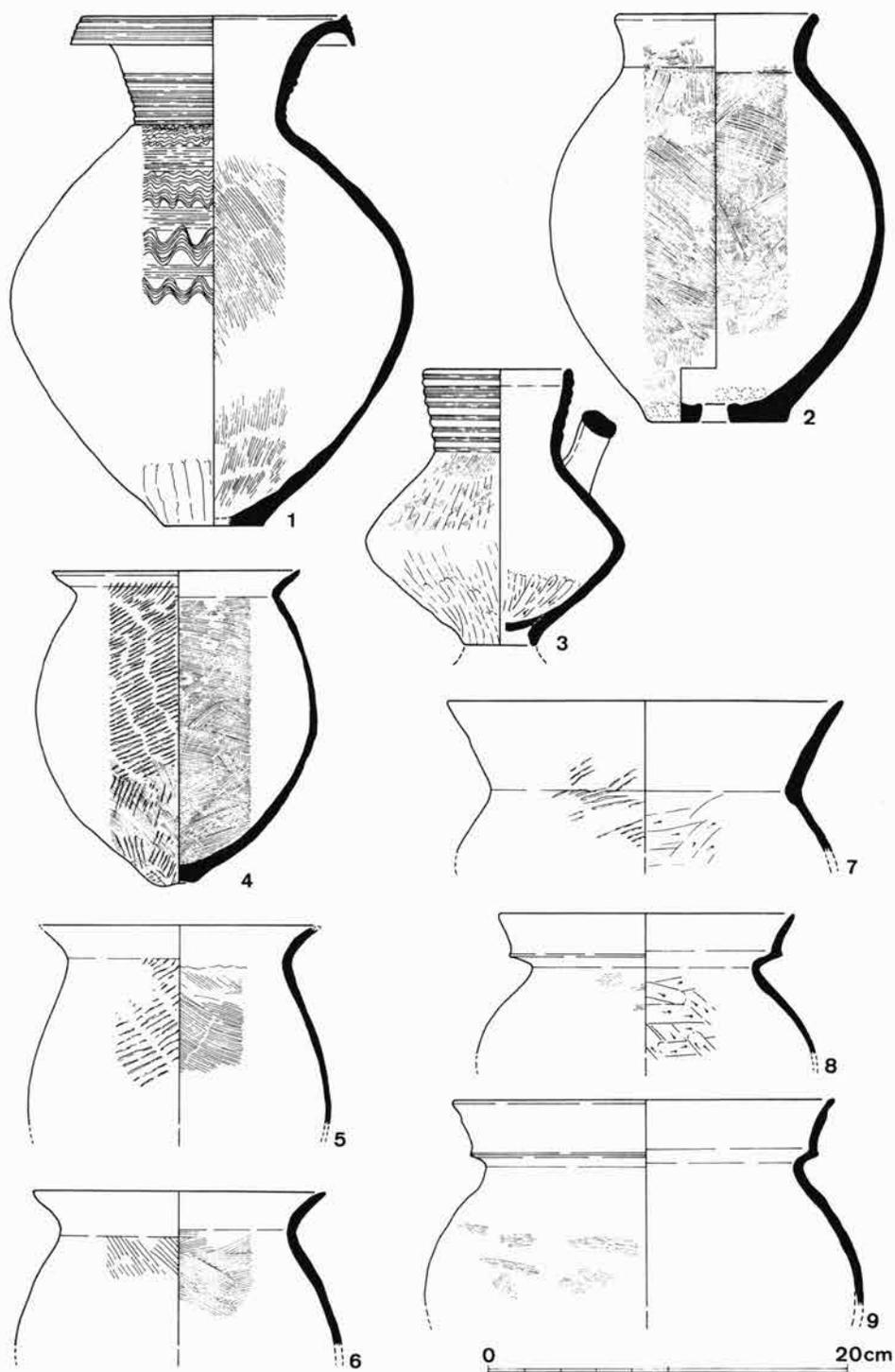


第31図 第V調査区SH01平面図

ままで終わる例が多い。土坑内の埋土は地山と同じく粘土質であったが、色調にはいくつかの変化が認められた。色調においては、黒色系・暗灰色系・暗茶褐色系に大別できた。

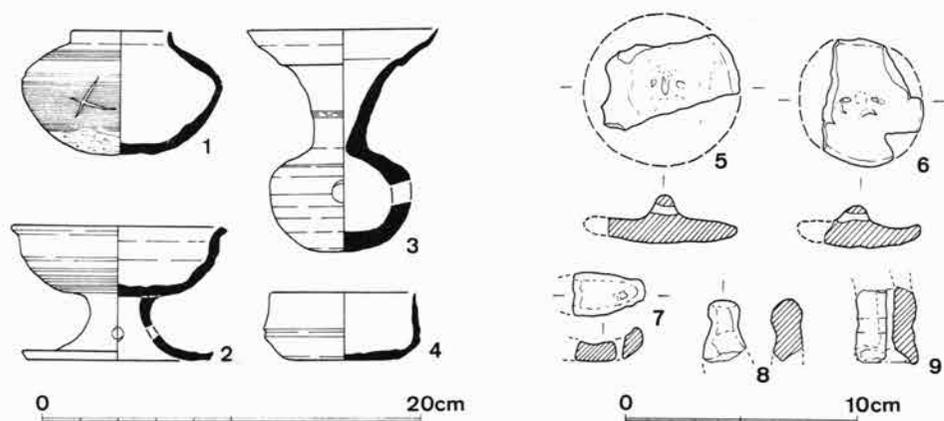
これらの土坑の内、約6割の土坑内から土器が出土している。大部分の土器は、第32図4～9に代表される古式土師器(庄内併行期)であったが、一部の土坑では瓦器碗の出土もみられた。瓦器碗が出土した土坑はSK051・075の2基だけであった。

第32図4～9は庄内併行期の甕である。4はSK287の出土である。口縁直径13.8cm・器高17.4cmを測る。口縁部は「く」字状に強く屈曲し、体部下半は上半部に対してとが



第32図 出土遺物実測図 1

1・2. 壺 3. 水差し 4~9. 甕



第33図 出土遺物実測図 2

1. 柑 2. 高杯 3. 臙 4. 杯 5・6. 鏡形土製品 7. 舟形土製品 8. 人形土製品
9. 円柱状土製品

りぎみで、小さな平底が付く。体部外面にはタタキメを施し、内面は上端部まで細かいハケメ調整を行う。5・6はSK333の出土である。口縁部は「く」字状に緩やかに外反する。口縁直径はいずれも18.0cm前後を測る。5の体部外面はタタキメ、内面は細かいハケメ調整を施す。6は体部内外両面をハケメ調整する。7はSK023の出土である。口縁直径は22.2cmを測る。「く」字状に外反する口縁は直線的で長い。体部外面はタタキメを施し、内面は上端までヘラ削りを行う。8・9はSK262の出土である。二重口縁を持ち、体部外面はハケメ調整、内面はヘラ削りを行う。口縁直径は8が16.5cm、9が21.4cmを測る。

(4) 第V調査区

この調査区は、調査対象地の北東端、以久田野丘陵の西裾部に位置する。調査区北端で弥生時代後期の溝(SD11)と古墳時代後期の竪穴式住居跡(第31図)を検出した。竪穴式住居跡(SH01)は方形住居跡であり、東壁中央部に造り付けの竈を持つ。住居跡は、東西4.2m・南北約5m、東壁高は約25cmを測る。竈には東壁に沿って南方にのびる煙道(全長約2.4m)が存在する。この住居跡の東壁は、中央の竈を境に南部の壁面が40cm程内側に入り込む。住居跡の南西隅には、排水溝状の溝(SD13)が存在した。住居跡の周囲には、幅約30cm・深さ約50cmの溝(SD14)が存在する。このSD14は住居への流入水を防ぐために、高所部分に作られた排水溝と推定される。

SD11は、畿内第V様式土器の出土した弥生時代後期の溝である。溝幅30cm、深さは最深部で20cmを測る浅い溝であった。比較的大型の把手付き鉢の破片が出土している。

SD12は、SH01とSD14に切られている溝である。溝幅約40cm・深さ約50cmを測る。溝は、SD14と接する辺りで西方へ直角に折れ曲がる。この溝の時期は、現在のところ不

明であるが、SD11と同じく弥生時代と見ることもできよう。

3. ま と め

今回の発掘調査は、弥生時代中期から古墳時代後期にかけての「墓域」の調査であったと言える。以久田野丘陵西端の段丘縁辺部(微高地部)には、弥生時代中期末の方形周溝墓と、古墳時代後期の円墳(三宅古墳群)が存在する。段丘の東部は後背湿地状の低地が広がり、古墳時代初頭の土壙墓群を検出した。

弥生時代における三宅遺跡は、中期末の方形周溝墓と後期の溝(SD11)を検出した。これらの遺構は、段丘の中でも比較的高所の地に認められる。住居跡の検出がみられなかったことから、方形周溝墓群を形成した人々の集落の確認はできなかった。赤国神社を中心に広がる館遺跡が、方形周溝墓の北東約500mに存在することから、この館遺跡が方形周溝墓被葬者の集落とみることもできよう。

古墳時代の三宅遺跡は、古墳時代初頭段階で、段丘上でも低地に墓域が設定され、336基にのぼる土壙墓が存在している。この土壙墓群は調査区外に広がることから、まだまだ数多く存在しているものと見られる。三宅遺跡におけるこの土壙墓群に関しては、現在のところ数多くの問題が残されている。63年度には北部の調査を実施することからも、ここで検討を加えなければならない問題点を列記してみる。

1. 336基以上の土坑がすべて墓と捉えられるか?(粘土採取坑?)
2. 土壙墓群の形成に時期差が存在するか?(現時点では庄内併行期)
3. 埋葬形態(木棺痕跡が認められないことから、遺体の直埋葬?)
4. 被葬者は一般庶民と考えられるが、その集落は?

おおよそ以上のような問題点が認められるが、今度の発掘調査と周辺調査を実施することにより、問題点を詰めていきたい。

古墳時代後期には微高地上に三宅古墳群が形成されているが、近世段階には墳丘が削り取られていたと判断する。今回の調査では円墳3基(三宅10~12号墳)の存在を新たに確認したほか、調査地東端の丘陵裾では、古墳時代後期(6世紀末)の堅穴式住居跡を検出した。今回の調査で検出した唯一の住居跡であったが、集落の位置を推定する上で貴重な住居跡であった。

今回の三宅遺跡の発掘調査では、現在に残る「三宅」の地名から、古代の地方における官衙のうち、「屯倉」に関連する遺構の検出が予想されていた。しかし、調査地内で幾度となく精査を実施したが、それらしき遺構は皆無であった。ただ、出土した遺物として、奈良時代の土器(須恵器・土師器)が、少量ながら出土している。「屯倉」の存在に関して

は再検討の必要があるが、わずかな調査範囲であったことから、今後の調査によっては「屯倉」に関連する遺構の発見の可能性も残る。

三宅の地名は古代の「屯倉」に由来する場合が多く、この丹波国にも6世紀には屯倉が置かれていたことが判明している。当地に残る三宅の小字名・採集遺物から、この三宅地区付近に屯倉が置かれていた可能性が高い。この地域の「屯倉」成立期を明らかにする資料はないが、三宅集落内に三宅古墳群(5世紀末～6世紀)が存在することから、ほぼ6世紀には成立していたものとみられる。

今後の三宅地区周辺の調査が待たれるところである。

(竹原一彦)

(4) 三宅 4 号 墳

1. 調査の概要

三宅 4 号墳は、三宅古墳群(1号墳～9号墳)の中の 1 古墳であり、由良川に注ぐ犀川の左岸、以久田野丘陵の西端に広がる河岸段丘上に存在している。この段丘上には弥生時代から鎌倉時代にかけての集落跡である三宅遺跡が存在している。

三宅 4 号墳は、墳丘上の中央付近を南北に農道が走り、墳丘の西部にはマウンドが残っていたが、農道以東は水田下に埋没していた。古墳の中央部は、過去において水田の土入れのため、広い範囲で墳丘封土の採掘が行われていた。

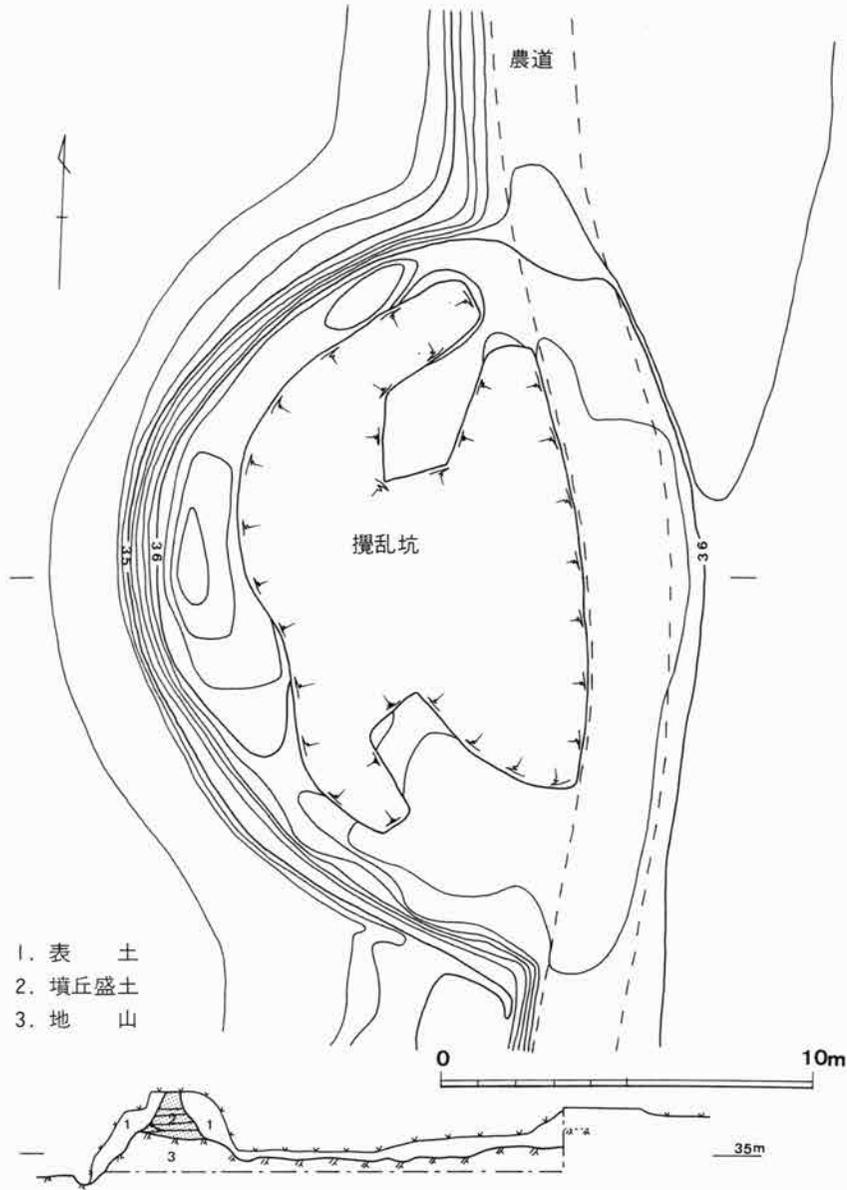
三宅 4 号墳の調査は、まず墳丘の地形測量から着手した。この測量調査の結果、農道の西部に残るマウンドの等高線がほぼ正円形に巡ることから、三宅 4 号墳は直径約 20m・高さ約 2m の円墳であることが判明した。地形測量の後、調査は人力による土砂採掘坑跡の表土除去作業を実施した。この土砂採掘坑は当初の予想以上に広範囲に及び、古墳築造当時の盛土は墳丘の周縁部にわずかに残存しているだけであった。土砂採掘坑は墳丘の中心部分を完全に破壊しており、坑底は地山層(黒墨土)にまで達していた。三宅 4 号墳の墳丘は黒墨土の上に盛土しており、黒墨土と黄色土がブロック状に混合した盛土が何層にも盛られていた。比較的残りのよい墳丘西部で確認しえた盛土層は、それぞれ約 10～15cm の厚みを持ち 1.2m 程度の盛土が残っていた。

土砂採掘坑跡の処理を終了した後、遺構検出のため三宅 4 号墳の全域で精査を行ったが、埋葬主体部等の遺構は検出できなかった。その後、墳丘中央部において東西方向に断ち割りのトレンチを入れ、墳丘下にその他の遺構が存在しないことを確認した後、現地での掘削作業をすべて終了した。

2. 遺構と遺物

今回の調査では、三宅 4 号墳に伴う遺構は確認できなかった。本来は墳丘中央付近に埋葬主体部が存在したものと推測されるが、後世の土砂採掘に伴って痕跡をとどめないまでに破壊されたものと考えられる。また、墳丘の西側の調査では、周溝等の外部施設の存在は認められなかった。

今回の三宅 4 号墳の調査において出土した遺物は、すべて土砂採掘坑跡内からの出土であり、墳丘部分からの出土はみられなかった。三宅 4 号墳に伴うとみられる遺物として須恵器の杯身・甕等の破片(第 35 図)がわずかに出土したほか、土師器・須恵器・瓦器・陶磁



第34図 三宅4号墳地形図

器等、中世～現代にかけての遺物も少量ながら出土している。

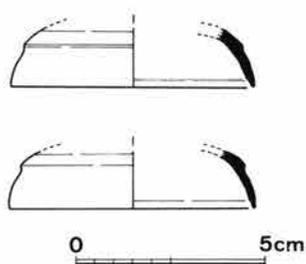
3. 小 結

三宅古墳群は、三宅1号墳(荒神塚古墳)を首長墳とする直径約15～20mの円墳からなる古墳群(5世紀末～6世紀)である。三宅古墳群は、昭和34年の茶園造成に伴い、現存して

いた4基の古墳(1号墳～4号墳)中、4号墳を除く他の古墳は失なわれている。工事途中で緊急調査が実施された三宅1号墳は直径約20mの円墳で2基の粘土槨主体部からなり、銅鏡・鉄刀・鍔・馬具・鉄製農工具・各種の土器等、首長墳にふさわしい豊富な遺物が出土している。

三宅4号墳は、三宅1号墳の北約150m、三宅古墳群中でも北端部に位置している。三宅4号墳は、埋葬主体部がすでに破壊されており、今回の調査は墳丘部分の調査にとどまった。三宅4号墳は直径約20mの円墳であり、墳丘は盛土によって築かれていた。盛土層は最も良好に残す墳丘西部で、基盤面から約1.2m確認した。上面は削平された可能性があり、古墳築造当初の墳丘はより高かったものと推定される。三宅4号墳の埋葬主体部がどのようなものであったかは不明であるが、三宅1・2号墳においては粘土槨主体部であったことから、4号墳も同様な主体部構造であった可能性が高い。三宅4号墳の築造年代に関しては、遺構に伴う資料の出土が見られない点で推定の域を脱し得ないが、出土した土器の年代観からはほぼ6世紀前半代の築造と見られる。

(竹原一彦)



第35図 出土遺物実測図

(5) 福垣北古墳群

1. 調査の契機

近畿自動車道舞鶴線に伴う調査では、昭和62年度事業として、綾部市豊里町の丘陵部にある「以久田野古墳状隆起」の試掘調査を行った。

今回の調査対象地は、以久田野丘陵の西端に位置する。この調査は昭和58年度の近畿自動車道舞鶴線の予定路線帯に含まれる遺跡の分布調査の結果、古墳状の隆起を2か所確認したところであり、昭和62年度は、当調査研究センターが、「古墳状隆起」が古墳であるかどうかを確認するための試掘調査として実施したものである。

試掘調査の結果、「以久田野古墳状隆起」が円墳あるいは方墳であることが明らかとなったため、試掘調査にかえ、墳丘・埋葬施設などを確認するための試掘調査を行った。

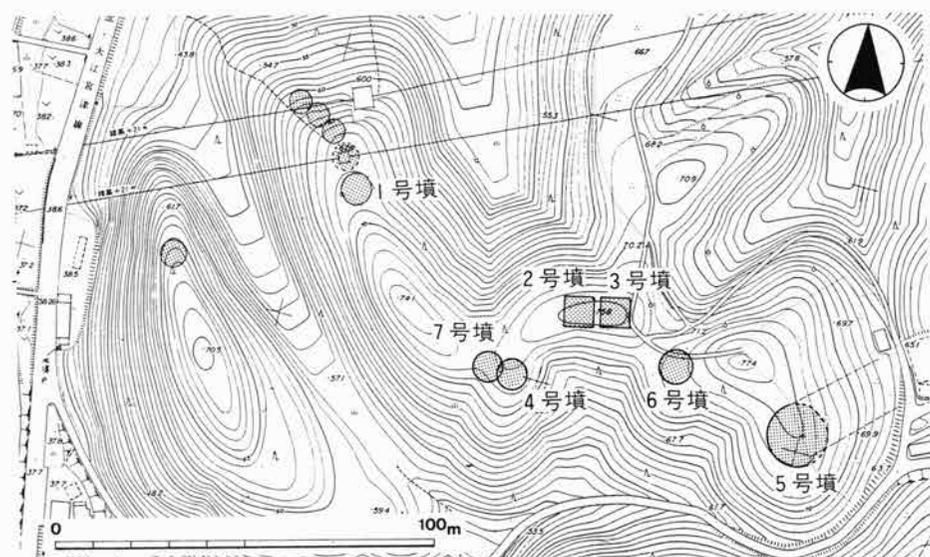
なお、これまで「以久田野古墳状隆起」として調査を進めてきたが、古墳であることが明らかになったため、遺跡名を変更し、「福垣北古墳群」と命名した。これは、昭和62年版『京都府遺跡地図—第2分冊—』のなかで、今回の調査地の同一丘陵上に隣接して、「福垣北古墳」として円墳が記載されているため、同古墳を福垣北第1号墳とし、以下確認した古墳の順番により、福垣北第2号墳、福垣北第3号墳とした。

2. 調査の経過

調査を開始するにあたって、道路予定路線帯の樹木伐採を行ったところ、墳丘を思わせるような古墳状の高まりははっきりしなかった。ただ、これまでの丹波・丹後地域での古墳の検出例、及びこの調査地が以久田野古墳群に包括される地点であるため、まず古墳か自然の隆起であるか判断がむずかしかったC地点の頂部に、長さ5m×幅3mのグリッドを設定し、古墳の確認につとめた。その結果、後述するように墓壙を2基(第2・3号墳の中心埋葬施設)確認し、古墳であることが明らかとなった。同じ試掘調査により、A地点・B地点・D地点の各古墳状隆起の頂部を精査したところ、各地点で埋葬施設と思われる墓壙および周溝の一部を確認した。

試掘調査の結果、今回明らかとなった古墳は、前述の第2・3号墳のほか、第4号墳・第5号墳・第6号墳・第7号墳の総数6基である。そして次年度以降、福垣北第1号墳及びE地点の調査が予定されているため、調査が進めば、古墳がさらに増加する可能性がある。

以下、今回検出した各古墳の概要説明を行う。



第36図 福垣北古墳群地形図

なお、調査は(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター調査第2課調査第2係長水谷寿克、同調査第2課調査第3係調査員石井清司が担当し、補助員として平野仁佳子・重松麻里子・飛田浩一・石田雅晃が主に調査に従事した。また地元の多くの方々には冬の悪天候のなか、調査に参加していただき、厚く御礼申し上げたい。

整理作業は発掘調査終了後、進めているが刊行物の関係上、主な遺物の一部を紹介するにとどめる。この整理作業は主に平野仁佳子、橋本 稔、伊勢田恵美子が行い、今回の遺構・遺物のトレースは主に平野仁佳子が行った。本文は石井清司が執筆した。

3. 各古墳の概要

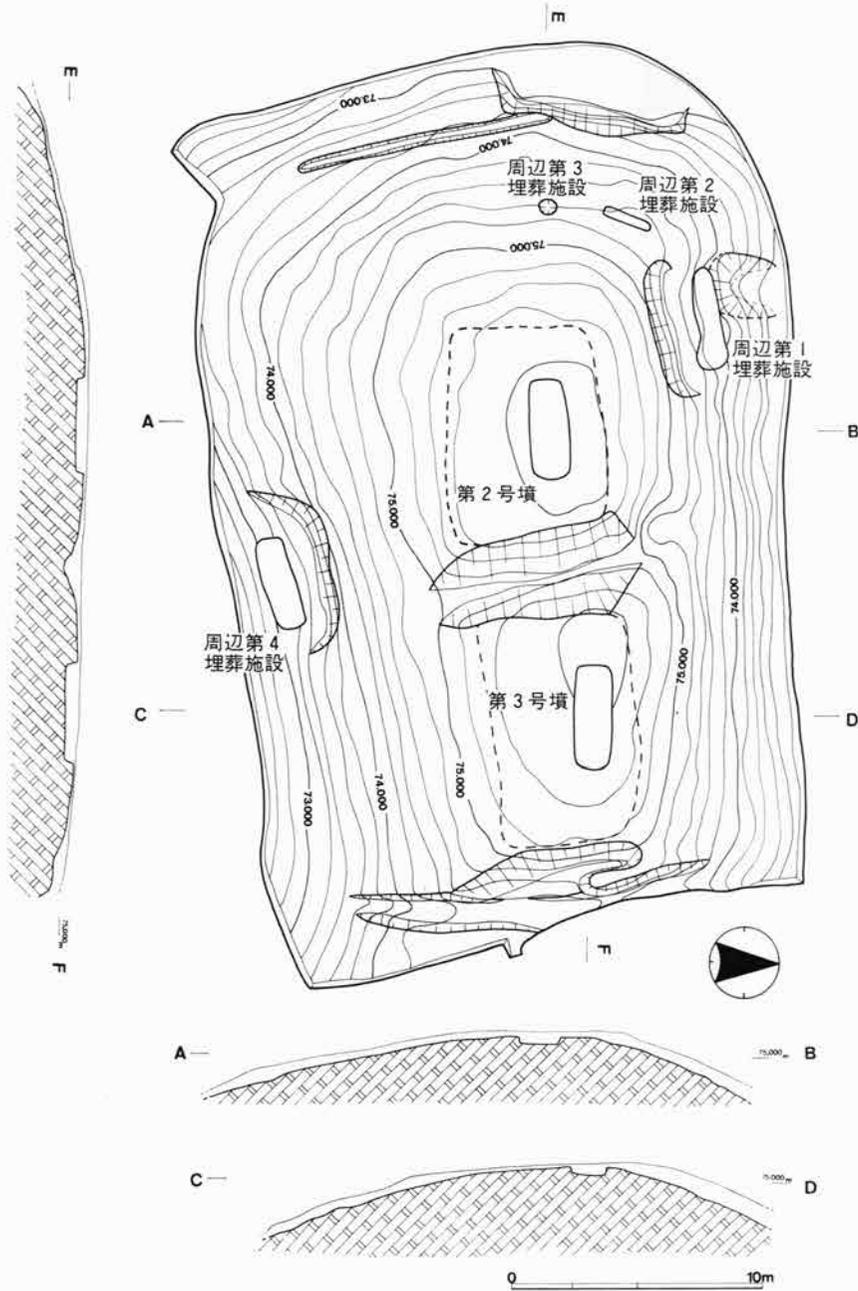
福垣北古墳群は、分布および発掘調査の結果、9基以上を数える古墳群からなり、昭和62年度は、福垣北第2号墳・福垣北第3号墳・福垣北第4号墳・福垣北第5号墳・福垣北第6号墳・福垣北第7号墳の調査を行った。

そのうち、福垣北第6号墳については、墓壇の輪郭を確認したのみであり、第4号墳・第7号墳については、諸般の事情により周溝の一部を確認したのみである。

そのため、ここでは第2号墳・第3号墳・第5号墳で確認した墳丘及び埋葬施設や出土遺物の概略と、第4号墳の周溝から出土した遺物について概要説明を行う。

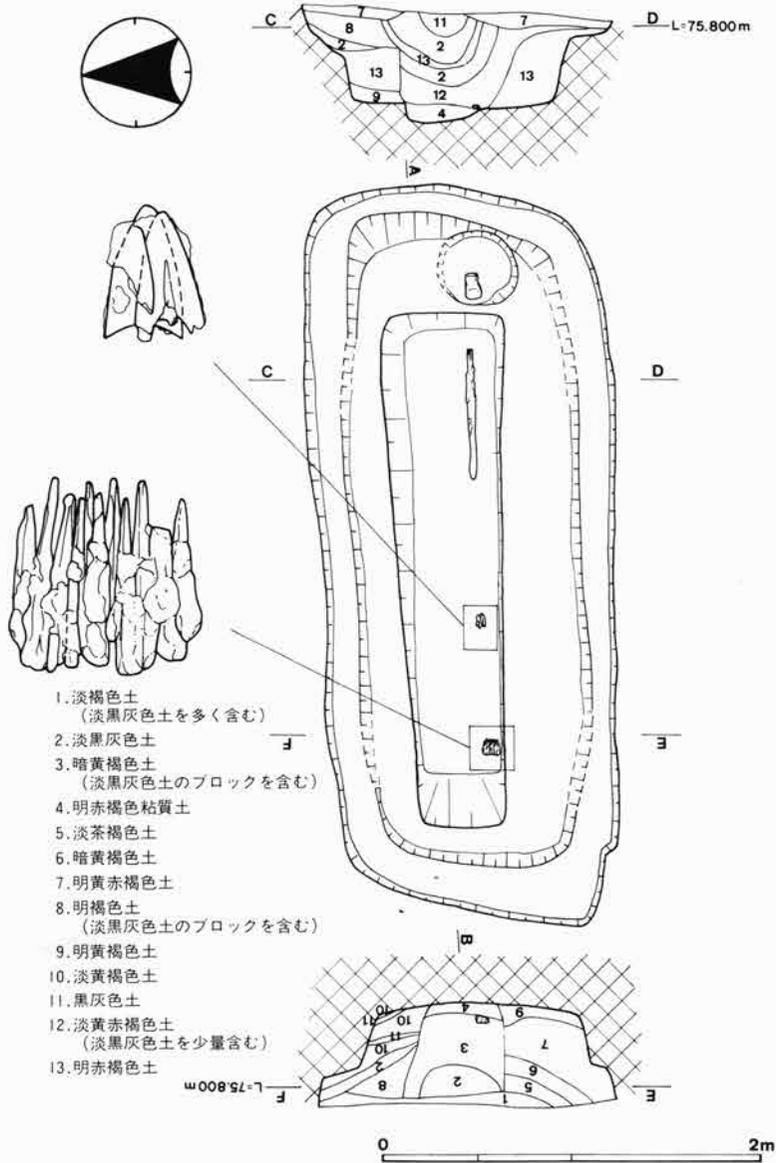
a. 第2号墳

第2号墳は今回の調査対象地の最高所に立地する古墳であり、溝(SD01)を挟んで東側に第3号墳がある。



第37図 第2・3号墳填丘図

この第2号墳の墳丘は、自然地形をそのまま利用しているため、北・南・西側の墳丘基底部分は明瞭でない。第2号墳の墳頂部には、東西約8m・南北約6mの平坦部があり、その平坦部の北側に偏して中心埋葬施設がある。



第38図 第2号墳中心埋葬施設平面図

この中心埋葬施設は木棺直葬であり、棺は組合せ木棺と思われる。中心埋葬施設から出土した遺物は、墓墳の上面で土師器の細片(器種不明)が散在しているほか、棺外の墓墳内から鉄斧が1点、棺内から鉄剣が1点、鉄鏃14点以上が出土した。

棺内の鉄製品の出土状況は、棺の東半部の南に接して鉄剣が剣先を西に向けて置かれ、鉄鏃は棺の西半部で、棺の西小口部に隣接して柳葉鏃(11本以上)が刃を西に向け、また三

角形鏃が柳葉鏃群より東約70cmのところ、刃を東に向けて置かれている。

b. 第3号墳

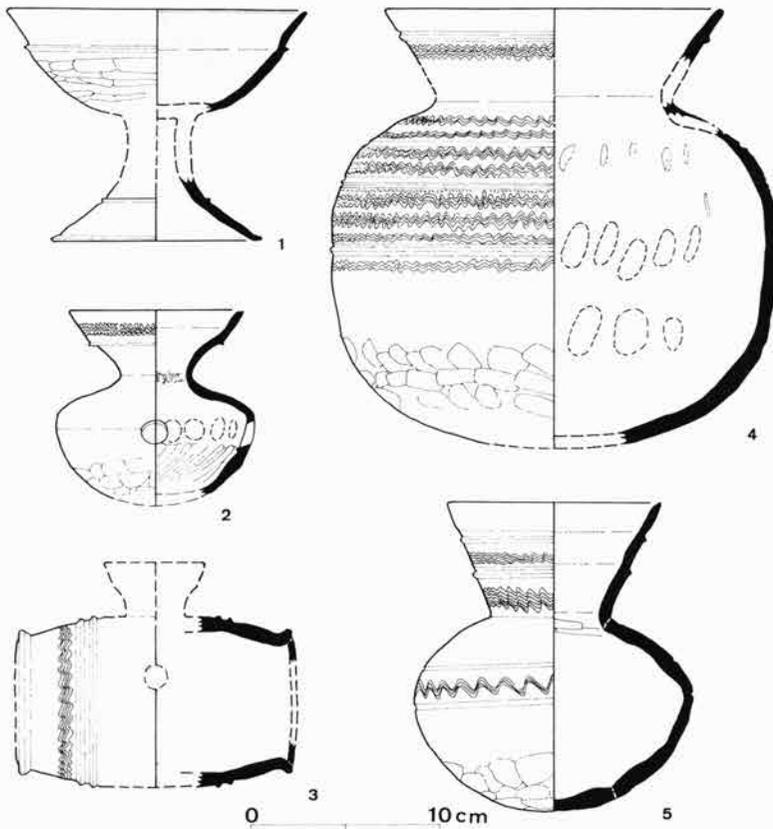
第3号墳は、第2号墳の東側にあり、SD01溝状遺構により区画されている。

第3号墳は、第2号墳と同様、自然地形を一部カットし、墳丘を形成した方墳である。第3号墳の西側には2条の溝状遺構(SD02・SD03)があり、SD01とSD03の溝の心々距離から測ると、東西規模は約18mを測る。南北規模は墳丘基底部分不明瞭なため、不確定であるが約16m(?)を測る。

墳頂部は東西約9m、南北約6mの平坦面があり、第2号墳と同様、北側に偏して中心埋葬施設がある。

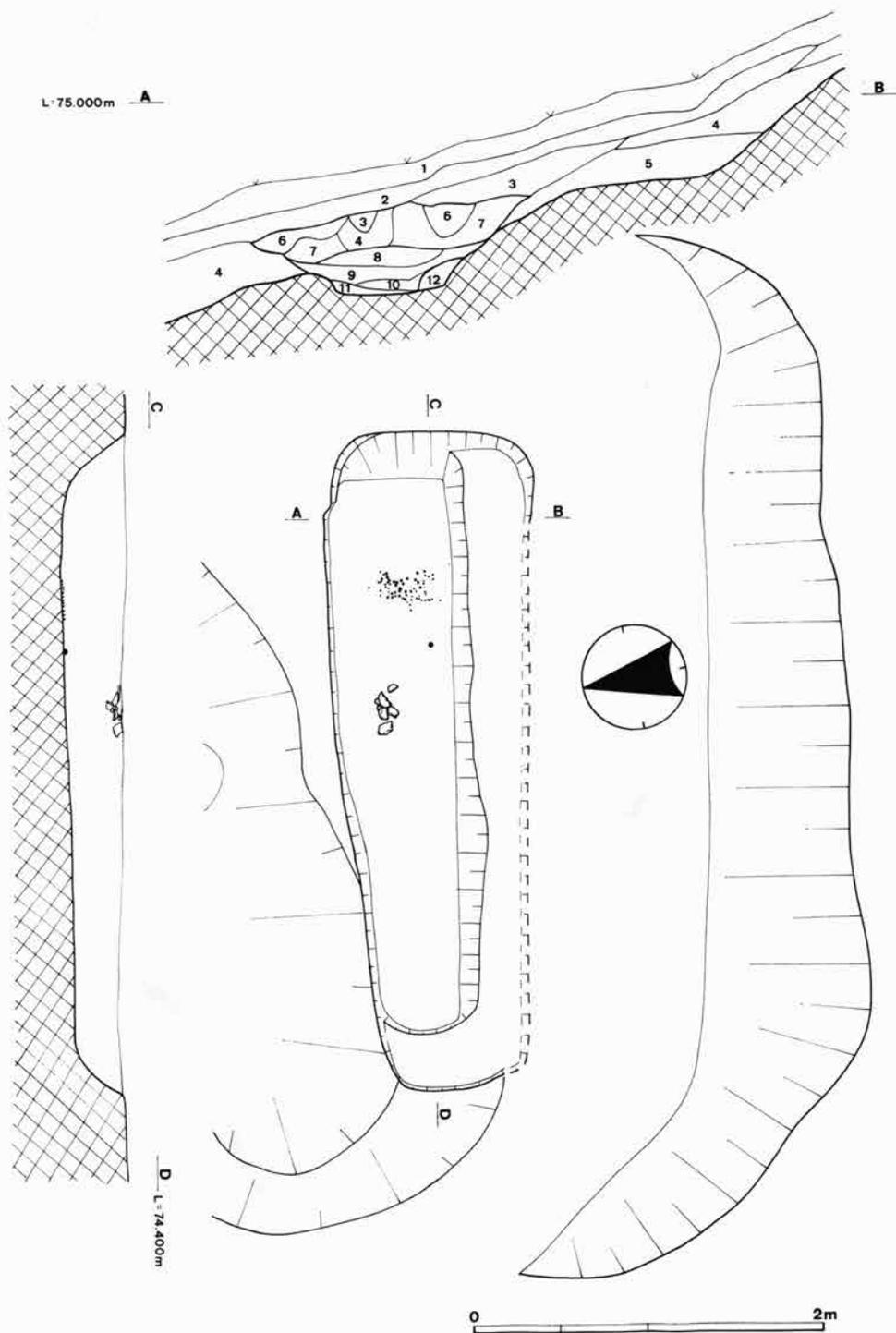
中心埋葬施設は木棺直葬であり、棺は「」形の組合せ木棺と思われる。

第3号墳の中心埋葬施設から出土した遺物は、棺の上面から須恵器壺(甗?)・高杯が破碎した状態であり、棺内からは鉄器片が出土したが器種は不明である。



第39図 出土遺物—須恵器—

1・4：第3号墳中心埋葬施設，2；周辺第4埋葬施設，3；第2号墳墳丘上，5；周辺第1埋葬施設



第40図 周辺第1埋葬施設平面図

1. 表土 2. 淡茶褐色土 3. 淡黒灰色土 (黄灰色土を多く含む) 4. 黒灰色土 5. 淡黒灰色土
 6. 淡黄褐色土と赤褐色土のブロック 7. 暗黄灰色土 8. 暗赤褐色土 9. 淡黒灰色土と赤褐色土のブロック 10. 暗黄褐色土 11. 暗茶褐色土と明赤褐色土のブロック 12. 淡黒灰色土と赤褐色土の互層(棺の裏込め土)

C. 第2・3号墳の周辺埋葬施設

第2・3号墳の墳丘の調査では、墳丘斜面から須恵器が出土し、その周辺を精査したところ、墓壙を確認した。以下、これらの墓壙を第2・3号墳に伴う周辺埋葬施設と考え、その説明を行う。

周辺埋葬施設は、第2号墳をとりまくようにあり、第2号墳の北斜面にあるものを周辺第1埋葬施設、北西斜面にあるものを周辺第2埋葬施設、西斜面にあるものを周辺第3埋葬施設、SD01の南延長にあるものを周辺第4埋葬施設とした。

このうち、周辺第2・3埋葬施設については遺物を含まず、墓壙の規模も小形であるため、埋葬施設として位置づけてよいかどうか疑問の残るものである。

周辺第1埋葬施設は、第2号墳の墳丘斜面に幅約5mにわたって墳丘をカットし、平坦面をつくる。そしてその平坦面に長軸約3.8m・短軸約1.15mの墓壙を掘り、その墓壙内に棺を設置したもので、棺は組合せ木棺と思われる。

周辺第1埋葬施設から出土した遺物は、棺の上面から須恵器甕が、棺内には棺の東半分集中して勾玉1点、小玉300以上が出土した。



第41図 第4(第7)号墳出土遺物—埴輪—

周辺第4埋葬施設は、第2号墳と第3号墳を区画する溝(SD01)の南延長線上にあり、周辺第1埋葬施設と同様、墳丘斜面を幅約7mにわたって墳丘をカットし、平坦面をつくる。そして、その平坦面に長さ約3.65m・幅約1.2mの墓壇を掘り、その墓壇内に棺を設置する。棺は組合せ木棺であり、棺の推定長は約2.3m・幅約0.5mを測る。遺物は棺の上面から須恵器礎のほか土師器片が、棺内からは東半分集中して小型仿製鏡(文様不明)・瑠璃製勾玉3・碧玉製管玉9・ガラス小玉20以上が出土した。

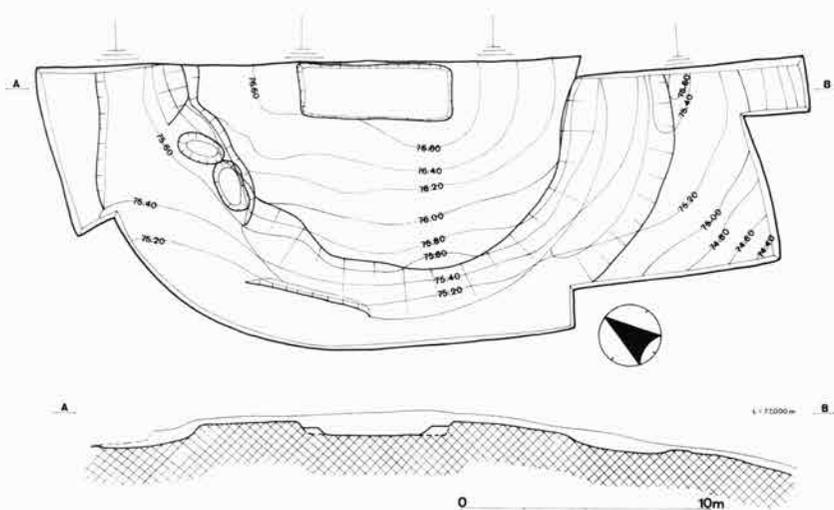
d. 第4号墳

第4号墳は、第2・3号墳の南西方向のD地点で検出した円墳である。

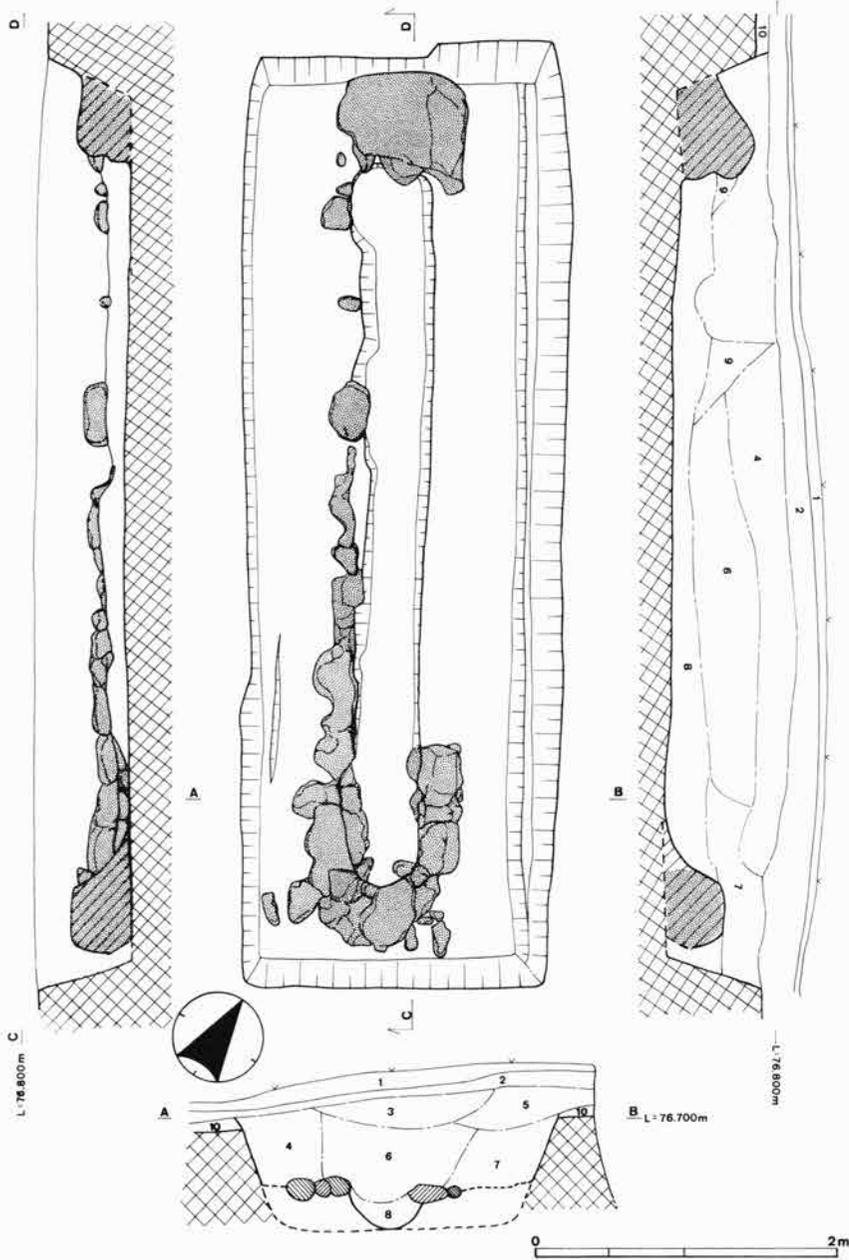
第4号墳で検出した遺構は、幅約35cm・深さ約40cmの周溝のみであり、主体部は後世の削平を受け不明である。これは遺構検出面が表土下約10cmで周溝が検出されたことから窺うことができる。第4号墳では、周溝内から円筒埴輪が出土した。この円筒埴輪の出土状態は周溝内に据えた状態ではなく、破片が散在した状態で出土し、破片は特に周溝の北西隅に集中して出土した。この地点は第7号墳の周溝と重なる地点である。埴輪は調整技法・タガの形態より川西編年の^(注6)IV期に相当する。

e. 第5号墳

第5号墳は、調査対象地の東端のA地点で検出した古墳である。このA地点は、発掘調査に先立つ分布調査の段階で確認できたもので、福垣北古墳群の調査の契機となった地点である。調査前の地形は、北東部が茶畑により大きく削平されていて、中心主体部の確認は難しいと考えていたが、掘削を開始し、表土下約10cm掘り下げたところで墓壇の輪郭を



第42図 第5号墳墳丘図



第43図 第5号墳中心埋葬施設平面図

1. 表土 2. 淡茶褐色粘質土 3. 淡黄褐色粘質土 4. 暗黄褐色粘質土 5. 淡黄褐色土
6. 暗黄褐色粘質土(4より淡黒灰色土のブロックが多い) 7. 黄褐色土 8. 淡黄褐色土
9. 暗黄褐色土(淡黒灰色土を含まない) 10. 淡黒灰色土

確認した。また墳丘も東西部が一部削平されていたがそのほかはよく遺存していた。

調査の結果、第5号墳は径約20mの円墳であり、外部施設として幅約4.6m・深さ約60cmの周溝がある。埋葬施設は長軸約6.2m・短軸約2.2mの墓壇内に、長さ約4.5m・幅約50cmの割竹形木棺を納めたものである。この割竹形木棺には小口部に青灰色粘土を幅70～80cm・厚さ約25cmにわたって充填し、長側部の南半分及び北半分の東側より人頭大の粘土塊を順次積み上げた状態で置かれていた。出土遺物は棺内及び墳丘上にもなかった。

この第5号墳では、直接古墳には関連しないが、北西部の周溝を切るように奈良時代の土坑を2基検出した。

4. ま と め

昭和62年度における福垣北古墳群の調査は、第2号墳・第3号墳・第4号墳・第5号墳の4基の古墳を対象に行い、次年度以降も第1号墳・第6号墳・第7号墳のほか、古墳であると考えられるE地点の調査を予定している。このため、ここでは今回調査した4基の古墳について若干気づいたことを列記したい。

古墳の築造は、第2・第3・第5号墳とも自然の地形を利用し、特に第2・第3号墳では、丘陵に直交する溝により墓域を区画するもので、弥生時代後期の台状墓的な成形方法である。埋土は地山土の上に黒墨土を積み上げたもので、本来各埋葬施設は黒墨土の上面で検出できるはずであるが、黒墨土が後世の削平により遺存しない部分があること（特に第2・3号墳の中心主体）、調査の下手際により確認しえなかったものがあり、黒墨土の上面より確認しえたのは第5号墳の中心埋葬施設と第2号墳の周辺第1埋葬施設のみである。

古墳の墳丘は、第2・3号墳にみられるように溝の区画により墓域を設定し、墳丘基底部が不明瞭な築造方法であり、弥生時代後期の台状墓以降、古墳時代前・中期の丘陵部に立地する中小古墳では認められる築造方法である。

古墳の埋葬施設の数をみると、古墳時代前期では、福知山市豊富谷丘陵遺跡に代表されるように1墳に対し数基の埋葬施設があり、首長の未分化がみとめられるが、古墳時代中期には基本的には1墳に対して1主体である。福垣北第2・第3号墳では中心埋葬施設は1基であるが周辺埋葬施設が墳丘斜面に認められ、築造方法と同様、首長墓の未分化が認められる。但し、福垣北第5号墳は1墳1主体である。

各主体部及び墳丘からは多種の遺物が出土した。

土器類をみると、第2・3号墳に土師器・須恵器が出土した。土師器は細片が多く良好な資料とはなりえないが、須恵器は器種・器形のわかるものが多い。第2・3号墳での須

恵器の出土状況は、各墓墳の上面あるいは棺の上面に置かれていたものが多く、各個体は完形な状態で正位に据えられていたものはなかったが、近接してばらまかれていた。

第3号墳の須恵器は壺・高杯であり、高杯の形態により田辺編年のTK73～TK216型式(注8)に相当する。また第2号墳周辺第1主体・周辺第4主体の墓墳上面から出土した甕は田辺編年のTK216～TK208型式に相当する。

第2号墳中心主体からは時期決定を示す土器類の資料はなかったが、棺の底部で鉄剣・鉄鏃が出土した。このうち鉄鏃は短頸の三角形鏃と柳葉鏃であり、古墳時代中期を代表する鏃である。

第5号墳出土の埴輪は、前述のように川西編年のⅣ期に属するもので、5世紀後半に位置づけられている。

第6号墳は出土遺物がなく時期決定の資料を欠くが、割竹形木棺を内部主体とすることより5世紀前半～中葉と考えられる。

このように遺物・内部主体・墳形の形状より福垣北古墳群の築造順位を考えると、福垣北第5号墳→福垣北第2・3号墳中心主体→周辺第1・4主体→福垣北第4号墳となり、福垣北古墳群は、5世紀前～中葉に築造を開始し、6世紀を前後する時期まで続く古墳群であると考えられる。

この福垣古墳群を以久田野古墳群(注9)のなかで考えると、以久田野古墳群は5世紀後半に築造を開始し、7世紀前半まで連綿と続く総数120基の古墳群と考えられていたが、その築造時期が福垣北古墳群の調査により5世紀前～中葉にまで遡ること、また以久田野古墳群の築造当初の古墳群が以久田野古墳群の西端に位置する福垣北古墳群に集中して認められることは、以久田野古墳群の成立を考える上で注目される。(石井清司)

付表2 福垣北古墳群検出遺構一覧表

名 称	外形・規模	埋葬施設	出土遺物	備 考
福垣北第2号墳	方墳 東西15m?×南北17m?	組合せ木棺 墓壙;長軸3.9m×短軸1.6m 棺;長さ2.6m×幅4.5m	棺内;鉄鏃14本以上・鉄剣1点 墓壙内;鉄斧 棺上;土師器 墳丘斜面;須恵器樽形甕 TK216~TK208	墳形は自然地形を利用しており、墳丘基底は不明瞭
福垣北第3号墳	方墳 東西18m×南北16m?	組合せ木棺 墓壙;長軸4.0m×短軸1.45m 棺;長さ2.3m×幅70~80cm	棺内;鉄器片 棺上;須恵器壺(あるいは甕)・壺(須恵器は棺上に壊した状態で出土) TK73~TK216	第2号墳と同様、自然地形を利用しており、南北の墳丘基底部は不明瞭、東西は丘陵に直交する溝により区画
福垣北第2号墳周辺第1埋葬施設	第2号墳の北斜面に平坦部を造り、墓壙を掘る	組合せ木棺 墓壙;長軸3.8m×短軸1.15m 棺の規模は不明	棺内;勾玉1・小玉300以上 棺上;須恵器甕 TK216~TK208	
福垣北第2号墳周辺第2埋葬施設	第2号墳の北西斜面にある	不明	なし	主体部かどうか不明
福垣北第2号墳周辺第3埋葬施設	第2号墳の西側斜面にある	不明	なし	主体部かどうか不明
福垣北第2号墳第4埋葬施設	第2号墳の南側斜面に平坦面を造り、墓壙を掘る	組合せ木棺 墓壙;長軸3.65m×短軸1.2m 棺;長さ2.3m×幅0.5m	棺内;小型仿製鏡・瑪瑙製勾玉3・碧玉製管玉9・ガラス小玉20以上 棺上;須恵器甕・土師器 TK216~TK208	
福垣北第4号墳	円墳 推定11m 周溝がめぐる	不明	周溝内より円筒埴輪出土 川西編年のⅣ期	第4号墳は削平を受け主体部および墳丘は残っていない。一部周溝がめぐるのみである。
福垣北第5号墳	円墳 径約20m 周溝がめぐる	割竹形木棺 墓壙;長軸6.2m×短軸2.15m 棺;長さ4.5m×幅0.5m	なし	

(6) 福垣城館跡

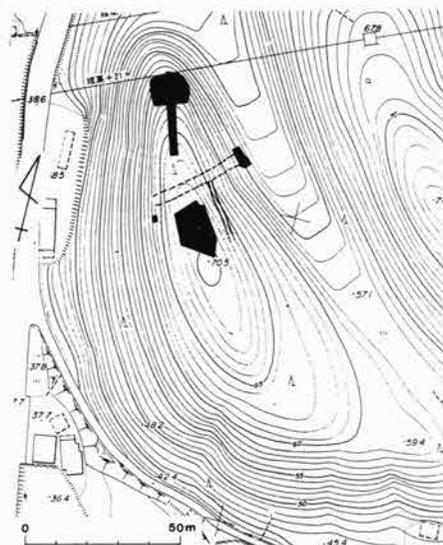
1. 調査経過

福垣城館跡は、犀川左岸の低位段丘を見下ろす丘陵端部に築かれた中世山城である。江戸時代(寛政6年)に記された丹波地方の地誌『丹波志』によると、大槻馬之助の居城とある。また、南北朝の内乱期に、当地では「栗村合戦」という戦があった。当時の栗村荘が亀山院領で南朝方であったことから、北朝方の丹波守護仁木頼章氏の攻撃を受けた。この時は、福垣城館より南西約1.2kmに立地する一尾城が攻防の中心的役割を担ったとされる。この福垣城館も一つの出城として築かれてきたのであろう。今回の発掘調査によって、南北朝の内乱期(室町時代初期)～戦国時代にかけての遺物が出土し、城館に伴う各施設の構造が明らかになった。また、城館の北側尾根上に、古墳(円墳)が1基あることもわかった。この古墳は、東側の福垣北古墳群とおそらく関係をもち5世紀末葉に位置付けられる。

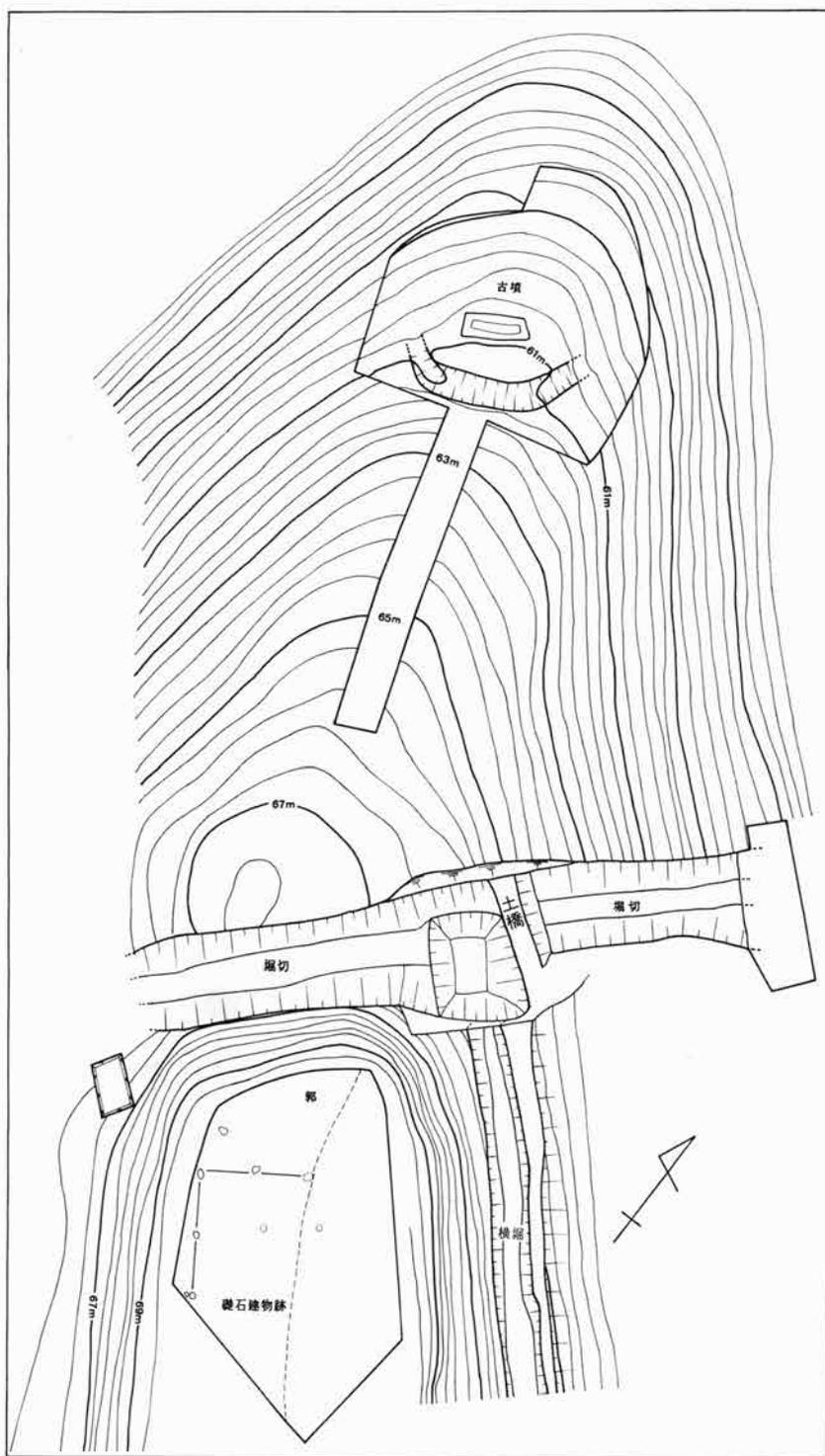
調査は、城館の郭である頂部平坦面をはじめ、斜面地・堀切部の表土剥ぎから始めた。城館はそのすべてが遺構となるため、限定的なトレンチは郭平坦面以外は設定しなかった。尾根部については、細長いトレンチ(幅2m)を入れ、遺構(古墳)を検出した段階で、随時その周辺を掘り広げていく方針をとった。掘削の深さについて記すと、標高67～70mを測る郭部および堀切は予想以上に深く、郭部で約1.2m、堀切部では実に2m以上にも達した。一方、古墳の存在する尾根部分の堆積状況は浅く、表土下わずか20cm程で主体部上面の掘形が現われた。各遺構とりわけ深い堀切部の掘り上げにかなりの日数を費した。また調査の最終段階で、郭部の中間裾部の周囲にとり付くように掘られた横堀を検出した。当初この横堀の存在に気付かなかったため、この部分の掘削も相当に手間取った。降雪にも苦しめられたが、各遺構の写真撮影・平板測量・細部実測を適宜行い、3月11日にすべての調査を終了した。

2. 検出遺構

検出遺構は、まず城館については郭部からの礎石建物跡1棟及び郭部を守るための堀切



第44図 トレンチ配置図



第45図 調査地平板測量図

・横堀・土橋がある。さらに、北側尾根上に造られた古墳が1基ある。

郭・礎石建物跡 郭部はほぼ南半部が調査対象地外となり、約300m²分掘り下げた。その結果、南北2間分・東西2間の規模をもつ礎石建物跡が1棟検出された。柱間寸法は、南北2.9m・東西2.5～2.7mを測る。礎石は、西側列の3個体がいずれも径50cm×40cm前後を測る大きなもので、原位置をとどめている。他の柱部は、平坦な面を上にした礫を2～3点組み合わせで礎石としていたようである。また、やや原位置を逸脱している。

さらに郭全体の構造として、礎石建物跡検出面である西半側と反対の東半側の地質が大きく異なる。すなわち、西半側は炭化物混じりの河原石を主体とする礫面であり、東半側は赤褐色粘土の地山面となっている。礫面の下に地山面がくる。おそらく郭の平坦面をより広くするため、犀川の河原石をここまで運び上げたのであろう。建物はこうして人為的に広げられた場に建てられており、かなり大がかりで思い切った工事が施されている。

堀切 郭部北側で、尾根に直交する形で深く掘られている。幅約4m・深さ約2.5mを測る規模である。埋土は5～6層に分かれて堆積しており、中には黒い炭化物が帯状にたまっている層もある。堀切の最下部の裾をたち割ったところ、堀切の両側の隆起は掘を掘っていく際に土砂を両側に積んだためであることが、縞のような幾重もの土層堆積状況から窺えた。堀切の断面形は端正な逆台形で、底は平坦に地山を削っている。戦いの際には通路としても使え、迅速な移動を可能にしたであろう。

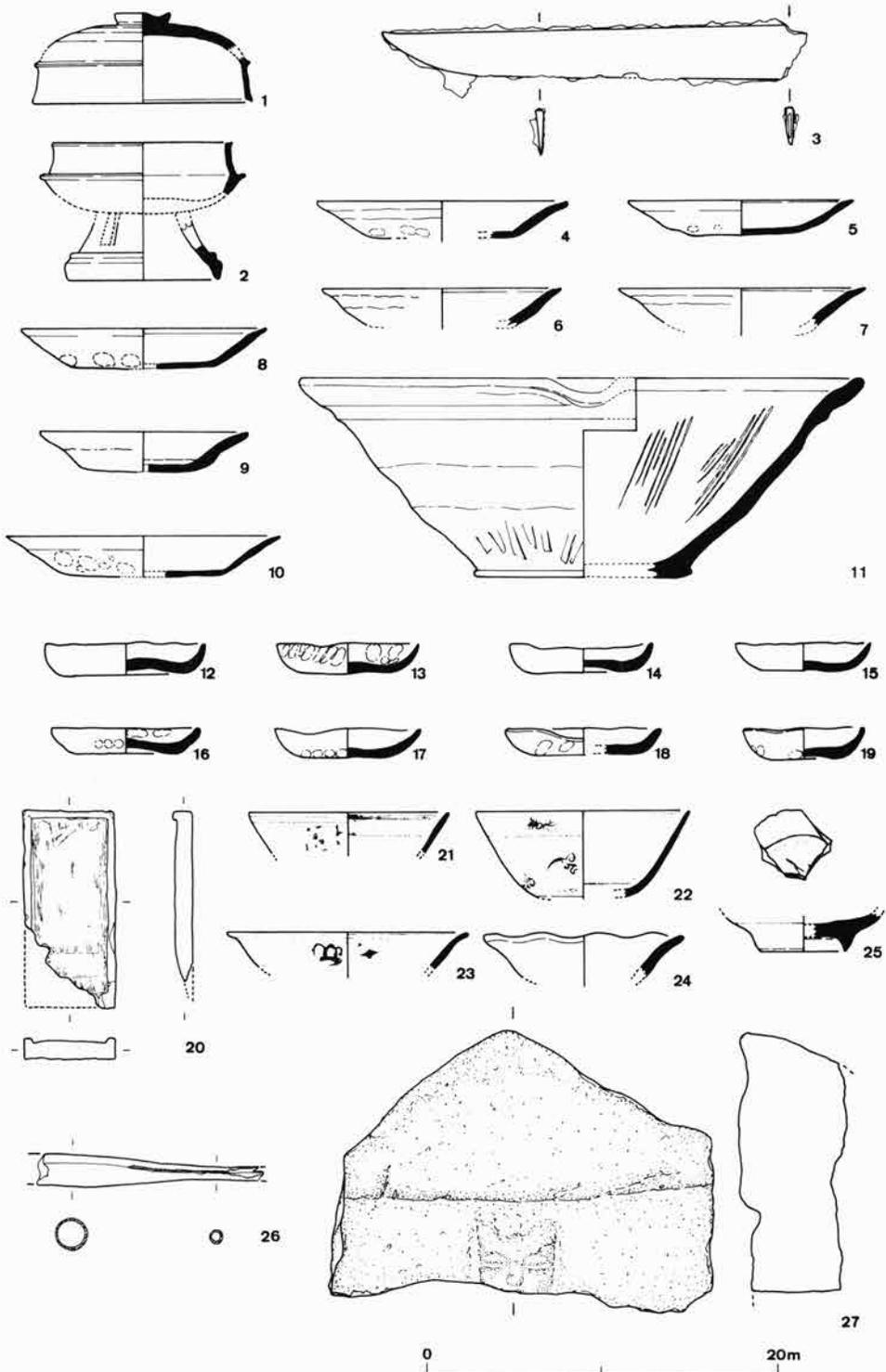
横堀 郭部にとりつく溝で、幅約2m・深さ約1.2mである。検出した長さは、郭の東側約20m分であるが、西側にもある程度の長さで掘られているようである。但し、郭の全周はまわらない。横堀の断面形は半円形で、底面には大小の礫が人為的に並べられている。水はけを考へてのことなのか、あるいは礫の列が部分的に途切れていることや礫の下から土器が出土することなどから、地鎮の意味あいを持つものかもしれない。この横堀から下位もかなりの急傾斜である。弓矢の威力や守備を高めるのに都合がいい。

土橋 堀切内に堅い地山(岩壁)を削り残して設けられている。東側から堀切をかけ登ろうとしても、堀切の深さ分(約2m)の壁がたちはだかる。そしてこの土橋の裏側は、四角に極めて深く掘られた穴があいている。土橋の上面からおよそ3.5mを測り、一旦入り込めば容易に這い上がれないであろう。この穴に先の横堀が屈曲ぎみに接続する。

古墳 おそらく組合せ式の木棺を主体部にもつ円形墳である。墳丘は、南側に浅い溝を掘ることによって画されている。溝はまるくなるようで、推定径14mを測る。主体部上面(棺上?)から須恵器片(有蓋高杯)が出土した。出土遺物はこれ1点のみである。

3. 出土遺物(第46図)

まず、古墳から出土した有蓋高杯1・2は、完形品ではなく4点の小破片である。同一



第46図 出土遺物実測図 (26のみ1/2)

個体という認識から凶化している。口径は蓋が12.5cm、杯部が10cmを測る。蓋の口縁部は、ほとんど垂直に立ち上がり、中間部の稜は極めてシャープにつく。口縁端部は面をもっている。これを受ける杯部も口縁部は長く、端部も面をもつ。陶邑編年第1期第3段階(TK208)に比定される。

3～27はすべて城館から出土したものである。短刀(3)は、刃わたり23cmを測り、茎部は折損する。郭北側の斜面地から出土した。土師器皿(4～10・12～19)は点数的に最も多く出土した。4～10のタイプは、精良な胎土をもつ。一端をしっかりと押さえて回転された際の指ナデ痕が胴部上半部にみられる。口径は約14cmのものが多いが、13～15cmのものもある。これら土師器皿の製作年代は、15世紀の終りから16世紀前半にかけてのものと言える。同図11は、瓦質のすり鉢である。口径は32cmを測る。内面の線条痕は1本1本刻まれている。また外面下部は、削り痕が明瞭に認められる。12～19は、肉厚のずんぐりとしたタイプで、胎土もやや荒い。手づくねによる成形で、口縁部径は平均8.3cmである。底部はやや上げ底ぎみになっているのが特徴である。

20は、硯である。海部の破損は当時に生じたもので、破れ面は風化しており古い。

21～25は、陶磁器類である。21～23は染付で、中国製輸入陶磁器類である。21と22は椀で、23はやや浅い小形の鉢となろう。24は青磁片である。波状の口縁部をもち、底は高台を付けたとみられる小皿である。25は不明である。その他にも赤絵をもつ陶磁器片(浅鉢あるいは皿か)が1点出土している。陶磁器類の年代は15世紀中頃から16世紀中頃と幅がある。

26は金銅製のキセルである。堀切内からの出土である。16世紀末以降の資料である。同じく堀切内からの出土で石仏(27)がある。先端が尖がって仕上げられており、未加工の裏面を含めつくりは荒い。室町時代の所産である。

4. ま と め

今回の調査では、福垣城館跡の北半分の全容をほぼ明らかにした。礎石建物を有する郭やこれの周囲をかためる堀切及び横堀を検出したことが主な成果と言える。城館の時期は2時期にわたり、土師器皿の年代等から、14世紀前半の南北朝の内乱期と15世紀後半から16世紀にかけての戦国時代がある。城館の施設がまとまりをもって構成されていることから、主に戦国時代に完成された感を強く受ける。郭の周りをめぐる横堀の調査例は、市域では貴重なものと言える。また、城館の築造によっても壊されずに残存した1基の古墳は、東側の福垣北古墳群との関連で捉える必要がある。遺跡の性格上、出土遺物は少なかったが、各遺構との関係をつきとめることが今後の課題となろう。(黒坪一樹)

(7) 平山城館跡

1. 調査経過

平山城館跡は、綾部市七百石町に所在する室町時代の山城跡である。今年度の調査は、昨年度に引き続き行ったもので、すでに調査の終了している第1郭の主要部分に加え、新たに第2郭・畝状堅堀・土塁の調査を中心に行った。調査全体の概要については昨年度の概要報告を参照されたい。^(注10)また、調査地の地区割は、昨年度のものを踏襲している。

今年度の調査は、昨年度に表土除去の終了していた第2郭の調査から着手した。この段階では、礎石が一行に並ぶことが判明していたが、他に顕著な遺構は検出されなかった。そのため、第1郭同様に遺物の包含層である暗茶灰褐色土及び焼土層を除去し、地山面において遺構の検出を行った。その結果、先に記した礎石が2棟の建物となることが明らかになったほか、柵列・柱穴・土坑・集石遺構が検出された。第2郭の南側に位置する土塁については、第2郭の調査終了後に断ち割りを行った。

畝状堅堀については、調査着手前の地形観察により、当初の予想を上回る大規模なものであることが判明し、調査範囲内においてはほぼ全面にわたり調査を行った。堅堀は、表土除去後に肩の部分において地山がすぐに露出し、堀の部分は、後の土砂の流入によってかなり埋没して浅くなっていることが明らかとなった。そのため、堀の部分においても流入土を除去し地山面まで掘り下げを行った。

調査は昭和62年4月20日から同年8月21日まで約4か月を費やした。なお、現地説明会は、昭和62年7月25日に実施した。

2. 調査概要

(1) 第2郭の調査

(a) 検出遺構 第2郭は、南北約10m・東西約35mの東西に細長く広がる郭であり、平山城館のなかでは最高所に位置する。第1郭との標高差は約7mを測り、背後には土塁・堀切を備えているなど、城館内にあって、特別な位置を占める場所といえる。

第2郭で検出した遺構^(注11)には、礎石建物(SB04・SB05)、柵列(SA05・SA06)、土坑(SK04・SK05・SK06)、集石遺構(SX01・SX02)のほか、溝状の遺構及び多数の柱穴がある。

SB04 SB04は、第2郭のほぼ中央部で検出した礎石建物跡である。東西2間×南北2間の規模をもつ正方形の建物で、柱間は約2mを測る。礎石は、建物の中心に位置する礎石を含め、合計5石を確認したが、本来は9石による総柱の建物であったと推定される。



第47図 第2郭検出遺構平面図

なお、建物の北壁及び南壁の礎石間のほぼ中央部はやや小振りの石が配置されており、9本の柱をさらに補助する柱が構築されていた可能性が強い。礎石は、いずれも自然石を用いており、加工した痕跡は認められない。礎石の設置にあたっては、平らな面を上面に利用し、安定の悪いものについては、地山をわずかに掘り込んで安定させている。

SB04の礎石上層には、厚い焼土層が堆積していたため、建物本体は、焼失したものと考えられる。

SB05 SB05は、SB04の西側に並んで配置している礎石建物跡である。東西3間×南北2間の規模をもつ長方形の建物で、柱間は約2mを測る。SB05の最大の特徴は、礎石を含み、それよりも一回り広い、東西6.6m×南北4.9mの範囲内に、拳大から人頭大までの石が乱雑に敷かれた状態で広がっていたことである。石の敷き方は、一様ではなく、南側半分は、特に石の密集度が高く、やや大きめのものを使用されているのに対し、北側半分では、石の空白となる場所が存在し、石も小振りのものが多い。こうした石の粗密が何に起因するのかは不明であり、また、石敷そのものの性格についても、建物自体の性格と合わせ、不明な点が多い。建物本体については、この石敷がSB04同様厚い焼土層に覆われていたことから、SB04と同時に焼失したものと判断される。

なお、SB05の南北軸の方向は、SB04と同じであり、また、北壁・南壁ともSB04とほぼ直線的につながるため、一連の建物と考えると差し支えはないが、SB04と著しく異なる特徴をもつことから、性格の異なる別棟と考えておきたい。

SK04 第2郭の西側で検出した土坑である。平面形は、一辺約1.4～1.8mの長方形を呈している。深さは、約0.2mを測る。土坑内からは、天目茶碗・青花磁器・丹波焼・土師器等が出土しており、これらの破損土器等を廃棄した土坑と考えられる。

(b) 出土遺物^(註12)(第49図1～15)

1～10は、第2郭焼土層内出土遺物である。

1～3は、白磁碗である。1は、体部から口縁部にかけて内湾するもので、口径9.4cm、器高2.4cm、底径5.6cmを測る。2・3は口縁部が大きく外反する。3は、部分的に黒灰色を呈する。4は、平高台をもつ青磁香炉である。口径9.6cm・底径4.0cmを測る。5は、美濃・瀬戸系の灰釉皿である。内底面には、印花文が押印されている。6は、美濃・瀬戸系の鑄連弁文碗である。口径14.0cmを測る。7は、青花磁器碗である。口径15.0cmを測る。

8は、丹波焼の壺である。口縁部が斜め上方へ立ち上がるもので、口径は16.4cmを測る。9は、青灰色を呈するが、焼きの悪い丹波焼と思われる。底径12.0cmを測る。10は、丹波焼の播鉢である。刷り目は、ヘラ状工具による一本引きである。底径11.2cmを測る。

11～15は、SK04内出土遺物である。

11は、土師皿である。内面には、強く火を受けた痕跡が残っており、灯明皿として使用されたことも考えられる。口径11.8cmを測る。12は、天目茶碗である。口径12.0cmを測る。13は、青花磁器皿である。口径15.0cm、底径5.0cmを測る。14は、一本引きの刷り目をもつ丹波焼の播鉢である。15は、軟質の播鉢である。刷り目は、櫛状工具によって引かれており、櫛目は、8本/2.9cm単位である。横方向にも、上下二段に櫛目が施されている。

(2) 畝状堅堀の調査

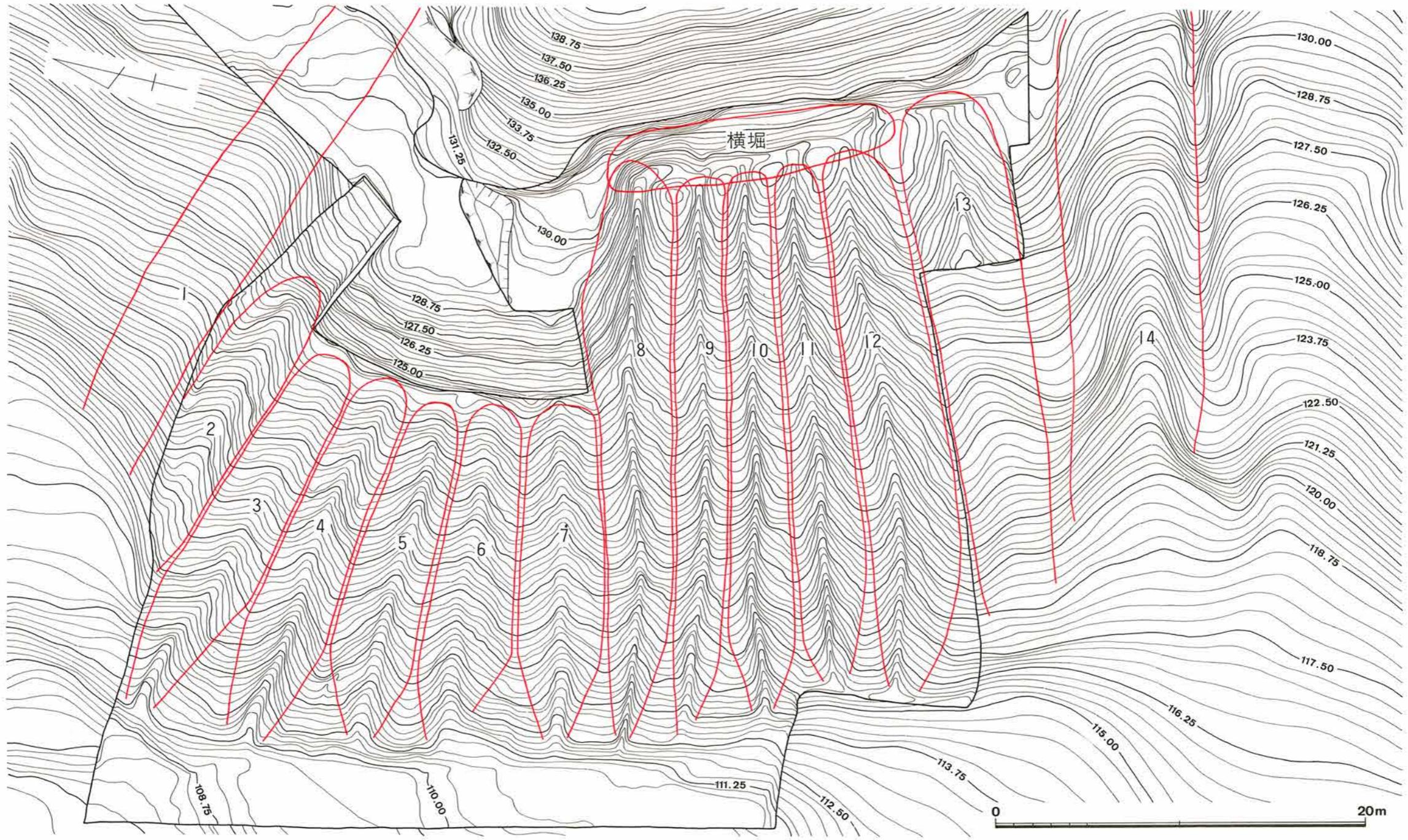
(a) 畝状堅堀の構造

前述のように、調査着手前に、西側の斜面には多数の堅堀の存在することが確認され、斜面に連続して築造されたいわゆる畝状堅堀であることが判明した。位置的には、第2郭の西側にあたり、また、他の場所には、全く堅堀が確認されないことから、特に第2郭への進入を防ぐために築造されたものと判断される。

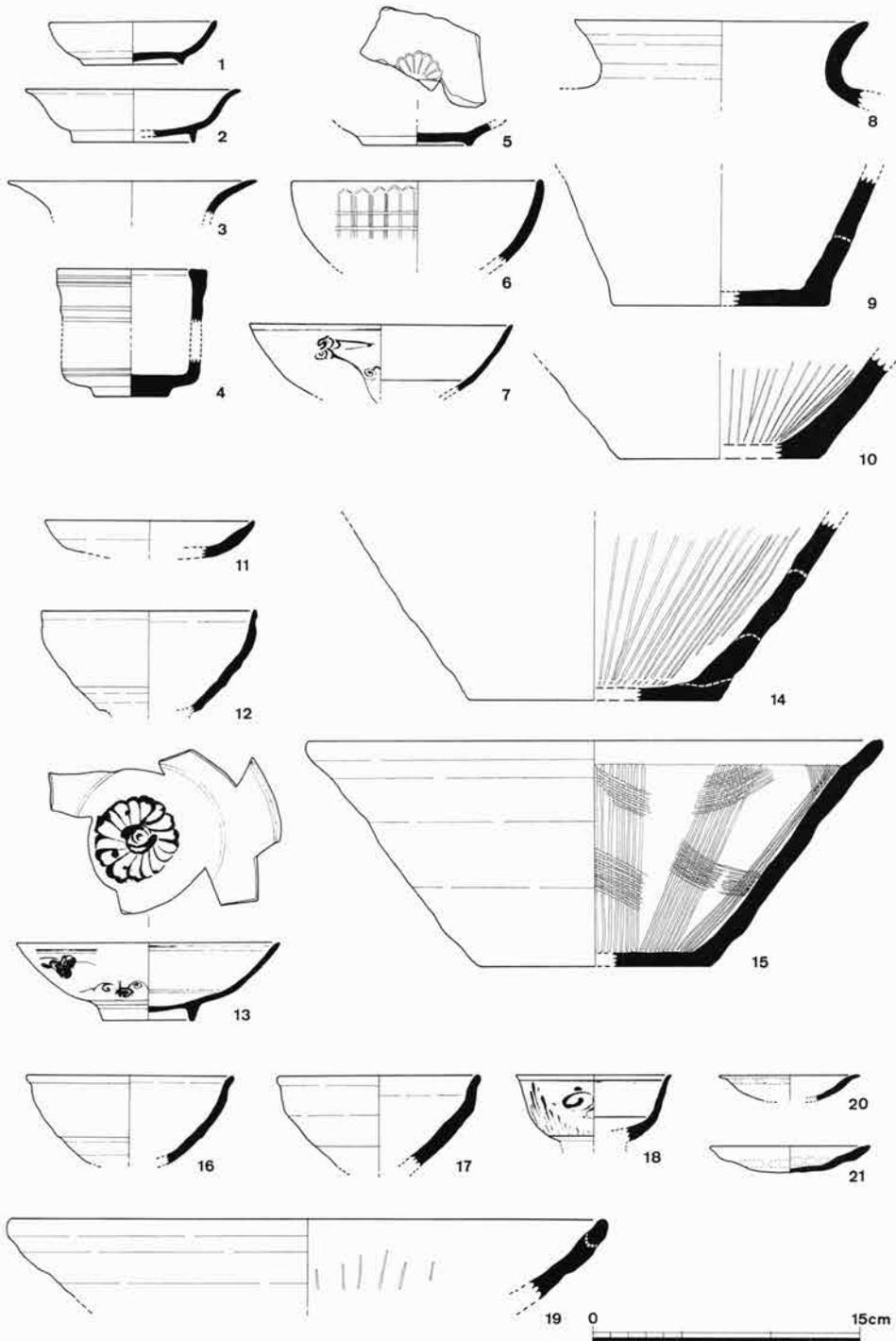
掘削前においては、堅堀は、比較的不明瞭なものを含め、14本が確認された。^(注13)この時点での地形観察では、各堅堀とも緩やかなU字状の溝を呈しており、浅いものでは、深さ約20cmしかない堅堀も存在した。しかし、結果的には、掘削前に確認した14本の堀は、いずれも地山を深く掘り込んだ明瞭な堅堀であり、城の廃絶後、土砂の流入により、かなり浅くなっていることが判明した。ここでは、説明の便宜上、これらの堅堀を北側から堅堀1～14とし(第48図)、以下の記述を行う。なお、堅堀14は、調査対象地外に位置するため、現状の地形観察しか行っていない。

堅堀1～14は、位置・堀の形状・規模等により、次の4グループに分けることが可能である。

- A. 堅堀1 斜面の裾から第2郭までつながるもの。溝は、ゆるやかなU字状を呈する。
- B. 堅堀2～7 斜面の途中(第1郭のレベルよりも低い位置)から掘り込まれているもの。長さ20m前後の規模をもつ。溝は、ゆるやかなU字状を呈する。傾斜角は、約31°(堅堀5)を測り、急傾斜である。これらの上部には、曲輪状に張り出した部分が認められる。2～7は、この下からやや放射状に広がって配置される。
- C. 堅堀8～13 第1郭のレベルとほぼ同じ高さから掘り込まれているもの。長さ35m前後の規模をもつ。溝は、深いV字状を呈する。傾斜角は、約25°(堅堀10)を測る。これらの上部には横方向の堀が造られ、これと連結して、8～12の堅堀が整然と直線的に造られている。
- D. 堅堀14 第1郭のレベルよりもやや高い位置から掘り込まれているもの。溝は、や



第48図 畝状縦堀地形測量図(調査後)



第49図 出土遺物実測図 (1~10. 第2郭焼土層, 11~15. SK04, 16~21. 竖堀)

や底の広いU字状を呈する。堅堀群中最も規模が大きい。

以上の4グループは、築造の順位により、形成されたものと考えられる。すなわち、B・Cグループは、それぞれほぼ同規模の堅堀群によって構成されるが、これは、A・Dの堅堀によって北側と南側の両端が規制され、その間を埋めるように等間隔に割り付けられて掘削されたと考えられること、つまり、A・Dの堅堀掘削→B・Cの堅堀群割り付け・掘削という順位が想定されよう。しかし、当初より全面的に計画された後、掘削されたのか、A・Dの堅堀掘削後、かなりの時間を経て、B・Cの堅堀群を付け足すように掘削したのかについては、判断できない。

さて、これらのA～Dグループは、有機的に結合し、全体として第2郭への進入を防ぐという役割を担っている。ひとつひとつの堅堀の構造は、基本的には、斜面に沿って溝を掘るという単純なものであるが、畝状に連続して構築することにより、防御機能は、格段に向上している。具体的には、斜面上での横方向への移動が非常に困難になることがあげられる。それにより、斜面への取り付きから、郭まで直線的にしか登ることができない、多人数による攻撃の場合、身動きがとりにくい等、攻め手にすれば大きな障壁になるといえよう。蛇足ながら、調査後の実感として、整然と並ぶ堅堀群は、視覚的にも敵を威圧する迫力をもつこと、地山まで掘り込んだ堅堀は、非常にすべりやすく、動きにくいこと、を記しておきたい。また、調査終了後、約半年を経過して、堅堀への土砂の流入状況を観察したところ、部分的には、約10cmの堆積が認められたものの、全体的には、それほどの流入はなかったことを付記しておく。

(b) 出土遺物(第49図16～19)

畝状堅堀からは、流入土内より、若干の遺物(土器・銅銭等)が出土している。

16・17は、天目茶碗である。17は、体部が厚く、口縁端部を丸くおさめる。16は、口径11.6cm、17は、11.2cmを測る。18は、青花磁器碗である。口径8.7cmを測る。19は、丹波焼きの播鉢である。一本引きにより刷り目を施している。20・21は、手づくねの土師器小皿である。20は、口径8.0cm、21は、口径9.0cm、器高1.5cmを測る。

3. 小 結

昭和61・62年度にわたる平山城館の調査では、戦国期の城館を考える上で多大な成果をあげることができたといえる。最後に、^(注14)両年度の調査成果を簡略にまとめ、小結とする。

〔城館の構成〕平山城館は、南から北へのびる尾根上に、2段の郭(下段-第1郭、上段-第2郭)と、第1郭西側に腰郭が存在する。防御施設としては、第2郭の背後に土塁・堀切、第2郭の西側斜面に14本の畝状堅堀が造られている。

〔検出遺構〕 第1郭では、礎石建物、柵列、溝、土坑等を、第2郭では、礎石建物、柵列、土坑、集石遺構、溝状の遺構及び多数の柱穴を検出した。また、第2郭西側斜面では、畝状堅堀を検出した。

SB05 第2郭の西よりに位置する礎石建物SB05は、石敷を有する特異な建物であることが判明した。城の中でも、最も重要な施設(後の天守閣に相当する建物、あるいは、食糧を保管した倉庫とも考えられる)であると思われる。

畝状堅堀 第2郭西側斜面に14本の畝状堅堀が存在し、このうち13本について調査を行った。その結果、堀の部分にはかなりの土砂が流入し、浅くなっていること、堅堀の配置に規格性が認められること、実戦における防御効力が多大と思われること等が判明した。

畝状堅堀については、近年特に関心が高まり、全国的にも、その存在が知られるようになってきたが、^(注15)発掘調査の行われた例はきわめて少なく、^(注16)その意味からも今回の調査成果は重要な意義をもつと考えられる。

〔継続年代〕 出土した土器は、15～16世紀のものが多く、なかでも16世紀と考えられるものが大半を占める。また、17世紀に入るものはほとんどみられないことから、室町時代後半、いわゆる戦国時代に城が機能し、安土桃山時代頃までには、城が廃絶したと考えられる。第1郭、第2郭で検出した建物跡は、いずれも焼失しており、城が戦火によって廃絶したことが窺えるが、その時期については、安土桃山時代前後と考えておきたい。

(鍋田 勇)

(8) 私市円山経塚

私市円山経塚は、日本道路公団の計画する近畿自動車舞鶴線の建設に先立ち、当センターが円山城館として発掘調査を行ったところで、新たに確認された。円山城館跡は、昭和62年度の調査によって、大規模な古墳(私市円山古墳)であることと、さらにその頂部に経塚の営まれていることが明らかになった。古墳については、昭和63年度も調査を継続中であり、ここでは、調査を終えた経塚とその関連遺構について、概要を報告する。

私市円山経塚は、京都府綾部市私市町円山に所在する。経塚の営まれた場所は、由良川の北側に位置し、通称「円山」と呼ばれる標高約94mの丘陵上である。ここからは、南側に広がる由良川中流域の平野を見おろすことが可能であり、古墳と同様に経塚の立地としても、申し分のない場所といえよう。

1. 調査経過

私市円山経塚は、古墳墳頂部の調査中に、新たに見つかり、最終的に経塚と確認するまで、以下の調査手順を踏んだ。

古墳の墳頂部は、直径約17mの広い平坦面を有しており、表土を除去した段階で、この平坦面のほぼ中心部において大きな木の株を中心にして古墳の葺石を集めた塚状の集石を確認した(第1検出面, 第50図)。また、周辺部には、3~5cm大の小石の集石が部分的に広がっていた。中央部の集石内からは、陶器・瓦器片等が出土したため、この集石は、経塚あるいは中世墓の可能性が高いと判断し、調査を進めた。その後、礫石を取り除くと、一辺約1mの範囲内に、やや大きな礫石が密集しているのが見つかった。これらの石は、土坑内に入れられたものと思われたが、木の株が石を取り込むように入り込んでいたため、



第2検出面の礫石除去作業風景



経塚の実測作業風景

やむなく、周囲の土を除去し、集石を検出した（第2検出面，第51図）。

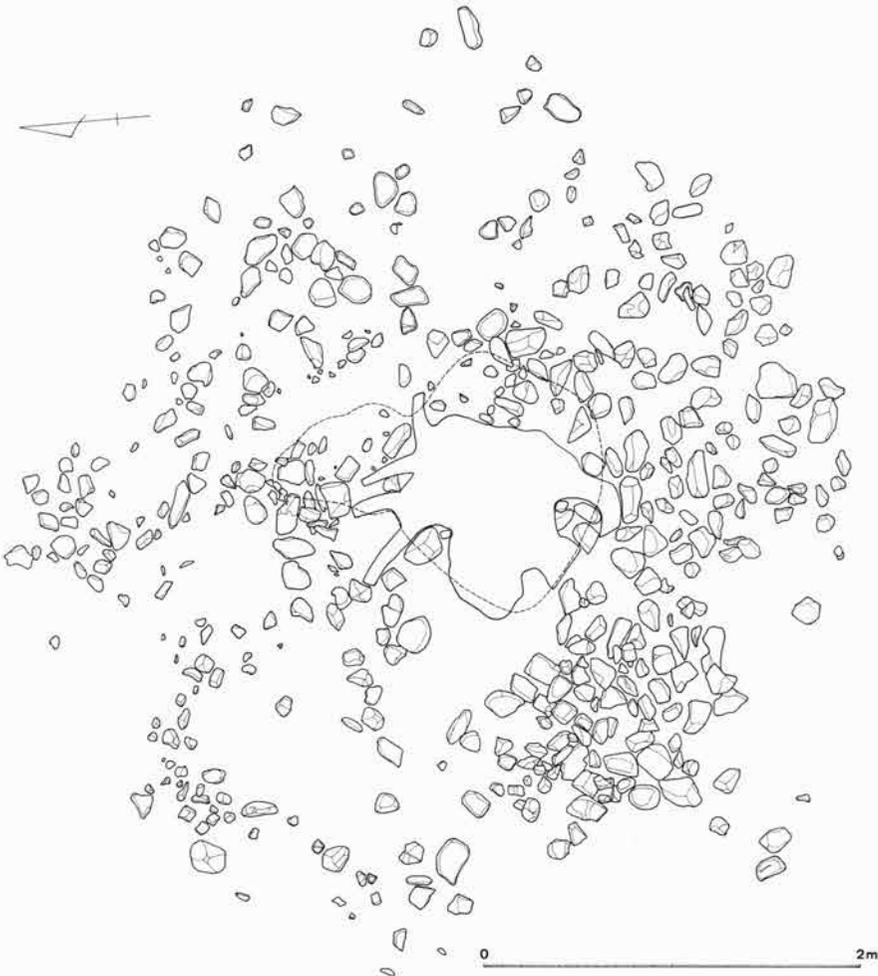
次に、この石と木の株を取りはずすと、土坑及び小石室・経筒が検出されて（第3検出面，第51図）、経塚であることが明らかになった。なお、前述した周辺部の集石については、中世墓の可能性が考えられたが、土坑等の遺構を伴わず、性格は不明である。

また、後述する経塚関連遺跡(石組・ピット)は、経塚の調査終了後に墳頂部南側縁付近で検出した。

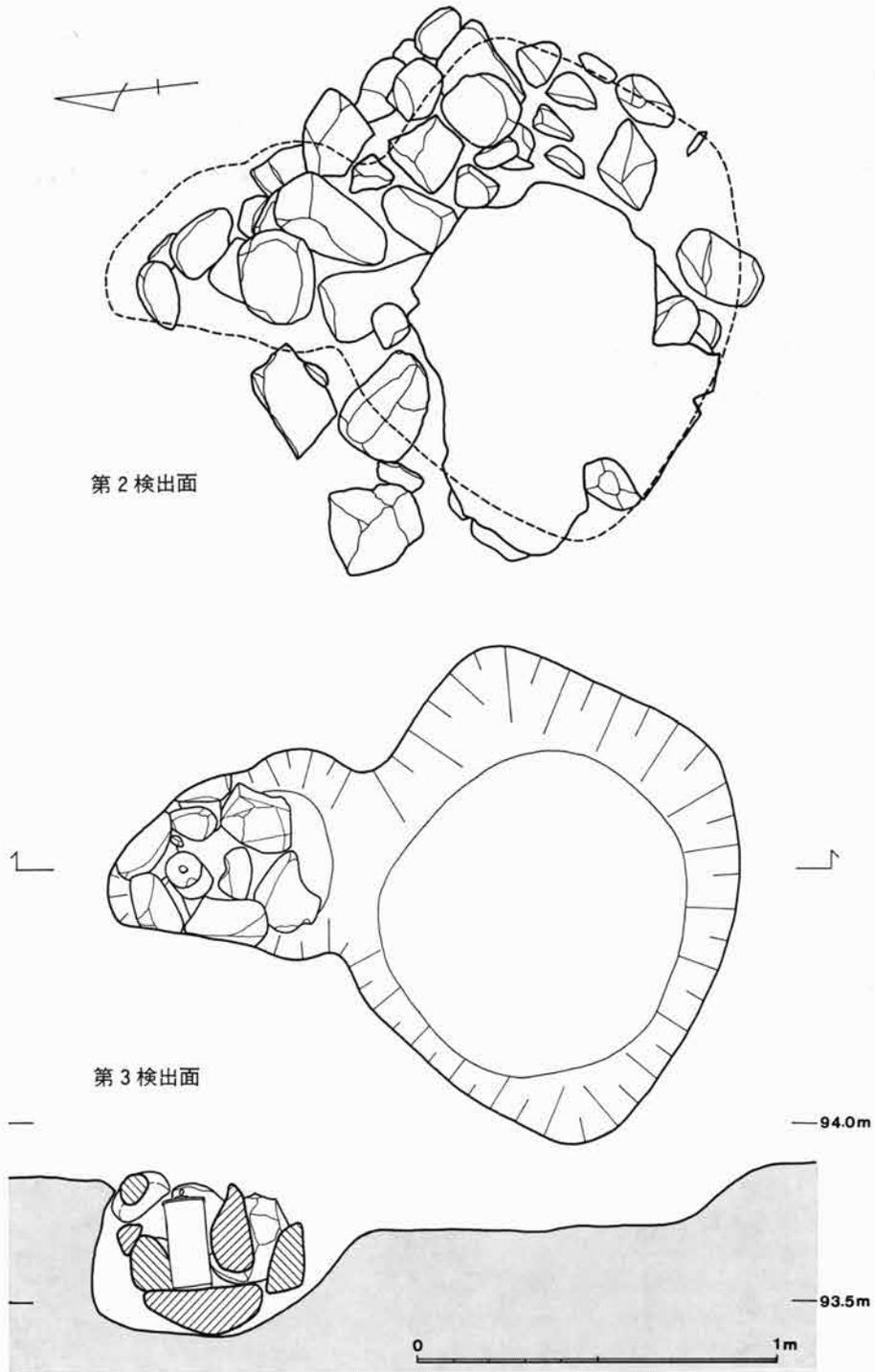
2. 調査概要

(1) 経塚の構造と遺物の出土状況

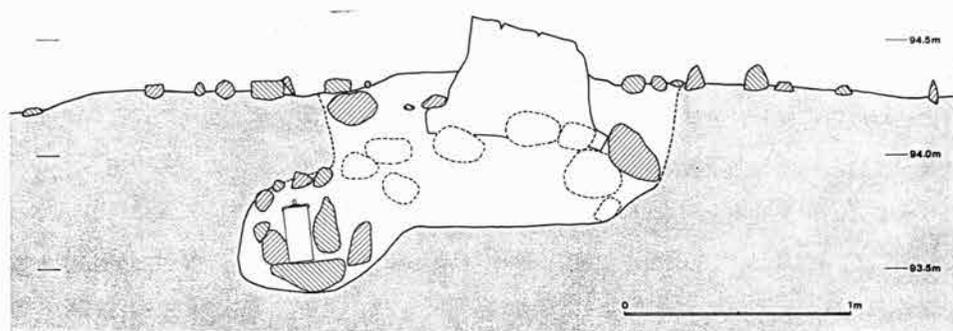
経塚は、中心となる土坑(以下、主土坑と記す)と、小石室から構成される。主土坑内に



第50図 経塚の検出状況(第1検出面平面図)



第51図 第2・3検出面平面図及び断面図



第52図 私市円山経塚の構造模式図

は、前述したように、木の根が複雑に入り込んでいたため、土坑の検出は、第3検出面においてしか行うことができず、内部の構造にも不明な点が残っている。この検出面での主土坑の平面形は、一辺約1mの隅丸型形状を呈し、深さは約0.2mを測る。推定では、地表面から約0.6m掘り下げたものと思われる(第52図)。

小石室は、土坑内から横穴をうがって構築された可能性が強く、横穴は、主土坑の北側の壁から、さらに掘り下げて造られている。石室は、この横穴に、平らな面を持つやや大きな石を据え、四方を石で囲んだものである。石室の開口部である南側には、1石だけを据え、奥壁及び両側壁には、2～3段に、壁に石を張りつけるように積み上げている。第52図における石室上部の石(第2検出面で検出した石)は、いわゆる天井石ではなく、側壁の石がずり落ちたものと考えられるため、天井石は、用いられなかったものと思われる。石室内の石には、大きめの石が使用されているが、積み上げの際に側壁の安定を図るため、握り拳大のやや小さな石も用いられている。経筒は、外容器を伴わず、石室内に直接埋納されていたが、経筒を納めた後、東側に石を2石はめこみ、経筒を安定させていた。石室内からは、経筒のほか、鉄鏃3点が出土した。このうち2点(実測図番号2・3)は石室の北西隅から、残り1点(同4)は、底石の除去後、横穴の奥から出土したものである。4については、石室の構築中に納められたものと考えられる。

経筒の埋納後は、主土坑に大きめの石を詰め込んでいるが、土坑の底から遺物は出土しておらず、土坑内の上層で、土師器蓋・小皿・瓦器碗が破片の状態出土している。

(2) 経塚出土遺物

出土した遺物は、石室内から、経筒1点・鉄鏃3点、主土坑内から、土師器蓋・土師器小皿・瓦器碗、第1検出面(表土内)から、陶器甕・土師器皿・瓦器碗等がある(第53図)。

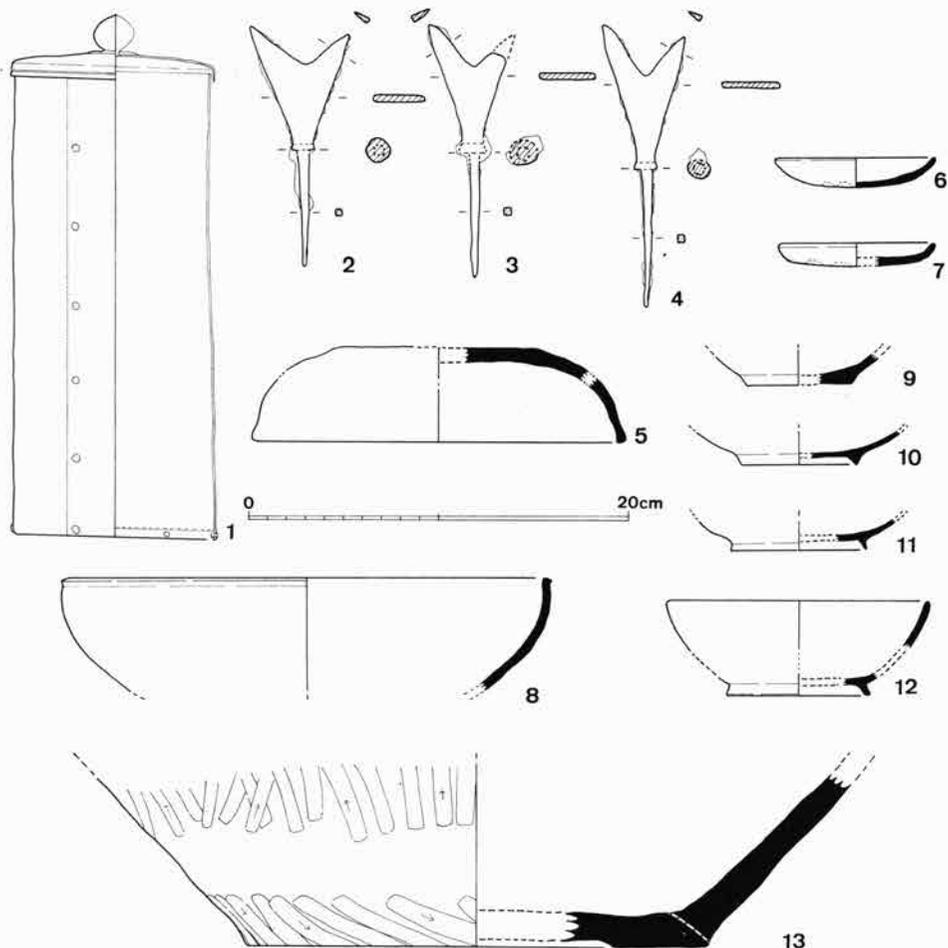
1は、経筒である。経筒は、蓋と筒身から構成される。蓋は、平面形が円形を呈するかぶせ蓋であり、一段の沈線が巡っている。筒身は、厚さ0.7mmの銅の板を筒状に曲げて、鋌で留め、別作りによる上げ底の底板を同じように鋌で側面と固定している。経筒には、

銘は記されていない。蓋の高さ3.6cm・口径10.7cm, 鈕座の直径2.6cm, 筒身の高さ29.5cm・口径10.3cm・底径10.6cm, 筒身に蓋をかぶせた状態での高さ27.6cmを測る。経筒内には経典等と思われる炭化物が遺存していたが, 詳細は不明である。

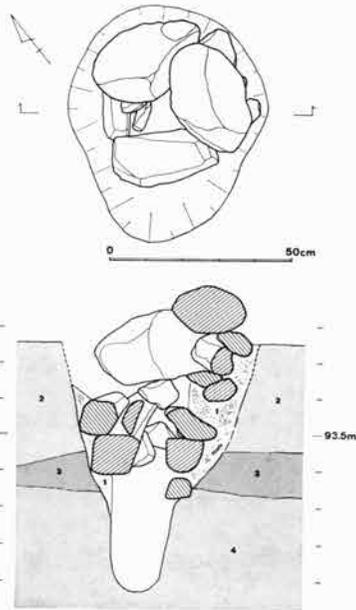
2~4は, いずれも雁股式の鉄鎌である。逆刺は有さないが, 鋭利なものである。

5~8は, 主土坑内上層出土遺物である。5は, 土師器の蓋と考えられ, ていねいなつくりである。口径は, 19.6cmを測る。6・7は, 土師器小皿である。7は, 口径8.3cmを測る。8は, 瓦製の鉢と考えられる。これら主土坑内の遺物には完形のものはなく, また, いずれも摩滅が著しい。

9~13は, 第1検出面で出土した遺物である。9は, 平高台を持つ土師器碗である。内外面とも摩滅が著しく, 調整は不明である。底径5.0cmを測る。10~12は, 瓦器碗である。11・12は, しっかりとした高台を持つ。13は, 丹波焼きと思われる大型の甕である。体部



第53図 出土遺物実測図 (Scale=1/4)



第54図 石組平面・断面図

石組の下部ではその他の小さな石も使用している。最上部では、南北に二つの大きな石を両側に据え、その間は、東側のみ、小さな石を積み、その上にさらに大きな石を、平面形が「コ」の字状になるように積んでいる。この最上部の構造は、石組を西側に開口することを意図したものと思われる。

石組の内部からは、遺物は出土していないが、裏込め土内から瓦器碗片が出土した。

この石組の性格については、現段階では不明と言わざるを得ないが、可能性として、京都府福知山市大道寺経塚で確認されたような竹製の経筒を納めた経塚とも考えられる。

b. ピット 石組の約1m西側で検出した。検出面における平面形は、長径約40cm・短径約30cmの楕円形状を呈し、深さは約45cmを測る。ピット内からは、瓦器碗破片と少量の炭が出土した。

3. 小 結

今回の調査で明らかになった私市円山経塚は、発掘調査を実施した例として、京都府下では3例目にあたる。経塚の発掘例は、比較的少ないことから、貴重な成果を収めたと言えよう。以下、経塚の築造年代および構造と関連遺構についてまとめてみたい。

(1) 築造年代

経塚の築造された年代は、主土坑内出土の土師器小皿、第1検出面出土の瓦器碗等から、

外面にはケズリを施し、内面は横ナデを行っている。

(3) 経塚関連遺構

古墳の墳頂部のなかでも平野部に近い南側の縁辺付近で、石組とピットを検出した。

a. 石組 墳頂部のほぼ中央部に築かれた経塚の約6m南側に位置している。構造は、まず地面を挿鉢状に掘り込み、底の部分をもう一段深く掘り下げる。そして、すり鉢状に掘った底の部分から、中央に空間をもたせ、石を四方に積みながら掘形の上面まで積み上げていく。石の積み方は、やや乱雑であり、裏込めをしながら石を固定し、積み上げたものと考えられる。中央部の空間は、平面で約8cm四方以上を確保している。石は、古墳の葺石を利用したものと考えられるが、

ほぼ13世紀に比定され、鎌倉時代前半頃と考えられる。しかし、これらの遺物が経筒埋納時のものかどうか検討が必要と思われ、さらに築造時期が遡る可能性も残る。また、石組及びピットについても、ほぼ同時期のものと考えられる。

(2) 経塚の構造と関連遺構

前述したように、この経塚の構造は、主土坑と小石室からなる特異な形態と考えられる。これに類似した様相をもつ経塚には、「横口式の石室」と呼称する兵庫県出石町田多地^(注17)経塚や京都府久美浜町権現山^(注18)経塚、同福知山市大道寺^(注19)経塚がある。これらは、いずれも近年の発掘調査により、その特異な形態が明らかとなり、また、但馬・丹後・丹波地方という近接した地域で相次いで発見されたことから、比較的限定された地域での経塚のひとつのあり方として注目されつつある。最近では、近畿地方北部のこれらのような特異な形態をもつ経塚やその他の経塚についても、経塚を単体の遺跡ではなく、他の遺構、特に古墓を含めた複合遺跡として捉えるべきとの見解が出されている。^(注20)

私市円山経塚と前述の経塚の構造には、若干の差異が存在するものの、基本的な構造においては、同一のものと考えて大過なからう。私市円山経塚の場合、主土坑内の構造にやや不明な点が残るものの、第1検出面で出土した大型の甕を蔵骨器と考えることは可能であり、主土坑については、権現山経塚同様に墓と考えるべきかもしれない。すでに、権現山経塚の調査で指摘されているように、経塚が古墓とセットで造営されていることから、^(注21)経塚を古墓に伴う供養具として捉える見解が、現段階では最も妥当な見解と思われる。

一般に、^(注22)経典に追善供養としての性格が濃厚となるのは、13世紀以降とされるが、但馬・丹後・丹波地方におけるこれらの特異な形態を有する経塚についても、経塚に対する共通の思想、すなわち経塚を死者に対する供養として営むという思想、が背景としてすでに存在したのではないかと考えられる。経塚と墓のセットになったこれらの経塚は、その思想が端的に具現化した形態として捉えることが可能であるかもしれない。(鍋田 勇)

(9) カジャヤ谷古墳

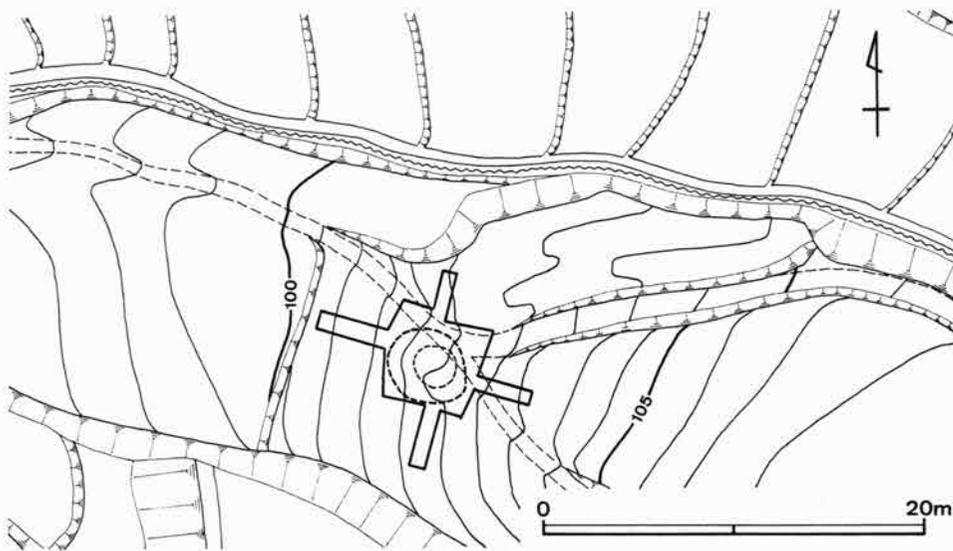
1. 調査の経過

調査着手に伴い、まず周辺地形測量のため、測量用基準杭を設定した。基準杭は、道路基準杭の内の2点(146・146+20)を軸とし、これを取り込む形で、調査地内に任意に多角形に杭を設定し、閉塞した。地形測量と併行して、礫の散布範囲の中心を基準に、四分法により土層観察用の畔を残し、礫の分布範囲をトレンチにより確認した。続いて、トレンチにより礫石を順次はずしていく過程では、顕著な遺構の存在は認められなかったため、地山まで掘り下げたところ、部分的に土色の変化が認められたので、土層断面を記録し、集石のすべてを除去した。さらに地山面について精査を行ったところ、トレンチ南西部において土坑を1基確認した。土坑を掘削する過程で、北西肩部で、柱穴1基を確認したが、埋土中から、土師器細片を検出したにとどまった。なお、調査期間は、1月29日から2月14日までである。

2. 調査の概要

(1) 地形

古墳の立地する丘陵は、高城山(標高300m)の東麓から東へ派生する。標高103m、平地との比高差約9m前後の低位丘陵の先端部に位置する。南北を比高20~50mの丘陵によっ

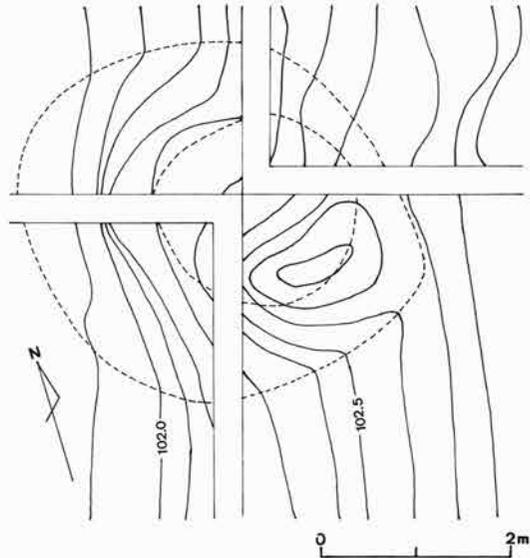


第55図 地形測量図

て囲まれ、眺望は悪く、全体として谷状地形を呈する。

(2) 集石遺構

丘陵端部中央の礫散布部分について、積雪を除去したところ、径3~5cm大の礫石が塚の全面を覆う状況が確認された。集石遺構は、北側の一部を山道により破壊されているものの、長軸2.8m・短軸2m・高さ40cmを測る。円形を呈する集石遺構を形成していた。周辺施設は存在せず、5~50cm大の自然礫を若干の敷き土の上に、無造作に積み上げたものである。



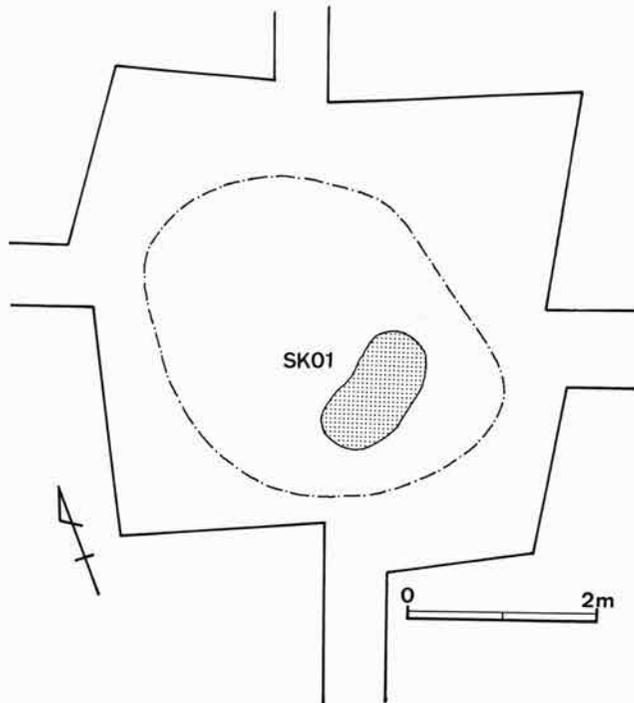
第56図 集石遺構測量図

(3) 検出遺構

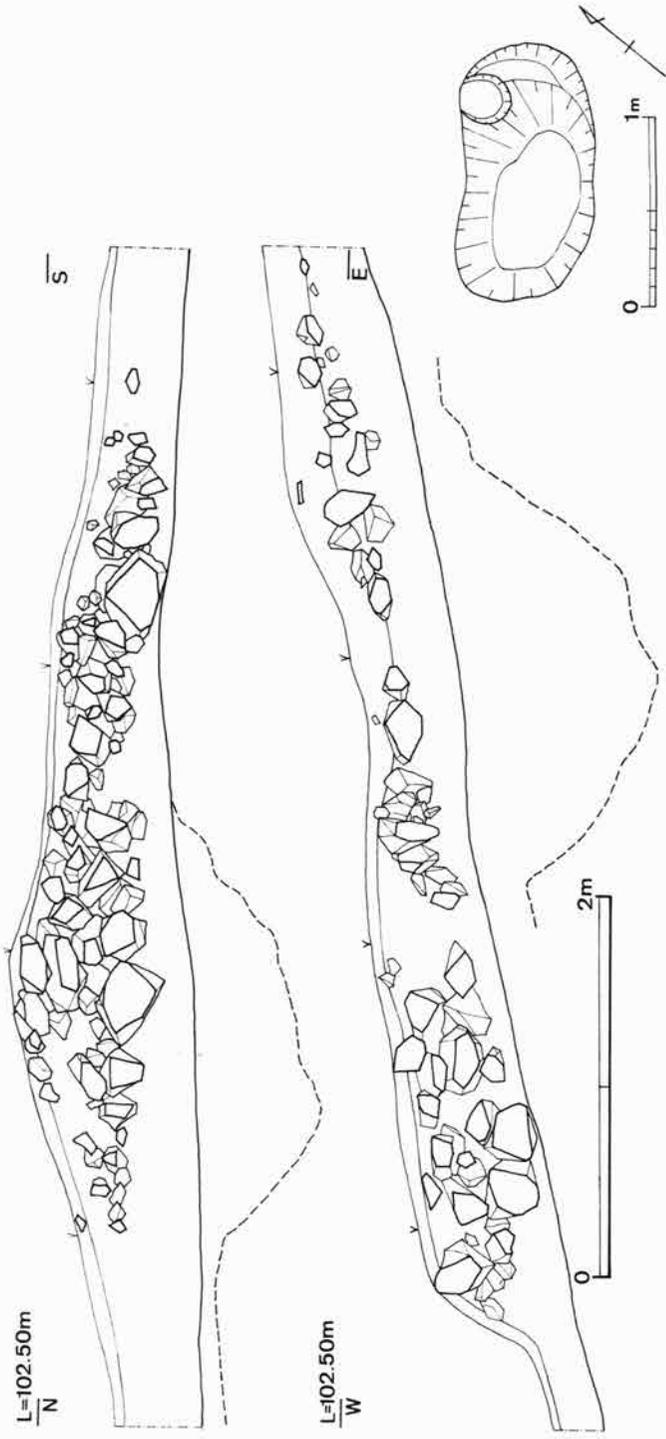
集石遺構を除去した地山面において、土坑1基を検出した。長辺1.3m・短辺0.6m・深さ70cmを測る不整形なものである。土坑掘形の北東隅には、径28cm・深さ33cmを測る柱穴が穿たれている。壁は垂直に近く、底部は平坦である。

(4) 遺物出土状況

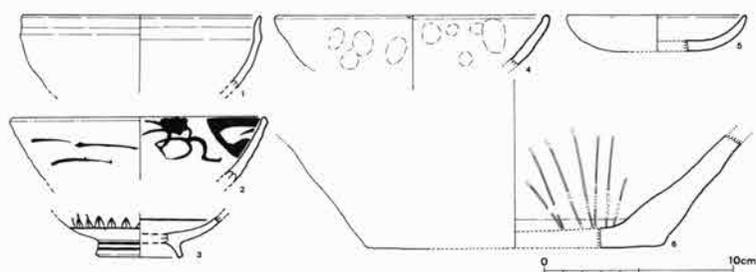
遺物は、除雪作業中に染付口縁片1点(2)が出土したほか、集石をはずす過程でごく少量の陶磁器類細片が出土した。遺物の検出レベルはまちまちで、相互に接合関係はなく、割れ口は



第57図 遺構配置図



第58図 遺構実測図



第59図 出土遺物実測図

磨滅している。以上のことから、これらの遺物は、集石形成時に破片の状態で混入したものと判断した。また、土坑に付設する柱穴埋土中から土師器細片が出土した。

(5) 出土遺物

出土遺物はすべて破片で総数は18点、内訳は、土師器11・陶器3・染付3片である。

図示した実測図のうち、1は、陶器椀口縁片である。底径に対して器高の高い、いわゆる天目茶碗と呼ばれるものである。外湾する体部からほぼ直立し、強く横ナデされた口縁部に続く。端部はややうすく、鋭がり気味である。胎土は精良で淡灰色を呈し、内外面には、厚さ0.2mmの暗茶褐色を呈する鉄釉を施す。

5・6は染付椀である。5はぶ厚く外湾する体部から、外面にわずかに端面を持つ丸味を帯びた口縁部へと続く。外面には水魚らしきものを、内面には植物文を呉須で描く。水挽きクロロ成形である。6の高台はやや高く、若干外方へ張り出している。外面には呉須で2条の圏線を描く。底部はやや厚く、外面には、圏線の上に連続した植物文、内面には圏線1条を呉須で描く。

これらは、一般に「くらわんか茶碗」と呼ばれるタイプのもので、ぶ厚い器壁と、発色の悪い呉須による文様が描かれるのを特徴とする粗製の日常雑器である。18世紀以降普遍化するものとされ、その流通範囲は広い。

3. おわりに

当初、積石を伴う古墓として調査を行ったが、今回の調査では、「墓」と断定し得る資料を得ることができなかった。歴史時代の積石塚は、調査例も少なく、遺物も出土しないのが常である。すでに「塚」としての伝承が途絶えている場合、その構築目的を明らかにすることは、ほとんど不可能に近い。本例もまた、塚名の伝承はおろか、その存在さえも知られていなかった。しかし、塚の下部構造としての土坑の存在は、本来、土坑の存在が主であって、集石遺構は、何らかの標識的機能を果すものであろう。土坑の形状は、不整

形ながらも埋葬可能な空間を有し、なお墳墓として構築された可能性も指摘しておきたい。

最後に、集石遺構の構築年代は特定できないが、その上限は、礫石に混入した遺物から、18世紀後半以降と考えられる。
(細川康晴)

注1 この項は、以下の参考文献によった。

『京都府遺跡地図』第2分冊(京都府教育委員会 1987),『綾部市史』上巻(綾部市史編纂委員会 1976),『日本の古代遺跡』27 京都1(保育社 1986),『丹波の古墳』I(山城考古学研究会 1983),『綾部市文化財調査報告』各集(綾部市教育委員会)等

注2 水山高幸「第二章 自然環境としての地域の性質」(『綾部市史』上巻 地理編) 1976 14~15頁。

注3 中谷雅治「6 小貝遺跡試掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1977)』京都府教育委員会) 1977

注4 平良泰久他『曾我谷遺跡発掘調査概報』園部町教育委員会 1977

注5 堤圭三郎「成山古墳群発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1966)』京都府教育委員会) 1966

注6 川西宏幸「円筒埴輪総論」(『考古学雑誌』64-2) 1977

注7 増田孝彦・竹原一彦『豊富谷丘陵遺跡』(『京都府遺跡調査報告書』第1冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1983

注8 田辺昭三『須恵器大成』平凡社 1981

注9 平良泰久「綾部市以久田野古墳群」(『京都考古』第6号, 京都考古刊行会) 1974
平良泰久「綾部市以久田野丘陵遺跡分布調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1975)』京都府教育委員会) 1975

常盤井智行ほか『丹波の古墳 I —由良川流域の古墳—』山城考古学研究会 1983

注10 藤原敏晃「平山城館跡」(『京都府遺跡調査概報』第24冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987

注11 遺構番号については、昭和61年度からの継続調査であるため、引き続き取り決めた。

注12 出土遺物については、当調査研究センター伊野近富氏の教示を得た。

注13 堅堀14の南側には、堀切から続く大規模な堀が存在しているが、今回は、これを堅堀には含めていない。

注14 今年度の調査では、奈良女子大学助教授村田修三、榎原考古学研究所研究員北垣聡一郎、米原町教育委員会中井 均、兵庫県教育委員会山上雅弘、綾部市教育委員会中村孝行各氏のほか、多くの方々から御教示を得た。記して謝意を表す。

注15 「いわゆる畝状堅堀群について」(『第3回全国城郭研究会セミナー資料』) 1986

注16 畝状堅堀の調査例としては、管見では、広島市三ツ城跡(奥田社紀他『三ツ城跡発掘調査報告』広島市教育委員会 1987)しか、確認できていない。また、堅堀の調査例としては、3条の堅堀を検出した綾部市八津合町所在の上林城(中村孝行他「上林城跡」『綾部市文化財調査報告』綾部市教育委員会 1980)がある。

注17 森内秀造他『田多地古墳群 田多地経塚群 I』(『出石町文化財調査報告書』第2冊 出石町教育委員会) 1985

注18 久保哲正他『権現山古墳発掘調査概報』(『京都府久美浜町文化調査報告』第9集 久美浜町教育委員会) 1983

注19 竹原一彦「大道廃寺跡の調査」(『京都府遺跡調査報告書』第1冊 豊富谷丘陵遺跡 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1983

- 注20 杉原和雄「経塚遺構と古墓—京都府北部を中心として—」（『京都府埋蔵文化財論集』第1集（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）1987
- 注21 同一の見解をとるものであるが、ここでいう主土坑と小石室は、両者一体の経典副葬墳である可能性が強いという御意見を石田茂輔氏より賜った。記して感謝する。
- 注22 『経塚』考古学ライブラリー ニュー・サイエンス社

3. 昭和62年度国道9号バイパス 関係遺跡発掘調査概要

はじめに

国道9号バイパス関係遺跡は、建設省近畿地方建設局が工事を行う国道9号バイパス予定路線帯にある遺跡の総称である。バイパス予定路線は、京都市右京区大枝沓掛町から亀岡市・船井郡八木町・園部町を経て丹波町須知へ至る、全長約32kmに及ぶ。これにかかわる遺跡の発掘調査は、昭和50年から京都府教育委員会及び当調査研究センターが継続的に行っている。その成果として、篠窯跡群・太田遺跡・北金岐遺跡・小金岐古墳群など口丹波地方のみならず、府下の歴史を考える上で欠くことのできない貴重な成果を得たものも数多くあった。

さて、今年度発掘調査を実施したのは千代川遺跡である。千代川遺跡は、亀岡市千代川町に所在する。縄文時代から近世まで長期にわたる遺物が認められ、その北半部には丹波国府跡推定地や桑寺廃寺をも含み込んでおり、府下でも有数の大複合遺跡と言えるものである。本遺跡では、その南半部ですでに調査が終了しており、弥生時代終末期～古墳時代・奈良～平安時代という2時期を中心とする集落跡を検出するなど多大な成果を収めている(第2・5次調査)^(注1)。残る北半部については、国府跡推定地の西辺部上に相当していることから、まず試掘調査を行い、その成果を踏まえた上で計画的に調査を進めることとなった。試掘調査は昭和59年度に実施し、調査対象地のほぼ全域で弥生時代～中世にわたる多くの遺構・遺物を検出した。特に奈良～平安時代、すなわち国府が当地に置かれたと考えられている時期の遺物が非常に多く出土し、中には緑釉陶器・墨書土器などが含まれていたため、国府跡との関連が注目された。そこで、昭和60年度より対象地を年度毎に区切って面的な調査を進めることとなった。今年度はその3年目に相当する。

現地調査は、建設省近畿地方建設局京都国道工事事務所の依頼を受けて、約6,200m²を対象として昭和62年4月19日から翌63年2月21日まで実施した。調査を担当したのは、調査第2課調査第2係長水谷寿克、同調査員森下 衛・鶴島三壽である。調査に際しては、亀岡市教育委員会・京都府教育委員会・京都府南丹教育局・口丹波史談会等の諸機関から多大の協力を得た。また、地元有志の方々や学生諸氏から作業員・整理員・調査補助員として参加協力があつた^(注2)。記して謝意を表したい。当発掘調査にかかわる経費は、すべて建設省近畿地方建設局が負担した。なお、本概要の執筆は鶴島が行った。

千代川遺跡第13次発掘調査概要

1. 遺跡の概要

千代川遺跡は、亀岡盆地の北西部にそびえる行者山(標高471m)の北東麓に形成された扇状地上に立地する。これまでに12次にわたる発掘調査が実施されているが、その成果から以下のことが確認されている。

①遺跡の範囲は、行者山の北東麓に形成された扇状地のほぼ全域(東西約1.2km, 南北約1.8km)に及んでいる。^(注3)

②検出された遺構・遺物から、縄文時代後期から中世(鎌倉時代)にわたる長期の集落遺跡と考えられている。

③遺跡の北半部には、丹波国府跡推定地や桑寺廃寺を含みこんでおり、府下でも有数の大複合遺跡といえる。

特に第3の点に関して言えば、丹波国府跡推定地として現在提唱されているいくつかの候補地の中では、本遺跡が最も可能性の高いところと考えられている。^(注4)そして、これまでの調査成果から、否定するよりも肯定する資料の方が多いと言える。

今回調査を実施したのは、先に述べたように千代川遺跡の中でも国府推定地の西辺部上に相当する部分である。南は昨年度の第12次調査地の北側に接し、北は拝田丘陵部まで総延長約550mにわたる。

2. 調査経過

調査は、対象地内に16か所の調査区を設定し掘削を行った。まず、重機によって表土を除去する作業から開始し、その後人力によってそれ以下の土層の掘削を進めた。

調査地内の基本的な層序は、すでに周辺部で過去に実施した第9・10・12次調査などの成果から以下のように把握している。

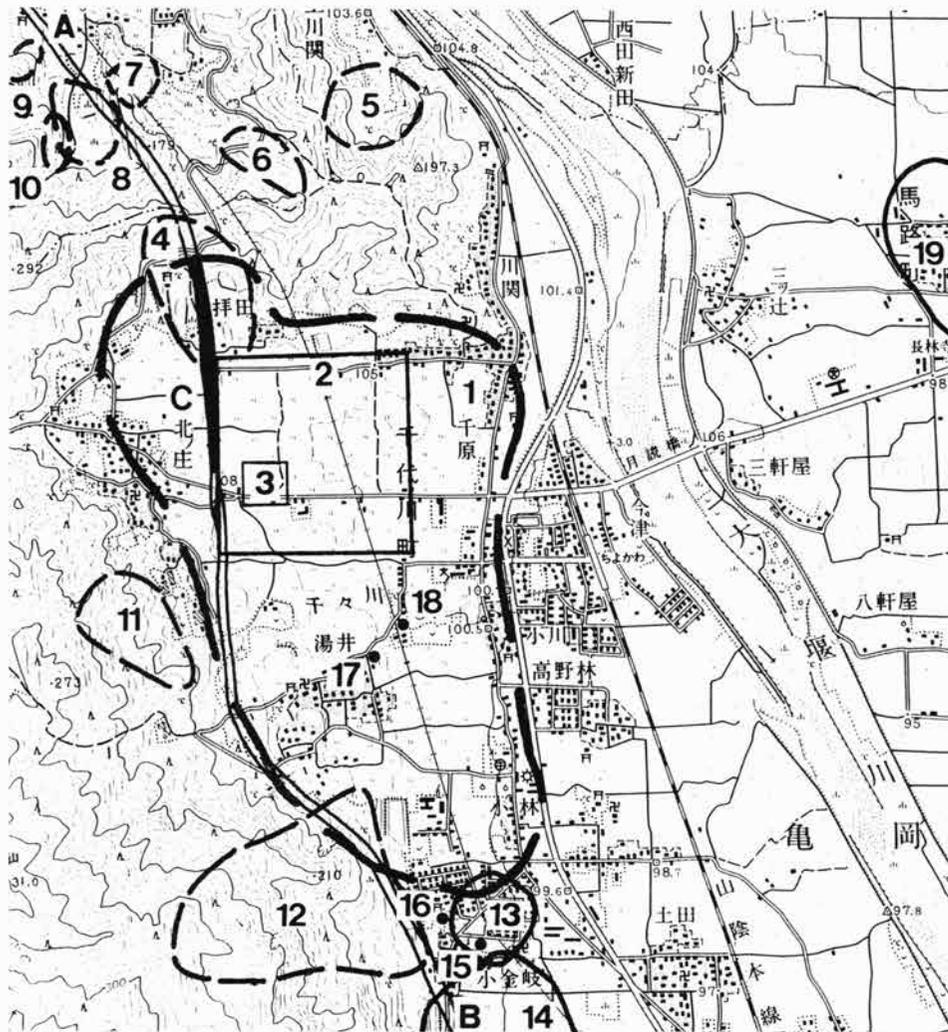
- | | |
|--------------------|---------------------|
| 第1層 耕作土 | 第4層 黒褐色土(弥生時代～平安時代の |
| 第2層 淡灰色砂質土(近世の耕作土) | 遺物包含層) |
| 第3層 灰褐色土(中世の遺物包含層) | 第5層 黄灰色粘土ないし砂質土(地山) |

しかし、現在は水田化し比較的平坦な地形を呈する調査地も旧地形はかなり起伏に富んでいたようである。調査区によっては、後世の削平によって表土を除去するとすぐ地山があらわれるところもあり、上記の土層がいずれの調査区でも一様に認めうるというわけではなかった。調査区の中でも、12・14・15区の微高地から建物跡を検出する一方、16・17

・18区にかけてかなりの幅をもつ自然流路跡を確認した。この自然流路跡では、黒褐色土の下に古墳時代前期の遺物を包含する黒灰色粘質土も認められた。

以下、各調査区ごとに調査内容を簡単に記しておく。

12区 耕作土の除去後、灰褐色土を掘削し青灰色砂質土の上面で精査を行ったところ、中・近世の素掘り溝を多数検出した。また、これらと重複した状態で中世(12世紀末～13世紀初頭)の掘立柱建物跡(SB12001・12002)を検出した。



第60図 調査地位置図(1/25,000)

- 1:千代川遺跡 2:丹波国府跡推定地 3:桑寺廃寺 4:拝田古墳群 5:上川関古墳群
 6:大法寺古墳群 7:内山古墳群 8:小谷古墳群 9:堂山窯跡群 11:北ノ庄古墳群
 12:小金岐古墳群 13:馬場ヶ崎遺跡 14:北金岐遺跡 15・16:馬場ヶ崎1・2号墳
 17・18:丸塚・丸塚西古墳 19:馬路遺跡 A～B:バイパス予定路線 C:今回の調査地

14区 耕作土の除去後、北東部ではすぐに地山を認めた。この北東部から南西部にむかっては、緩やかに傾斜する旧地形を呈していた。この部分に堆積している黒褐色土には、奈良時代（8世紀中葉）の遺物が多量に包含されていた。なお、この黒褐色土については、土層中に遺構面の存在する可能性が高いと考えられたため、^(注5) 数cmずつ掘り下げたところ、やはり一辺50～60cmを測る隅丸方形の柱穴からなる掘立柱建物跡(SB14001・14002)を検出した。

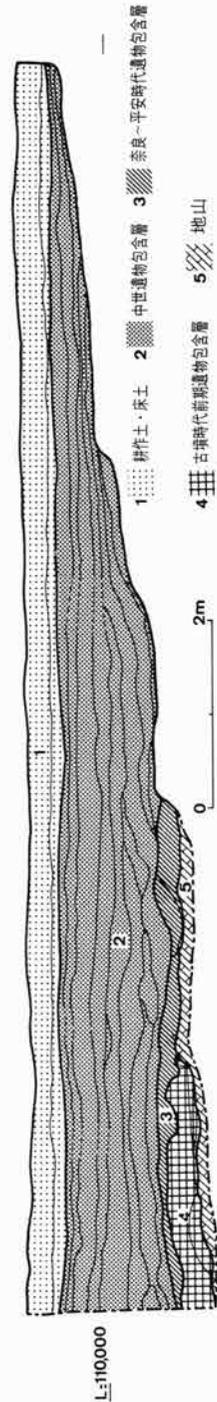
15区 耕作土を除去した後、まず暗灰褐色土上面で精査を行ったところ、多数の中・近世の素掘り溝を検出した。続いて、黒褐色土上面まで掘削し、精査を行った結果、調査区の南東部を中心に、中世(12世紀末～13世紀初)の掘立柱建物跡5棟(SB15001・15002・15003・15007・15008)を検出した。さらに、地山である黄灰色粘土まで掘削したところ、調査区南西部を中心に奈良時代の掘立柱建物跡(SB15005・15006)を、北西部では古墳時代前期の溝(SD15040)の一部を検出した。

16区 耕作土・淡灰色砂質土を除去すると、南半部ではすぐに地山を認めた。近世頃の著しい削平により、何ら遺構を確認することはできなかった。なお、北半部では自然流路跡(SR16001)を検出した。現地表面から、流路の底まで約2mの深さをはかるが、地山である砂礫層の上に堆積する黒灰色粘質土中からは、整理箱にして約30箱ほどの古式土師器および木器が出土した。

17区 掘削を進めていくと、16区で検出した自然流路跡の北半部を確認した。自然流路跡は、16区と同様の土層堆積状況が認められた。

18区 ここは、微高地を呈していることから、耕作土の除去後、うすく堆積する灰色砂質土及び灰褐色土の掘削を進めると、すぐに砂礫からなる地山を認めた。一部で、一辺約30cmを測る隅丸方形の柱穴などを確認したが、周囲はかなり削平を受けているようで、建物跡としてのまともには確認できなかった。

19区 耕作土の下には、黒褐色土を認めた。この土層中には、



第61図 自然流路跡 (SR16001) 土層断面図 (1/80)

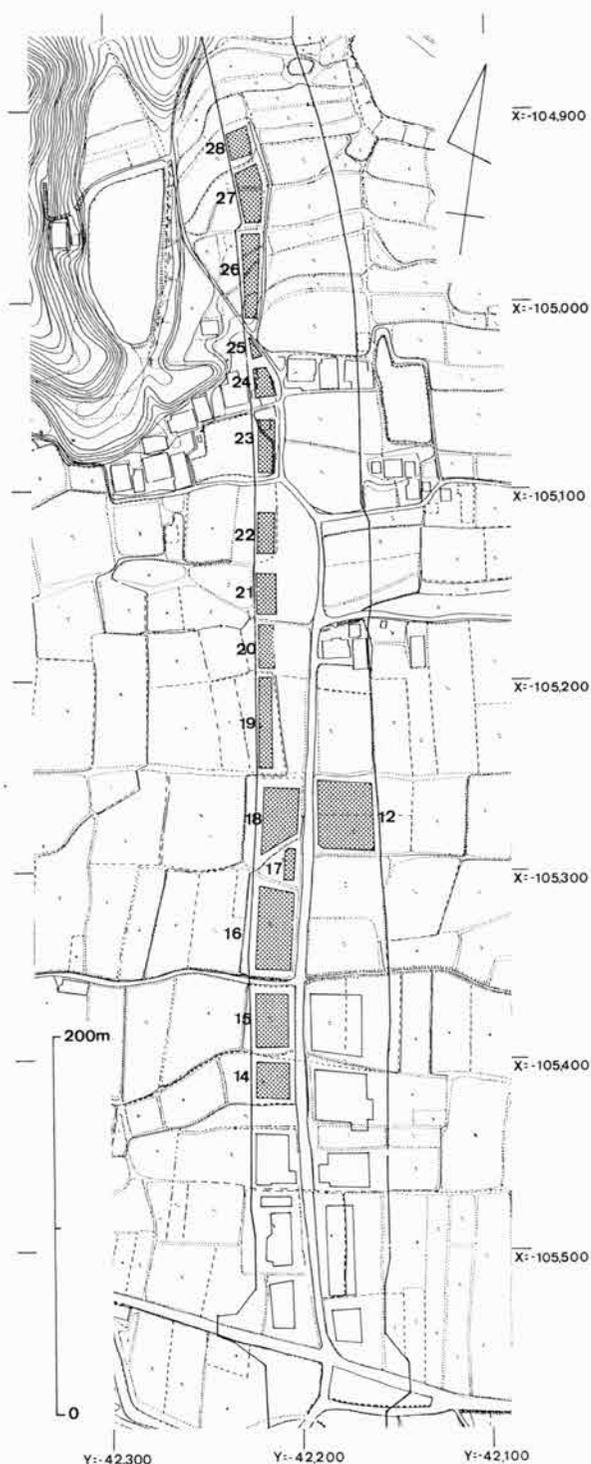
弥生時代後期の遺物を若干包含していた。調査区中央部のやや凹地状部に、この黒褐色土の堆積の厚い部分を認められたが、それ以外、顕著な遺構は認められなかった。

20区 耕作土の除去後、淡灰色砂質土・灰褐色土などの堆積を認めこれを掘り下げたが、顕著な遺構は認められなかった。

21区 耕作土を除去した後、淡灰色土を掘り下げたところ、すぐに地山面があらわれた。調査区北端では東西にのびる大溝(SD21001)の一部を検出した。これは、後述するように推定国府説による国府北限の溝(堀状施設)の西への延長上に相当する部分にある。

22区 ここは微高地を呈し、ゆるやかに西から東へ傾斜していく旧地形を確認した。地山である黄灰色粘土の上面で精査を行うと、奈良時代の井戸跡(SE21001)を検出した。

23区 22区と同様、西から東へ傾斜していく旧地形を呈していた。耕作土及び近世段階の盛土と見られる黄色砂質



第62図 調査区配置図(1/4,000)

土を除去すると、地形に沿って堆積する灰褐色土(中世遺物包含層)、黒褐色粘質土(奈良～平安時代遺物包含層)の堆積を認めた。近世段階の井戸跡や土坑のほかには、溝を一条(SD23010)認めたのみである。

24区 ここは、拜田16号墳に隣接する調査区のため、16号墳に関連する遺構・遺物の存在に期待がもたれた。表土を除去すると、黄褐色土および中世の遺物を包含する灰褐色土を認めた。さらに、その下層の暗灰色砂質土上面で精査を行ったところ、円弧を描くように南北にのびる溝を検出した。しかし、位置的にみて16号墳との関連は考え難い。

25区 24区と同様、拜田16号墳に隣接する地区である。耕作土および床土と思われる暗灰色砂質土を除去すると、すぐに地山である青灰色砂質土を認めた。遺物はほとんど出土しなかった。

26区 ここから、拜田丘陵へと続く斜面地形の調査区となる。耕作土を除去すると、20～40cmほどの灰褐色土(中世遺物包含層)の堆積がみられた。さらに掘り下げていくと、奈良～平安時代の遺物を包含する黒褐色土が80～100cmほど堆積した後、青灰色砂質土の地山となることを確認した。灰褐色土・黒褐色土からは、非常に多くの遺物が出土した。

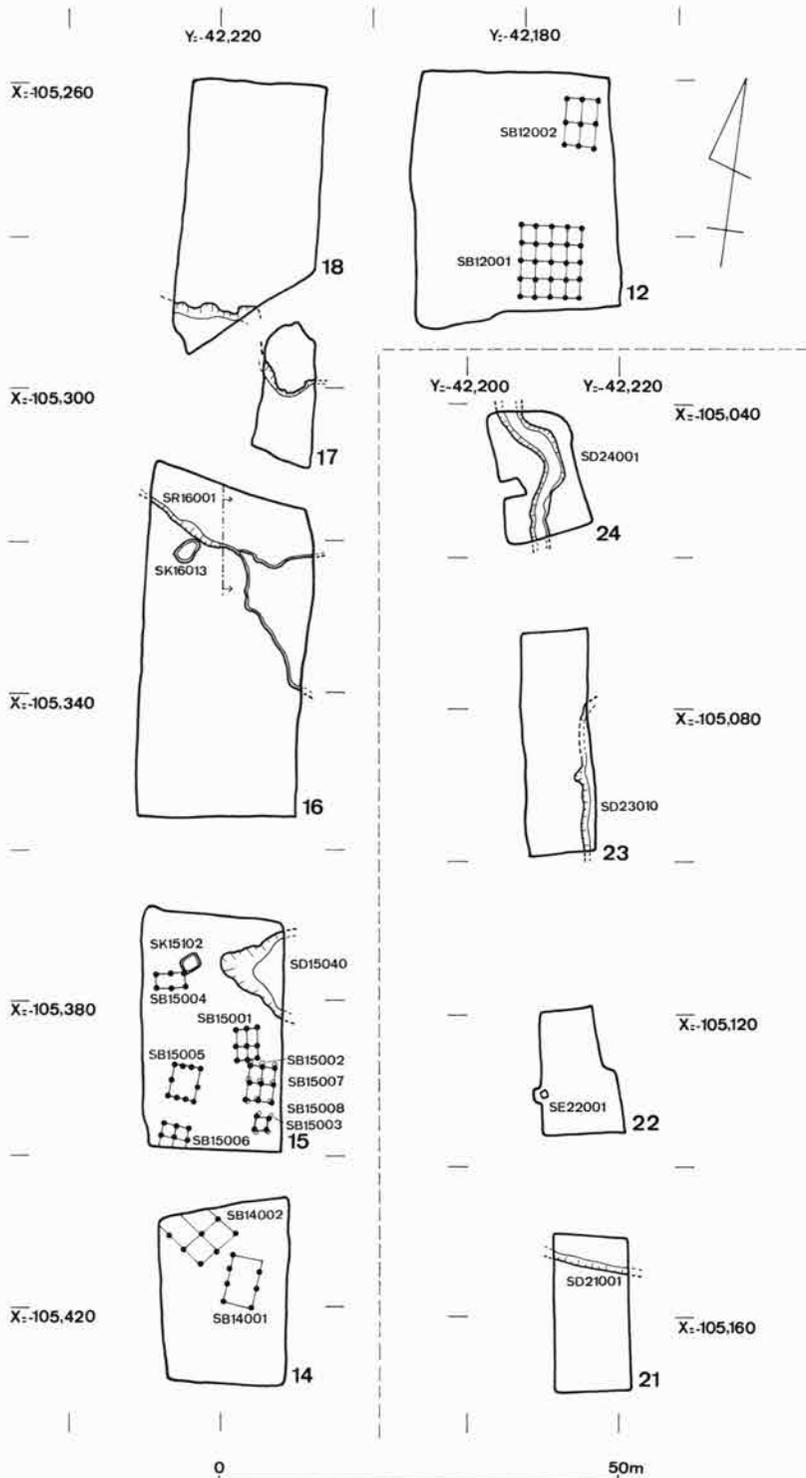
27区 26区と同様の土層の堆積状況が確認された。本調査区も多くの遺物が出土した。

28区 耕作土および床土と思われる黄灰色土を除去すると、淡灰色土を認めた。さらに掘削を進め、暗灰褐色土上面で精査すると中・近世の素掘り溝を検出した。そのほかに顕著な遺構は認められなかった。

3. 検出遺構

今回の調査で検出した遺構には、掘立柱建物跡・溝・井戸・土坑などがある。時期的には、古墳時代から中世(鎌倉時代)にわたるものである。以下、古墳時代・奈良～平安時代・中世(鎌倉時代)の時代順に主なものを概述する。なお、各遺構の呼称番号は、遺構の略号と5ケタの数字で表わした。上2ケタは各調査区の番号とし、下3ケタが遺構の番号を示すものとする。

古墳時代 この時期の遺構と考えられるものには、土坑(SK15102・SK16013)、自然流路跡(SR16001)、溝(SD15040)がある。SD15040は、今年の第12次調査の7区で検出した溝(SD12121)に続くものと思われる。堆積土中から、布留式併行期の古式土師器が出土した。また、磨製石鏃(第68図7)も出土している。断面は浅いU字形をなす。SK15102は、SD15040の西方で検出した。長辺約2.5m・短辺約2mの隅丸方形を呈する。遺存状況は極めて悪かったが、埋土中から焼土や炭に混じって、SD15040と同様な布留式併行期の土器片が出土している。



第63図 主要遺構配置図

SR16001は、16・17・18区にわたって検出した。堆積土は大まかに4層に分かれ、その最下層にあたる黒灰色粘質土層から、多量の古式土師器および木製品が出土した。このSR16001の検出面での幅は約26m・深さ約2mを測る。なお、後述するが、上層の3層からは、奈良～中世、特に中世の遺物が多量に出土している。

SR16001に隣接して、SK16013を検出した。長径約3.7m・短径約2.2mの楕円形をなし、一部流路に切られた状況を呈している。出土遺物として、6世紀前半頃のものと思われる須恵器杯蓋や甔の把手などが確認されている。

以上、15・16区を中心に、多量の古式土師器が西方から流入した状況で出土している。このことは、調査地の西方のそれほど遠くないところに当時の集落跡が存在することを示していると考えられる。

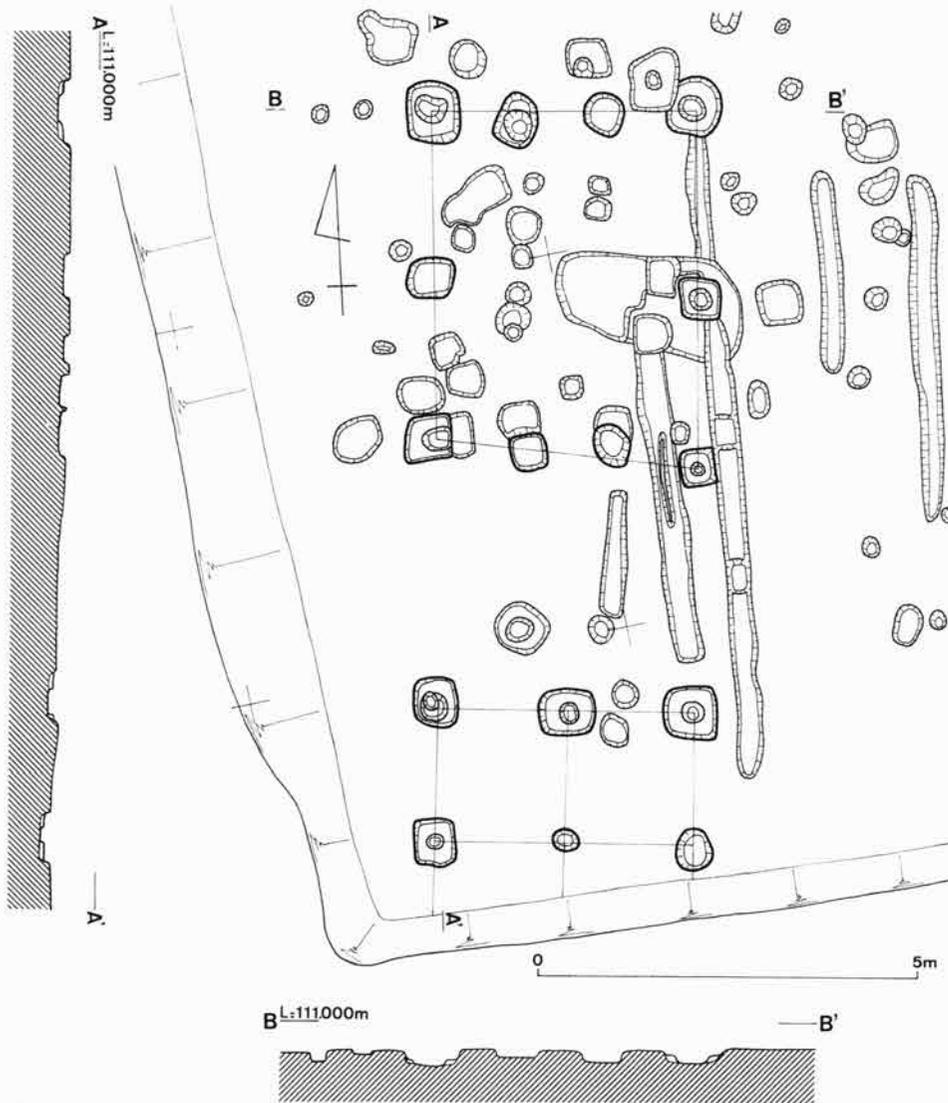
奈良～平安時代 この時期の遺構には、14・15区で確認した、掘立柱建物跡3棟(SB14001・15005・15006)、井戸跡1基(SE22001)、溝2条(SD21001・23010)などがある。

掘立柱建物跡3棟は、いずれもほぼ同一方向を向き、時期的には8世紀中葉～後半のものと考えられる。SB14001は、東西1間(4.3m)×南北3間(6.8m)で、柱穴は隅丸方形を呈し一辺50～60cm、深さ10cm前後を測る。南北の柱間は、西側で2.4m・2.1m・2.4mであった。SB15005は、東西3間(3.5m)×南北2間(4.8m)で、柱穴は隅丸方形を呈し、一辺50～60cm、深さ10～15cmを測る。南北の柱間は、西側で2.7m・2.1mであった。SB15006は、東西2間(3.5m)×南北1間(1.7m)以上の総柱による建物である。柱穴は隅丸方形を呈し、一辺60cm前後、深さ10～15cmを測る。東西の柱間は1.8m・1.7mである。SB15005・15006については、その形態により倉庫跡と推定される。本建物群は、周囲に広がる微高地上に立地しており、第12次調査でも同一の微高地上から建物群を検出している。おそらく、その掘立柱建物跡群と一まとまりととらえることができていると考えている。

井戸跡(SE22001)は、一辺約1mの方形の掘形を有し、その内側に一辺約60cmの方形の井戸を構築する小規模なものである。埋土の黒灰色粘質土中からは、一括遺物として墨書土器5点を含む8点の土器(須恵器7点・土師器1点)が出土した。

SD21001は、幅4m以上、深さ約60cmを測り、21区を東西に横切るものである。埋土は大まかに2層に分かれ、上層からは13世紀後半の瓦器片、下層からは奈良～平安時代の須恵器片が出土している。国府推定域の範囲外で検出したが、位置的に見て従来から提唱されている国府推定域の北限を示す堀状の落ち込み(水田などが周囲のものより約1～2m低くなっている)^(注6)の延長上にあたっている。そのため、これまでの国府説にあてはめると少し西へ突出することとなるが、国府との関連で非常に注目される遺構といえる。

SD23010は、23区の末端を北から南へ流れる溝である。埋土の黒褐色粘質土中から、奈



第64図 SB15005・15006 実測図 (1/100)

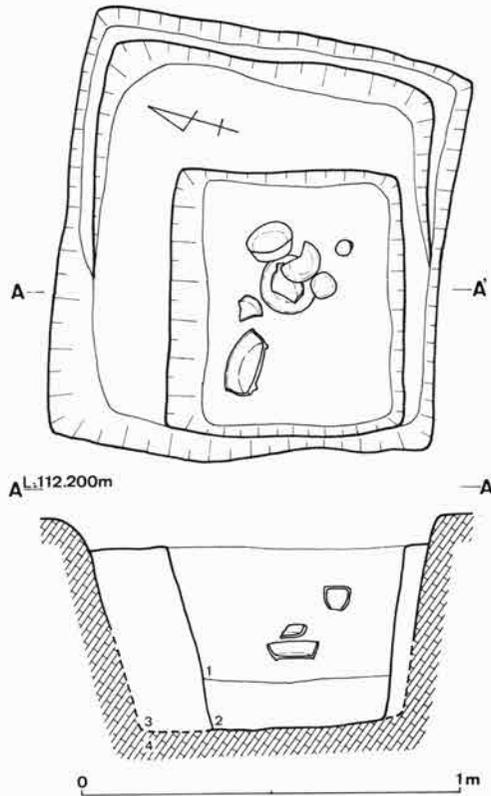
良～平安時代の須恵器，緑釉陶器などが多量に出土した。

このほか，明らかにこの時期のものと思われる柱穴を12・14・18区などから検出している。しかし，後世の削平が著しく，建物跡としてのまとまりを把握するまでには至らなかった。また，国府推定域から大きくはずれる拜田丘陵裾部でもこの時期の遺物が数多く出土している。特に，26・27区の黒褐色土から出土し，27区から判読はできないが墨書土器も確認している。今後調査が進めば，この拜田丘陵裾部にも遺構が広がるものと思われる。

また、明確な時代等は不明であるが、SB14002・15004はその主軸の方向などから、奈良時代をさかのぼる可能性のある掘立柱建物跡である。

中世(鎌倉時代) この時期の顕著な遺構として、掘立柱建物跡(SB12001・12002・15001・15002・15003・15007・15008)がある。

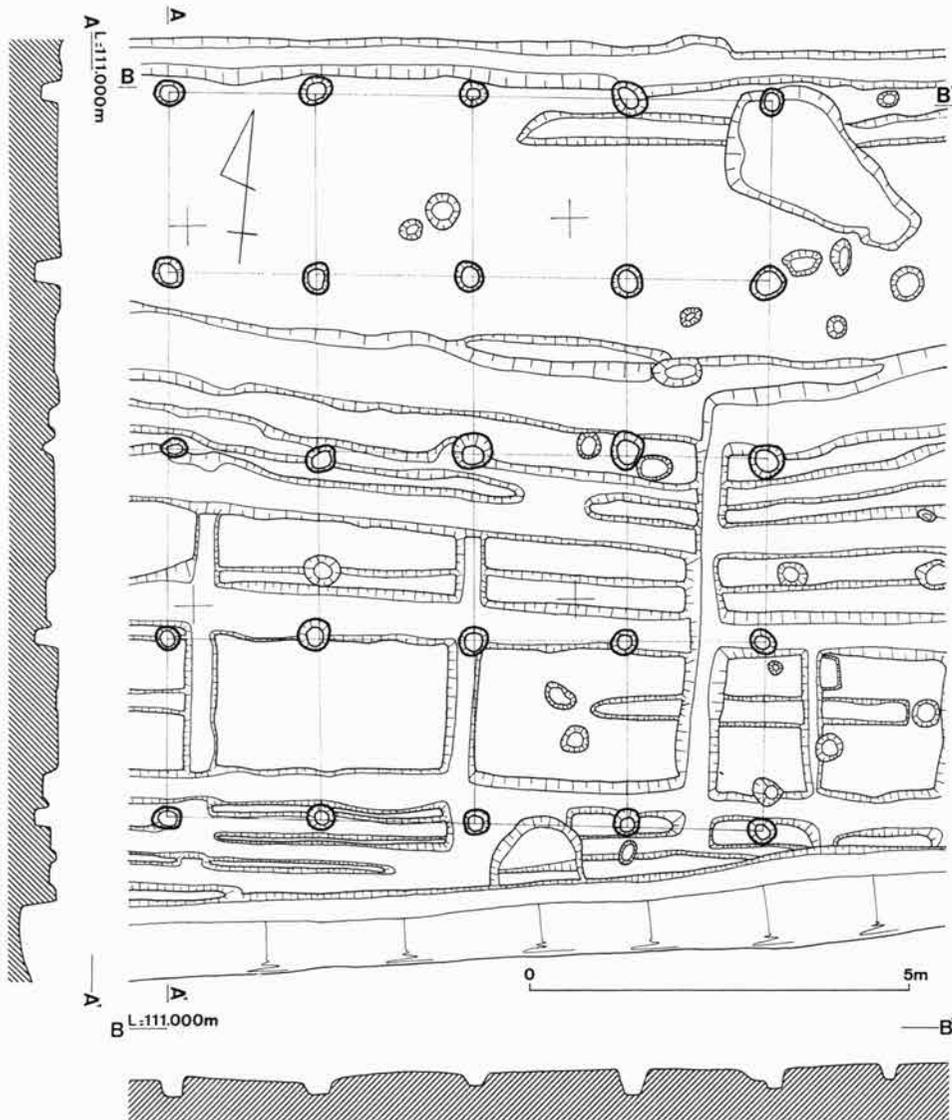
SB12001は、今回検出した中では最も規模が大きい。東西4間(8m)×南北4間(9.6m)の総柱による建物である。柱穴は円形で直径約30~40cm、深さは中・近世の素掘り溝によって上部削平されているところもあるが、20cm前後を測る。東西の柱間は、北側で2m・2.1m・2.1m・1.8mを測り、南北の柱間は、西側で2.4m・2.3m・2.5m・2.4mを測る。本建物は、柱穴に埋納されていた瓦器から12世紀末~13世紀前半に



第65図 SE21001 実測図 (1/20)

1. 黒灰色粘質土
2. 淡黄灰色砂
3. 黒褐色土
4. 黄灰色粘土

構築されたと考えられる。SB12002は、東西2間(3.9m)×南北2間(6.1m)の総柱の建物跡である。柱穴は円形で直径約30~40cm・深さ20cm前後を測る。東西の柱間は、北側で1.9m・2m、南北の柱間は3.1m・3mである。SB15001は東西2間(3.9m)×南北2間(4.1m)の総柱の建物跡である。柱穴は円形で直径約30cm・深さ10~20cmを測る。東西の柱間は、北側で1.4m・1.5m、南北の柱間は西側で2.4m・1.7mである。SB15002は、東西2間(3.4m)×南北2間(4.7m)の総柱による建物である。柱穴は円形で直径約30cm・深さ10~15cmを測る。東西の柱間は、1.7m・1.7m、南北の柱間は2.3m・2.4mである。対応する各柱間の長さがほぼ等しくなっている。SB15007は、東西2間(3.6m)×南北2間(4.3m)の総柱の建物跡である。柱穴は円形で直径約30cm・深さ10~20cmを測る。東西の柱間は、1.8m・1.8m、南北の柱間は2.5m・2.8mである。東西南北それぞれ対応する柱間がすべて同一の数値を示す建物である。SB15002と15007は、切り合い関係から、SB15007は15002より新しいことがわかる。SB15003は、東西1間(1.7m)×南北1間(1.5



第66図 SB12001 実測図 (1/100)

m)を確認した。調査区南東隅で確認したため、東ないしは南方向へさらにのびる可能性が高い。柱穴は円形で、直径約30cm・深さ約20cmを測る。SB15008は、15003と切り合い関係をもつ掘立柱建物跡である。切り合い関係から、SB15008は15003よりも新しいことがわかる。SB15003と同様に、東西1間(1.7m)×南北1間(1.9m)を確認しえたにとどまる。柱穴は円形で、直径約30cm・深さ約20cmを測る。

また、古式土師器が多量に出土した自然流路跡(SR16001)からも、たくさん中世の遺物が出土した。本流路跡の堆積土は、第61図に示したように、大まかに3層に分かれる。最

下層に古式土師器を多量に含む黒灰色粘質土、中層に奈良～平安時代の遺物を含む黒褐色粘質土、上層に中世の遺物を含む灰褐色土である。中世の遺物を包含する暗灰褐色土(砂を含む)の最下部の段階で打ち込まれた杭列(護岸用か)を確認する一方、同様に最下部から木簡が出土している。当初、出土層位などからみて中世木簡と判断したが、赤外線カメラで判読した結果、「承和七年三月廿五日」の紀年をもつ平安時代前期のものであることが確認された。中世遺物包含層は、約1.2mと非常に厚く堆積するが、この中世遺物包含層である灰褐色土の堆積により本流路が埋没している。部分的にやや凹地として残り、そこに近世段階の層を認めるところもあるが、ほぼこの流路が姿を消したのが13世紀末～14世紀初頭と考えられる。本流路は先述のように非常に規模の大きなもので、現在、南方約300mを流れる千々川の旧流路の可能性がきわめて高いと考えられる。^(注7)

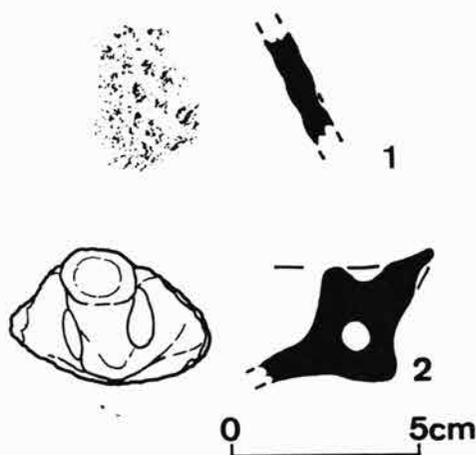
4. 出土遺物

今回の発掘調査で出土した遺物は、整理箱約150箱に及んだ。内容としては、先にみた遺構と同様に、古墳時代前期・奈良～平安時代・中世(鎌倉時代)に属するものがそのほとんどを占め、他に縄文土器片、弥生土器片、近世陶磁器などを若干認めうるといったものであった。以下、主なものを図示し、その概要を簡単に報告する。

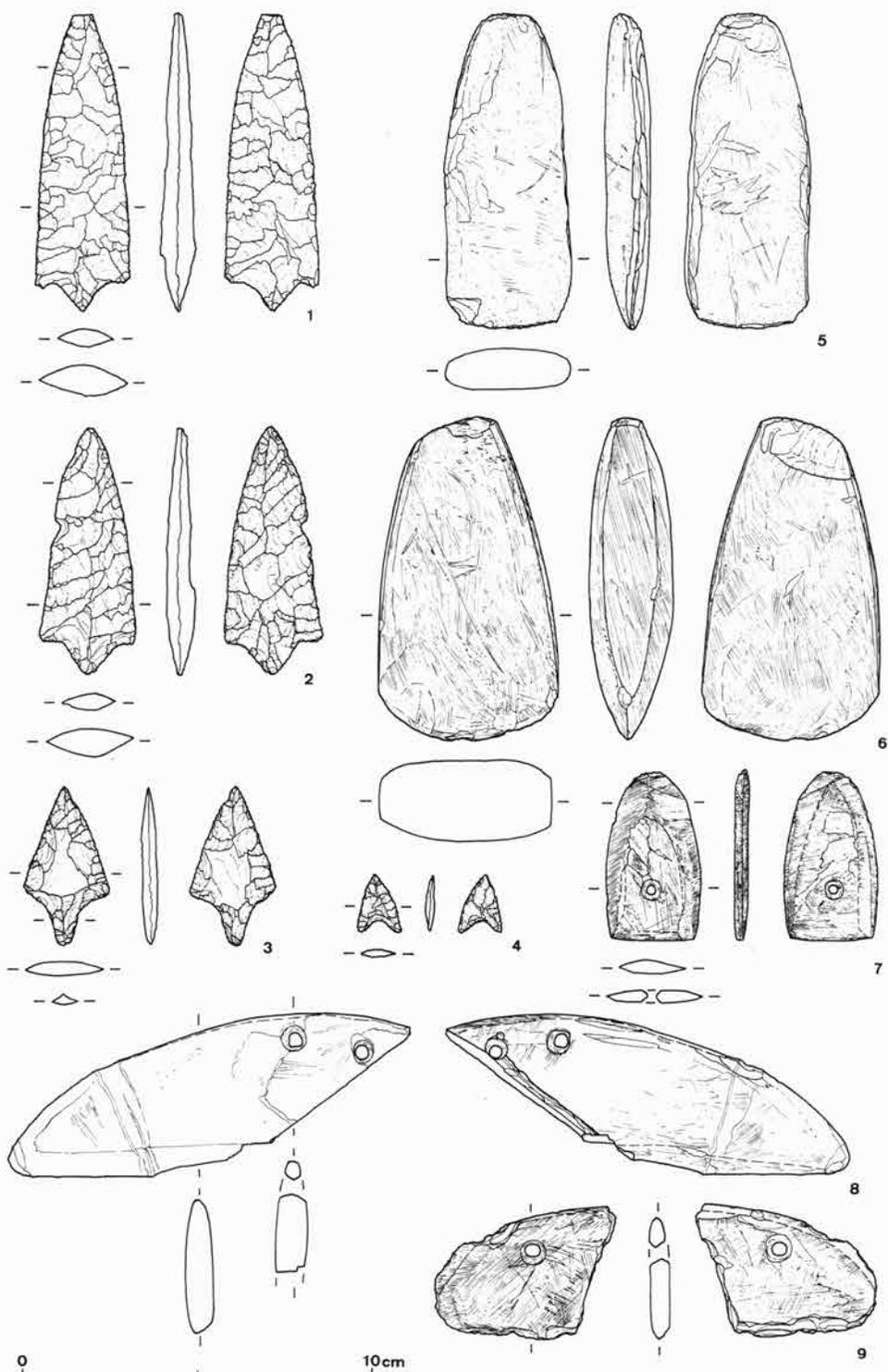
縄文時代(第67図, 第68図1・2・4)

1は押型文土器の破片である。長径8mm・短径4mmほどを測る楕円文が器壁外面に施される。土器片がやや磨滅していることにもよるが、隆起は低く、配列もはっきりしない。器壁は9mmで、黄褐色の色調を呈している。胎土には、石英・長石・金雲母などが混入している。2は鉢の把手と思われる。胎土中には砂粒が多く、2～5mm大のものを含む。色調は暗褐色を呈する。その形態から、縄文時代後期頃と考えられる。

また、有舌尖頭器(第68図1・2)、打製石鏃(第68図4)は、いずれも中世の遺物を包含する灰褐色土中から出土したものであり、いずれも明確に帰属時期を示しうるものではなかった。1は、長さ8.5cm・幅2.7cm・厚さ1.0cm・重さ19.25gを測る。2は、長さ7.1cm・幅2.7cm・厚さ0.8cm・重さ13.5gを測る。いずれも、石材としてサヌ



第67図 出土遺物実測図(縄文時代)(1/2)
1:15区淡灰色砂質土中 2:17区灰褐色土中



第68図 出土遺物実測図(石器)(1/2)

カイトを用い、両面とも入念に調整加工が施されている。4は、長さ1.6cm・幅1.2cm・厚さ0.25cm・重さ0.4gを測る。凹基無茎鏃で、周辺よりていねいな調整加工が施される。石材は赤褐色を呈するチャートを用いる。

弥生時代(第68図3・5・6・8・9)

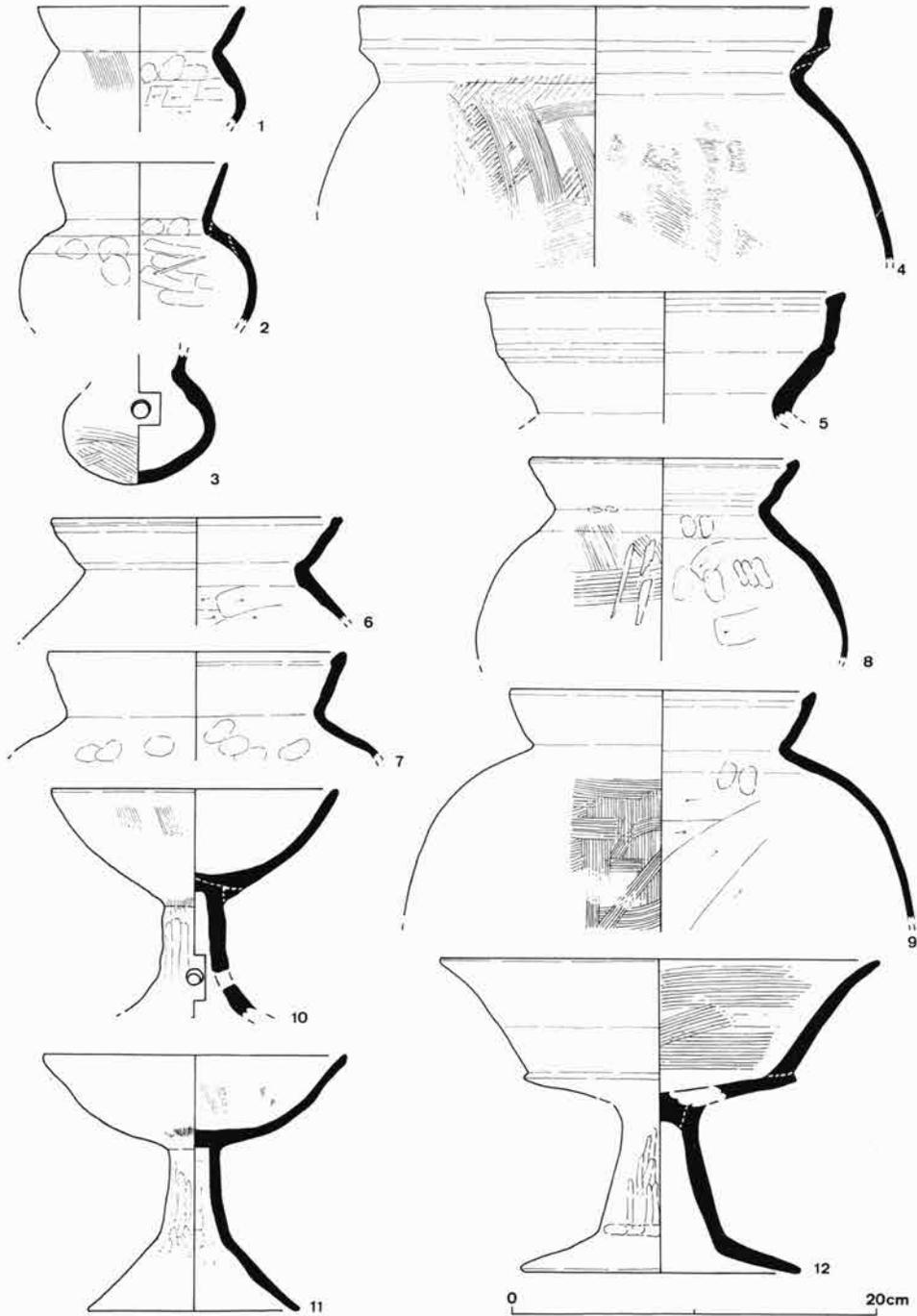
この時代の遺物としては、図示はし得なかったが19区から出土した弥生時代後期の土器片、及び石器がある。ここでは、石器について概要を述べる。3は打製石鏃である。長さ4.5cm・幅2.4cm・厚さ0.42cm・重さ3.6gを測る。凸基有茎式で、両面ともていねいに調整加工が施される。石材としてサヌカイトを用いている。23区の灰褐色土(中世遺物包含層)より出土した。5は扁平片刃石斧である。長さ9.0cm・最大幅3.5cm・最大厚1.3cm・重さ57gを測る。平面形は長方形、断面形は扁平な長方形を呈し、基部にむかって薄くなる。刃部は主に片面から研ぎ出して成形する。縁辺には使用痕とみられる小剥離を認めることができる。石材は安山岩を用いる。6は蛤刃石斧である。最大長9.2cm・最大幅5.1cm・最大厚2.4cm・重さ170gを測る。全体的にていねいに研磨されている。石材は緑泥片岩を用いる。8は石庖丁である。現存長8.5cm・最大幅3.7cm・最大厚0.85cm・重さ48gを測る。半月形直線刃形態をとり、刃部は石目により角度を変えている。頁岩ないしは粘板岩系の石材を用いる。9も石庖丁である。現存長4.5cm・最大幅3.6cm・最大厚0.55cm・重さ15.75gを測る。粘板岩系の石材を用いる。5・6・8・9はいずれも16区自然流路跡の黒灰色粘質土(古墳時代前期遺物包含層)から出土した。

以上、いずれの石器も中世ないしは古墳時代前期の遺物包含層中からの出土であり、明確に帰属時期を示しうるものではなかった。

古墳時代(第69図, 第70図1~4)

この時代の遺物としては、主に16・17区の自然流路跡から出土した古式土師器が大半を占める。そのため、ここでは古式土師器を中心に報告する(第19図)。1~3は小型丸底壺、4・5は壺、6~9は甕、10~12は高杯である。

1は、口径11.4cm・頸径9.0cm・体部最大径11.5cmを測る。口縁部はやや内湾し扁球形の体部をもち、口径部径と体部最大径がほぼ等しくなっている。2は、口径9.6cm・頸径7.9cm・体部最大径12.9cmを測る。外面にススの付着が見られ、内面に指頭圧痕が残る。3は、体部最大径8.4cmを測る。底部から体部にかけてハケメ調整を施す。全体にススの付着が見られる。出土層位中須恵器は同伴しないが、甕を意識したものと思われる。4は、口径25.8cm・頸径23.3cmを測る。広口壺口縁と二重口縁との段は内外面とも明瞭である。体部外面は、右あがりのタタキを施した後、ハケメ調整を施す。内面は、横方向にハケメ調整を施す。5は、口径19.6cm・頸径13.8cmを測る。二重口縁をもつが、広口壺口縁と



第69図 出土遺物実測図(古墳時代前期)(1/4)
4のみ17区, 他はすべて16区

の段が内外面ともあまり明瞭ではない。口縁端部は肥厚し面をもつ。6は、口径15.8cm・頸径12.3cmを測る。口縁端部は、内外面とも肥厚させ上面に面をもち、口縁はやや内湾する。外面にはススの付着が見られる。頸部はぶ厚いが、体部内面はヘラ削りによって器壁を薄くしている。7は、口径16.4cm・頸径14.1cmを測る。口縁端部は肥厚し面をもつ。これも外面にススの付着が見られる。8は、口径14.4cm・頸径11.8cmを測る。口縁端部は内湾させ肥厚させたものである。外面は、ハケメによる調整を施すが、一部にヘラ状工具によるハケメの欠損が認められる。内面はヘラ削りを施した後ナデを行う。9は、口径16.6cm・頸径14.2cmを測る。口縁端部は、内面にやや肥厚させ外面端部を丸くおさめている。体部外面は、縦横にハケメを施す。また、ススの付着も認められる。10は、口径15.6cm・杯部高6.2cmを測る。11は、口径16.4cm・杯部高5.2cm・器高14.0cmを測る。10・11とも浅い椀状の杯部になだらかに広がる円錐状の脚部をもつ。12は、口径23.9cm・器高17.3cm、を測る。口縁は外反し、口縁部と体部の境に明瞭な稜をもち、直線的に広がりながら移行する脚部に屈折して開いた裾部を有する。杯部内面には、ていねいなハケメ調整を施す。

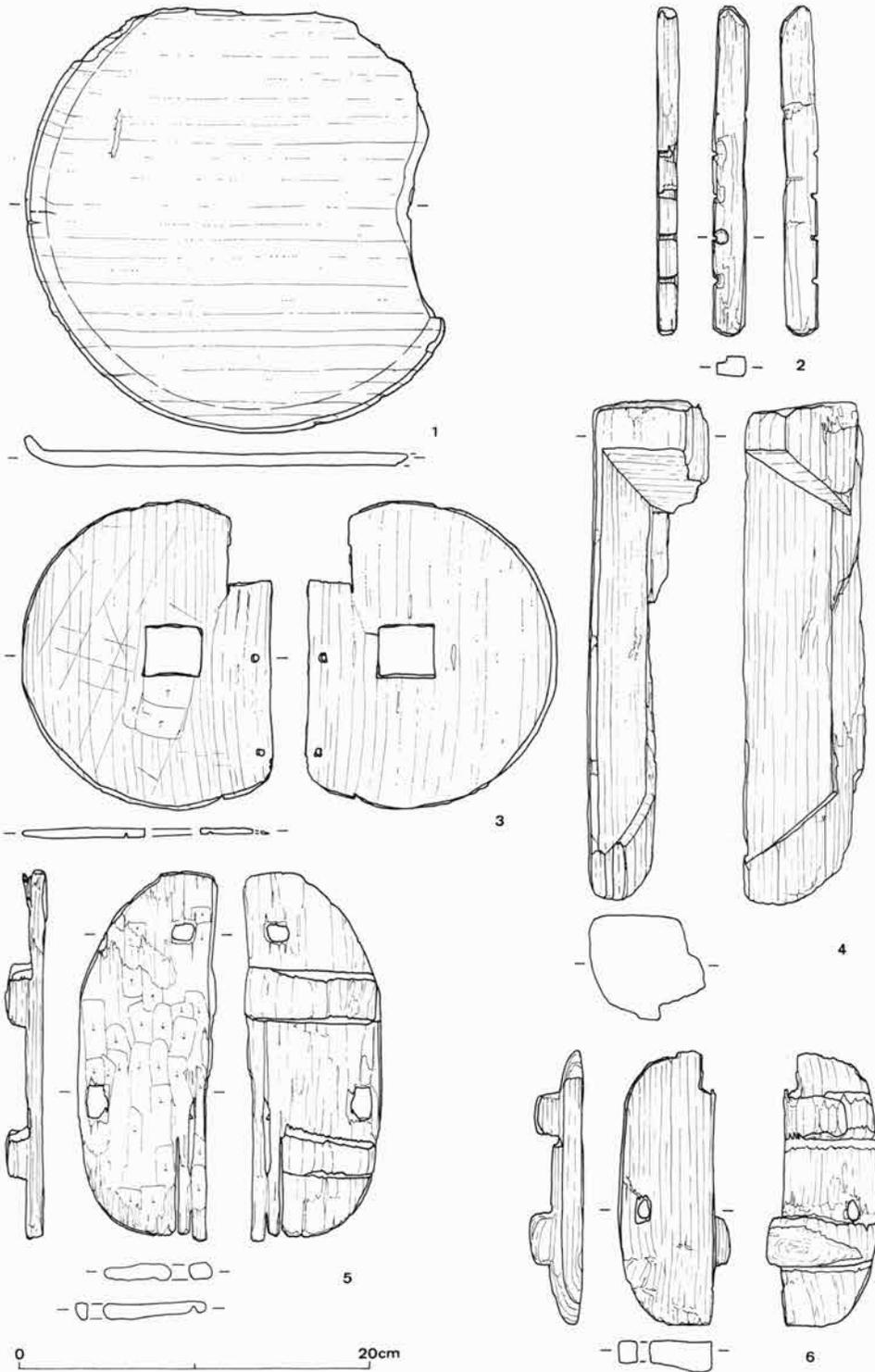
石器のなかでは、この時期の遺物として磨製石鏃(第68図7)がある。長さ4.8cm・幅2.7cm・厚さ0.4cm・重さ6.9gを測る。平基無茎式で、ていねいな研磨によって鋭い刃縁を形成している。15区のSD15040から出土した。粘板岩系の石材を用いる。

また、SR16001の黒灰色粘質土中より、古式土師器に混じって木製品(第70図1～4)も出土した。1は、径約26cm・高0.9cmを測る。挽物であるが、具体的な用途は不明である。2は火鑽板である。長さ18.6cm・幅1.9cm・厚さ1.1cmを測る。細い角棒の側面に、2.5cm間隔をおいて切り欠きを入れ、火鑽杵を回転させた火鑽臼を上面にとどめる。3か所に未使用の切り欠きがある。裏面は黒くこげている。3は蓋板かと思われる。径17.2cm・厚さ0.6cm、円板の中央に3cm四方の穴をあけている。2か所に目的不明の穴がある。これは、中央に穴をあけていることから蒸器のサナに比定することも可能であろう。4は盤の破片である。平坦な底部から口縁部が斜めに立ち上がるものである。しかし、破片であるため全体像ははっきりしない。

奈良～平安時代(第70図6, 第71～75図)

この時期の遺物の大半は、各調査区の黒褐色土中から出土した。時期的には、8世紀中葉から10世紀までのものが混在する。遺構に伴うものとしては、22区で検出したSE22001より出土した須恵器7点・土師器1点が一括資料であり貴重である。今回はその中でも主なものを第71図に図示した。

1・2は杯蓋である。1は、口径16.4cmを測る。平らな天井部から下方へ屈曲し、口縁端部は鈍角に屈曲し尖りぎみにおわる。胎土は密、焼成はやや軟、色調は淡黄灰色を呈す



第70図 出土遺物実測図(木器) (1/4)

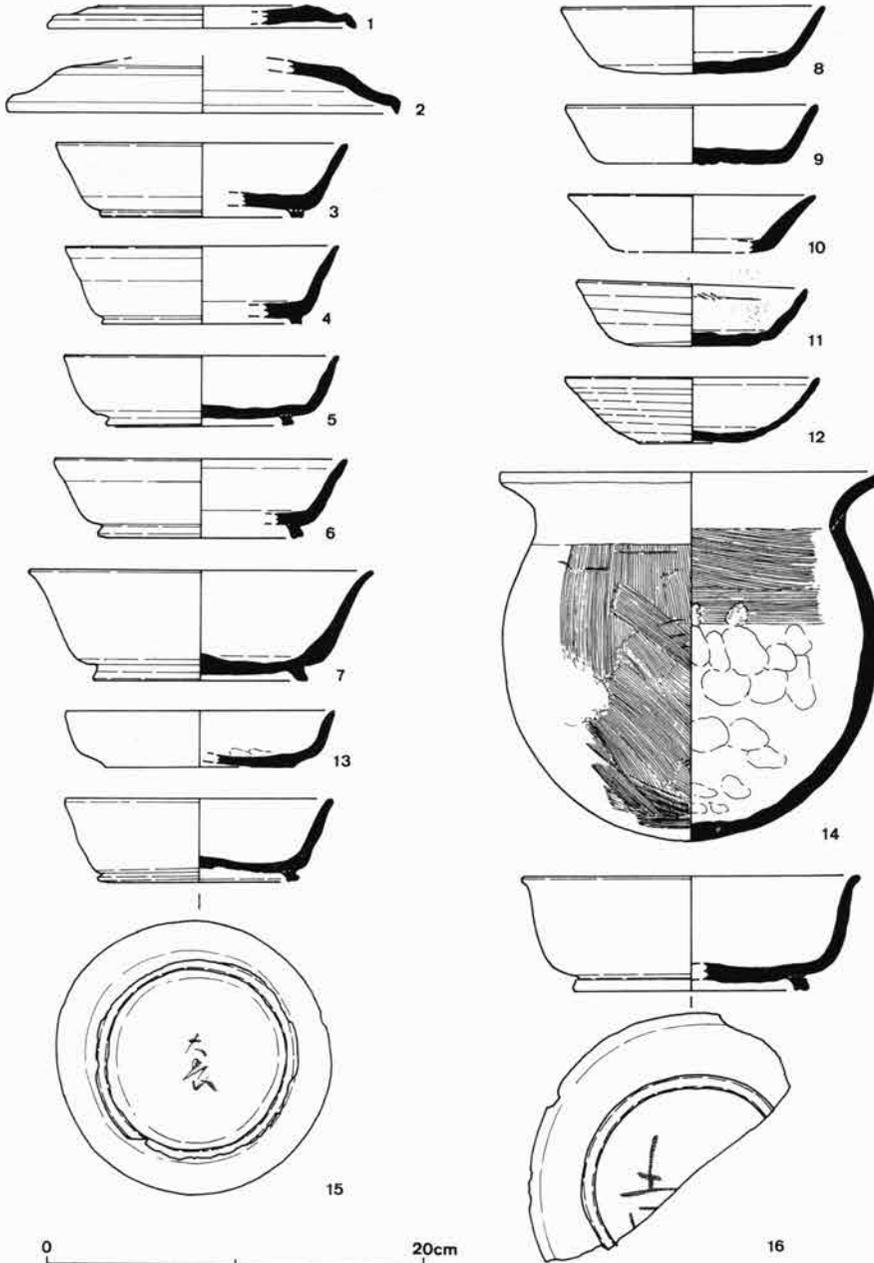
る。2は、口径20.8cmを測る。胎土は密、焼成は堅緻、色調は青灰色を呈する。3～7は高台をもつ杯身である。3は、口径15.4cm・高台径10.8cm・器高3.9cmを測る。底部より斜め上方へ立ち上がる口縁部へ続き、口縁端部が上方へ尖り気味におわる。外面全体に自然釉の付着がみられる。4は、口径14.5cm・高台径10.6cm・器高4.1cmを測る。5は、口径14.5cm・高台径9.9cm・器高3.9cmを測る。口縁端部は上方へ尖り気味でわずかに外反させておわる。6は、口径15.4cm・高台径10.9cm・器高4.1cmを測る。胎土中に2mmほどの砂粒を含む。焼成はやや軟、色調は青灰色を呈する。7は大型品で、口径18.1cm・高台径11.4cm・器高5.9cmを測る。口縁は外反気味におわる。外面には自然釉の付着がある。底部外面には2条のヘラ記号が入る。8～13は高台をもたない杯身である。8は、口径13.8cm・底径10.0cm・器高3.6cmを測る。図示はしていないが、底部外面に墨痕がある。9は、口径13.1cm・底径10.0cm・器高3.1cmを測る。底部外面には、粘土紐の痕跡が明瞭に残り、その上を粗くヘラでなでつけている。8・9とも口縁部は斜め上方に立ち上がり、口縁端部は丸みをもっておわる。10は、口径13.1cm・底径8.7cm・器高3.0cmを測る。口縁部は斜め上方にやや外傾気味に立ち上がり、口縁端部が尖り気味におわる。11は、口径12.1cm・底径8.9cm・器高3.3cmを測る。底部外面は、ヘラ切り後ナデ調整が施されている。器形は全体的に大きく歪み、楕円形を呈している。12は、口径13.4cm・底径5.5cm・器高3.6cmを測る。底部は静止糸切り後ナデを施す。13は土師器杯である。22区のSE22001から出土した。口径14.2cm・底径10.1cm・器高3.0cmを測る。表面磨滅が著しく、調整手法の観察は行い得ない。14は土師器の甕である。口径22.0cm・器高19.4cmを測る。体部外面全体にハケメ調整を行う。また、著しくススの付着が認められる。15・16は墨書土器である。2点とも22区のSE22001から出土した。15は、口径14.0cm・高台径10.7cm・器高4.4cmを測る。口縁部は斜め上方に立ち上がり、口縁端部は外反ぎみに丸くおわる。文字は「大長」と判読することができる。16は、口径17.6cm・高台径12.5cm・器高6.1cmを測る。口縁端部は外反し丸くおわる。文字は「吉」であろうか。破片のため確定はしがたい。

第72図は、杯身の内面見込みに漆の付着が認められるものである。漆がふ厚く付着している。口径12.7cm・底径9.9cm・器高3.7cmを測る。また、底部外面には墨痕と思われる色素が付着している。そのほか、図示はし得なかったが、漆の付着する杯身の口縁部片が1点出土している。

一方、17区の自然流路跡からは下駄(第70図6)が出土している。長さ15.7cm・現存最大幅5.3cm・高さ2.0cmを測る。後壺を後歯の前にあけ、台と同じ幅で断面方形の歯をつくる。平面形は隅丸長方形を呈する。図示はし得なかったが、同様の下駄が14区の黒褐色粘

質土中より出土している。

黒色土器(第73図)は、千代川遺跡において初見のものである。口径15.5cm・高台径6.1cm・器高4.8cmを測る。内外面ともヘラ磨きによっていねいに仕上げられ、口縁端部



第71図 出土遺物実測図(奈良~平安時代)

1・3~9:14区, 11・14:16区, 2:18区, 10・12:21区, 13・15・16:22区

には1条の沈線が巡る。断面台形の高台を付し、内面見込みには螺旋形の暗文が施される。また、底部外面にはヘラ記号が認められる。そのほか、同様な黒色土器碗の口縁部片が2点出土している。

そのほか、注目すべきものに木簡(第74・75図)がある。中世遺物包含層の最下部より出土したため、当初は中世木簡かと思われたが、赤外線写真により平安時代のものであることが判明した。長さ22.7cm・最大幅3.8cm・最大厚0.7cmを測る。出土木簡は、032型式に相当し、長方形の材の端から1.4cmのところに入り込みを入れている。文字は、「承和七年三月廿五日」と書かれており、西暦840年に該当する。これは、明らかに平安時代前期のものであり、従来から提唱されている千代川国府説は一段と可能性を高めたと言えよう。

中世(鎌倉時代)(第76・77図)

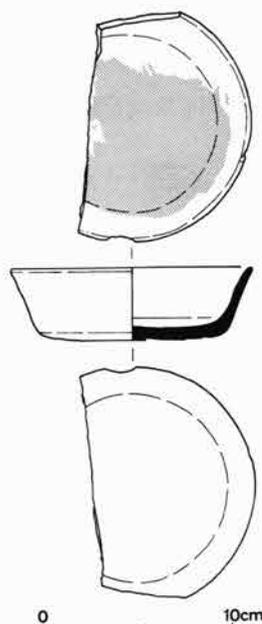
この時期の遺物は、全調査区にわたって出土した。整理箱にして約70箱にも及ぶ。特に瓦器は約50箱にも及び、出土遺物の約1/3に相当する。今回はその中から主なものを図示した。第76図は12~21区までの調査地南半部、第77図は22~27区までの調査地北半部出土の遺物である。

1~6・23~33は土師器皿、7~14・34~38は瓦器碗、15~19・42~46は白磁碗、20・21は青磁碗、22は瓦質の播鉢、39~41は羽釜である。

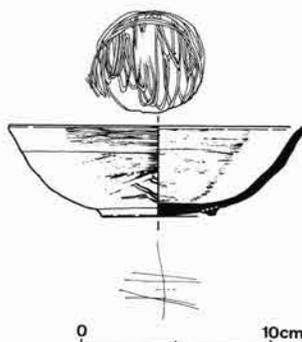
土師器皿は、1~5・23~29を小皿、6・30~33を中皿と大きく2つに分類できる。小皿には、口径が7.5~

8.5cmのもの(1~3・5・23~25・27)、9.0~9.5cmのもの(4・26・28・29)がある。特に、23は口縁端部を強く内傾させて折り返す。口径7.8cm・器高1.0cmを測る。口縁端部は尖り気味におさまる。胎土は密、色調は淡褐色を呈する。口縁部、体部外面は横ナゲを行う。中皿は、口径が10.5cmを測るもの(30)、11.5~12.5cmのもの(6・31・32)、14.0cmをこえるもの(33)がある。

次に瓦器碗について述べる。7は、口径13.6cm・器高5.9cm・高台径5.8cmを測る。断面三角形の安定した高台をもち、見込みの暗文は螺旋形を描き、体部外面にも暗文を施す。



第72図 出土遺物実測図 (1/4)

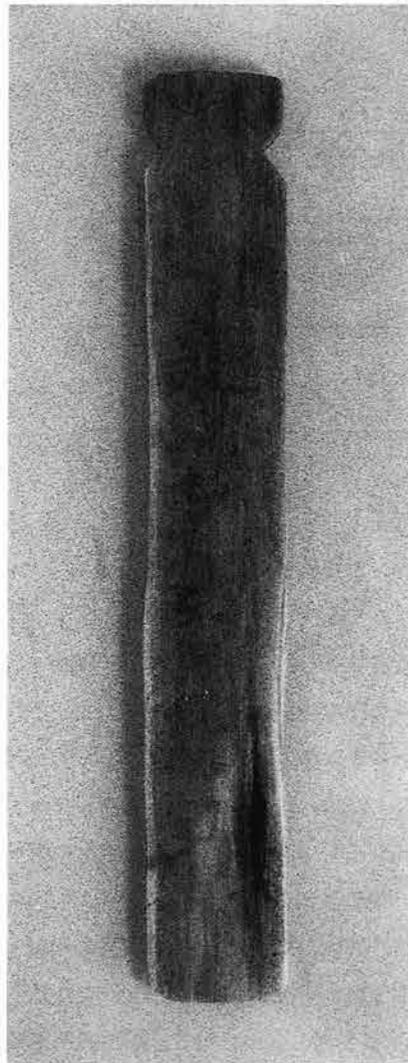


第73図 出土遺物実測図 (黒色土器) (1/4)

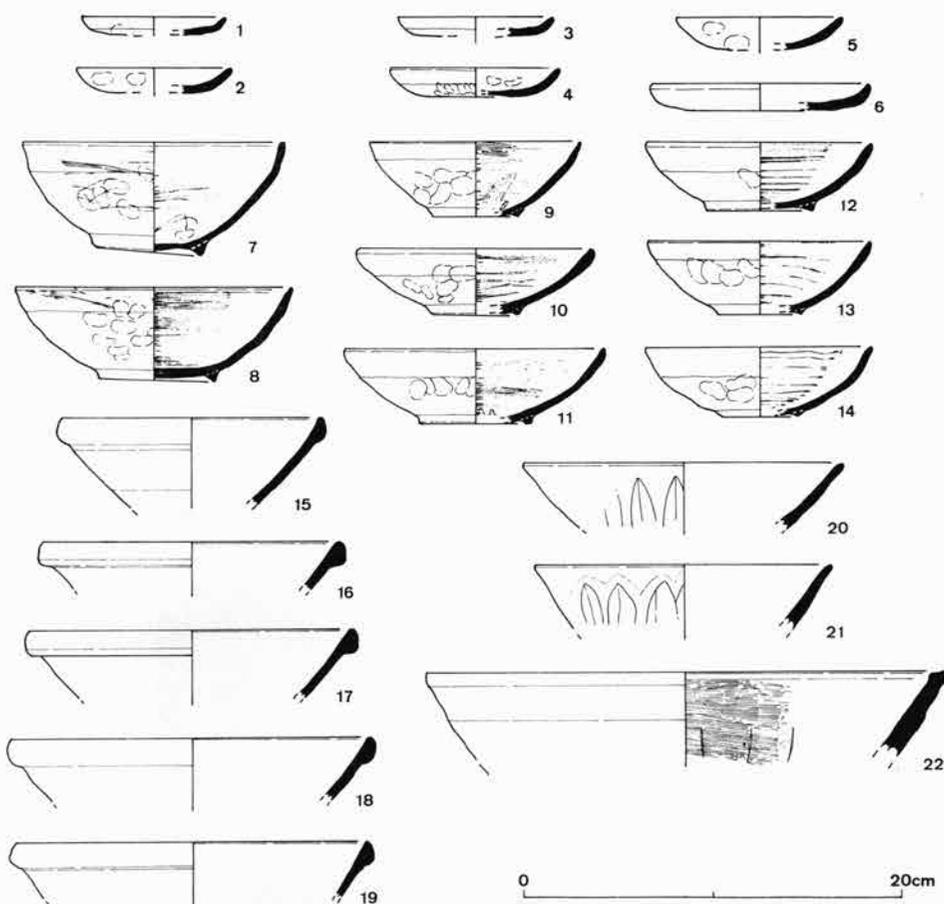
8は、口径14.6cm・器高4.9cm・高台径6.1cmを測る。断面三角形の高台をもち、見込みには螺旋形の暗文を施す。外面は口縁部に暗文を施す。9は、口径11.1cm・器高5.0cm・高台径4.5cmを測る。断面三角形の細い高台がつき、内面に数条の暗文を施す。10は、口径11.1cm・器高3.5cm・高台径4.5cmを測る。断面三角形の細い高台がつき、口縁部が肥厚する。11は、口径13.6cm・器高3.9cm・高台径6.0cmを測る。断面台形の高台がつき、見込みには鋸歯状の暗文を施す。12は、口径11.8cm・器高3.8cm・高台径5.6cmを測る。断面三角形で外方に張り出す高台をもつ。内面の暗文は平行に施されている。13は、口径11.7cm・器高4.9cm・高台径4.4cmを測る。断面三角形の細い高台がつき、内面の暗文は



第74図 出土遺物実測図(木簡) (1/2)



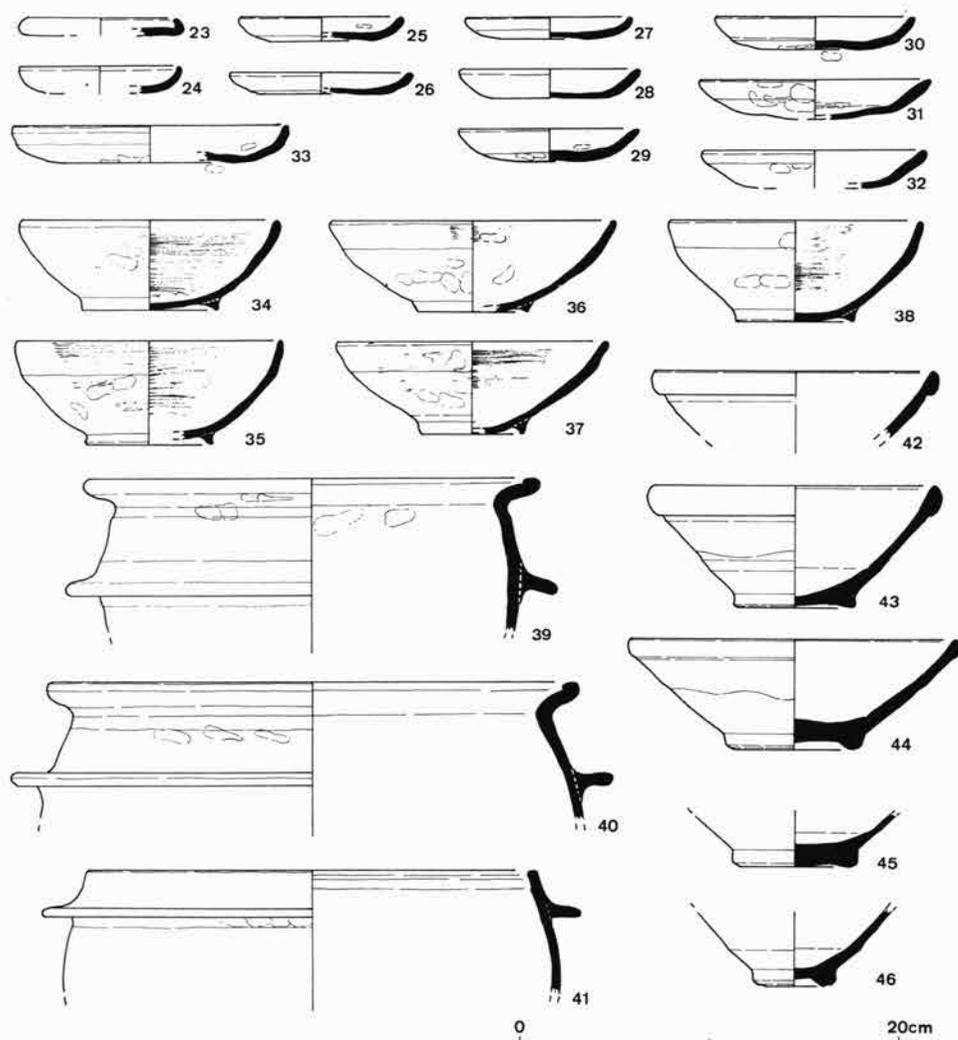
第75図 木簡(赤外線写真)



第76図 出土遺物実測図(鎌倉時代1) (1/4)

4・6~8・15~18:12区, 20・21:14区, 1~3・5・9・12~14・19・22:16区, 10・11:21区

平行に施される。14は、口径11.9cm・器高3.6cm・高台径4.0cmを測る。断面三角形の細かい高台がつき、内面の暗文はまばらで平行に施される。34は、口径13.4cm・器高4.9cm・高台径7.2cmを測る。断面台形で外方に張り出す高台をもつ。見込みには螺旋状の暗文を施す。35は、口径13.9cm・器高5.4cm・高台径6.8cmを測る。断面三角形で外方に張り出す高台をもつ。内面及び外面上位に密な暗文が施される。36は、口径14.8cm・器高4.9cm・高台径5.8cmを測る。断面三角形の高台をもつ。内外面の暗文は磨滅のため不明瞭である。37は、口径14.1cm・器高4.8cm・高台径5.3cmを測る。断面三角形の高台をもつ。内面上位に暗文が施され、外面はわずかに暗文が施される。38は、口径13.1cm・器高5.5cm・高台径6.2cmを測る。断面三角形の高台をもち、内面の暗文は密、見込みには螺旋状の暗文が施される。



第77図 出土遺物実測図(鎌倉時代2)(1/4)

34:22区, 23~27・31・32・35~44:23区, 28・46:24区, 29・31・33・45:27区

白磁は、口縁部片が多く、完形に復原できるのは2点のみである。いずれも玉縁状口縁を有するが、若干の形態差がある。43は、口径14.8cm・器高6.5cm・高台径6.1cmを測る。灰白色の磁胎に不透明白色釉を施す。44は、口径17.1cm・器高5.8cm・高台径6.3cmを測る。43と同様に、灰白色の磁胎に不透明白色釉を施す。

青磁は白磁に比べて出土点数は少ない。20・21はいずれも青磁碗である。20は口径16.8cm, 21は口径15.7cmを測る。磁胎は灰青色、色調は淡緑色を呈する。両者とも、外面に蓮弁を描く龍泉窯系の製品である。時期的には13世紀後半頃のものと思われる。

22は、瓦質の播鉢である。口径27.4cmを測る。口縁端部は上方に面をもつ。内面は横ハ

ケを行った後、粗く挿目を入れる。

39・40はいわゆる大和型の羽釜である。39は口径23.4cm、40は口径27.0cmを測る。口縁部は「く」の字に外反し、端部を肥厚させておわる。口縁部から少し離れた肩部に頸をはりつける。41はいわゆる山城型の羽釜である。口径23.4cmを測る。口縁部は内湾気味に立ち上がる。水平に頸をはりつけ、頸下部は指オサエ、内外面に横ナデを施す。外面にススが付着している。

また、27区の中世遺物包含層より下駄が出土した(第70図6)。長さ20.8cm・現存最大幅7.6cm・高さ2.2cmを測る。連歯下駄で、後壺を後歯の前にあける。台と同じ幅で、断面形が台形の歯をつくる。平面形は隅丸長方形を呈する。

中世の遺物を全体的に見ると、12世紀前半～14世紀前半頃までの資料がまんべんなく出土していると言える。

ま と め

以上が今回の調査成果の概略である。調査地は、現在、平坦地となり水田が営まれているものの、旧地形はかなりの凹凸があったようで、特に凸部については、水田が営まれるようになった中世末～近世段階に非常に大規模な削平が行われたようである。そのため、遺構の遺存状況はきわめて悪く、確認し得た遺構は少なかった。しかし、出土遺物や検出し得た遺構の中には、非常に重要な意味を有しているものも少なくなかった。以下に、これらの中から主なものについてか条書きにし、まとめとしたい。

① 明らかに縄文時代に属する遺構は確認できていないが、調査を経るにつれ、この時代の資料が増加している。特に今回の調査では、わずか1点ではあるが、早期に遡る押型文土器片が出土した。また石器としては有舌尖頭器が2点出土したことは注目される。

② 16～18区で検出した自然流路跡は、旧千々川流路の可能性の高いものであるが、ここから古式土師器や木製品、中世の瓦器などが多量に出土するとともに、平安時代の紀年を有する木簡が出土した。

③ 自然流路跡(SR16001)出土の古式土師器は、15区のSD15040出土資料とともに、調査地の西方に古墳時代前期の集落跡の存在を示すものである。

④ 木簡は千代川遺跡で初めての出土であり、従来の千代川国府説の可能性をより高めたとと言える。しかし、出土位置が明らかに調査地西方から流入した状況を呈していること、遺構の項でも述べたように、本流路跡と現千々川流路との関連などから国府推定域については、従来の諸説に疑問をなげかけることとなった。

⑤ ④の木簡の出土状況に加え、21区で検出した溝は国府北限といわれる堀状落ち込み

の延長上にあるとは言うものの、やはり従来の国府推定域から西へ突出する場所にあり、問題を提示する資料となった。

⑥ 14・15区の奈良時代の建物跡は、12次調査の6区で検出した建物群と一まとまりをなすものと考えられ、6・14・15区と続く微高地上に立地している。

⑦ 鎌倉時代には、12・15区の微高地上に建物が建てられた。これらの廃絶後、この一帯は耕作地へと転用され、現在に至るものと考えられる。

⑧ 拜田地区の谷部からも、奈良・平安・鎌倉時代の遺物が大量に出土した。明確な遺構は確認し得なかったが、付近に遺構の存在を確実視させるものである。(鷗島三壽)

注1 ①水谷寿克ほか「国道9号バイパス関係遺跡昭和56年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第1冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1982

②水谷寿克ほか「国道9号バイパス関係遺跡昭和58年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第11冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1984

注2 八木感一・渡辺春三・並河義次・福田亘孝・高橋一義・田中寛治・松浦寛一・宇野三雄・石野正男・俣野ふじを・俣野利江・山内きくの・八木千代江・八木まさ子・八木美重子・八木よし子・山内タカ子・原田敦子・山本美代子・野々村礼子・松山晃子・八木淑子・松本菊栄・松本はつゑ・黒田茂子・黒田美代子・松本末野・中垣民子・八木きみ・俣野よ志江・谷口明子・中西ふみ子・西田初恵・小槻小福・八木すて
田中智子・田代美穂子・石原俊子・牧野當子・小林洋子・松尾幸枝
中島和彦・山口信彦・吉田昌己・横山憲郎・大西智也・中島皆夫・山室 繁・川勝 修・西井淳也・岩津博文・高野陽子・松田靖史・藤本城次・船越正美・鈴木永子・郡司佳代子・西村健司・中橋孝之・笹井 信・高野はずみ

注3 これまで、千代川遺跡は、東西約1.2km・南北約1.6kmとされていた。しかし、第13次調査の第26～28区における遺物包含層の存在や、さらに北側の拜田丘陵裾部における遺物の散布を考えて、千代川遺跡は約200mほど北へ広がりをもつと推定した。

注4 奈良時代に千代川、平安末～鎌倉時代までに八木町屋賀へ移転したという説がある。
木下 良「丹波国府址」(『古代文化』16-2) 1966

注5 10・12次調査の成果による。

①水谷寿克ほか「国道9号バイパス関係遺跡昭和60年発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第21冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1986

②森下 衛 「昭和61年度国道9号バイパス関係遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第26冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987

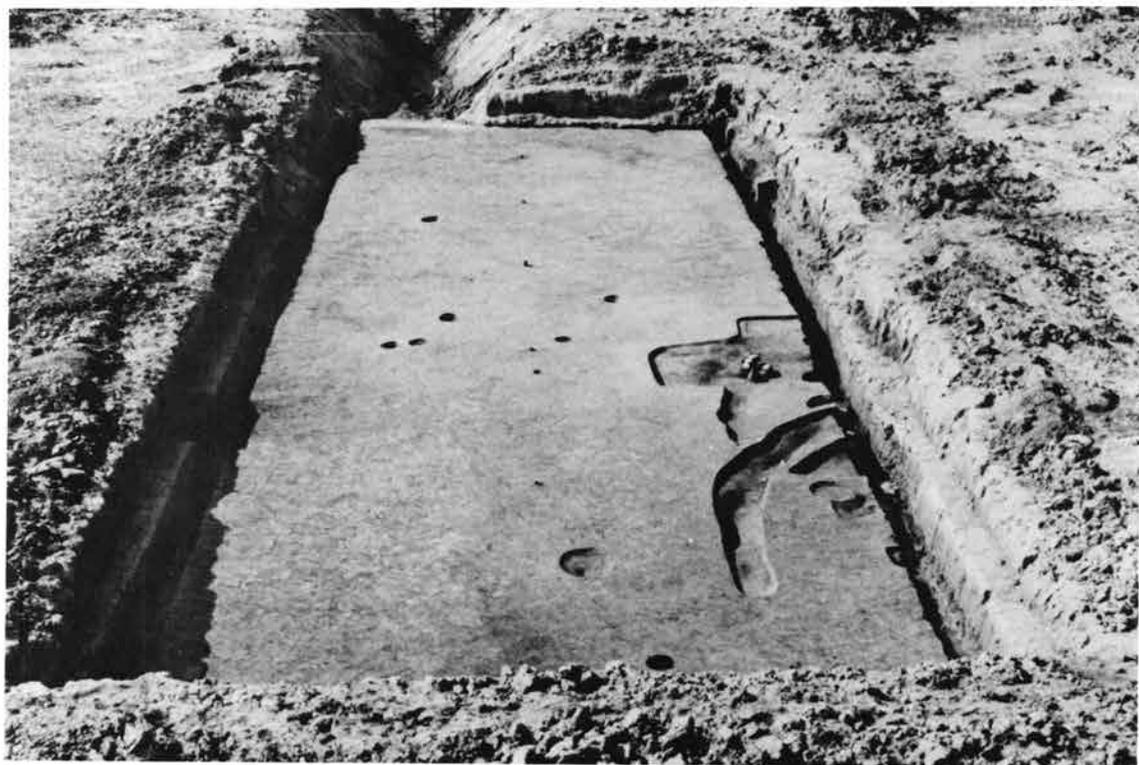
注6 注4に同じ

注7 木下説は、奈良時代から現在のような流路であったとするが、一般的に考え難いものである。検出した自然流路跡の大きさ、および現地形の確認から、千々川の旧流路と考える。

圖

版

図版第1 桑飼上遺跡



(1) 第1トレンチ全景 (北から)

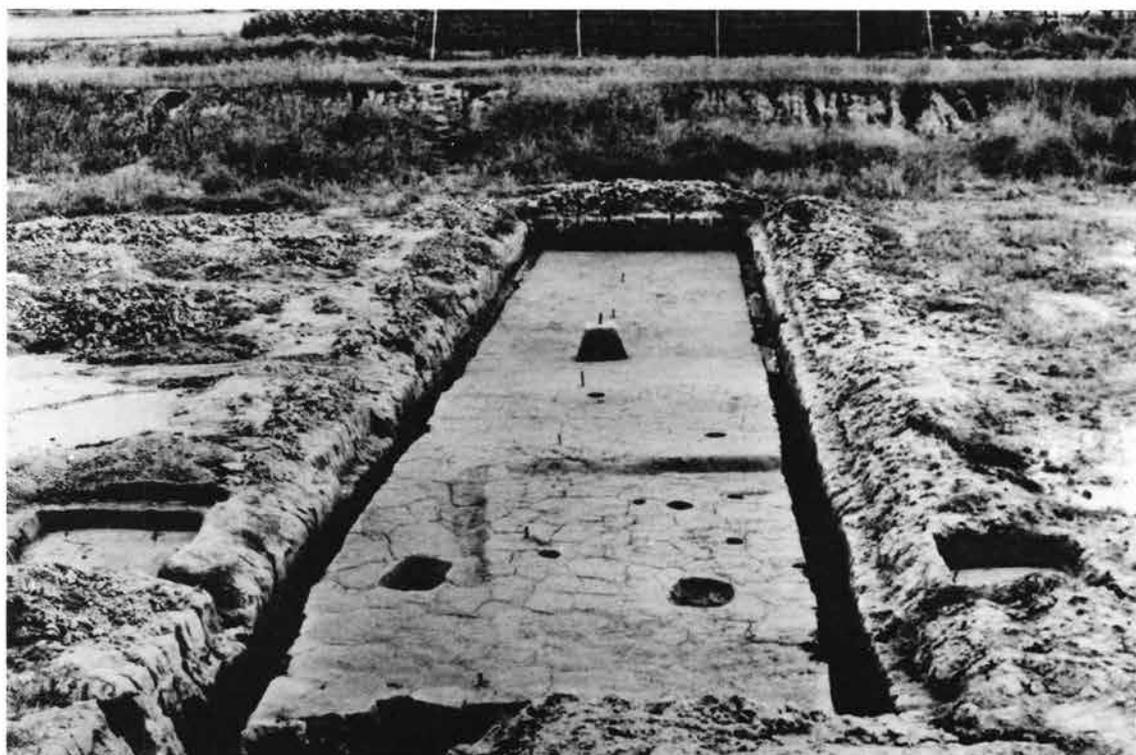


(2) 第2～第4トレンチ調査風景 (東から)

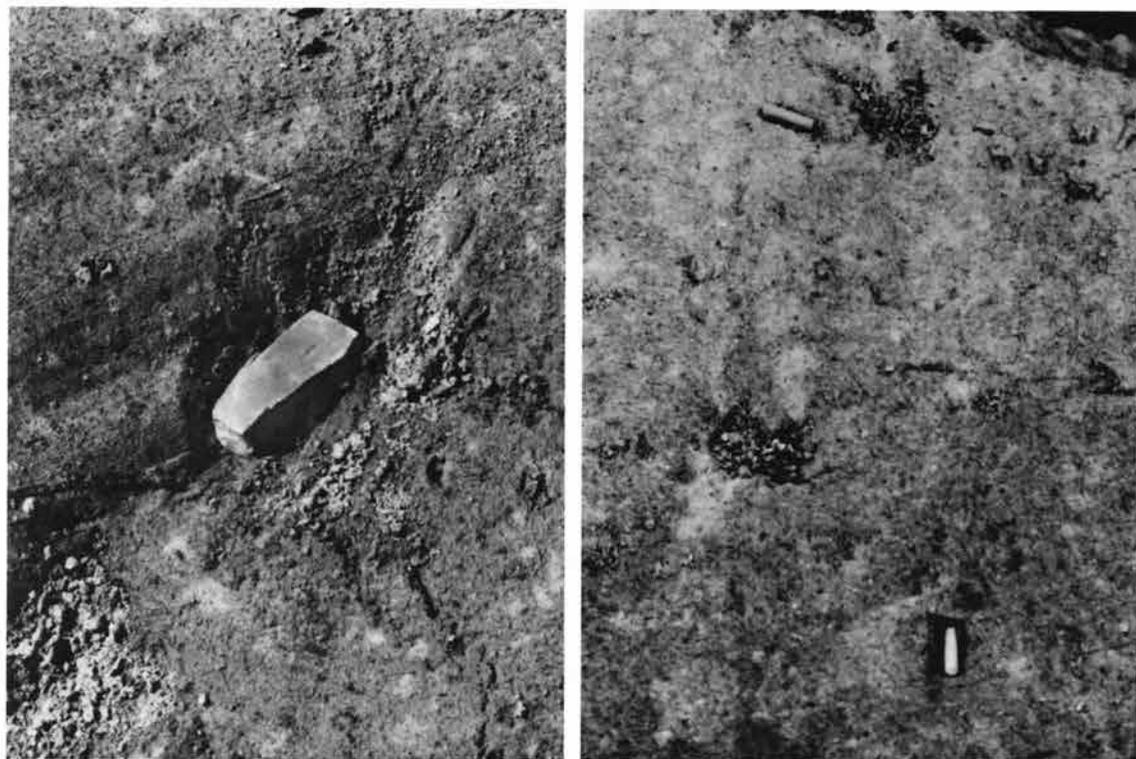
図版第2 桑飼上遺跡



(1) 第3トレンチ全景(北から)



(2) 第4トレンチ全景(北から)

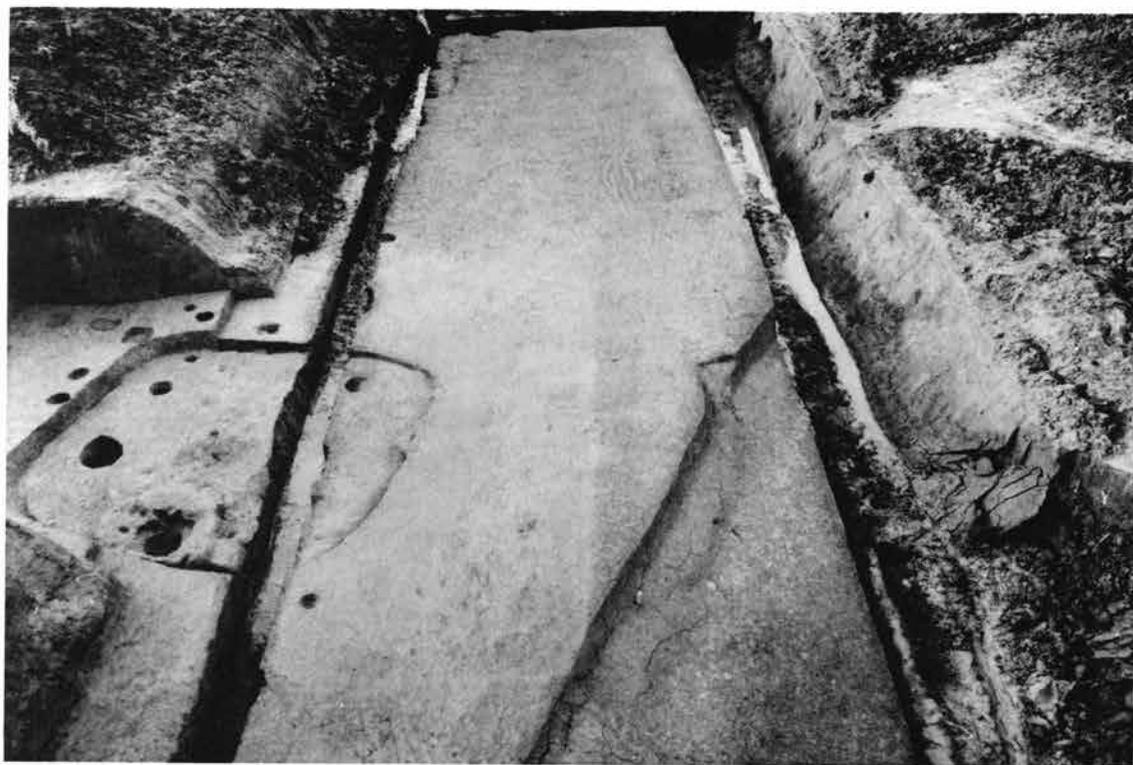


(1) 第4トレンチ管玉原石及び製品出土状況

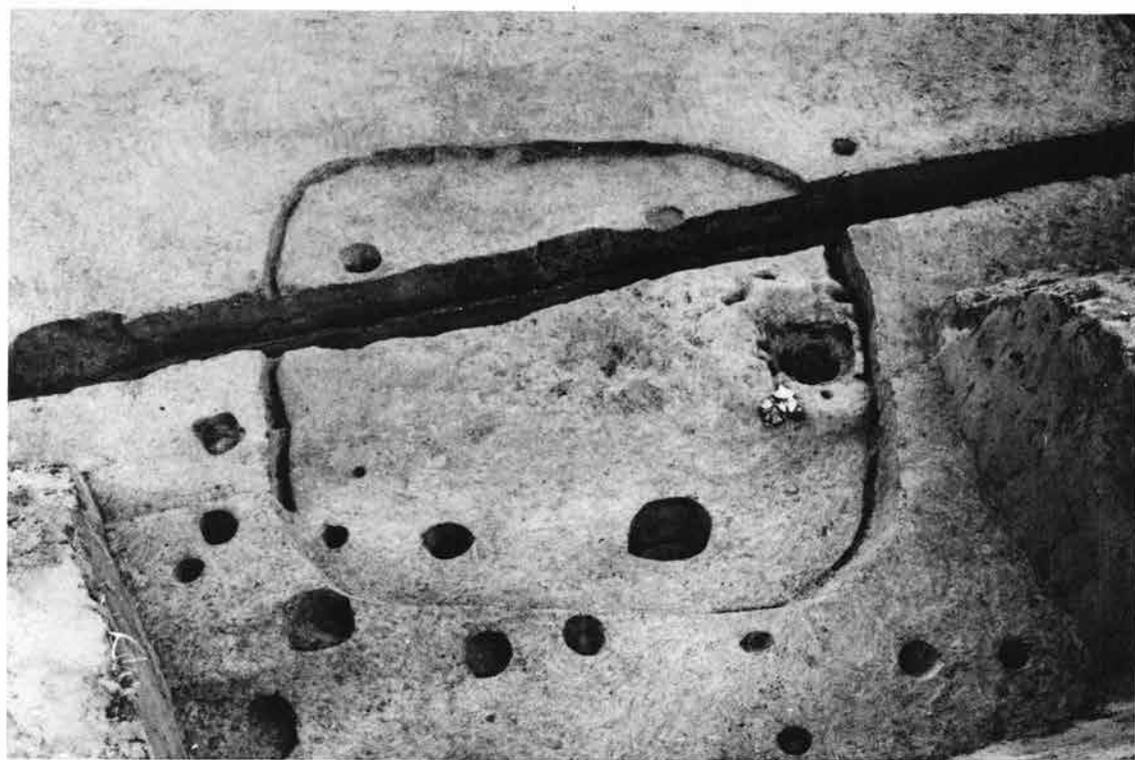


(2) 第5トレンチ土器溜まり (S X 501)

図版第4 桑飼上遺跡



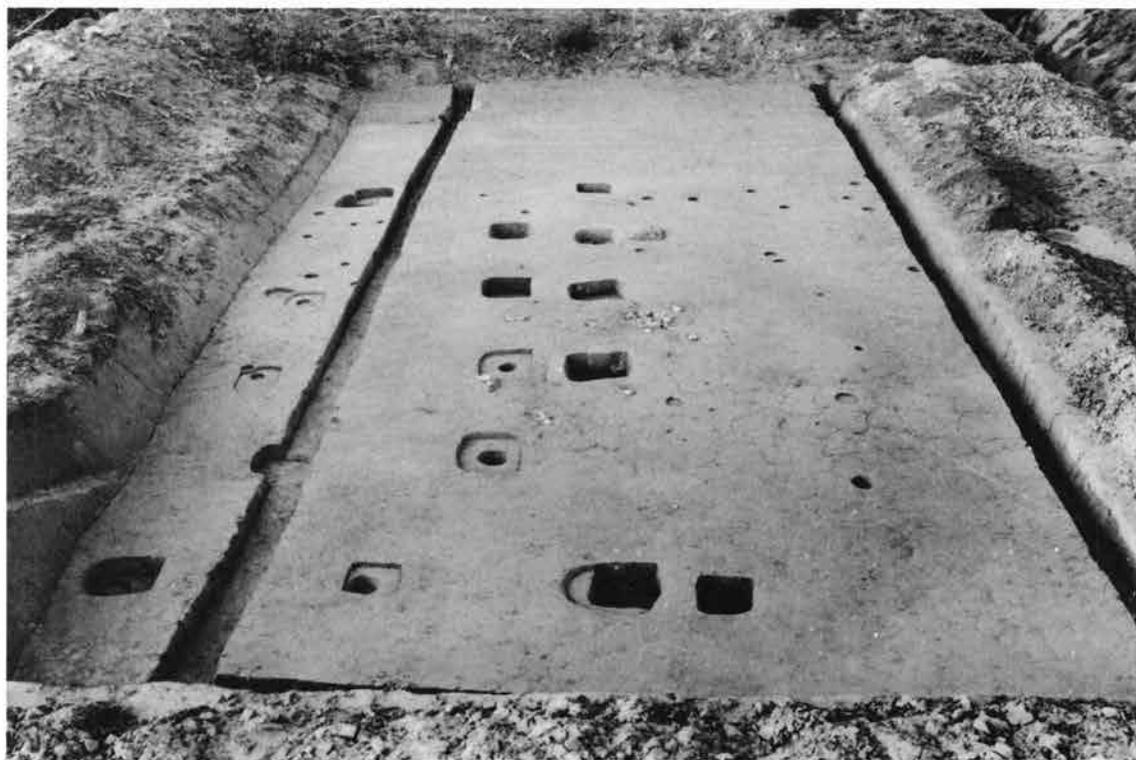
(1) 第6トレンチ (南から)



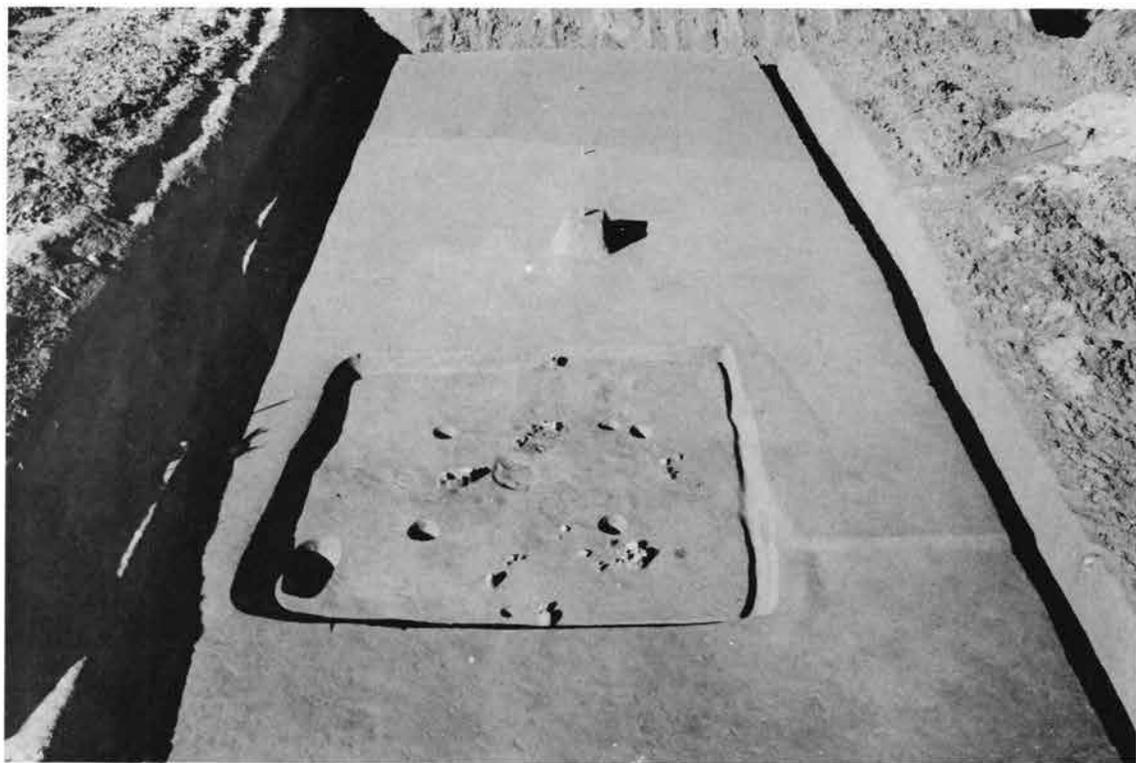
(2) 第6トレンチ S H601 (西から)



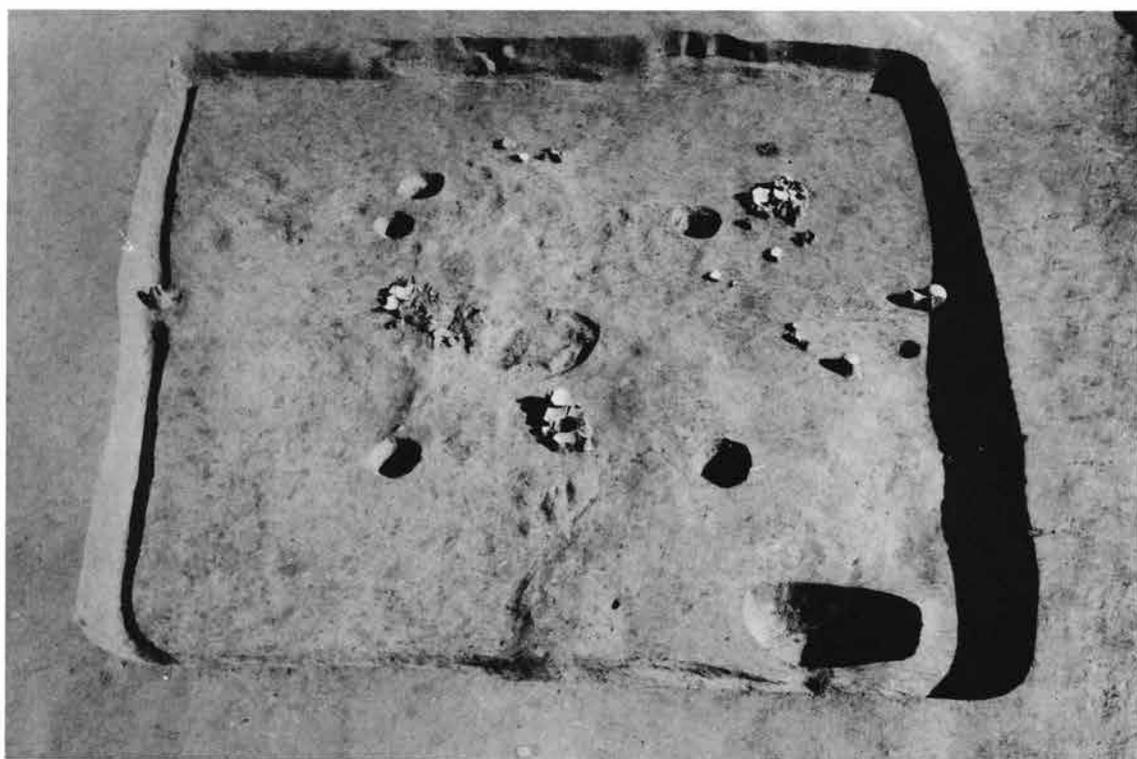
(1) 第6トレンチ SH601 (北から)



(2) 第7トレンチ掘立柱建物跡群



(1) 第8トレンチ SH801 (南から)

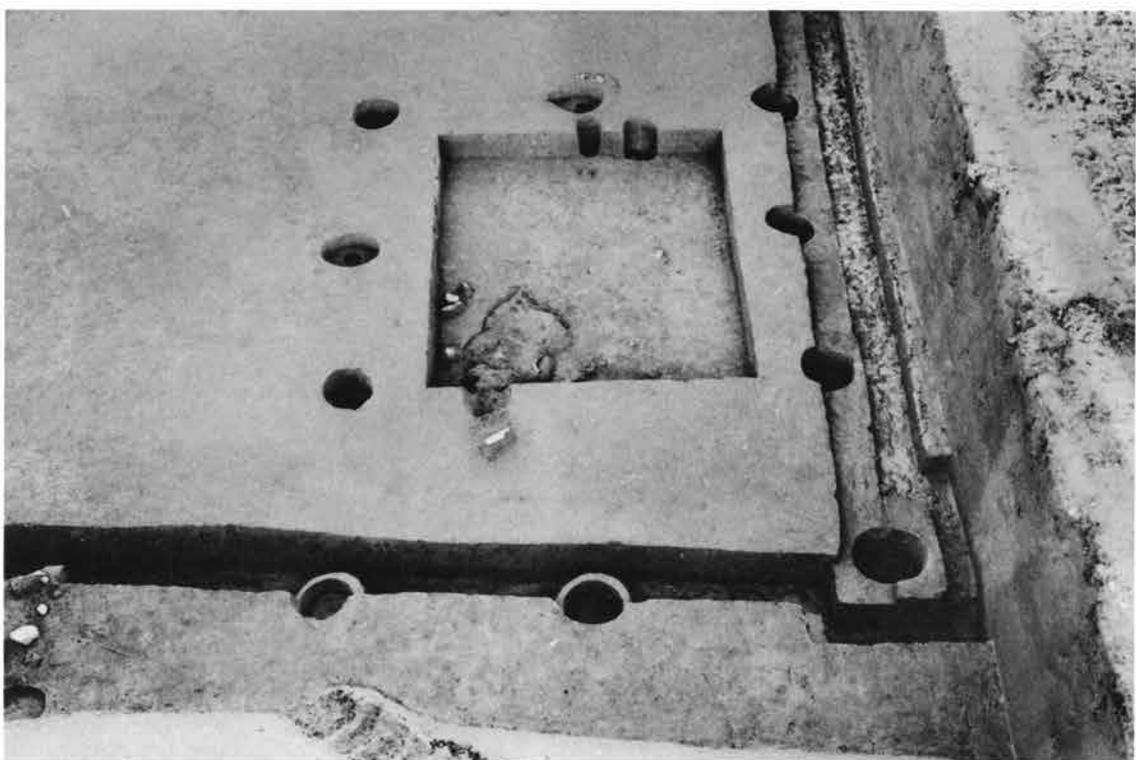


(2) 第8トレンチ SH801 (西から)

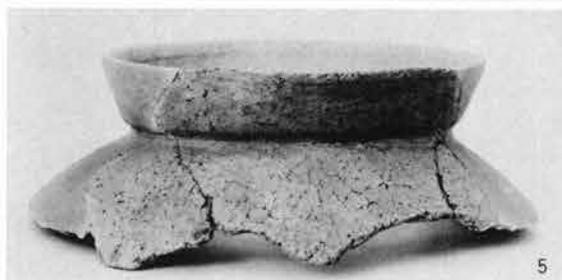
図版第7 桑飼上遺跡



(1) 第9トレンチ S B901・S K902 (北から)



(2) 第9トレンチ S B901・S K902 (西から)



出土遺物



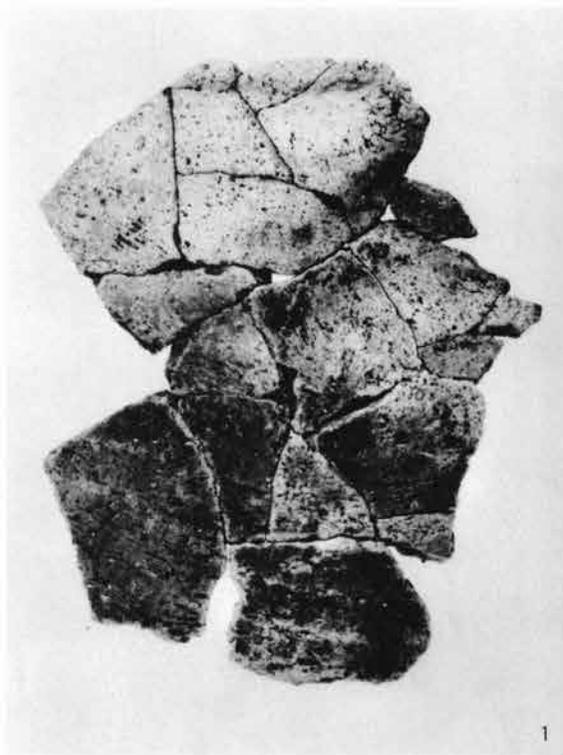
(1) 調査前風景（北から）



(2) 集石土坑・柱穴列検出状況（北から）



(1) 方形周溝墓検出状況 (東から)



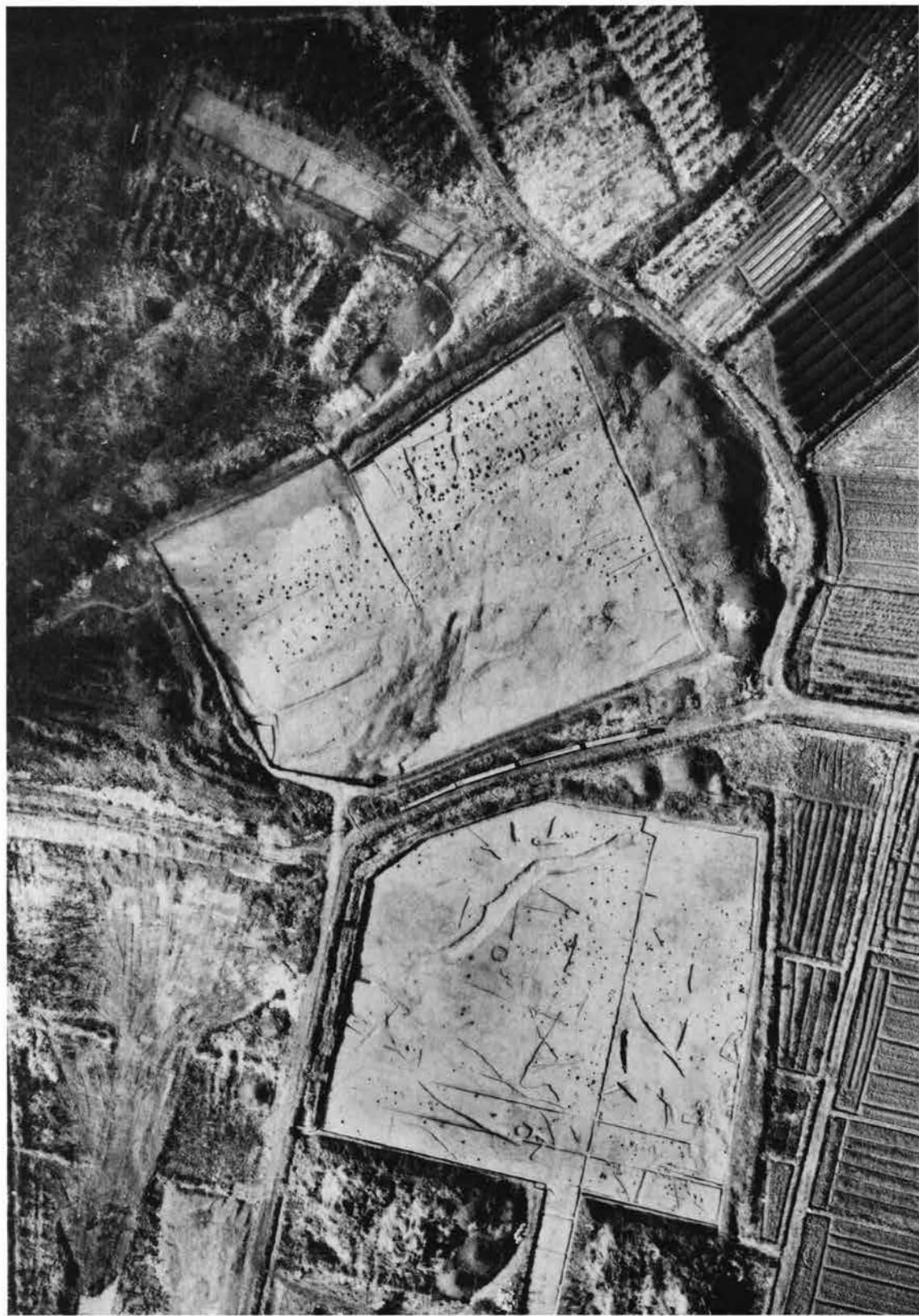
(2) 出土遺物 1. 縄文土器 2. 弥生土器 (壺)



(1) 調査前遠景 (東から)



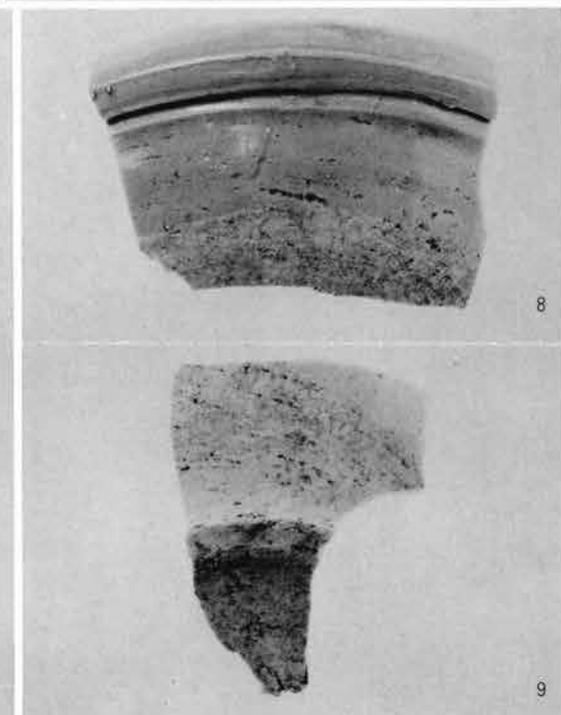
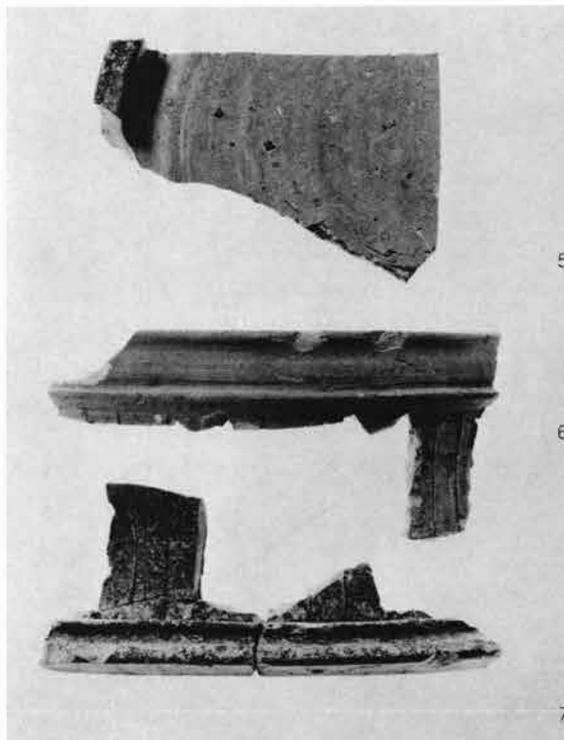
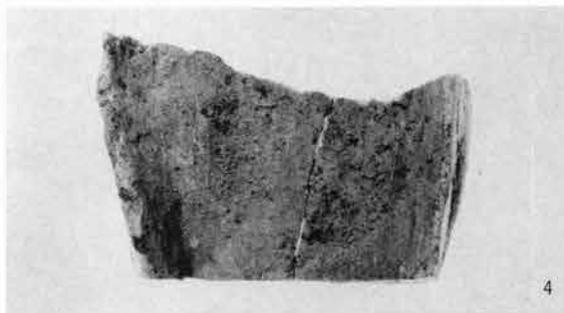
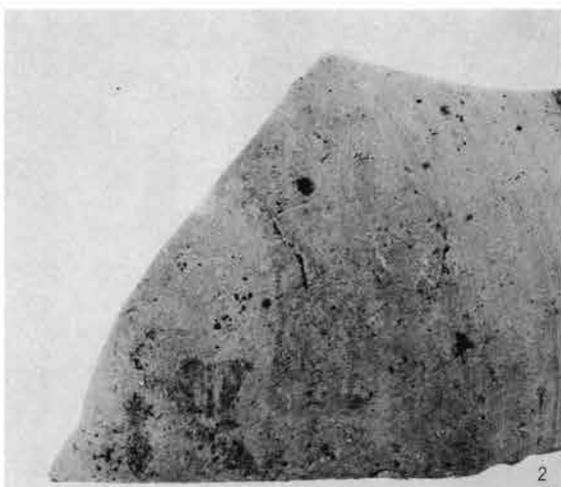
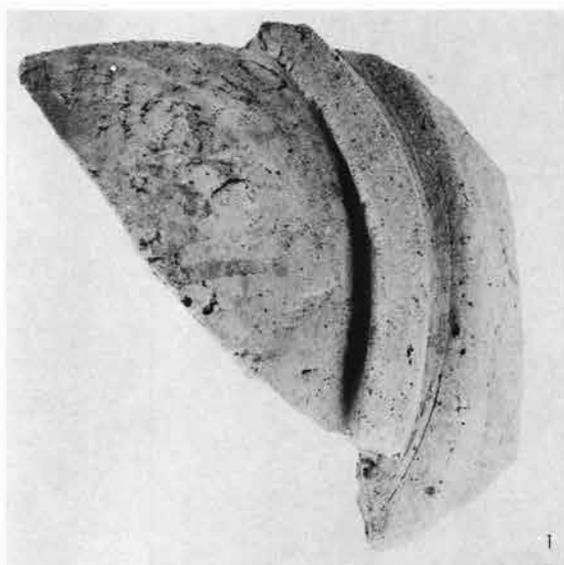
(2) 調査地全景 (東から)

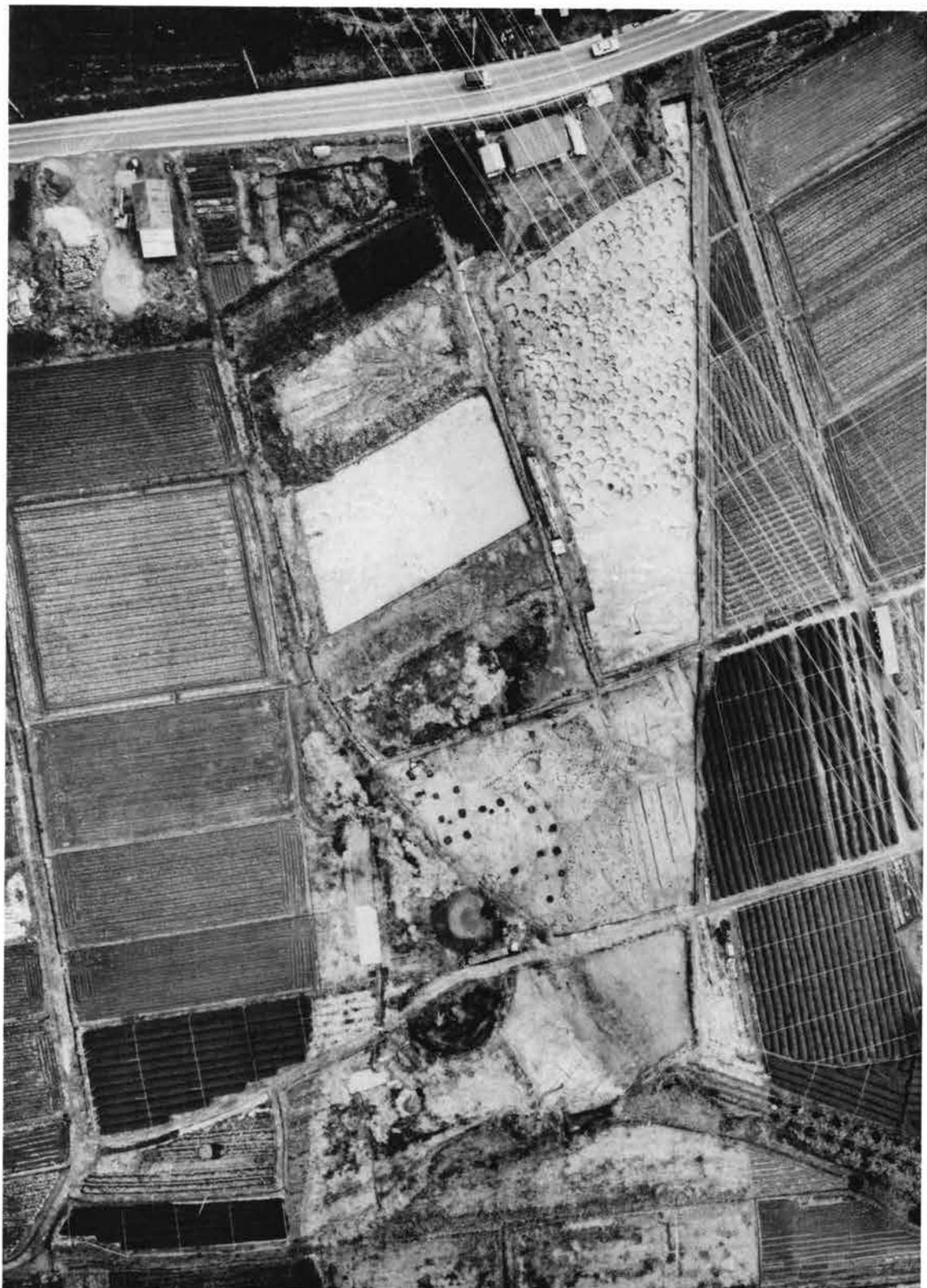


調査地全景



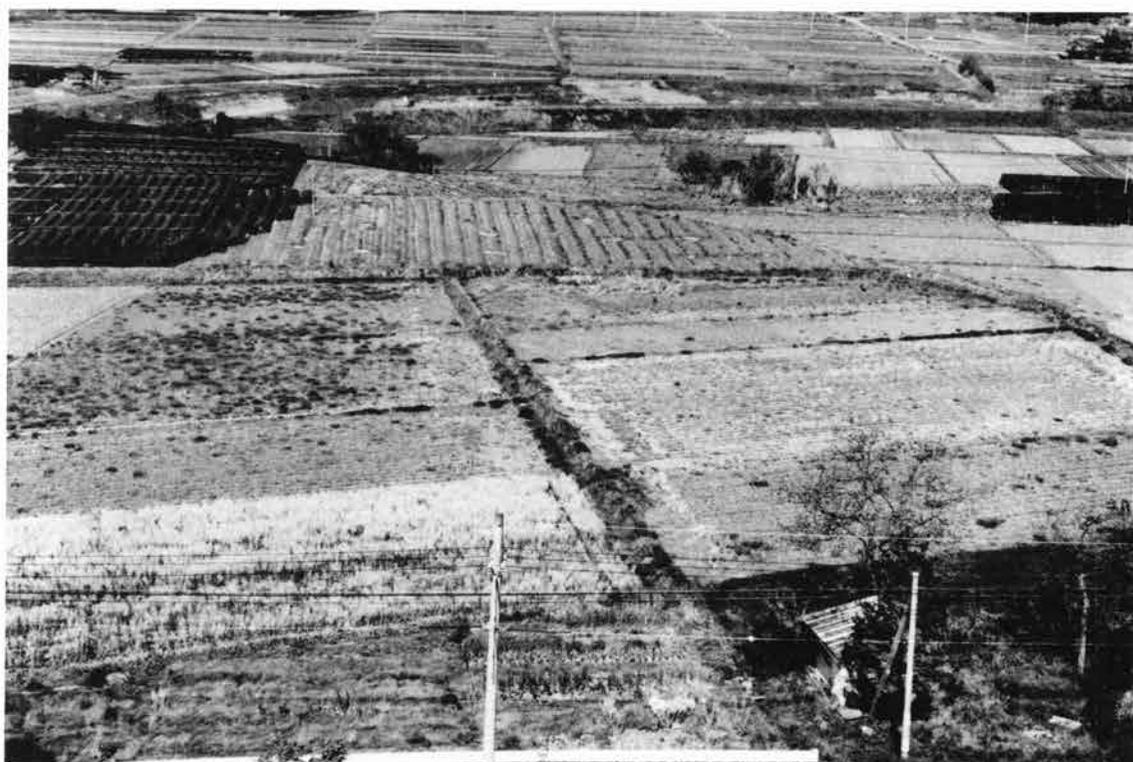






調査地全景

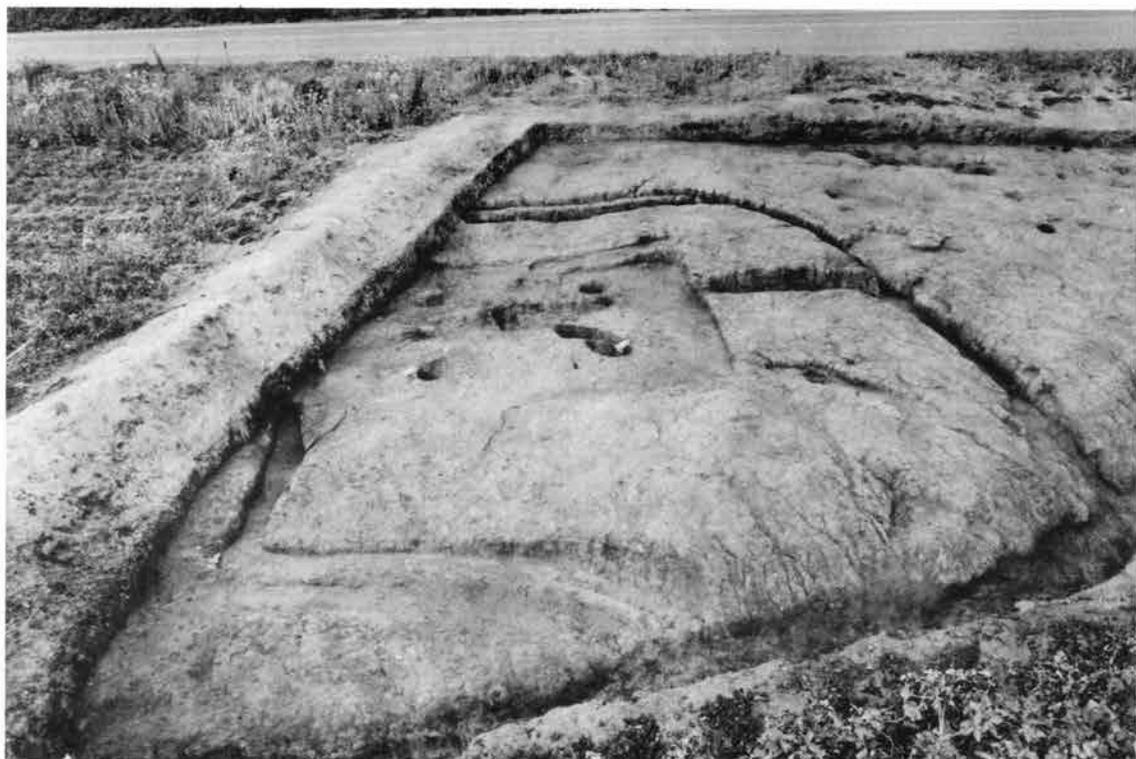
図版第17 三宅遺跡



(1) 調査前全景（東から）



(2) 調査地全景（東から）



(1) 第Ⅴ調査区 SH01 (西から)



(2) 第Ⅲ調査区 土壇墓



出土遺物

1. 壺 2. 甕 3. 瓦器碗 4. 甗 5. 高杯 6. 鏡形土製品



(1) 調査地全景（東から）



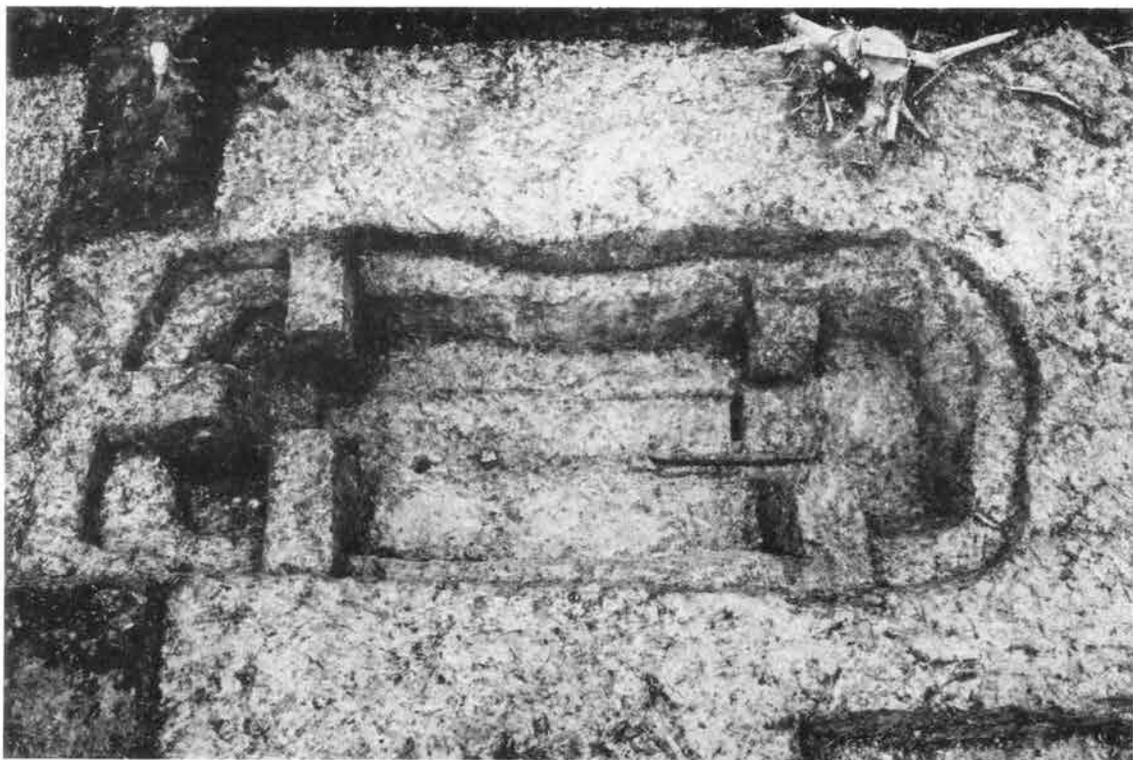
(2) 墳丘断面（南から）



(1) 第3号墳 中心埋葬施設検出状態（南から）



(2) 第2・3号墳 完掘状態（東から）



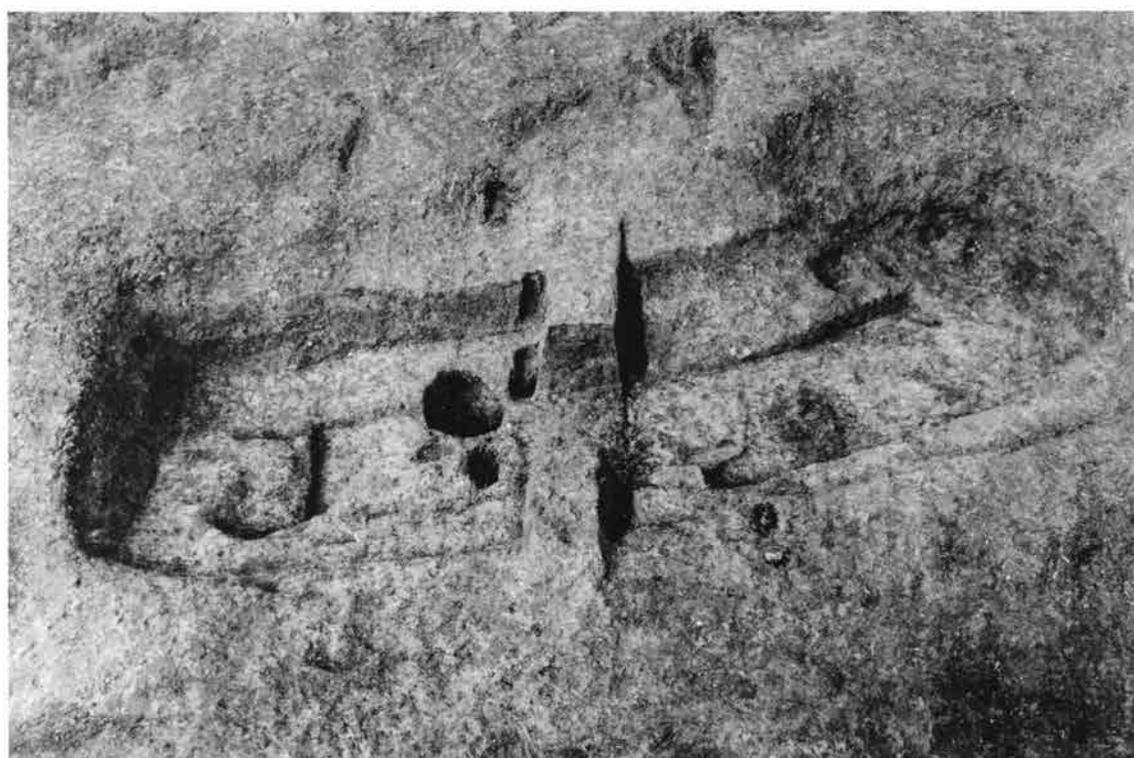
(1) 第2号墳 中心埋葬施設鉄器出土状態(南から)



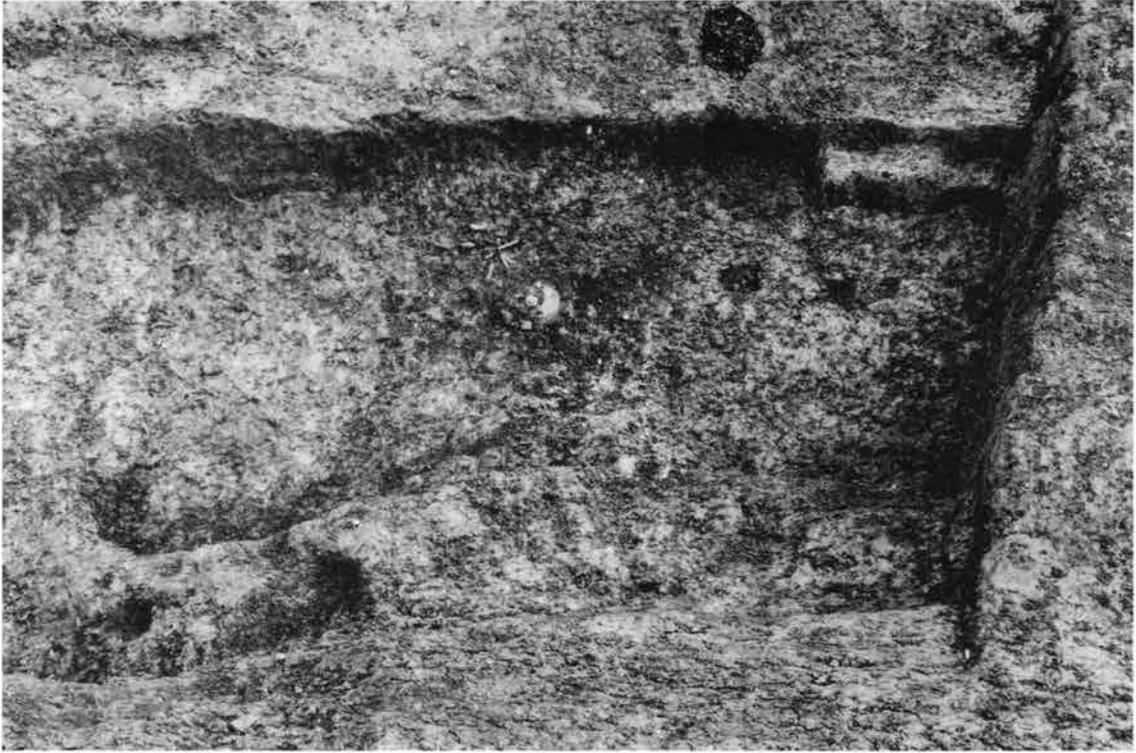
(2) 第2号墳 中心埋葬施設鉄器出土状態細部(南から)



(1) 第2号墳 周辺第1埋葬施設完掘状態（北から）



(2) 第2号墳 周辺第4埋葬施設完掘状態（南から）



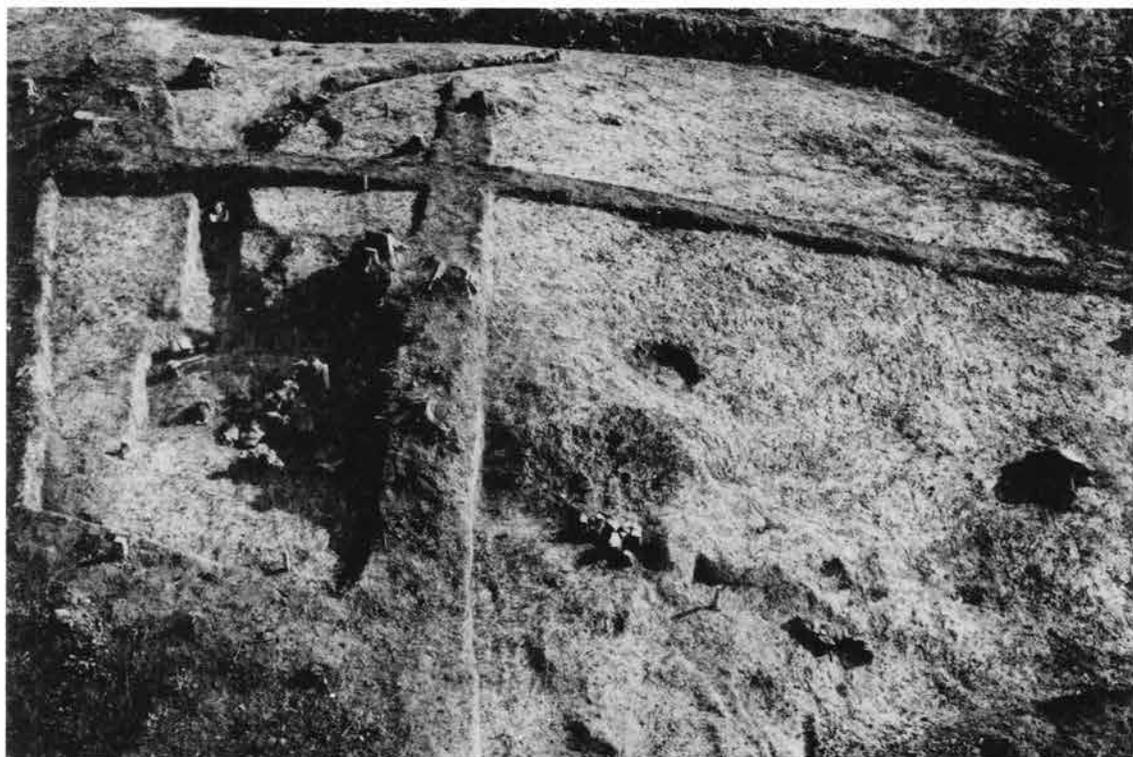
(1) 第2号墳 周辺第4埋葬施設遺物出土状態 (北から)



(2) 第2号墳 周辺第4埋葬施設遺物出土状態細部 (南から)



(1) 第5号墳 中心埋葬施設完掘状態 (西から)

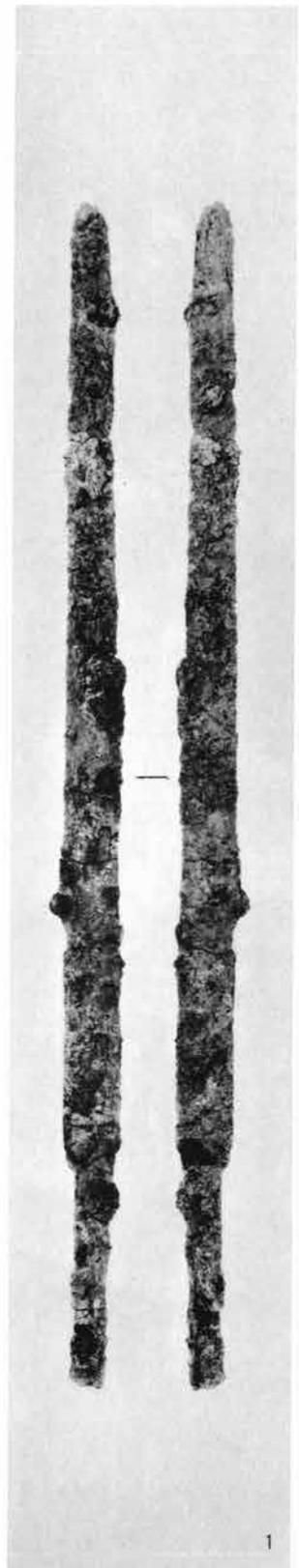
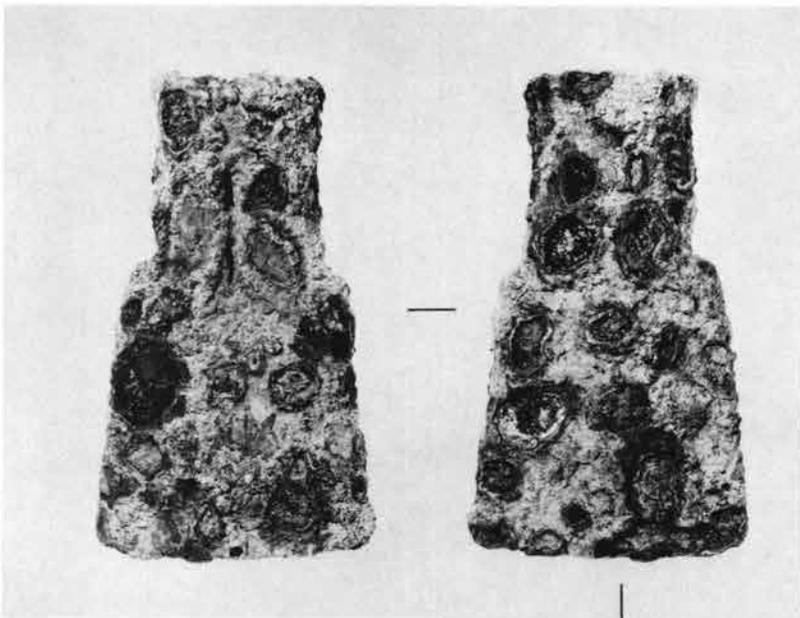
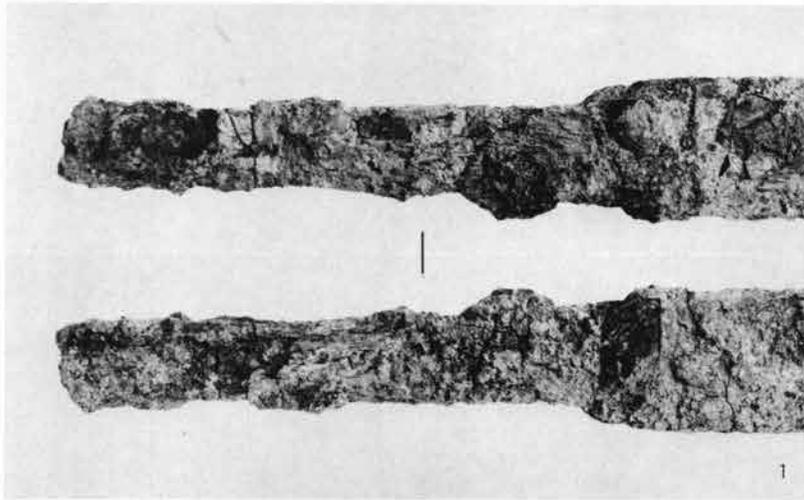


(2) 第4号墳 周溝内遺物出土状態 (西から)



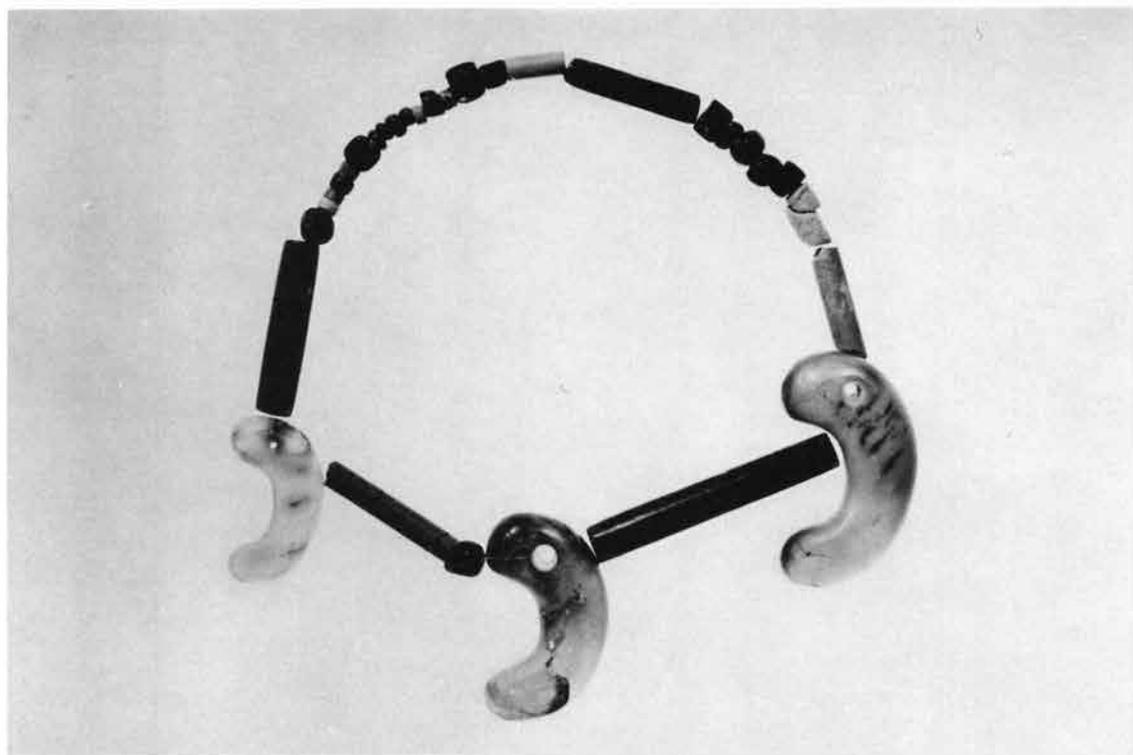
出土遺物(1)須恵器・埴輪

須恵器：2. 第2号墳周辺第4埋葬施設 3. 第2号墳墳丘上 4. 第3号墳中心埋葬施設
5. 第2号墳周辺第1埋葬施設 埴輪：4. 第4号墳周溝内埴輪

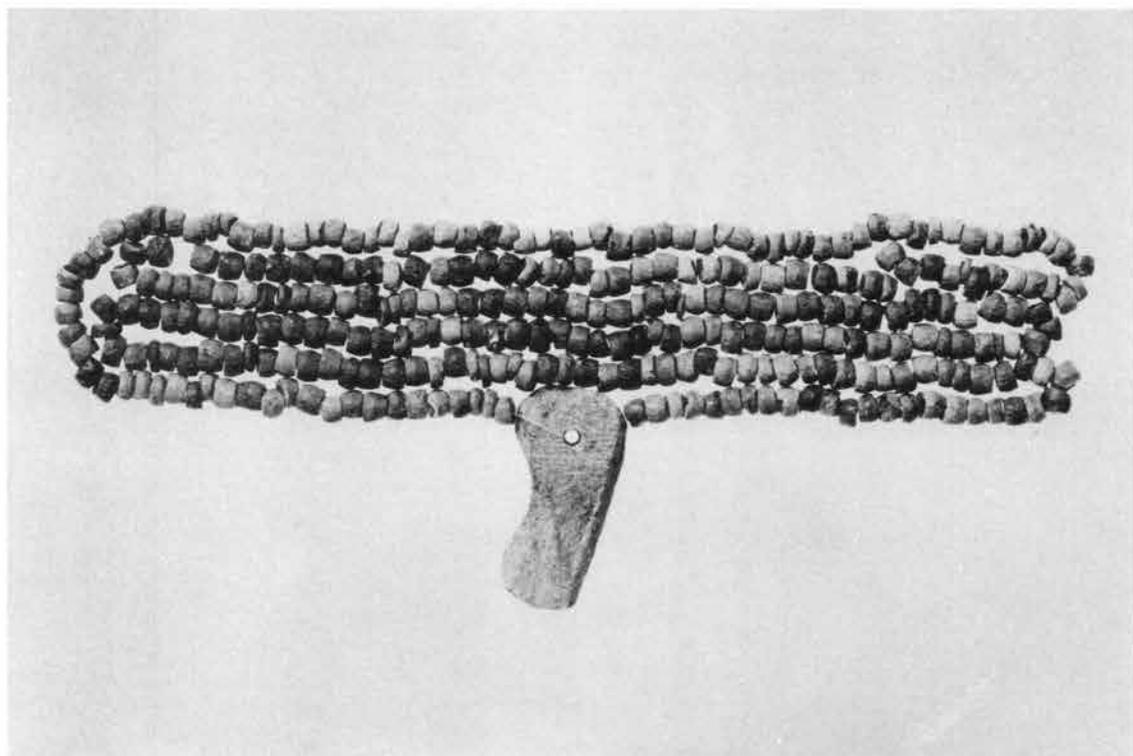


出土遺物(2)

1. 第2号墳中心埋葬施設出土鉄剣 2. 第2号墳中心埋葬施設出土鉄斧
3. 第2号墳周辺第4埋葬施設出土鏡 4. S D01出土銀環



(1) 第2号墳 周辺第4埋葬施設出土 玉類



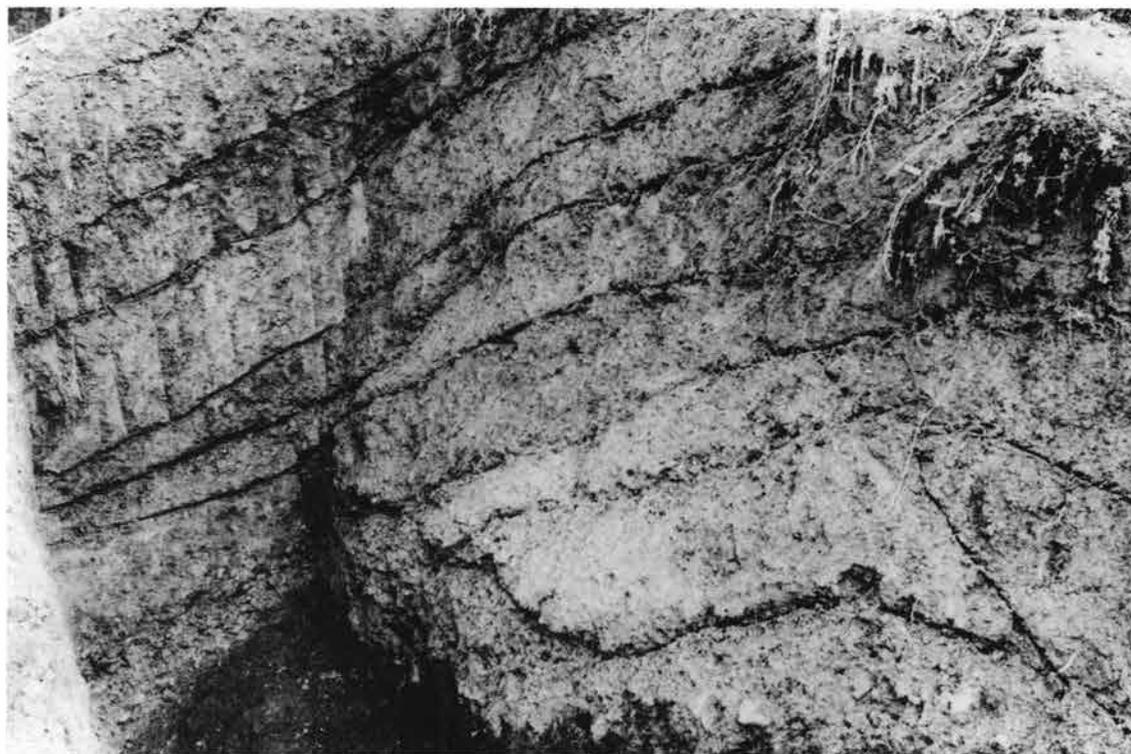
(2) 第2号墳 周辺第1埋葬施設出土 玉類



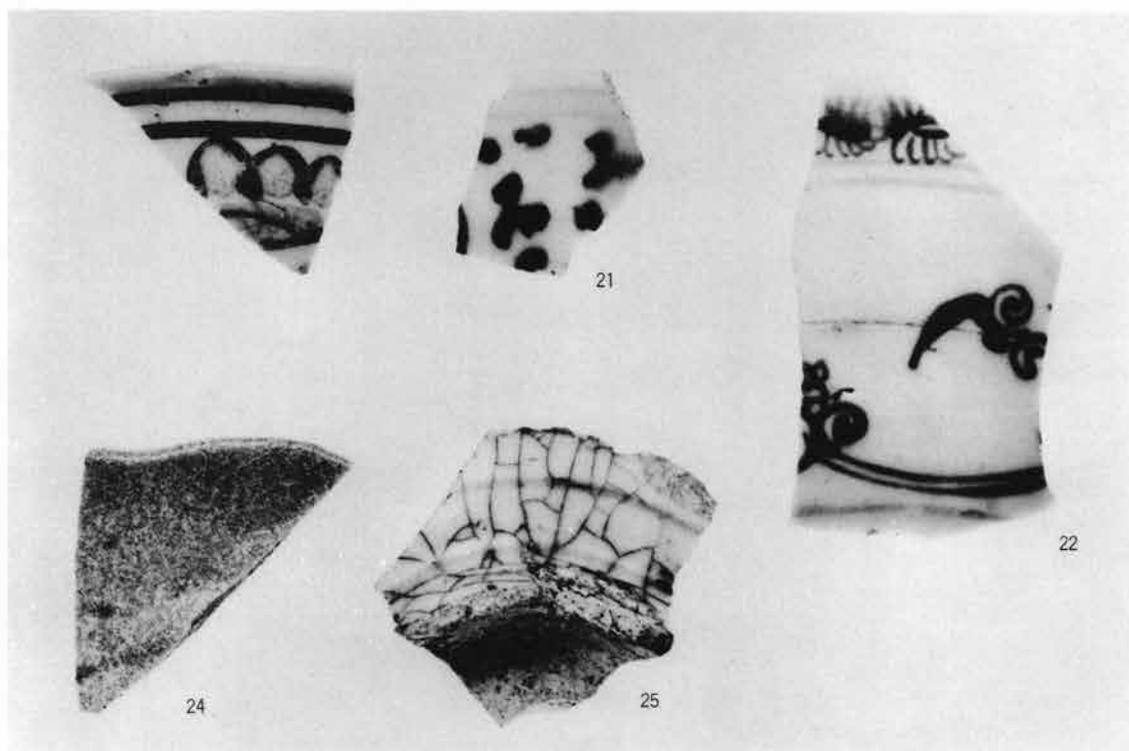
(1) 調査前風景（東から）



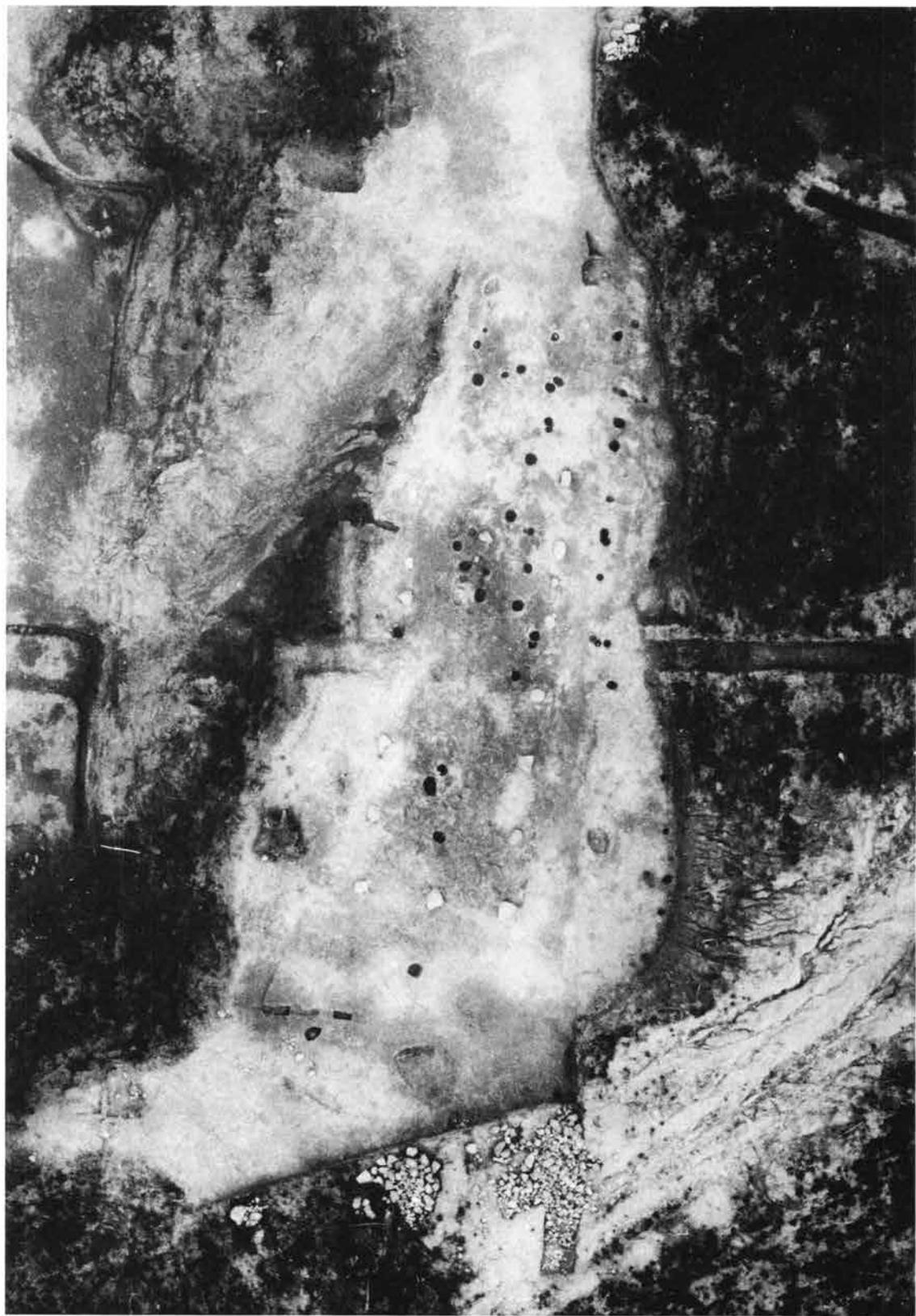
(2) 横堀検出状況（北東から）



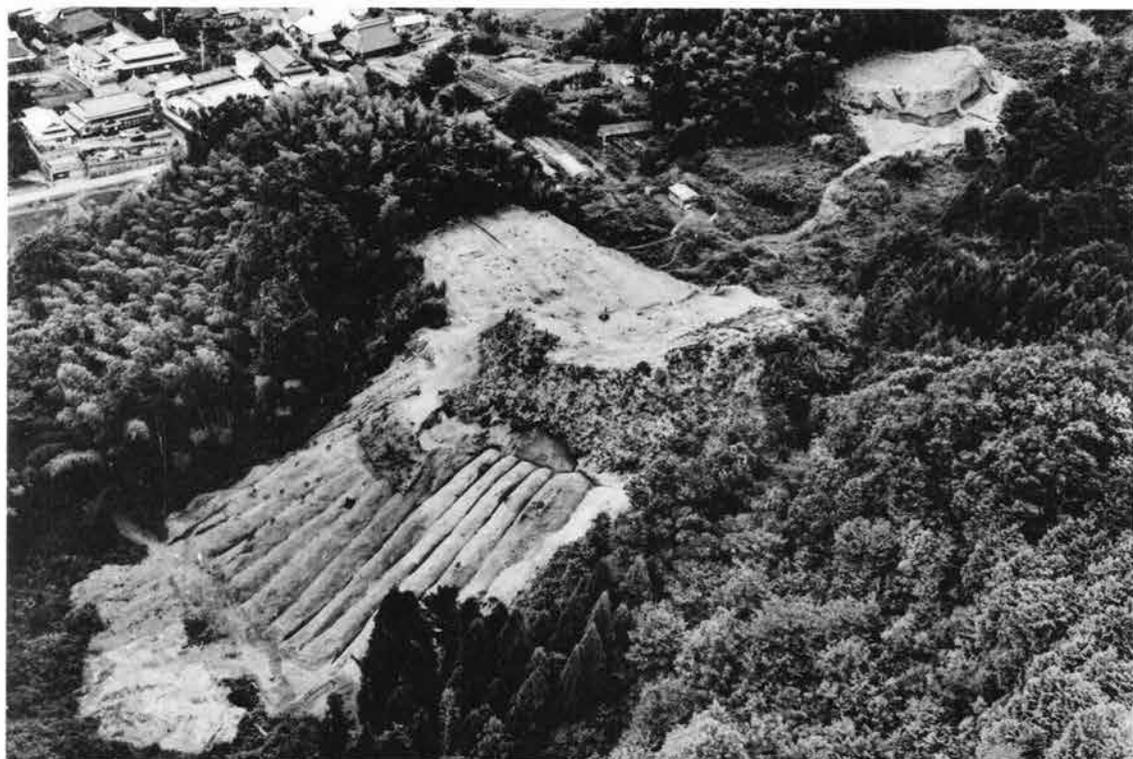
(1) 堀切り断ち割り断面



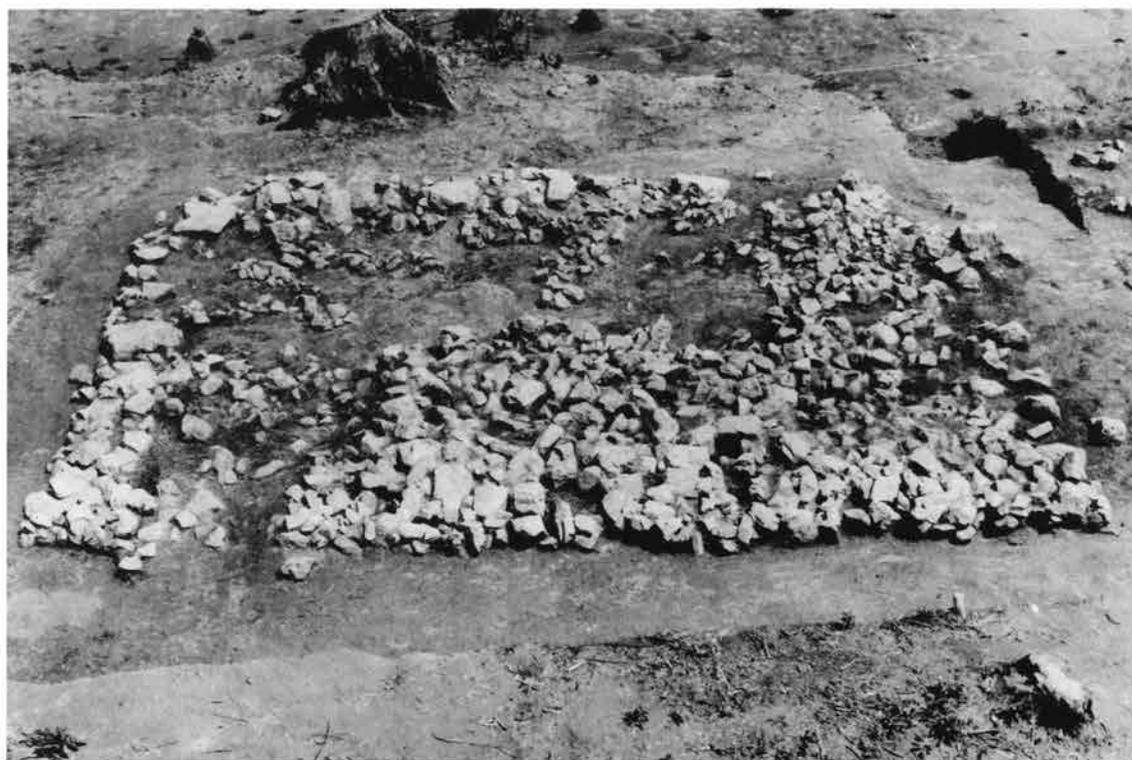
(2) 出土陶磁器類



第2郭全景 (空撮)



(1) 調査地全景 (南西から)



(2) 第2郭 S B05全景 (南から)



(1) 畝状縦堀（調査前、西から）



(2) 畝状縦堀（調査後、西から）



(1) 調査地遠景 (南から)



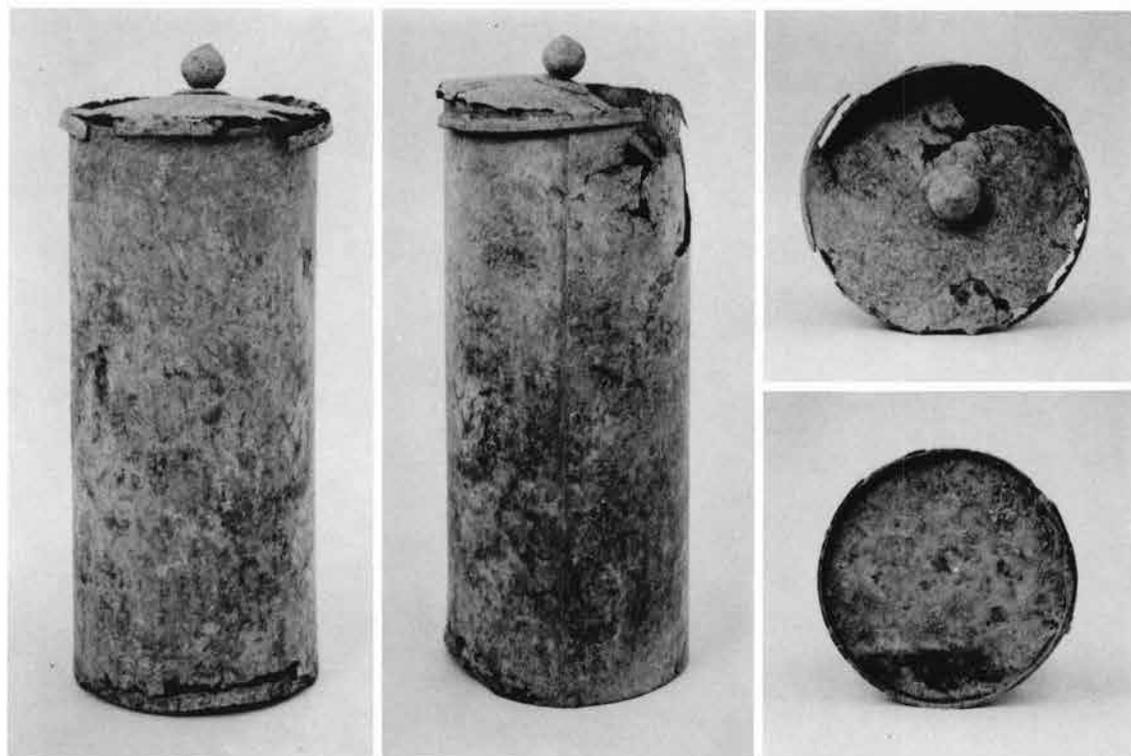
(2) 経塚の検出状況 (第1検出面、東から)



(1) 経塚の検出状況（第2検出面、北西から）



(2) 経塚の検出状況（第3検出面、南から）



(1) 銅製経筒



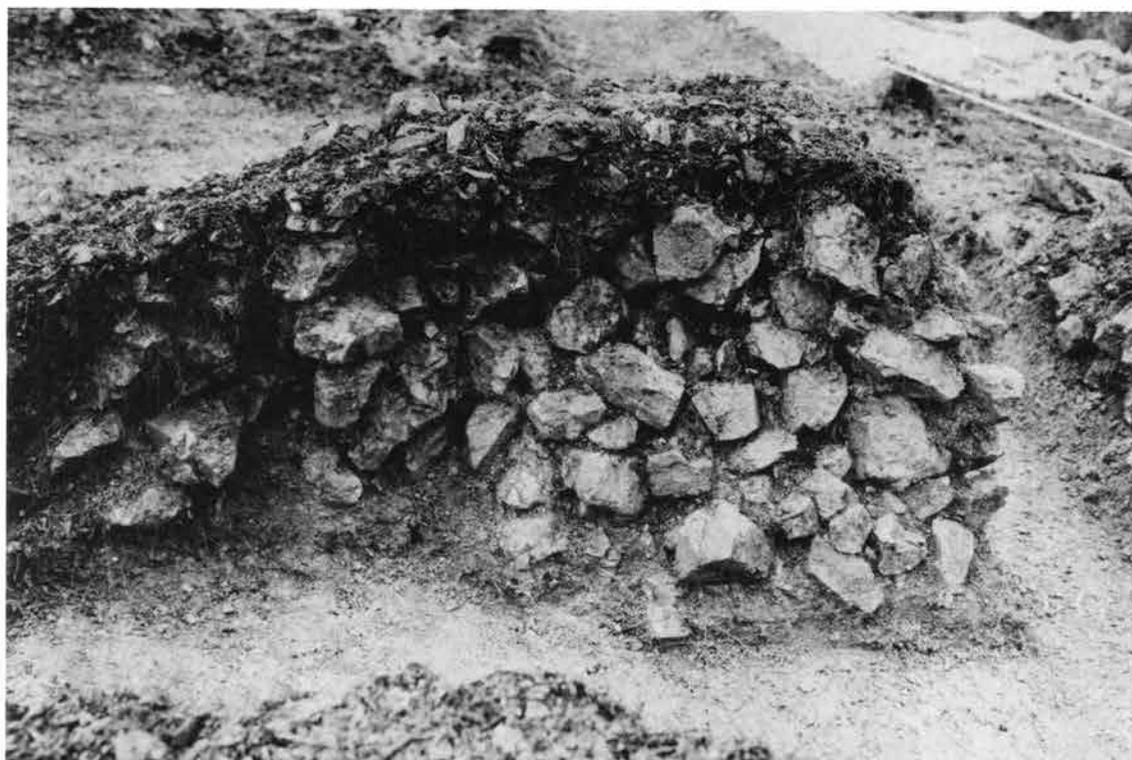
(2) 石組検出状況（西から）



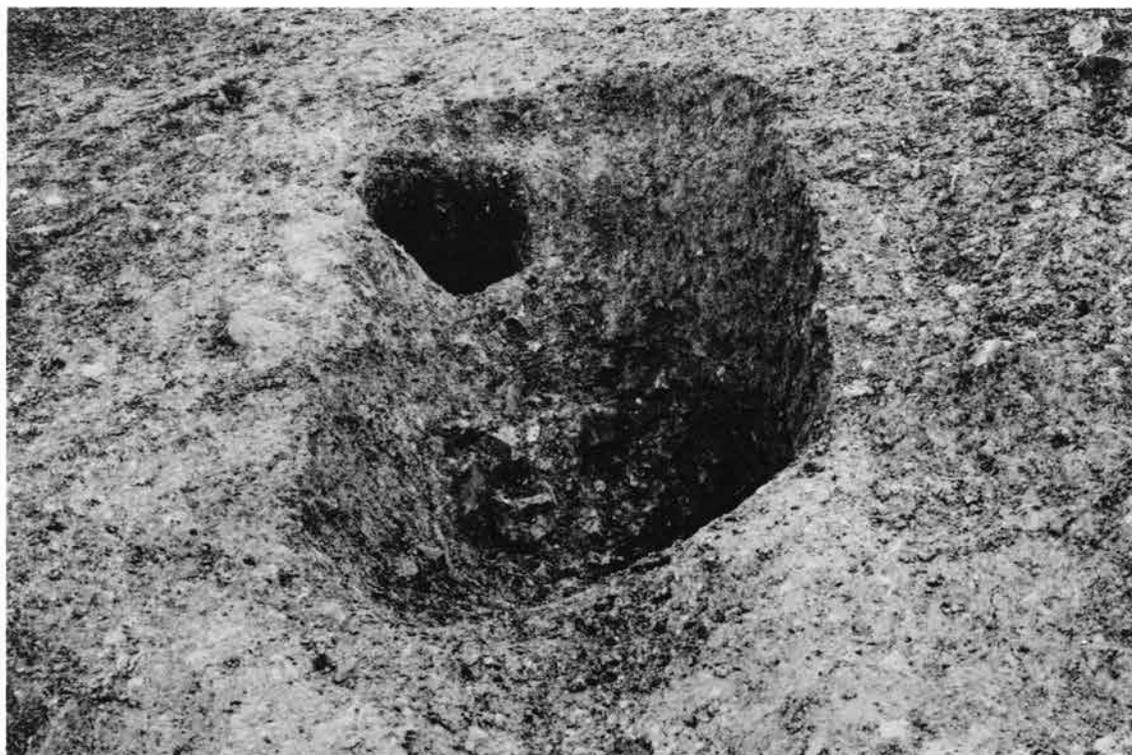
(1) 遺跡全景（南から）



(2) 遺跡全景（南西から）



(1) 集石遺構断面（北から）



(2) 土坑(S K01)完掘状況



(1) 調査地遠景（北からの空中写真）



(2) 調査地全景（北の拝田丘陵から）



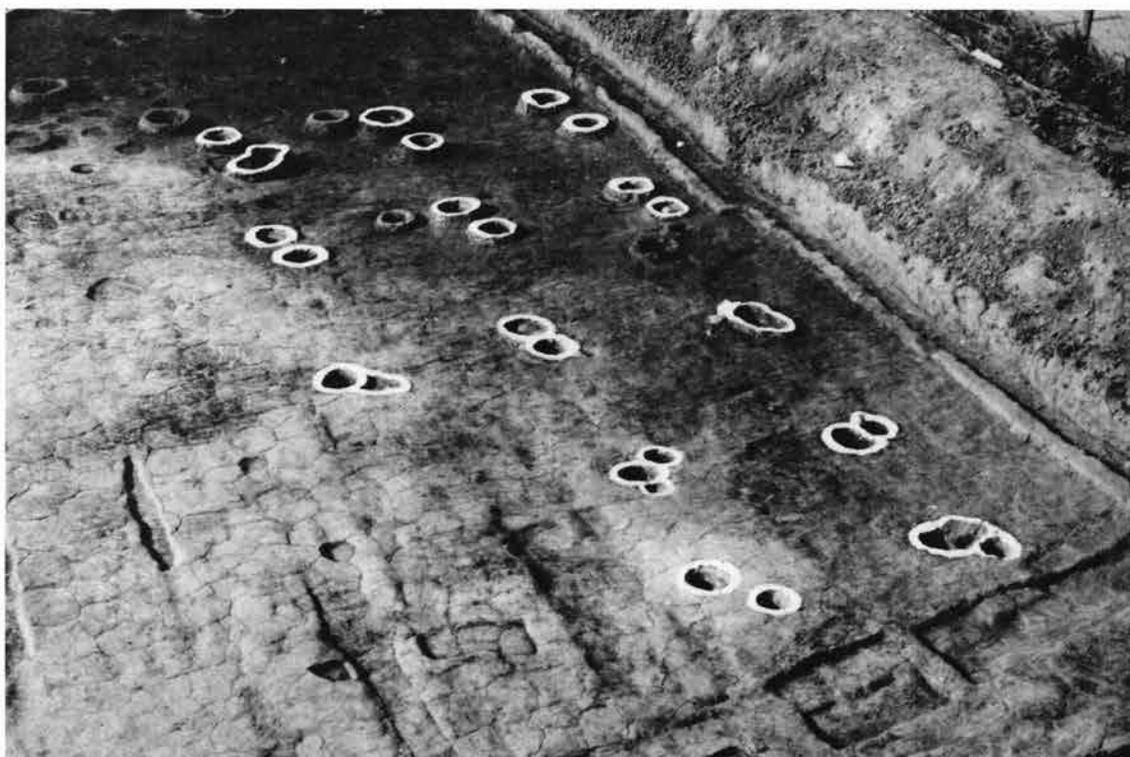
(1) 掘立柱建物跡(S B12001)検出状況(南西から)



(2) 掘立柱建物跡(S B14001)検出状況(南東から)



(1) 掘立柱建物跡(S B15005・15006)検出状況(北から)



(2) 掘立柱建物跡(S B15002・15003)検出状況(南西から)



(1) 16トレンチ自然流路跡(S R16001)完掘状況(西から)



(2) 17トレンチ全景(北から)



(1) 18トレンチ全景 (北から)



(2) S D 21001完掘状況 (東から)



(1) S E22001遺物出土状況（東から）



(2) 23トレンチ全景（北から）

京都府遺跡調査概報 第31冊

昭和63年12月26日

発行 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒617 向日市寺戸町南垣内40の3
☎ (075)933-3877

印刷 中西印刷株式会社
〒602 京都市上京区下立売通小川東入
☎ (075)441-3155 (代)